秋田県文化財調査報告書第432集

堀　ノ　内　遺　跡

―一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―

第１分冊　本文・観察表編

２００８・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

堀ノ内遺跡

―一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―

第１分冊　本文・観察表編

２００８・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

調査区全景（2004.7.7. 撮影・西から）

MC・ME43・44グリッド完掘（西から）　人が立っている所が土坑、座っている所が土器埋設遺構の位置

LT・MA50グリッド遺物出土状況（西から）

50ラインベルト〔東〕（西から）

SK222・666・701確認状況（南から）

SK479確認状況（北西から）

SK322土器（82-1・2）出土状況（北東から）

SK55クルミ出土状況（北から）

SQ20　SN96検出状況（東から）

SQ41・42検出状況（東から）

人面装飾付土器（194-2）出土状況（西から）

人面装飾付土器

SK634出土岩偶

埋設土器

SK610出土　剝片の入った土器

Ⅳ群第２段階土器群

Ⅳ群第３段階土器群

Ⅳ群第４段階土器群

207－05
197－1
201－2
201－1
201－6
198－1
198－4
198－2
208－5
206－6
205－3
204－5

Ⅴ群土器群

213－2
223－2
214－5
217－4
217－3
218－11
220－4
226－5

Ⅵ群土器群

動物形土製品

打製石斧

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号湯沢横手道路建設事業に先立って、平成15・16年度の２か年にわたって湯沢市において実施した堀ノ内遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代の土坑墓や土器棺墓、配石遺構などが見つかり、縄文時代の墓域であることが明らかとなりました。また、出土した多種多様な遺物からは、これを作り出した縄文人の卓越した技術と、精神文化の一端をうかがい知ることができます。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、湯沢市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本書は、平成15・16(2003・2004)年度に発掘調査した堀ノ内遺跡の調査成果を収めたものであり、一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の４冊目である。

2　本書は第１分冊本文・観察表編と第２分冊挿図・写真図版編および付図からなる。

3　本書の刊行以前に概要を掲載した『年報』『発掘調査資料』等の内容と相違のある場合、本書をもって訂正したものとする。

4　第５章「自然科学的分析」は、下記の各機関に分析を委託した成果報告である(敬称略)。

第１～３節　パリノ・サーヴェイ株式会社

第４節　京都大学原子炉実験所　藁科哲男

第５節　北海道大学　小笠原正明／株式会社古環境研究所

第６節　株式会社古環境研究所

第７節　いわき短期大学　山崎京美

5　本書に使用した地図の原図は、国土地理院発行１/50,000地形図「湯沢」「稲庭」である。

6　土層断面図などの土色の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2001年度版)に準拠した。

7　発掘調査、整理作業においては一部を下記の機関に委託した。

水準測量及び方眼杭設置：株式会社秋田総合建設センター

遺跡空中写真撮影：有限会社デジタルビジネス秋田

出土品洗浄：文化財調査事業企業組合／ふれあい作業所「太陽の園」

土器実測・製図：株式会社シン技術コンサル／有限会社アイテックス

石器実測・製図：有限会社三航光測　　石器石材肉眼鑑定：株式会社古環境研究所

遺物写真撮影：金子写真館　　遺構配置図製図：株式会社ラング

8　発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々のご指導・ご協力をいただいた(五十音順、敬称略)。

青野友哉　阿部明義　稲野裕介　榎本剛治　大島直行　大塚達朗　岡田憲一　岡村道雄　長田友也　葛西勵　加藤雅士　金子昭彦　小杉康　小林圭一　佐野元　玉田芳英　手代木美穂　土肥孝　中沢道彦　中村大　中村哲也　中村良幸　藤沼邦彦　増子康眞　松田泰典　水戸部秀樹　宮尾亨　宮内信雄　八木勝枝　米村祥央　渡辺丈彦

9　本書の原稿は、第１～３章、第４章第１～３節１、第６章を加藤朋夏が、第４章第３節２を高橋学が執筆し、全体の編集を加藤朋夏が行った。

目　次

巻頭図版

序

例言…… ii

目次…… iii

挿図目次…… iv

表目次…… iv

第１章　はじめに…… 1

第１節　調査に至る経過…… 1

第２節　調査要項…… 2

第２章　遺跡の環境…… 3

第１節　遺跡の位置と立地…… 3

第２節　歴史的環境…… 3

第３章　発掘調査の概要…… 11

第１節　遺跡の概観 …… 11

第２節　調査の方法…… 12

第３節　調査の経過…… 14

第４節　整理作業の方法と経過…… 17

第４章　調査の記録…… 19

第１節　基本層序…… 19

第２節　縄文時代の遺構と遺物…… 23

1　遺構と出土遺物…… 23

（1）土坑…… 23

（2）フラスコ状土坑……111

（3）柱穴様ピット……112

（4）土器埋設遺構……113

（5）石囲土器埋設炉……133

（6）配石遺構……133

（7）焼土遺構……135

2　遺物包含層……137

3　出土遺物 ……139

（1）土器……139

（2）石器……144

（3）土製品……156

（4）石製品……160

第３節　古代から近世の遺構と遺物……165

1　検出遺構と遺物……165

（1）土坑……165

（2）焼土遺構……165

（3）柱穴様ピット……166

2　遺構外出土遺物……166

第５章　自然科学分析……167

第１節　堀ノ内遺跡におけるテフラの同定……167

第２節　ＳＫ55堆積土の自然科学分析 ……170

第３節　遺構内土壌の理化学分析……174

第４節　堀ノ内遺跡出土の黒曜石製石器、剥片の原材産地分析……179

第５節　堀ノ内遺跡出土石器の石質鑑定……194

第６節　堀ノ内遺跡から出土した天然アスファルトの有機化学分析……197

第７節　堀ノ内遺跡出土焼骨の同定報告……201

第６章　まとめ……203

1　墓域を構成する主な遺構……203

2　遺物包含層の形成過程と「場」の推移……205

3　遺物出土状況にみる祭祀行為の一端と遺跡の性格……214

4　総括……215

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置…… 1
第２図　一般国道13号湯沢横手道路と関連遺跡 …… 2
第３図　表層地質図…… 4
第４図　地形分類図…… 6
第５図　周辺の遺跡…… 8
第６図　調査区地形模式図…… 11
第７図　基本土層位置・グリッド配置図…… 13
第８図　基本土層柱状図（Ａ～Ｈ）…… 18
第９図　Ｉ：ＬＱ52－ＭＣ54　Ｊ：ＬＴ58－59土層断面 …… 20
第10図　Ｋ：50ライン土層断面 …… 21
第11図　Ｌ：45ライン土層断面 …… 22
第12図　縄文時代の遺構配置全体図 ……136
第13図　包含層中の遺物出土状況 ……138
第14図　石鏃分類図 ……144
第15図　石鏃出土分布図 ……145
第16図　石錐分類図 ……146
第17図　石錐出土分布図 ……146
第18図　石匙分類図 ……147
第19図　石匙出土分布図 ……147
第20図　スクレイパー類分類図 ……148
第21図　スクレイパー類出土分布図 ……148
第22図　両極石器出土分布図 ……149
第23図　ＲＦ出土分布図 ……149
第24図　ＵＦ出土分布図 ……150
第25図　石核出土分布図 ……150
第26図　フレイク出土分布図 ……150
第27図　磨製石斧分類図 ……151
第28図　磨製石斧出土分布図 ……151
第29図　打製石斧分類図 ……152
第30図　打製石斧出土分布図 ……152
第31図　石斧未成品出土分布図 ……153
第32図　礫器分類図 ……153
第33図　礫器出土分布図 ……153
第34図　石皿・砥石類分類図 ……154
第35図　石皿・砥石類出土分布図 ……154
第36図　磨・凹石類分類図 ……155
第37図　磨・凹石類出土分布図 ……155
第38図　敲石分類図 ……156
第39図　敲石出土分布図 ……156
第40図　土偶出土分布・接合図 ……157
第41図　土製耳飾分類図 ……158
第42図　土製耳飾出土分布図 ……158
第43図　焼成粘土塊出土分布図 ……159
第44図　石棒分類図 ……160
第45図　石棒出土分布・接合図 ……161
第46図　有孔石製品分類図 ……162
第47図　有孔石製品出土分布図 ……162
第48図　円盤状石製品出土分布図 ……163
第49図　古代～中世の遺構配置図 ……164
第50図　重鉱物組成および火山ガラス比 ……167
第51図　火山ガラスの屈折率測定結果 ……168
第52図　重鉱物・火山ガラス（写真図版） ……169
第53図　主要珪藻化石群集の層位分布 ……170
第54図　珪藻化石（写真図版） ……173
第55図　赤色顔料のＸ線回折図 ……177
第56図　黒曜石原産地 ……186
第57図　№２のFI－MSスペクトル分割図 ……198
第58図　№４のFI－MSスペクトル分割図 ……198
第59図　天然アスファルトの原産地及び出土遺跡の位置 ……199
第60図　№１のＧＣ－ＭＳクロマトグラム ……200
第61図　№２のＧＣ－ＭＳクロマトグラム ……200
第62図　№３のＧＣ－ＭＳクロマトグラム ……200
第63図　№４のＧＣ－ＭＳクロマトグラム ……200
第64図　堀ノ内遺跡出土の焼骨（写真図版） ……202
第65図　土器埋設遺構　分類模式図 ……204
第66図　Ⅳ群土器の変遷案 ……206
第67図　50ラインベルトの遺物出土状況 ……207
第68図　ＬＰ58グリッド出土土器集成図 ……207
第69図　ＬＳ54グリッド出土土器集成図 ……208
第70図　ＭＡ50グリッド出土土器集成図 ……209
第71図　ＭＥ43グリッド出土土器集成図 ……209
第72図　包含層出土土器時期別分布状況（１） ……210
第73図　包含層出土土器時期別分布状況（２） ……211
第74図　遺構と「遺物集中区」の変遷 ……213

表 目 次

第１表　「湯沢」「稲庭・焼石岳」表層地質図凡例対応表…… 5
第２表　周辺の遺跡一覧…… 9
第３表　出土石器総点数一覧……144
第４表　石鏃分類別出土点数……144
第５表　石錐分類別出土点数……146
第６表　石匙分類別出土点数……146
第７表　スクレイパー類分類別出土点数……148
第８表　石核分類別出土点数……150
第９表　磨製石斧分類別出土点数……151
第10表　打製石斧分類別出土点数 ……152

第11表　石斧未成品分類別出土点数 ……152
第12表　礫器分類別出土点数 ……153
第13表　石皿・砥石類分類別出土点数 ……154
第14表　磨・凹石類分類別出土点数 ……155
第15表　敲石分類別出土点数 ……156
第16表　土製品出土点数一覧 ……156
第17表　土製耳飾分類別出土点数 ……158
第18表　焼成粘土塊一覧表 ……159
第19表　石製品出土総点数一覧 ……160
第20表　石棒分類別出土点数 ……161
第21表　有孔石製品分類別出土点数 ……162
第22表　重鉱物・火山ガラス比分析結果 ……168
第23表　珪藻分析結果 ……171
第24表　土壌理化学分析結果 ……176
第25表　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……187
第26表　黒曜石製遺物群の元素比の平均値と標準偏差値 ……189
第27表　堀ノ内遺跡出土黒曜石製石器・剥片の元素比分析結果 ……190
第28表　堀ノ内遺跡出土黒曜石製石器・剥片の原材産地分析結果 ……192
第29表　遺構内石器比重計測一覧 ……196
第30表　天然アスファルトのＲ値及び相対偏差 ……200
第31表　堀ノ内遺跡出土の動物種名 ……201
第32表　堀ノ内遺跡から出土した焼骨 ……202
第33表　土坑一覧 ……217
第34表　フラスコ状土坑一覧 ……220
第35表　柱穴様ピット一覧 ……221
第36表　土器埋設遺構一覧 ……223
第37表　石囲炉一覧 ……224
第38表　配石遺構一覧 ……224
第39表　焼土遺構一覧 ……224
第40表　土坑土層注記一覧 ……225
第41表　フラスコ状土坑土層一覧 ……234
第42表　柱穴様ピット土層一覧 ……235
第43表　土器埋設遺構土層一覧 ……237
第44表　石囲土器埋設炉土層一覧 ……240
第45表　焼土遺構土層一覧 ……240
第46表　遺構内出土土器一覧 ……241
第47表　遺構内出土石器・石製品一覧 ……260
第48表　遺構内出土土製品一覧 ……266
第49表　遺構外出土土器一覧 ……267
第50表　遺構外出土石器・石製品一覧 ……280
第51表　遺構外出土土製品一覧 ……286
第52表　古代～中世柱穴様ピット一覧 ……287

巻頭図版目次

巻頭図版１　調査区全景
巻頭図版２　遺構群の完掘状況
巻頭図版３　基本層序･遺物出土状況
巻頭図版４　土坑の調査状況
巻頭図版５　配石遺構
巻頭図版６　遺物
巻頭図版７　遺物
巻頭図版８　遺物
巻頭図版９　遺物
巻頭図版10　遺物

付　　図

付図１　縄文時代の遺構配置全体図
付図２　縄文時代の遺構配置図（１）
付図３　縄文時代の遺構配置図（２）
付図４　縄文時代の遺構配置図（３）
付図５　縄文時代の遺構配置図（４）
付図６　縄文時代の遺構配置図（５）
付図７　縄文時代の遺物分布図
付図８　古代～中世の遺構配置全体図

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

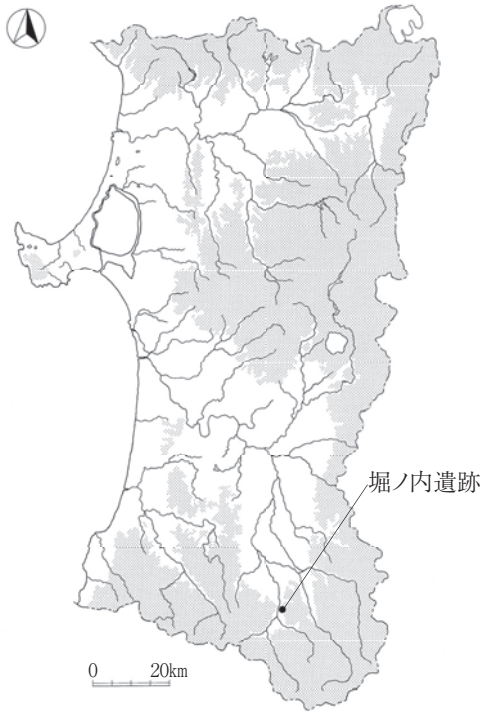
一般国道13号は福島市を起点として秋田市に至る総延長303.7㎞の主要幹線道路として重要な役割を果たしてきた。しかし近年、湯沢・横手両市街地を中心に交通量の増加と車両の大型化等に伴う交通渋滞が慢性化し、騒音振動等による沿道住民の生活環境の悪化も指摘されていた。

こうした諸問題を解消するため、昭和59(1984)年度に横手南バイパス、昭和60(1985)年度に湯沢バイパスの建設事業が着手されたが、その後、両バイパス事業は一般国道13号湯沢横手道路建設事業と事業名を変更し、高規格道路としての機能を持たせ活用を図るものとして整備が進められた。このうち、平成16年７月には湯沢IC～三関IC間の、平成18年８月には三関IC～須川IC間の供用が開始され、平成19年８月には須川IC～雄勝こまちIC間(8.5㎞)の供用をもって全線暫定２車線での整備を完了している。

建設工事区域には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、秋田県教育委員会は国土交通省湯沢工事事務所と今後の対応について協議し、2000(平成12)年に工事対象区域のうち湯沢市関口から湯沢市上関までの約3.9㎞について、踏査および試掘による分布調査を実施した。この際、事業予定地内で新発見の遺跡１か所(堀量遺跡)を確認し、2001(平成13)年には同遺跡の発掘調査を実施した。さらに2002(平成14)年には湯沢市上関地区から湯沢市(旧雄勝町)桑ヶ崎地区にかけての約6.1㎞の区間で分布調査を行い、堀ノ内遺跡を含む新発見の遺跡４か所を確認した。

堀ノ内遺跡については、平成14年12月18日の分布調査によって確認されたが、諸々の事情により改めて遺跡の確認調査を実施することが困難であったことから、分布調査と同時に事業地内５か所におけるトレンチ調査を実施した。その結果、縄文時代晩期を中心とする遺物を多量に包含した、いわゆる「捨て場」が形成されていること、後世の撹乱を受けずに比較的良好に保存されていること、その範囲は約1,270㎡あまりに及ぶであろうことが確認された。

このトレンチ調査の結果、事業地内の3,250㎡が発掘調査対象区域とされた。また協議の結果、事業計画との関連から2003(平成15)年度から発掘調査を実施するに至った。なお、当初は単年度で発掘調査を終了する予定であったが、初年度の発掘調査開始日時が遅れたこと、遺構の密度が予想をはるかに上回っていたことなどから、発掘調査は2003・2004(平成15・16)年度の２か年にかけて実施した。



第１図　遺跡の位置

第２節　調査要項

遺 跡 名 称　堀ノ内遺跡　（遺跡略号　９ＨＮＵ）
所　在　地　秋田県湯沢市上関字堀ノ内21
（北緯　39度６分22秒、東経　140度29分10秒）
遺 跡 状 況　宅地・果樹園
調 査 期 間　平成15年８月１日～12月18日
　　平成16年４月14日～７月16日
調 査 面 積　3,250㎡
調査主体者　秋田県教育委員会
調査担当者
　平成15年度
　　小島　朋夏　南調査課調査班文化財主事
　　高橋　孝輝　南調査課調査班学芸主事
　　伊藤　彰悦　南調査課調査班非常勤職員
　　横山香菜子　南調査課調査班非常勤職員
　　小松田博嗣　南調査課調査班非常勤職員
　　高安　直美　南調査課調査班非常勤職員
　平成16年度
　　小島　朋夏　南調査課調整・普及班文化財主事
　　高橋　孝輝　南調査課調査班学芸主事
　　開田　猛夫　南調査課調査班学芸主事
　　伊藤　彰悦　南調査課調査班非常勤職員
　　照井　洋子　南調査課調査班非常勤職員
　　横山香菜子　南調査課調査班非常勤職員
調査総務担当
　平成15・16年度
　　高橋　修　　総務課主任
　　田口　旭　　総務課主事
　　※担当者・職名は発掘調査時のものである。
調査協力機関　　国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所
　　湯沢市教育委員会

第２図　一般国道13号湯沢横手道路と関連遺跡

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

堀ノ内遺跡は秋田県湯沢市上関地区に所在し、北緯39° 06′ 22″、東経140° 29′ 10″、JR三関駅の南東約400mに位置する（第２図）。遺跡の東側には東鳥海山麓、西には檜山山地が広がる。遺跡は国土地理院発行の５万分の１地形図「湯沢」の図幅に含まれる。現況は宅地および果樹園であり、調査区西側には水田が広がる。調査区から西へ約30mには、東鳥海山麓より流れ出て雄物川へと合流する麓沢川が北流している。調査区の標高は約107～109mである。

湯沢市は秋田県の南東部に位置しており、南に山形県真室川町・金山町・新庄市・最上町、宮城県大崎市・栗原市、東に東成瀬村、北に横手市、西に羽後町・由利本荘市と接する秋田県内陸最南部の都市である。平成17年３月に旧湯沢市、稲川町、雄勝町、皆瀬村の４市町村が合併し、現在の湯沢市となった。総面積は790.72㎢で、人口54,881人（平成19年12月現在）を有する。

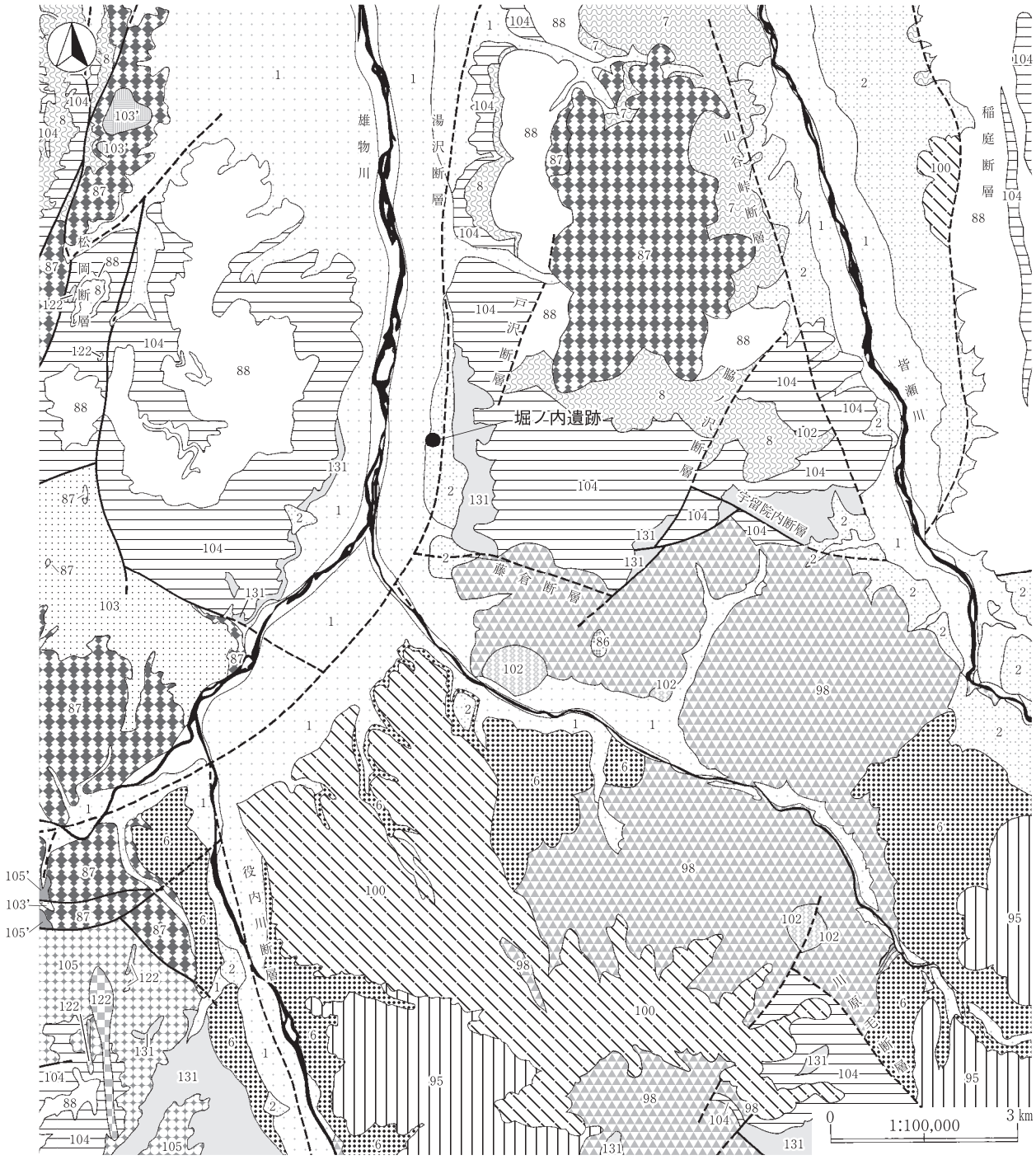
遺跡のある地域は大部分が山地・火山地が占めており、雄物川、高松川、役内川といった主要河川に沿って僅かに低地が形成されている（第４図）。遺跡周辺では、東には東鳥海山（777.5m）を主峰とする東鳥海山山地、西には出羽山地の一部であり、檜山（613.1m）を主峰とする桧山山地が存在する。両者に挟まれて北流する雄物川に沿って幅約２㎞の雄物川低地が形成されており、北の横手盆地に向かって開いた地形となっている。この雄物川低地は、湯沢断層によって形成された断層谷であり、同時に雄物川によって造り出された河谷低地でもある。遺跡東側の東鳥海山麓には小形の扇状地が南北にいくつも連なり、いわゆる複合扇状地が発達している。遺跡の南東側には高松川が流れ、遺跡から南へ約2.5mの地点で合流している。この合流点付近では特に扇状地が発達する。また、国道13号に並行して砂堆地が点在しており、集落の立地などからみても河川の流路変更に伴って取り残された自然堤防と考えることが出来る。遺跡の南には小比内山火山地が位置する。これは、およそ70～100万年前に噴火し、その火山噴出物によって一帯を形成した火山地である。起伏量は400m以下である。

遺跡周辺の地質は、中新世から第四紀更新世にかけて形成されており、山地は安山岩・両輝石安山岩から、低地には沖積地堆積物からなる（第３図）。

遺跡は標高190mの扇状地端部に位置するが、調査の結果、遺跡の立地する扇状地の形成時期が比較的新しいものであり、本来は沖積低地状に立地していたことが明らかとなった（第３章参照）。

第２節　歴史的環境

堀ノ内遺跡周辺では、縄文時代から近世までの遺跡が確認されており、そのほとんどが縄文時代と中世である。これらは雄物川とその支流である役内川流域の低地や丘陵地、山麓などに立地している。また、当地域は古代から交通の要衝であり、有屋峠・雄勝峠を越えて山形県最上郡金山町へ通じている。以下に、発掘調査が実施された遺跡を中心に当遺跡周辺の歴史的な環境を概観する。文中・挿図中・表中の（７－１）などの表記は、『秋田県遺跡地図（湯沢・雄勝地域版）』に掲載された遺跡の地図



				堆積岩類					岩層	火山岩類				深成岩類
				段丘	非海成			海成		非アルカリ				
					砂丘	湿原				珪長質		苦鉄質		珪長質
										貫入岩		火砕流		
新生代	第四紀	完新世	H	H(1)										
		更新世	Q3	Q3(2)							Q3(95)			
			Q2									Q2(100)		
			Q1											
	新第三紀	鮮新世	N3	N3(6)						N3(86)	N3(98)	N3(102)	N3(122)	
		中新世	N2	N2(7)						N2(87)		N2(103)		
			N1	N1(8)						N1(88)		N1(104)		
			PG4									PG4(105)		
	古第三紀	漸新世	PG3											
		始新世	PG2											
		暁新世	PG1											
中生代	白亜紀	後期	K2											
		前期	K1											K1(131)

N2(103')
PG4(105')

・本図は土地分類台帳『湯沢』と『稲庭・焼石岳』を産業技術総合研究所地質調査総合センター編「20万分の１シームレス地質図データベース」を基に統合したものである。
・図中の数字はデータベースの凡例（基本版）に対応する。
・103' と 105' は、土地分類台帳の分類を残したものである。
・各層の対応関係や詳細な内容は第１表に記した。

第３図　表層地質図

第１表　「湯沢」「稲庭・焼石岳」表層地質図凡例対応表

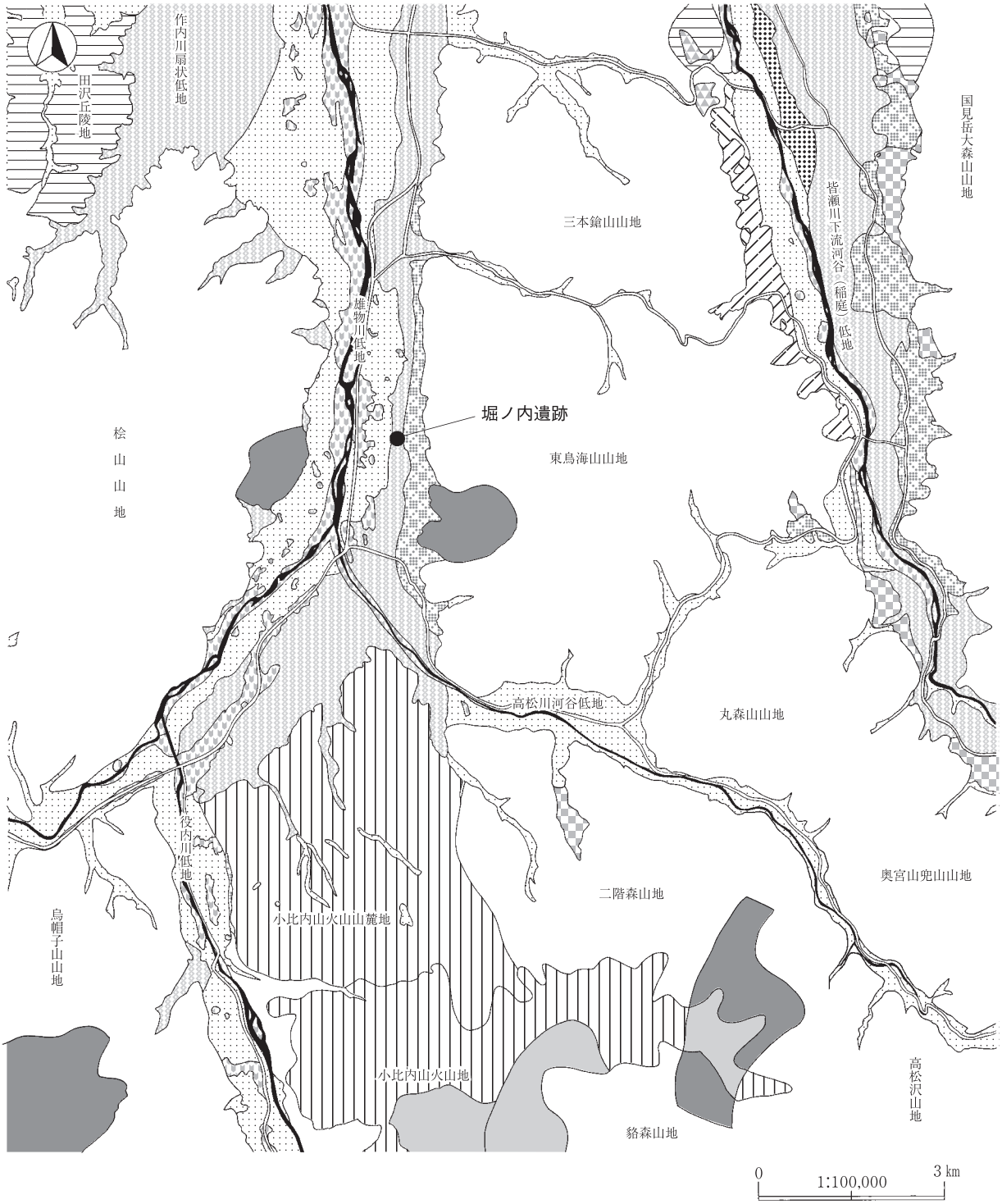
凡例No.	湯沢	名称	内容	稲庭	名称	内容
1	Sa・Ma	沖積低地堆積物	砂がち・泥がち堆積物	Sa t4・t3	沖積低地堆積物・ 段丘堆積物3・4	砂がち堆積物・礫・砂を主とし泥を含む
2	tr	沖積低地堆積物	礫・砂および泥	fs・t2・t1	扇状地堆積物・段丘堆積物1・2	礫・砂がち、礫・砂を主とし泥を含む
6	Sm	三途川層	泥岩・砂岩・酸性凝灰岩および礫岩	Szm	三途川層	凝灰質泥岩・凝灰質砂岩互層、礫岩を伴う
7				Sm	山内層	硬質泥岩
				Am	相野々層	泥岩
				At	相野々層	軽石凝灰岩
8	Ｓｓ	須郷田層	砂岩・および礫岩(泥岩および酸性凝灰岩を含む)	TZｃ	戸沢層	礫岩・砂岩およびシルト岩
				Im	市内川層	泥岩・シルト岩
86				dc	貫入岩類	石英安山岩
87	Ot	女川層院内凝灰岩部層	酸性軽石凝灰岩および火山礫凝灰岩(泥岩を伴う)	Td	虎毛山層	石英安山岩、流紋岩
				It	市内川層	軽石凝灰岩
88	Ow	南沢熔結凝灰岩部層雄勝層	角閃石黒雲母石英安山岩熔結凝灰岩・凝灰岩および火山礫凝灰岩	KNt	国見岳層	安山岩質火砕岩
	Ht	畑村層	酸性凝灰岩・火山礫凝灰岩および安山岩火山砕屑岩			
	Ｈｂ	畑村層	カンラン石玄武岩			
95	Da2	川井山石英安山岩	角閃石石英安山岩火山砕屑岩	KWd	川井山石英安山岩	角閃石石英安山岩
				KAd	兜山層	石英安山岩
				KAw	兜山層	熔結凝灰岩
98				Tt	虎毛山層	含黒雲母凝灰岩、熔結凝灰岩・角礫岩を含む
100	Vd・An2	母沢安山岩	安山岩火山岩屑・両輝石安山岩	KOa・ Kua・ds	小比内山安山岩・栗駒安山岩	両輝石安山岩
102				ad	貫入岩類	安山岩
103	An1	女川層加無山安山岩部層	両輝石安山岩およびその火山砕屑岩			
103'	Ry	貫入岩類	流紋岩			
104	Oc	南沢熔結凝灰岩部層雄勝川層	変質輝石安山岩火山砕屑岩および礫岩(酸性凝灰岩などを伴う)	Ha	細越沢層	変質安山岩、同質火砕岩
	Ia	飯沢層	輝石安山岩およびその火山砕屑岩	KNa	国見岳層	輝石安山岩
105	Ya	湯ノ沢川層	変質輝石安山岩および火山砕屑岩(熔結凝灰岩などを伴う)			
105'	Om	女川層院内凝灰岩部層	硬質泥岩(塊状泥岩・酸性凝灰岩および砂岩を伴う)			
122	Qd	貫入岩類	角閃石閃緑岩および角閃石石英閃緑玢岩			
131	Gr	神室山花崗岩類	角閃石黒雲母花崗閃緑岩および片麻状花崗閃緑岩	Gr	神室山花崗岩類	角閃石黒雲母花崗閃緑岩、片麻状花崗閃緑岩

番号と一致する(第６図・第２表)。図幅には雄物川流域、高松川流域、役内川下流域、皆瀬川流域を含めた。

当図幅に含まれる縄文時代の遺跡は、雄物川流域で11遺跡、高松川流域で８遺跡、皆瀬川流域で８遺跡の計27遺跡である。図幅外であるが雄物川上流域の院内地区の丘陵上には、国指定史跡である岩井堂洞窟遺跡をはじめとし、縄文時代の遺跡が分布する。岩井堂洞窟については、1962(昭和37)年に実施された県内埋蔵文化財の一斉調査によって発見され、その後1963(昭和38)年から1976(昭和51)年までに８次にわたる発掘調査が実施されている。凝灰岩壁に形成された大小４つの洞窟が調査され、縄文土器(早期・前期・後期・晩期)、弥生土器、石器、土師器などが出土した。特に縄文時代早期の押型文や貝殻沈線文系土器は県内でも数少ない貴重な資料である。

堀ノ内遺跡よりさらに雄物川を下ると、遺跡から北へ約８㎞で戸沢川と合流しており、ここから雄物川低地が北に向かって広がる。この戸沢川と雄物川の合流点に程近くに、堀量遺跡(７－64)が立地する。堀量遺跡は、堀ノ内遺跡と同様一般国道13号湯沢横手道路建設工事に伴って発見された遺跡で、2002(平成13)年に発掘調査が実施された。調査の結果、複式炉を持つ竪穴住居23軒が検出され、縄文時代中期末の集落跡であることが明らかとなった。雄物川の左岸では、檜山山地の山裾に沿うように、中屋敷遺跡(７－７)、塞の神遺跡(７－８)、鐙田遺跡(７－９)、水沢遺跡(７－10)、山田中学校グラウンド遺跡(７－11)、土沢Ⅰ遺跡(７－13)、土沢Ⅱ遺跡(７－14)といった後期から晩期にかけての遺跡が確認されている。このうち鐙田遺跡では、1973(昭和48)年に発掘調査が実施されており、その立地条件や出土遺物から縄文時代晩期の水辺に営まれた祭祀遺跡であったことが分かっている。

高松川流域には縄文時代の遺跡としては、上流から順に桑の沢口遺跡(７－22)、三途川遺跡(７－21)、高野遺跡(７－20)、長蓮寺遺跡(７－18)、大台山遺跡(７－17)、外ノ目遺跡(７－16)などが点在する。このうち長蓮寺遺跡については、2003(平成15)年に湯沢市教育委員会によって発掘調査が実施され、縄文時代晩期の配石遺構を伴う土坑や土器埋設遺構、その周辺には多量の土器・石器などの


田沢丘陵地
作内川扇状低地
国見岳大森山山地
三本鎗山山地
皆瀬川下流河谷（稲庭）低地
雄物川低地
堀ノ内遺跡
桧山山地
東鳥海山山地
高松川河谷低地
丸森山山地
役内川低地
奥宮山兜山山地
二階森山地
小比内山火山山麓地
烏帽子山山地
小比内山火山地
高松沢山地
貉森山地
0
1:100,000
3 km
大起伏山地
中・小起伏山地
大起伏火山地
中・小起伏火山地
丘陵地
砂礫段丘Ⅲ
砂礫段丘Ⅳ
砂礫段丘Ⅴ
断層分離段丘
土石流崩積地
谷底平野
扇状地・扇状地前面地
崖錐状扇状地
砂堆地・河原
旧河道

第４図　地形分類図

遺物を出土している。堀ノ内遺跡と同様、縄文時代晩期の墓域・祭祀域であったことが明らかにされている。

東鳥海山を挟んで東に位置する皆瀬川流域では、菅生地区の扇状地上に大谷Ⅰ遺跡(65－22)、宝龍台上遺跡(65－23)、大谷Ⅱ遺跡(65－24)、白沢遺跡(69－１)、上野遺跡(69－３)などが比較的密集して確認されている。これらの遺跡からは、中期(大木６～８b式)および晩期(大洞ＢＣ～Ｃ２式)の遺物が採集されている。このうち宝龍台遺跡では、1954(昭和29)年に武藤鉄城らによって実施された発掘調査によって大木６から８ｂ式の土器などと共に２基の組石が検出されている。

遺跡周辺の縄文時代遺跡は沖積地や扇状地上にその多くが立地し、その時期は概ね後期から晩期にかけて集中する。堀ノ内遺跡の立地する複合扇状地上には遺跡が少ないが、これは扇状地に覆われているため、地表面に遺物などが現れにくいことに起因していると思われる。

弥生時代の遺構は確認されていないが、前述の岩井堂洞窟遺跡ではほぼ完形に復元可能な土器が出土しており、岩陰が生活の場として利用されていた可能性がある。また、洞窟内では土師器も出土しており、その出土状況から、古代には祭祀の場として利用されたと考えられている。

古代の遺構を伴う遺跡は未発見であるが、古代における当地域の動向に関しては『続日本紀』などの文字資料によって窺い知ることができる。これによると、奈良時代の733(天平五)年には出羽柵が庄内地方から秋田高清水岡に移され、間もなく秋田県内陸部の横手盆地にも律令体制がおよび、雄勝郡が建郡されたと記されている。また、759(天平寶字三)年には平鹿郡の建郡と、雄勝城築城の際、有屋峠を通じて平戈駅屋(山形県最上郡金山町)と雄勝駅屋(雄勝郡羽後町)を結ぶ中間の雄勝町にも横河駅屋が設けられたと記されている。こうして国府からの通路が整備されるとともに、横手盆地の積極的な開発が進み、多くの集落が形成され、現在の湯沢市一帯も律令下に入ったことが窺われる。なお、横河駅屋が設けられた場所は未だ特定されていないが、横堀の寺沢地区には大伝馬などの地名があり、その名残とも考えられている。

中世以降、当地域は小野寺氏や最上氏の影響下にあり、これらに関係すると目される城館跡が多数存在する。図幅中では、雄物川流域に鵜沼城(66－34)、平城館(66－35)、新屋敷遺跡(66－65)、桐木田館(66－36)、御返事城(66－37)、泉沢館(66－38)、小野城(66－39)、法領館(66－40)、臼館(66－42)が、役内川流域では椛山館(66－51)、影平館(66－52)、草井崎城(66－54)、館堀城(66－55)、浅萩館(66－56)、穴小屋址(66－57)、高松川流域に相川城(７－60)、中屋敷館(７－61)が確認されている。河川の合流点を望む丘陵上部にその多くが立地している。中でも新屋敷遺跡は、堀ノ内遺跡と同じく湯沢横手道路建設事業に伴って2003(平成15)年に発掘調査が実施されている。須川と雄物川の合流点より南に約3.5km、平城館から北西へ約１kmの複合扇状地上に立地する遺跡で、調査の結果、掘立柱建物跡19棟、竪穴状遺構４基、溝跡５条などが検出され、12世紀末から13世紀代に営まれた居館跡の一部が明らかとなった。

城館跡のほか、当地域では板碑が数多く分布する。板碑は東鳥海山麓の道路に沿って点在しており、堀ノ内遺跡付近でも立石(７－35)、正和５年碑(７－36)、貞和３年碑(７－37)、延文５年碑(７－38)、建武元年双式碑(７－39)が確認されている。中世にはここを通る主要道路が整備されていたものと想定される。また、調査区に隣接する土地の小字「立石」は、これら板碑が由来となった地名と推察される。

第５図　周辺の遺跡

※網かけしたものは中世の遺跡

参考文献

奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』郷土考古学叢書３　1967(昭和42)年　吉川弘文館

秋田県教育委員会・雄勝町教育委員会『岩井堂岩陰発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第16集　1969(昭和44)年

秋田県『土地分類基本調査　湯沢』1979(昭和54)年

秋田県『土地分類基本調査　稲庭・焼石岳』1987(昭和62)年

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(湯沢・雄勝地域版)』2005(平成17)年

秋田県教育委員会『新屋敷遺跡』秋田県文化財調査報告書第389集　2005(平成17)年

横手市『横手市史(資料編)　考古』2007(平成19)年

産業技術研究所地質調査総合センター編『20万分の１日本シームレス地質図データベース』2005年８月16日版

第２表　周辺の遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構　・　遺物
湯　沢　市				
（旧湯沢市）				
７－１	東山寺墓地上	湯沢市字西金掘沢４	遺物包含地	石核、舟底形石器、ナイフ形石器、石刀、尖頭器、削器、彫器、石篦
７－７	中屋敷	湯沢市山田字中屋敷255-1	遺跡包含地	竪穴住居跡と思われるもの３ヶ所、縄文土器(後期)、注口土器、土偶、変身具など多数
７－８	塞の神	湯沢市松岡字塞の神2-2	遺跡包含地	縄文土器片(堀之内１、２式)
７－９	鎧田	湯沢市松岡字鎧田127	遺跡包含地	縄文土器片(晩期)、完形品80個、台付浅鉢、壷形土器、香炉彫土器、四脚土器、土偶、土版、土製栓状耳飾10個以上、臼形耳飾１個、小玉30個以上、漆塗櫛２個、環状石斧、多頭石斧、両頭石斧、石剣、石棒、クルミドングリ、クリ、トチ、ハシバミ、木片多数
７－10	水沢	湯沢市松岡字水沢86	遺跡包含地	縄文土器片(後期)
７－11	山田中学校グラウンド	湯沢市山田字下館10	遺跡包含地	縄文土器(大洞C ２、A式)、独鈷石、石棒、掻器
７－12	上人沢	湯沢市字上人沢山	遺物包含地	縄文土器片(新地式、加曾利B式)
７－13	土沢Ⅰ	湯沢市山田字南土沢77-78	遺跡包含地	縄文土器(大洞BC式)、磨石、片頭石棒、石槍、石匙、磨製石斧、石篦
７－14	土沢Ⅱ	湯沢市山田字南土沢74	遺跡包含地	縄文土器、(大洞C式)、石皿、凹石、石棒、石匙
７－15	中山	湯沢市相川字中山105	遺跡包含地	縄文土器片(後期)、石鏃
７－16	外ノ目	湯沢市相川字新坊89-1	遺物包含地	縄文土器片(後期)、石篦、石鏃
７－17	大台山	湯沢市高松字大台山	遺物包含地	縄文土器片
７－18	長蓮寺	湯沢市高松字上地49	遺物包含地	配石遺構、土坑、焼土遺構、縄文土器片(大洞BC、Ｃ１、Ｃ２式)、打製石斧、掻器、石鏃、石棒、石刀、勾玉、磨製石斧、石匙
７－19	七十刈	湯沢市字留院内字七十刈9-1	遺物包含地	縄文土器片、石刀、打製石器
７－20	高野	湯沢市高松字高野158-1	遺物包含地	縄文土器片(大洞BC式)
７－21	三途川	湯沢市高松字三途川93	遺物包含地	土偶片、石匙、磨製石斧片
７－22	桑の沢口	湯沢市高松字桑の沢口	遺物包含地	縄文土器片
７－27	杉田	湯沢市深堀字杉田10-11	遺物包含地	土師器、須恵器片
７－28	鍬柄	湯沢市山田字鍬柄	遺物包含地	竪穴住居跡、土師器、須恵器
７－30	無紀年碑	湯沢市山田字下六日町56	板碑	種子、胎蔵界大日(アー)
７－31	トラ坊姫碑	湯沢市山田字南土沢195-4	板碑	種子、月輪にバク、延文５年４月28日
７－32	無紀年碑	湯沢市山田字芦ヶ沢山林203	板碑	種子、キリーク、サ、サク
７－33	無紀年碑	湯沢市関口字関口226-4	板碑	種子、胎蔵界大日(アーンク)
７－34	無紀年碑	湯沢市下関字榎本	板碑	種子、弥陀(キリーク)
７－35	立石	湯沢市八反田字八反田26	板碑	銘文
７－36	正和５年碑	湯沢市上関字鍋ヶ沢17	板碑	種子、月輪に胎蔵界大日(アーン)
７－37	貞和３年碑	湯沢市上関字鍋ヶ沢17	板碑	種子、弥陀(キリーク)
７－38	延文５年碑	湯沢市上関字鍋ヶ沢17	板碑	種子、弥陀(キリーク)
７－39	建武元年双式碑	湯沢市相川字岩の沢144-9	板碑	種子、弥陀(キリーク)、蓮台、蓮部元年８月の年紀あり
７－40	貞和４年碑	湯沢市相川字田畑290	板碑	種子、釈迦(バク)らしい。貞和４年
７－41	無紀年碑	湯沢市相川字中山18	板碑	種子、弥陀(キリーク)、釈迦(バク)の２尊
７－42	無紀年碑	湯沢市相川字中山18	板碑	種子、弥陀三尊(キリーク、サ・サク)、蓮台
７－43	紀年不詳碑	湯沢市高松字中村87	板碑	種子、弥陀三尊(アン・サク・サ)、主尊無量寿(アン)、その下右が勢至(サク)、左が観音(サ)、紀年判読不能
７－44	元亨２年碑	湯沢市高松字上地49	板碑	２基１組の内の１基、種子、右に金剛界大日(バン)、胎蔵界大日(バン)、左に金剛界大日(バン)、弥陀三尊(キリーク)、下部に弥陀三尊(キリーク)、下部に弥陀三尊(キリーク・サ・サク)を横に配列、銘文あれど判読不能
７－45	嘉暦２年碑	湯沢市高松字上地49	板碑	種子、金剛曼荼羅(上に弥陀・キリーク)、中に金剛界大日(バン)、左に阿閃(ウン)、右に不空成就(アーク)、嘉暦２年９月
７－46	無紀年碑	湯沢市留院内字川前34	板碑	種子、月輪に金剛界大日(バン)
７－47	貞和２年碑	湯沢市留院内字川前34	板碑	種子、月輪金剛界大日(バン)、真和２年７月10日
７－48	松岡経塚	湯沢市松岡字坊中	経塚	金銅経筒(４)、須恵器３、土師器(１)、刀子(３)、洪武通宝(１)、菊花双雀文鏡(１)、寿永３年～建久７年の銘あり
７－49	取上石山	湯沢市取上石山3-1	窯跡	平窯群、柱穴群、炉跡、水消壷、住居跡(罹災している)、刻文土器(ヘラ書き文字)、土師器片
７－52	湯沢城	湯沢市字古館山	館跡	郭、堀
７－53	深堀城	湯沢市深堀字深堀	館跡	郭
７－54	松岡城	湯沢市松岡字新城	館跡	郭、堀
７－55	八幡林館	湯沢市松岡字八幡林	館跡	郭、堀
７－56	堂ヶ沢館	湯沢市山田字北ノ沢	館跡	郭、堀
７－57	上の宿館	湯沢市山田字芦ヶ沢	館跡	郭、堀
７－58	関口城	湯沢市関口字館落	館跡	郭、堀
７－59	瘤沢館	湯沢市下関字瘤沢	館跡	郭、堀
７－60	相川城	湯沢市相川字古館山	館跡	郭、堀
７－61	中屋敷館	湯沢市高松字中屋敷山	館跡	郭、空堀
７－62	一里塚	湯沢市湯ノ原2-40-9	一里塚	槻木
７－63	一里塚	湯沢市愛宕町2-1-56	一里塚	槻木
７－64	堀量	湯沢市関口字堀量113外	集落跡	竪穴住居跡23軒、土坑100基、竪穴状遺構１基、配石遺構２基、焼土遺構５基、溝跡１条、柱穴様ピット169基、縄文土器、土偶、石器
（旧稲川町）				
65－12	宮の前	湯沢市駒形町字八面宮ノ前65-1	遺物包含地	土師器片、須恵器片
65－13	欠上り	湯沢市川連町字欠上り	遺物包含地	炉跡、縄文土器片(大木６、７a、７b、８a、８b式)、打製石斧、磨製石斧、石篦、石棒、打製石斧、石匙、石鏃、石錘、掻器
65－14	稲荷山	湯沢市三梨町字飯田稲荷山18	遺物包含地	剥片
65－15	韮谷地	湯沢市三梨町字飯田韮谷地68- 1、67- 1	遺物包含地	
65－16	萱場沢	湯沢市三梨町字飯田萱場沢13、14	遺物包含地	縄文土器片(加曾利B式並行)、石鏃、石篦、掻器、打製石斧、石匙、石槍、磨製石斧

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(湯沢・雄勝地域版)』2005(平成17)年より転載

65－17	峠脇	湯沢市三梨町字宮田峠脇1	遺物包含地	縄文土器片、石錘、石鏃、石斧
65－18	小松原	湯沢市三梨町字小松原75-1	遺物包含地	石篦
65－19	女夫沼	湯沢市三梨町字女夫沼	遺物包含地	縄文土器片(大洞B、B-C １式)、土偶、勾玉、磨製石斧、打製石斧、石錘、石匙、尖頭器、石鏃、掻器
65－20	下川原	湯沢市稲庭字下川原２外	遺物包含地	縄文土器片(加曾利B式並行)、磨製石斧
65－21	早坂	湯沢市稲庭字早坂	遺物包含地	縄文土器片(大木７b式)、石鏃、石匙、石篦、フイゴ羽口片、椀形鉄滓
65－22	大谷Ⅰ	湯沢市稲庭町字大谷(俗称檀ノ上)	遺物包含地	縄文土器片(大洞BC、Ｃ１式)、円形凸形土版、中空土版、遮光器土偶、石鏃、石錘、打製石斧、石棒、掻器
65－23	宝龍台上	湯沢市稲庭町字大谷(俗称宝龍台)	遺物包含地	組石群、縄文土器片(前期・大木６、７a、７b、８a、８b式)、石鏃、発火石、石匙、石斧
65－24	大谷Ⅱ	湯沢市稲庭町字二階220～250(俗称腰めぐり)	遺物包含地	縄文土器片(大洞BC、Ｃ１式)、円形土版、中空土版、打製石斧、石鏃、石錘、掻器
65－27	八幡館	湯沢市川連町字川連古館	館跡	郭、空堀
65－28	川連城	湯沢市川連町字大館古館	館跡	帯郭、空堀
65－29	大館	湯沢市川連町字大館下山王	館跡	
65－30	平城	湯沢市川連町字上平城25	館跡	堀、焼米
65－31	三梨城	湯沢市三梨町字下宿	館跡	郭、水堀
65－32	栄花館	湯沢市稲庭町字栄花館、三梨町字栄花館	館跡	
65－33	新城館	湯沢市稲庭町字下高橋、字新城台	館跡	郭、空堀
65－34	稲庭城	湯沢市稲庭町字古館前平	館跡	郭、空堀、焼米、直刀の一部
65－36	大屋敷	湯沢市三梨町字三梨山崎355	寺院跡	
65－37	長楽廃寺	湯沢市稲庭町字苧	寺院跡	
65－38	大谷経塚	湯沢市稲庭町字大谷310	経塚	
65－39	広沢寺石塔	湯沢市稲庭町字小沢112	宝篋印塔	
65－40	大谷五輪塔	湯沢市稲庭町字大谷	五輪塔	
65－42	永徳碑	湯沢市三梨町字御嶽堂93	板碑	碑高110cm、幅70cm、厚20cm、永徳３年
65－43	峠茶屋(あやめ茶屋)	湯沢市三梨町字飯田韮谷地	史蹟	御道茶屋跡
(旧雄勝町)				
66－９	下馬場	湯沢市下院内字下馬場28	遺物包含地	縄文土器片(大木10式)、打製石斧、石錘
66－10	小野熊野神社	湯沢市小野字小野115	遺物包含地	縄文土器片(大木７b、８a式)
66－11	小野Ⅰ	湯沢市小野字小野	遺物包含地	縄文土器片、石鏃、石斧
66－12	小野Ⅱ	湯沢市小野字小野53	遺物包含地	縄文土器片(大木６式)
66－13	桐木田の井戸	湯沢市小野字桐木田	史跡	井戸
66－14	姥っこ石	湯沢市小野字桐木田	板碑	板碑３基
66－15	桐善寺紀年碑	湯沢市桑崎字平城206-1	板碑	板碑３基
66－16	無紀年碑	湯沢市桑崎字平城206-1	板碑	阿弥陀、金剛界大日
66－17	三ツ村	湯沢市桑崎字蟹沢	遺物包含地	石器
66－18	嘉暦元年碑	湯沢市横堀字板橋40	板碑	金剛界大日、胎蔵界大日
66－19	貞和碑	湯沢市横堀字館堀96	板碑	板碑１基
66－20	嘉暦２年碑	湯沢市寺沢字堀ノ内13	板碑	嘉暦２年丁卯３年
66－21	応永７年碑	湯沢市寺沢字田中167	板碑	梵字、阿弥陀三尊
66－22	磨崖碑	湯沢市横堀字板橋40	磨崖碑	角閃安山岩
66－27	九十九沢	湯沢市秋ノ宮字九十九沢4	遺物包含地	
66－34	鵜沼城	湯沢市桑崎字平城１	館跡	掘立柱建物跡59棟、井戸跡68基、土坑27基、堀跡１条、溝16条、陶磁器類、漆器、木製品、石製品
66－35	平城館	湯沢市桑崎字平城	館跡	郭、土塁
66－36	桐木田館	湯沢市小野字桐木田	館跡	堀、土橋、土塁
66－37	御返事城	湯沢市桑崎字御返事	館跡	堀、段築
66－38	泉沢館	湯沢市泉沢	館跡	
66－39	小野城	湯沢市泉沢字古館1-1	館跡	郭、堀
66－40	法領館	湯沢市下院内字館山	館跡	郭、堀
66－42	臼館	湯沢市下院内字焼山	館跡	郭、空堀
66－51	椛山館	湯沢市秋ノ宮字九十九沢	館跡	郭、空堀
66－52	影平館	湯沢市秋ノ宮字影平	館跡	郭、空堀
66－54	草井崎城	湯沢市横堀字館ノ沢	館跡	郭、空堀
66－55	館堀城	湯沢市寺沢字館堀	館跡	郭、空堀、掘立柱建物跡、中世陶磁器
66－56	浅萩館	湯沢市寺沢字浅萩館	館跡	郭、空堀、土塁
66－57	穴小屋址	湯沢市寺沢字黒森	館跡	段築、土塁
66－58	沢	湯沢市秋ノ宮字沢	遺物包含地	縄文土器、石器
66－65	新屋敷	湯沢市桑ヶ崎字新屋敷146ほか	集落跡	掘立柱建物跡、土坑、縄文土器(後～晩期)、石器、土師器、須恵器、中世陶磁器
66－66	長戸呂	湯沢市桑ヶ崎字長戸呂125ほか	遺物包含地	土坑、縄文土器(後～晩期)、石器、土師器、須恵器
66－67	清水前	湯沢市桑崎字清水前226ほか	遺物包含地	土師器
66－⑪	県指定　史跡　<磨崖>			
(旧皆瀬村)				
69－１	白沢	湯沢市皆瀬字白沢	遺物包含地	縄文土器片(晩期)、磨製石斧、石篦、石錘、打製石斧、掻器、石鏃、石槍、石匙、尖頭器
69－２	打野	湯沢市皆瀬字打野	遺物包含地	縄文土器片、石鏃
69－３	上野	湯沢市皆瀬字上野71、72	遺物包含地	縄文土器片(大洞C ２式)、片頭石棒、石匙、打製石斧、独鈷石、土偶
69－４	沢梨台	湯沢市皆瀬字沢梨台	遺物包含地	縄文土器片(大木７b式)、磨製石斧
69－19	板碑	湯沢市皆瀬字白沢	板碑	嘉暦元(1326)年
69－⑤	県指定有形文化財(建造物)<菅生橋>			

第３章　発掘調査の概要

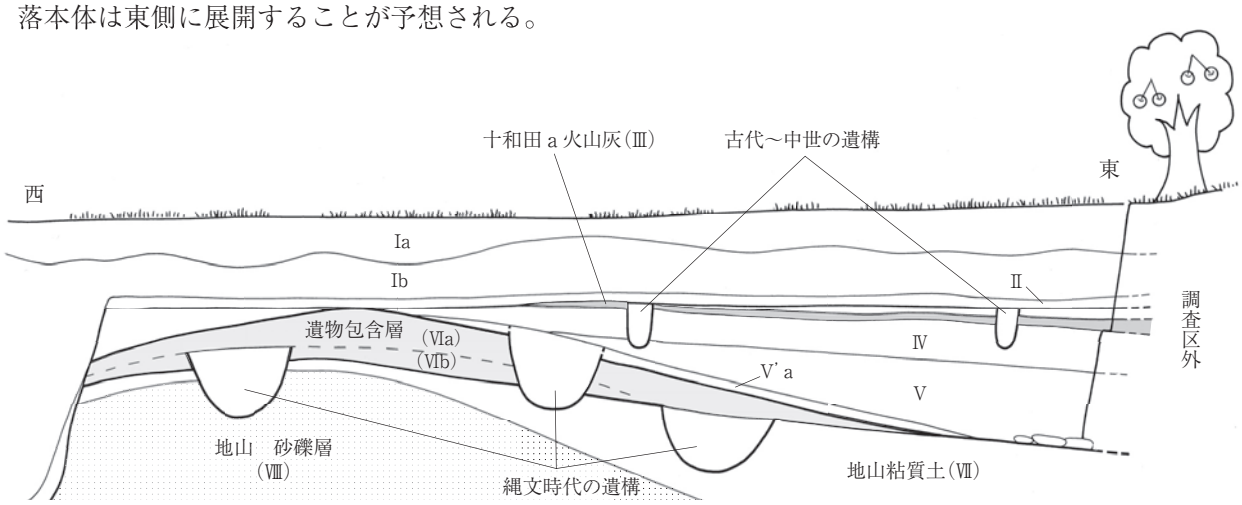
第１節　遺跡の概観

堀ノ内遺跡は湯沢市を北流する雄物川の右岸に位置し、東鳥海山の麓より湧き出でて雄物川へと合流する麓沢川沿いの沖積扇状地に立地する。遺跡東側の緩斜面地にはさくらんぼを主とした果樹園が一帯に広がる。遺跡はこの果樹園のある小さな扇状地形の端部に立地する。調査区西側の一段低い低位沖積地には水田が展開する。比較的形成時期の新しい小規模な扇状地形の広がるこの地域では、表土が厚く遺物などが地表面に現れることが少ないため、周知の遺跡はあまり多くない。

今回の発掘調査では、厚い表土の下から大きく２時期の遺構群が検出されている。

発掘調査で確認された最も古い時期の生活面は縄文時代後期後葉から晩期中葉にかけての墓域・祭祀域で、土坑や土器埋設遺構、配石遺構で構成されている。土坑は概ね円形である。調査区中央部に南北方向に細長く微高地が存在し、これより東および西側に向かって緩やかに傾斜する地形を呈する。標高106.9～107.8ｍの沖積低地である。縄文時代の遺跡は氾濫原で、流路にはさまれた微高地上に遺構群が集中する。この遺構群の分布とほぼ重なるように、遺物包含層が約５～40㎝堆積しており、土坑や土器埋設遺構はこの遺物包含層の上面や中から構築されたものと、遺物包含層下の地山面から構築されたものがある。この時期の遺構群および遺物包含層は調査区北東方向にさらに展開している。また、調査区内で検出された３基の配石遺構は調査区西側にさらに展開することが分かっている。が、遺物包含層はこれより東にはそれほど広がらない。

新しい時期の遺構群は古代から中世の集落跡と思われる。この時期には東鳥海山の沢からの堆積物で粘質土層が厚く堆積し、広い平坦地へと地形が変化している。標高は107.7～108.2ｍである。基本層序でⅢ層とした十和田ａ火山灰が薄くほぼ水平に堆積しており、この時期には比較的安定した陸地になっていたことが分かる。遺構群のほとんどは規模が径15～25㎝の柱穴で、その他に焼土遺構６基と土坑１基が検出された。柱穴がどのような構造物を構成していたかは不明であるが、これら遺構群は南東側に集中しているため、今回の調査区は古代～中世の集落の西端を調査したものと分かる。集落本体は東側に展開することが予想される。



第６図　調査区地形模式図

第２節　調査の方法

１　グリッドの設定方法

調査区には、日本測地系国家座標第Ｘ系に整合する任意の点(X＝－99,425　Y＝－29,750)を原点として、X軸・Y軸の方向に４m間隔の方眼を設定した(第７図)。方眼の原点を通る南北X軸方向の線をＭＡ、同じく東西Y軸方向の線を50とし、X軸方向の線には西に向かって昇順する２文字のアルファベットを、Y軸方向の線には北に向かって昇順する２桁の数字をそれぞれ付した。なおX軸方向に付したアルファベットには、繰り返しとなるＡ～Ｔまでの20文字を組み合わせて用いた。方眼による４m四方の区画は、南東隅を通過する線の記号を組み合わせ、例えば方眼の原点をＭＡ50と呼ぶことにした。

２　遺構の検出と精査

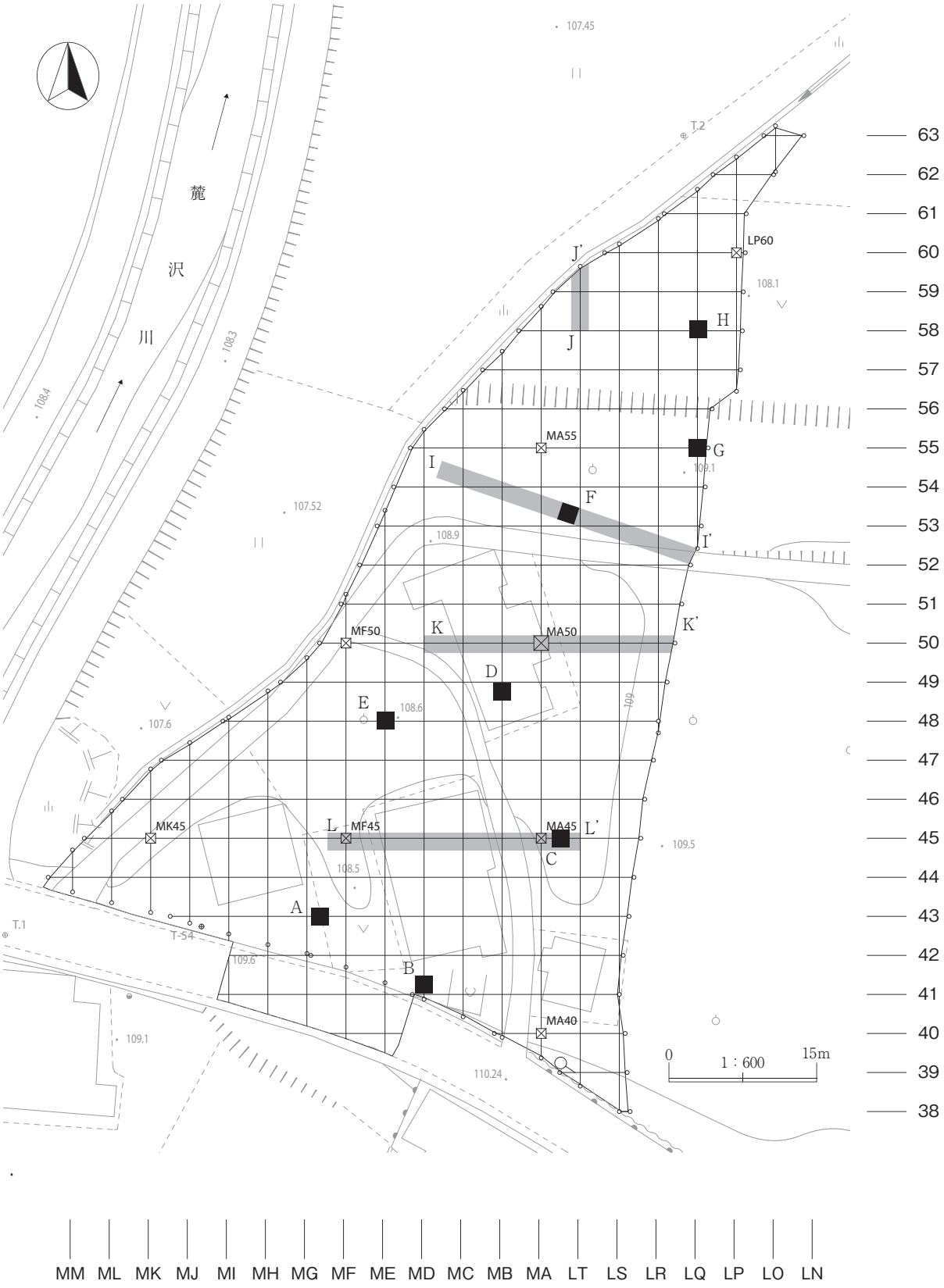
基本土層Ⅱ～Ⅳ層から構築された遺構群とⅤ'ａ～Ⅶ層で構築された縄文時代の遺構群が存在することが、重機による表土除去の際に確認された。そこで、まず調査区全面においてⅡ～Ⅳ層上面での遺構の検出を行い、精査が完了したグリッドより縄文時代の遺構確認のためにⅡ～Ⅴ層を掘り下げた。調査途中で、このうちⅣ～Ⅴ層中には遺物がほとんど含まれないこと、さらには調査区南東側では最大0.8mの厚さ堆積していることが判明した。そこでⅣ～Ⅴ層の掘り下げには可能な限り重機を用いることとした。調査区内には、グリッドに沿って土層観察用ベルトを東西方向に５本、南北方向に７本設定し、この部分を残しながら層序毎に掘り下げを行った。Ⅴ'ａ層においては数基の土器埋設遺構が検出されたが土坑など他の遺構は確認できなかったため、この部分を残してグリッド全体をⅥａ層上面あるいはⅦ層上面まで掘り下げ、遺構の確認及び精査を行った。

遺構名称については、その種別を示す略記号と01からの番号を付し、例えばＳＫ01のように呼称することとした。番号は遺構の種別にかかわらず確認した順に連番で付した。ただし、Ⅱ～Ⅳ層で確認した縄文時代以外の柱穴様ピットについては、グリッド毎の通し番号とし、ＭＡ50①のように表記した。なお、調査の結果遺構として判断されなかった場合は欠番とした。

遺構の精査は、半截または十字や一文字に土層観察ベルトを残して掘り下げ、堆積土を観察し、土層断面の実測と写真撮影を行った。土層は土色・土性・粘性・硬度・混入物の相違などによって分層し、各層の注記を行った。

３　遺物の取り上げ方

発掘調査では、特にⅥ層を中心として多量の遺物が出土した。しかし、調査期間が限られていたことからこれらは基本的にはグリッド毎で層位別に取り上げた。包含層の掘り下げは厚さ約５㎝ずつ段階的に行い、１段目、２段目というように段階毎に取り上げた。また、掘り下げ段階で土器の完形個体や土製品・石製品などを確認した場合は可能な限り出土状況の記録(平面およびレベルの計測)を行った。平面位置の記録には一部に光波測量機を併用した。



第７図　基本土層位置・グリッド配置図

４　記録

遺構の平・断面図は基本的に1/20で作成したが、土器埋設遺構や配石遺構など、より詳細な図が必要となった場合には1/10で作成した。遺物の出土状況については1/20で平面図を作成し、レベルを用いて標高の記録を行ったが、一部に光波測量器を併用して記録した。図面の記録にはＡ２版のマイラーベースを使用した。

写真撮影には、35㎜およびブロニー版フィルムカメラを使用した。フィルムはモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを中心に、ネガカラーフィルムを交えて行った。また、デジタルカメラによる調査状況の記録等も実施した。平成16年度の発掘調査終了間際には、バルーンによる空中写真撮影を業務委託し、遺跡全景などをデジタルカメラで撮影した。

第３節　調査の経過

平成15年

堀ノ内遺跡の発掘調査は、７月24日～８月１日に重機による表土除去、７月28日～８月８日に方眼杭打設などの諸準備を経て、８月１日より開始した。古代～中世の遺構群と、調査区南部を中心に縄文時代の遺構と遺物包含層を調査した。

７月24日(金)　本調査に先立って、重機を用いての調査区内の表土除去を実施(８月１日まで)。縄文時代の包含層より上位にも遺構確認面が存在することが判明。基本土層Ⅱ～Ⅳ層上面より精査を実施することとした。８月１日より作業員を雇用。機材の搬入と環境整備を行った。

８月４日(月)　Ⅱ～Ⅳ層上面での遺構確認を開始。柱穴群を検出した。

８月５日(火)　調査区内に５本の土層観察ベルトを設定。これに沿ってトレンチ調査を開始。縄文時代の遺物包含層(Ⅵ層)上面までを掘削。調査区中央にやや高まりを持つように分布すること把握をした。

８月11日(月)～15日(金)　お盆休み

８月18日(月)～22日(木)　調査区南端でのトレンチ調査により、調査区西側に確認された旧河川跡による撹乱は基盤礫層に達していることが判明。この撹乱の範囲の精査は必要ないと判断した。また、Ⅲ層(十和田ａ火山灰)が平面的に堆積していることが判明した。

８月23日(金)　旧河川跡による撹乱を一部除去したところ、土器埋設遺構３基(ＳＲ06・07・08)を検出した。

９月３日(水)　ＳＫ09をⅢ層上面にて検出。

９月４日(木)　45ライン以南で、Ⅱ～Ⅳ層検出の遺構の精査を終了。

９月10日(水)　Ⅱ～Ⅳ層検出遺構の精査を全て完了。全員でⅣ～Ⅴ層の除去作業に入る。Ⅳ～Ⅴ層にはほとんど遺物が含まれないことが明らかとなった。

９月16日(火)　Ⅵ層以下の状況を確認するため、以前に設定したトレンチの幅を広げて掘り下げた。

９月18日(木)　一部グリッドで縄文時代の遺物包含層まで達し、遺物や土器埋設遺構が検出された。

９月22日(月)　トレンチ調査によりⅥ層の分布範囲が想定に反して、53ラインより北側では調査区全域にわたっていることが判明。

９月24日(水)　調査区東端、ＬＱ51グリッドにて配石遺構(ＳＱ20)を確認。

９月26日(金)　これまでの調査結果より、Ⅳ・Ⅴ層が調査区北部で約30㎝、調査区南部では60～80㎝も堆積していることが判明。調査期間に限りもあることから、重機を用いてⅣ・Ⅴ層を除去することとした。重機の進入路確保のため、調査区南端部の精査を急いだ。

10月３日(金)　調査区南端のⅦ層上面にて本調査で初めて、土坑を検出(ＳＫ18)。

10月９日(木)～15日(水)　重機によるⅣ・Ⅴ層の除去を実施。

10月14日(火)　雄勝高等学校一年生67名が、発掘調査を見学。

10月15日(水)　調査区北部・南部の２班に分かれてⅥ層の掘り下げ、遺構の検出・精査を実施。

10月28日(火)　ＬＴ42グリッド付近で、ＳＱ41・42の一部を検出。大型の配石遺構の存在を知った。

10月29日(水)　県文化財保護室、県埋蔵文化財センター、原因者の３者で、今後の調査工程などについて協議した。当初は調査を予定していなかった市道下にも遺跡が展開することが判明し、この地点の調査実施が決定した。

10月31日(金)　調査区北側で、ＳＫ55よりクルミ層を検出。
ＳＱ41・42については全体像が現れた。概ね２列の弧状に配置することが分かった。

11月10日(月)　秋田朝日放送が取材のため来跡。
市道部分の調査のため、道路切り回し部にかかる箇所について、集中して遺構の精査を実施。ＳＱ41・42の断ち割り調査を行ったが、下部に人為的な掘り込みが存在しないことが判明した。

11月12日(水)　羽後町立明通小学校の生徒42名が発掘調査の見学に訪れた。
原因者から、次年度に調査を持ち越さず、冬期間も調査を継続して欲しいとの要望があり、この件について県文化財保護室、県埋蔵文化財センターを交えて協議した。

11月17日(月)　市道切り回し工事開始(～19日)。

11月25日(火)　市道部分のアスファルト及び表土を除去。調査を開始した。

11月28日(金)　埋蔵文化財センターにて遺物の洗浄作業を開始するため、36ℓコンテナ162箱の遺物を搬出した。

12月２日(火)　原因者と文化財保護室との幾度かの協議の結果、平成15年度の発掘調査を12月18日(木)までとし、残りは次年度に持ち越すことが決定した。

12月３日(水)～５日(金)　中国・甘粛省から秋田県へ来ている２名の交流員(甘粛省文物考古研究所：周広済氏、甘粛省博物館：李暁青女史)が調査に参加した。

12月４日(木)　この日、調査区ではじめての降雪。これ以降、雪の中での調査となった。

12月18日(木)　遺物包含層が既に露出している次年度調査予定地区に、保護のためのシートを全面に敷いて養生し、平成15度の発掘調査を終了した。

平成16年度

前年度の調査で、確認される遺構の種別や状況は把握されていたため、各グリッドで順次、遺物包含層の掘り下げと遺構確認・精査を進めた。しかし、縄文時代の遺構確認面が２面存在すること、前年度調査区に比較して遺構の重複が著しかったことなどから、当初予定より１週間ほど延長して調査を実施した。

４月14日(水)　調査開始。山側からの湧水量が昨年度に比べて多いため、これを24時間ポンプアップしながら調査を進めることとした。しばらくは原因者側が工事のために準備した配線を使用しポンプを稼動させた。排水の関係から調査区北部および試掘時の４号トレンチ内で確認された遺構の精査を優先的に進めることとした。調査区北部では、Ⅵ層上面において砂質土の円形プランを複数確認。

４月20日(火)～21日(水)　湯沢市ローカルＦＭ局のＦＭゆーとぴあが取材に訪れた。

４月28日(水)～５月10日(月)　15年度の調査で遺物が集中して出土したＭＡ50付近で遺構確認を進めた。小型の柱穴様ピットがいくつか検出されるのみで、この部分の遺構の分布が希薄であることが分かった。

５月６日(木)　調査区脇への電気配線工事が終了。水中ポンプの設置が楽になった。

５月11日(火)　４号トレンチ内の精査を終了。北側と南側の大きく２班に分かれて遺物包含層(Ⅵ層)の掘り下げ→遺構の確認→精査を実施した。遺物の洗浄のため、出土品を36ℓコンテナ20箱分をセンターへ搬出した。

５月13日(木)　ＭＢ50グリッドより、大型の動物形土製品が出土。翌日もＬＳ54より１点が出土し、遺跡から出土した動物形土製品は２ヵ年合計で４点となった。

５月中旬　調査区北部でⅥ層上面にて確認されるプランは、人為的掘り込みと確認した。縄文時代の遺構検出面が少なくとも２面あることを把握し、効率的な方法を選択しながら精査を進めた。

５月下旬　ＬＲラインでは概ねⅥ層上面の遺構精査およびⅥ層の掘り下げを終了し、Ⅶ層上面での遺構確認段階に入った。

５月25日(火)　15年度に検出したＳＱ20の断ち割りを実施。Ⅵ層より上部に構築されていることが判明。周辺のⅥ層出土遺物から、晩期の配石遺構であることが確認された。

５月28日(金)　人面装飾付き土器が出土。

６月上旬　ＬＴ52～ＭＡ52グリッド付近で、土器埋設遺構が密集して分布することが確認された。

６月19日(土)　遺跡見学会を実施。県内外から145名が参加した。

７月７日(水)　バルーンを使っての空中写真撮影を実施。

７月８日(木)　51ラインより南の調査を終了。全員が北部にて作業を進めた。

７月12日(月)～16日(金)　残る数基の土坑について掘り下げと記録を実施した。14日には豪雨により調査区北部がほぼ水没。中央の微高地だけが水面より出ていたので、この部分の精査を進めた。

７月14日(水)　山形県埋蔵文化財センターの職員７名が来跡。

７月16日(金)　調査区内のすべての調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

１　室内整理の経過

堀ノ内遺跡の遺物は、未洗浄の状態で36ℓ入りコンテナ換算で土器約442箱、石器約148箱に及んだ（２ヵ年合計）。これら遺物については、平成15年10月より、発掘調査と並行し南調査課において遺物の洗浄および注記作業を実施した。また平成15年12月19日～平成16年１月27日には、遺跡に程近い湯沢市下関に仮設プレハブ事務所を設け、遺物の洗浄を実施した。平成16年度には遺物の洗浄・注記、埋設土器の接合および復元、平成17年度はその他の土器の接合および石器の分類、平成18年度は主に遺物実測図作成、平成19年度は土製品・石製品の実測と遺物トレースおよび図版作成を行った。

２　遺物の注記

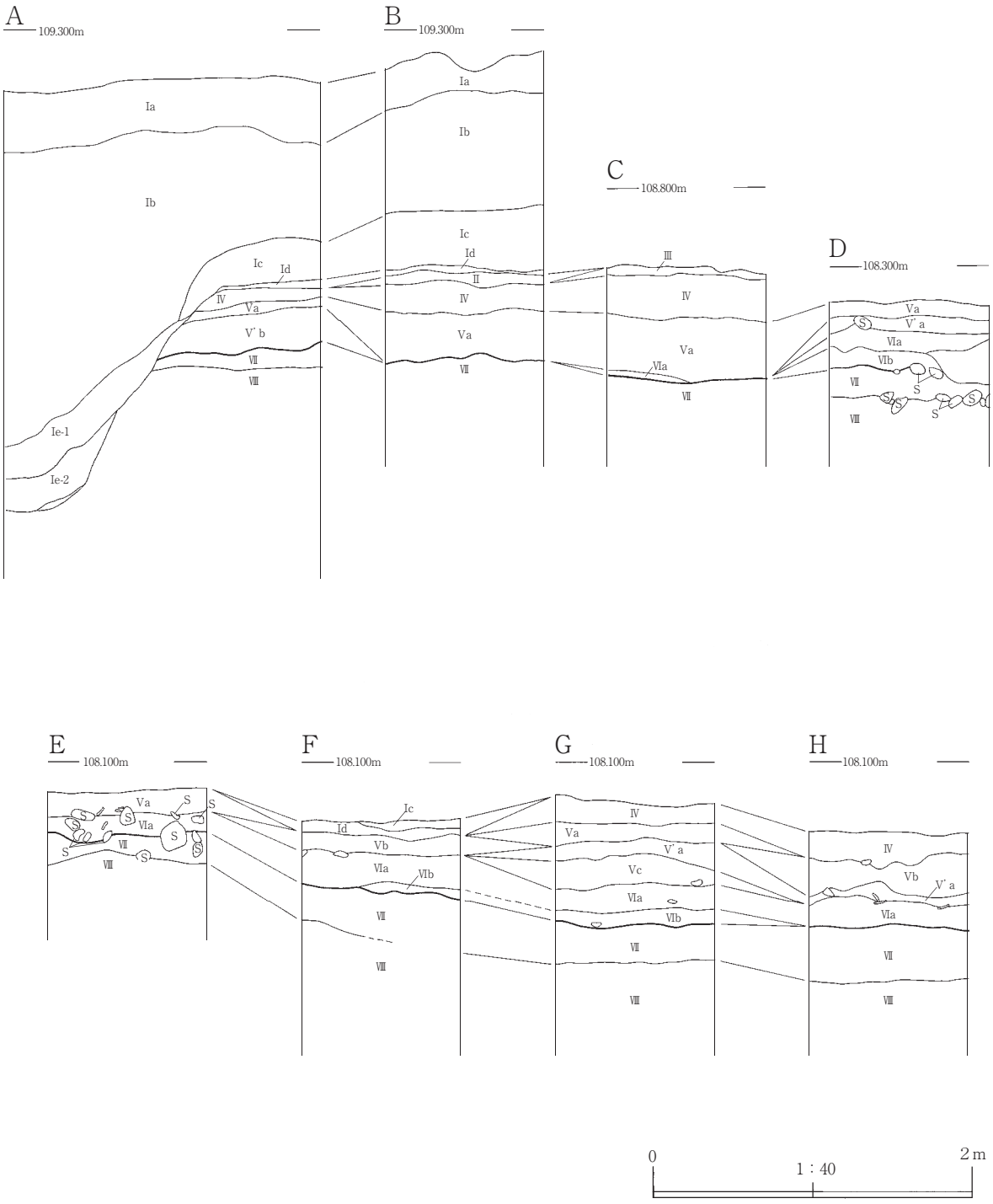
遺物の注記は遺跡名（９ＨＮＵ）・出土位置（グリッド名もしくは遺構名）・遺物番号・出土層位・出土年月日（031021のような６桁の数字）を記入した。ほとんどの資料には機械を使用して注記したが、土製品・石製品を中心として一部の資料にはポスターカラーで注記した。その際、遺構外出土資料には白色、遺構内出土資料には黄色のポスターカラーを使用した。なお、機械で注記した資料についても、遺構内出土資料については文字の下に黄色のポスターカラーでマークし、容易に識別できるようにした。遺構外出土遺物の層位については、取り上げ時の層名のまま注記してある。基本層位の名称は、本報告書の作成段階で一部変更している。第４章第１節では基本土層について説明しているが、ここに取り上げ時の層名も付記した。これを参照して、本書の記述内容と照合させて欲しい。

３　遺物の分類と掲載遺物の選定

基本的には種別毎に形態などにより分類を行った後、特定の分類に偏らず、出来るだけ遺跡全体の様相を反映出来るように考慮しながら、掲載資料を決定した。遺構外出土の土器については、資料数の少ないものについては、破片資料も掲載した。また、晩期の土器のように同一規模で似通った文様の資料についても、一定量を選び出すことでそのタイプの資料が比較的まとまって出土している様子が反映出来るように考慮した。

４　調査記録の整理と保存

発掘調査時に現地で作成したマイラーベースに記した遺構平・断面などの原図類、及び原図を基に整理し報告書に掲載する挿図の基とした第２原図類はＡ２版二つ折り図面ケースに収納した。写真類は概ね撮影順にアルバム類に整理して収納した。35㎜のネガカラーおよびモノクロフィルムは、ネガカラー29冊、モノクロ21冊のネガアルバムに、35㎜リバーサルフィルムについてはスライドアルバム29冊に収納した。現場で補助的に撮影したデジタルカメラによる写真記録、遺跡の空中写真撮影（デジタル撮影）の成果品、遺物写真類（デジタル撮影分）については、CD-R、DVD-R等に記録した。その他、調査に関する記録（野帳・遺構調査カード等）は全て、埋蔵文化財センターに保管する。



第８図　基本土層柱状図（Ａ～Ｈ）

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

本調査ではトレンチによる試掘調査の結果を基に、重機により表土層を除去した後、グリッドに沿って土層観察用ベルトを東西方向に５本、南北方向に７本設定し基本層序の把握に努めた。このうち８か所の土層柱状図（Ａ～Ｈ）と４本の土層断面図（Ｉ～Ｌ）を第８～11図に、その位置を第７図に示した。

Ｉ層は近～現代の土層で、その土質や由来によって上から順にａ・ｂ・ｃとアルファベットを付した。Ｉａ層は現代の表土で、層厚は30～50㎝である。調査区全域に堆積していた。Ｉｂ層は層厚約70～180㎝の混土砂礫層である。調査区西側に確認された旧河川流路を埋めている。調査時の聞き取りで、昭和20年代ごろに集中豪雨による大規模な山崩れが発生し、調査区域周辺に土砂が厚く堆積したと聞いた。本土層はこの際の土砂と推察される。Ｉｃ層とＩｄ層は調査区内でほぼ水平に堆積する水田由来層である。Ｉｅ層は調査区西の旧河川流路に堆積する混土砂礫層で、層厚10～50㎝である。

Ⅱ層は灰褐色粘質土（7.5YR5/2）で調査区南東部で部分的に確認された。層厚は10㎝以下である。古代～中世の遺構群は概ねⅡ層で検出されており、当該期の遺物を少量含む。

Ⅲ層は黄褐色火山灰（2.5Y5/4）である。分析の結果、915年降下の十和田ａ（Ｔｏ－ａ）火山灰であることが確認された（第５章第１節）。層厚２～10㎝で、調査区東部に広く分布していた。

Ⅳ層は灰黄褐色～褐色（10YR4/2～7.5Y4/3）粘質土層である。層厚15～30㎝で礫をほとんど含まない。

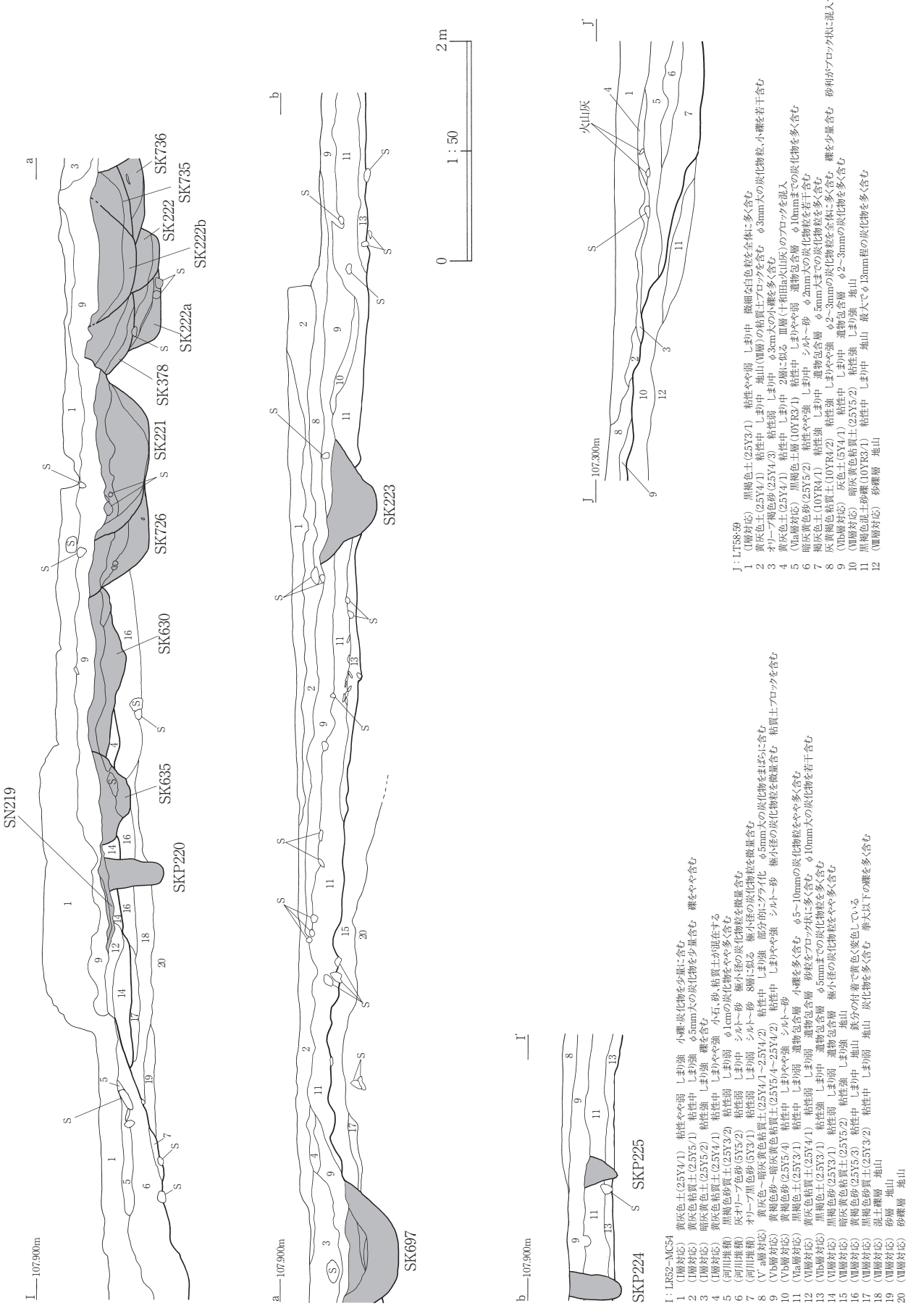
Ｖ層は縄文時代の遺物包含層上部に堆積した粘質土～砂層である。Ｖａ層は灰色（5Y5/1）粘質土層で層厚20～70㎝である。調査記録（遺物注記）の「Ｖ層」はこれに対応する。部分的に粗粒砂が互層を成す。Ｖｂ層は黄褐色（2.5Y5/4）シルト～砂層であり、調査記録（遺物注記）の「Ｖ層砂」と対応する。縄文時代の遺物を少量含む。Ｖｃ層は暗褐色（10YR3/1）粘質土層で層厚は15～20㎝である。調査記録（遺物注記）の「Ｖ層下」はこれに対応する。Ｖｂ・Ｖc層は52ライン以北のみに堆積する。

Ｖ'層は縄文時代の遺物包含層で、全体に炭化物粒を含んだ粘質土層である。礫等の混入状況や色調からａ・ｂに細分した。Ｖ'ａ層は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土層で層厚は５～10㎝である。土器破片を中心とした遺物を含むが、完形の土器は含まれない。調査記録（遺物注記）のＶ'層はこれに対応する。Ｖ'ｂ層は黄灰色（2.5Y4/1）粘質土層で、拳大以上の礫を多く混入する。45ライン以南にのみ堆積する。層厚は５～12㎝である。遺物には完形土器も含まれる。調査記録（遺物注記）の「Ⅵ礫層」はこれに対応する。

Ⅵ層は遺跡の主体を成す遺物包含層であり、炭化物を多量混入する。調査開始後、特に調査区北部では２層に細分できることが分かったため、上からａ・ｂとした。Ⅵa層は黒褐色土（10YR3/1）で、粘性しまりとも弱く、焼土粒が混入する。Ⅵb層は灰色土（５Y4/1）で粘土質である。また、50ラインベルトでのみ、Ⅵ層が大きく３層に細分された。他地点の土層との対応関係が不明瞭であったため、ＬＳ～ＭＡ50グリッドでは上からⅥa・Ⅵ②・Ⅵ③と表記した。Ⅵa・b層の分布しない地区のⅦ層（地山）上部では、炭化物を微量含んだ土層を確認した。これをⅥ'層とした。旧表土である。

Ⅶ層はにぶい黄褐色～暗灰黄色（10YR5/3～2.5Y5/2）の地山粘質土層で、層厚は約10～70㎝である。

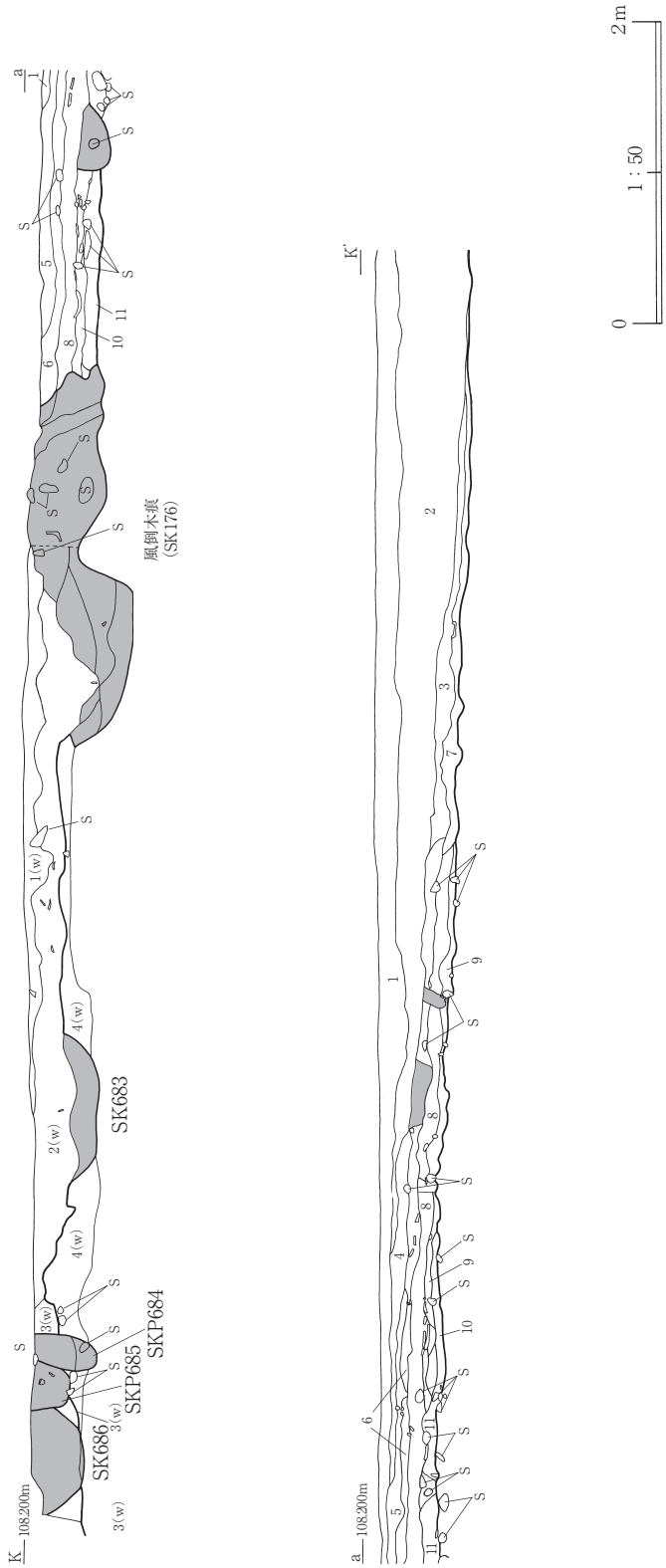
Ⅷ層は地山の砂礫層である。調査区南部では大形の礫が、北西部では砂利が主体となる。



I：LR52-MC54
1　(I層対応)　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘性やや弱　しまり強　小礫・炭化物を少量に含む
2　(I層対応)　黄灰色粘質土(2.5Y5/1)　粘性中　しまり強　φ5mm大の炭化物を少量含む　礫をやや含む
3　(I層対応)　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘性強　しまり強　礫を含む
4　(I層対応)　黄灰色粘質土(2.5Y4/1)　粘性中　しまりやや強　小石、砂、粘質土が混在する
5　(河川堆積)　黒褐色砂質土(2.5Y3/2)　粘性弱　しまり弱　φ1cmの炭化物をやや多く含む
6　(河川堆積)　灰オリーブ色砂(5Y5/2)　粘性弱　しまり中　シルト～砂　極小径の炭化物粒を微量含む
7　(河川堆積)　オリーブ黒色砂(5Y3/1)　粘性弱　しまり弱　シルト～砂　8層に似る　極小径の炭化物粒を微量含む
8　(V a層対応)　黄灰色～暗灰黄色粘質土(2.5Y4/1～2.5Y4/2)　粘性中　しまり強　部分的にグライ化　φ5mm大の炭化物をまばらに含む
9　(Vb層対応)　黄褐色砂～暗灰黄色粘質土(2.5Y5/4～2.5Y4/2)　粘性中　しまりやや強　シルト～砂　極小径の炭化物粒を微量含む　粘質土ブロックを含む
10　(Vb層対応)　黄褐色砂(2.5Y5/4)　粘性中　しまりやや強　シルト～砂
11　(Va層対応)　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘性中　しまり弱　遺物包含層　小礫を多く含む　φ5～10mmの炭化物粒をやや多く含む
12　(VI層対応)　黄灰色粘質土(2.5Y4/1)　粘性弱　しまり弱　遺物包含層　砂粒をブロック状に多く含む　φ10mm大の炭化物を若干含む
13　(Vb層対応)　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘性強　しまり中　遺物包含層　φ5mmまでの炭化物粒を多く含む
14　(VI層対応)　黒褐色砂(2.5Y3/1)　粘性弱　しまり弱　遺物包含層　極小径の炭化物粒をやや多く含む
15　(VI層対応)　暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)　粘性強　しまり強　地山
16　(VI層対応)　黄褐色砂(2.5Y5/3)　粘性中　しまり中　地山　鉄分の付着で黄色く変色している
17　(VI層対応)　黒褐色砂質土(2.5Y3/2)　粘性中　しまり弱　地山　炭化物を多く含む　拳大以下の礫を多く含む
18　(VI層対応)　混土礫層　地山
19　(VI層対応)　砂層　地山
20　(VI層対応)　砂礫層　地山

J：LT58-59
1　(I層対応)　黒褐色土(2.5Y3/1)　粘性やや弱　しまり中　微細な白色粒を全体に多く含む
2　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘性中　しまり中　地山(VI層)の粘質土ブロックを含む　φ3mm大の炭化物粒、小礫を若干含む
3　オリーブ褐色砂(2.5Y4/3)　粘性弱　しまり中　φ3cm大の小礫を多く含む
4　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘性中　しまり中　2層に似る　III層(十和田Ha火山灰)のブロックを混入
5　(VIa層対応)　黒褐色土層(10YR3/1)　粘性中　しまりやや弱　遺物包含層　φ10mmまでの炭化物を多く含む
6　暗灰黄色砂(2.5Y5/2)　粘性やや強　しまり中　シルト～砂　φ2mm大の炭化物粒を若干含む
7　褐灰色土(10YR4/1)　粘性強　しまり中　遺物包含層　φ5mm大までの炭化物粒を多く含む
8　灰黄褐色粘質土(10YR4/2)　粘性強　しまりやや強　φ2～3mmの炭化物粒を全体に多く含む　礫を少量含む　砂利がブロック状に混入する
9　(VIb層対応)　灰色土(5Y4/1)　粘性中　しまり中　遺物包含層　φ2～3mmの炭化物を多く含む
10　(VI層対応)　暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)　粘性強　しまり強　地山
11　黒褐色混土砂礫(10YR3/1)　粘性中　しまり中　地山　最大でφ13mm程の炭化物を多く含む
12　(VI層対応)　砂礫層　地山

第９図　I：LQ52-MC54　J：LT58-59土層断面



1(w)　(Ⅱ層対応)　黒褐色土(2.5Y3/2)　粘性弱　しまり強　φ1mm前後の炭化物粒,小礫を少量含む　Ⅲ層の火山灰粒をブロック状に含む　土器片少量
2(w)　(Ⅳ層対応)　黒色土(10YR2/1)　粘性ややや中　しまり強　遺物包含層　φ1～10mmの炭化物を多量に含む　小～拳大礫を多量に含む
3(w)　黒褐色土(2.5Y3/2)　粘性弱　しまり強　φ1mm前後の炭化物粒を少量含む　地山(Ⅶ層)粘質土粒を7%含む
4(w)　(Ⅶ層対応)　黄褐色粘質土(2.5Y5/3)　粘性中　しまり強　地山　φ1mm前後の炭化物を微量含む

1　(Ⅳ層対応)　灰黄褐色～褐色粘質土(10YR4/2～7.5Y4/3)　粘性強　しまり強
2　(Ⅴ層対応)　黄褐色粘質土(2.5Y5/3)　粘性強　しまり中　粘質土　φ2～5mm大の炭化物粒を微量含む
3　(Ⅴa層対応)　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性中　しまり中　遺物包含層　微細な赤石粒を若干含む
4　(Ⅴ'a層対応)　暗灰黄色土(2.5Y5/2)　粘性強　しまりやや強　炭化物を多量に含む　小礫も多く含む
5　(Ⅴ'a層対応)　黄灰色土(2.5Y4/1)　粘性強　しまりやや強　φ10mmまでの炭化物を多量に含む　φ5mm大の焼土粒を含む
6　(Ⅵa層対応)　黒褐色粘質土(10YR3/1)　粘性強　しまり中　φ10mmまでの炭化物,炭化物塊を多く含む　焼土粒を微量含む
7　(Ⅵa層対応)　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性やや弱　しまり中　φ10～15mmの炭化物ブロックを多量に含む
8　(Ⅵ②層対応)　黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱　しまりやや弱　φ2～10mmまでの炭化物を多量に含む
9　(Ⅵ③層対応)　黒褐色土(10YR3/2)　φ10mmの炭化物ブロック　φ3mm程の炭化物粒をまばらに含む
10　(Ⅵ③層対応)　灰黄褐色土層(10YR4/2)　粘性強　しまりやや強　微量の焼土粒を含む
11　(Ⅵ③層対応)　黒褐色土(10YR3/2)　φ10mmの炭化物を全体に含む　焼土粒をやや多く含む

第10図　K：50ライン土層断面

1　(Ia層対応)　粘質土を主体とする
2　(Ⅲ層対応)　黄褐色火山灰(2.5Y5/4)
3　(Ⅳ層対応)　灰黄褐色～褐色粘質土(10YR4/2～7.5Y4/3)　粘性強　しまり強　部分的に砂～シルトをラミナ状に含む
4　(Ⅴ層対応)　灰色～にぶい黄褐色粘質土(5Y5/1～10YR4/3)　粘性強　しまり強　φ5mm以下の炭化物を微量含む
5　(Ⅴ' a層対応)　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)　粘性強　しまり強　粘質土　遺物包含層　φ1～3mmの小礫、φ5mmまでの炭化物粒を多く含む
6　(Ⅴ' a層対応)　暗灰黄色粘質土層(2.5Y4/2)　粘性強　しまやや強　遺物包含層　7層に比し、礫(φ2～5cm)が多く、炭化物粒が少ない
7　(Ⅴ' b層対応)　黄灰色粘質土層(2.5Y4/1)　粘性強　しまり強　遺物包含層　小～大礫礫を多く含む　炭化物をやや含む
8　(Ⅵa層対応)　にぶい黄褐色～灰黄褐色土層　(10YR4/3～10YR4/2)　粘性中　しまりやや弱　物包含層　φ1～10mmの炭化物を多量に含む　小礫をやや含む
9　(Ⅶ層対応)　にぶい黄褐色土層(10YR5/3)　粘性強　しまり中　地山の粘質土　無遺物層　10cm以下の礫をやや多く含む
10　(Ⅶ層対応)　黄灰色粘質土層(2.5Y4/1)　粘性強　しまり弱　地山の粘質土　無遺物層　微量の炭化物を含む
11　(Ⅶ層対応)　黒褐色土層(2.5Y3/2)　粘性弱しまりやや弱　砂礫を多く含む
12　(Ⅶ層対応)　暗灰色粘質土層(2.5Y4/2)　粘性中　しまり中　地山　φ5cmまでの礫、砂利をやや多く含む　φ5mmの炭化物粒を若干含む
13　(Ⅶ層対応)　黄灰色土層(2.5Y4/1)　粘性中　しまり弱　地山　砂利、φ3mmまでの炭化物を微量含む
14　(Ⅶ層対応)　オリーブ褐色土層(2.5Y4/3)　粘性弱　しまり中　地山　15層より細かな砂利を多く含む
15　(Ⅶ層対応)　砂礫層　粘性中　しまり強　地山

第11図　L：45ライン土層断面

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構と出土遺物

（１）土坑

２ヵ年に亘る調査により、338基の土坑を検出した。平面形は概ね円形であり、特にＬＴ・ＭＡ53～56付近では著しく重複していた。直径２ｍ程度のものから0.5m程度の小型のものまで、規模は大小さまざまである。径0.7m以下の小型の遺構については柱穴様ピットとの判別に苦慮したが、本報告では壁が垂直に立ち上がるもの、あるいは土層断面に柱痕跡が確認できるものについて柱穴様ピットと認定し、それ以外のものについては規模が極端に小さいものを除いて土坑とした。

調査方法：遺構プランを確認した後、大型プランには土層観察ベルトを設定して、小型プランの場合は半截して土層断面の観察を実施した。出土遺物については、本来は全ての出土地点を記録することが望ましいが、調査期間との兼ね合いもあり、以下のように取り扱った。復元可能な個体土器の場合、人為的な出土状況と判断された場合、あるいは土偶や石製品などの特徴的な遺物については出土状況を平面図や写真により記録した。その他の資料については、半截あるいはベルトを残して掘り下げている段階では覆土一括として取り上げ、土層観察を行った後は層位ごとに一括して取り上げた。

以下、遺構番号順に詳細を記述する。また、検出した遺構の一覧および土層注記を巻末に掲載した。

ＳＫ18（第２分冊第１図、図版８）

［位置・検出状況］ＭＦ42・43グリッドの地山（Ⅶ層）上面で灰黄褐色粘質土の円形プランを確認した。

［概要］直径2.10mの円形を呈する。底面は狭く緩やかに湾曲しており、壁は急角度で立ち上がる。確認面からの深さは0.80mを測る。Ⅷ（砂礫）層を深く掘りこんでおり、底面および壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］５層に分層した。覆土上部の１・２層には多量の炭化物を混入する。いずれの土層にも土器破片を中心とした遺物が多く含まれる。５層にはⅧ層由来の礫が目立つ。土層の状況から一括して埋め戻されたものと判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第58図１～５）、磨・凹石類（同６・７）、礫器（同８）が出土した。

［時期］土層の状況から、土坑墓であった可能性が高い。時期は出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ25（第２分冊第１図）

［位置・検出状況］ＬＰ57グリッドの地山（Ⅶ層）上面で炭化物の集中する不整円形プランを確認した。

［概要］長径1.26mの不整円形であり、東側は調査区外へと展開する。確認面からの深さは0.11mと浅く、底面から壁は緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］暗緑灰色粘質土の単層である。径１～２㎜の炭化物が多量に混入する。また、土器破片を多く混入していた。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第58図９～11）が出土した。

［時期］出土遺物より後期後葉～晩期初頭と推察される。

ＳＫ26（第２分冊第１図）

［位置・検出状況］ＬＰ57グリッドの地山のグライ化粘質土（Ⅶ層）面で、炭化物の集中するやや不明瞭なプランを確認した。

［概要］長径1.32m、短径0.81mの楕円形を呈する。確認面からの深さは最も深い北端部で0.25mを測る。

［堆積土の特徴］暗緑灰色粘質土の単層である。土器破片を全体に混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第58図12～15）、石匙の破片（16）が出土した。

［時期］出土遺物から後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ27（第２分冊第１図）

［位置・検出状況］ＬＰ57グリッドの地山（Ⅶ層）上面で炭化物の集中する不整円形プランを確認した。

［概要］長径1.17m、短径0.86mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.14mと浅い。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層には特に炭化物の混入が顕著であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第58図17・18）が出土した。

［時期］出土遺物から、後期末～晩期初頭の可能性がある。

ＳＫ31（第２分冊第１図、図版８）

［位置・検出状況］ＭＤ44グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。確認面東側に礫が集中しており２基の遺構が重複しているものと予測したが、土層断面からも礫の下部にプランは検出されなかった。

［概要］直径1.38mの円形プランを呈する。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。Ⅷ（砂礫）層を掘り込んでおり、壁には拳大の礫が露出する。

［堆積土の特徴］確認プラン北東部では拳大の礫が集中して検出された。これら礫の真下に当たる位置からは土器破片が集中して出土した（図版８参照）。壁際では炭化物の混入の少ない地山に近い土層が堆積するが、中央部は炭化物や遺物の混入の目立つ黒色土がほぼ全体を覆っている（２層）。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第59図１～９）、土器片円盤（10）、石錐（11）、ＲＦ（12）が出土した。

［時期］出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ35（第２分冊第１図、図版８）

［位置・検出状況］ＬＱ56グリッドで地山（Ⅶ層）上面を精査中に、ほぼ円形のプランを確認した。

［概要］直径1.26mの不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で壁は比較的急に立ち上がる。プラン東側では一部屈曲して段のようになっている。

［堆積土の特徴］暗緑灰色粘質土の単層で、一括堆積である。土器破片を多量に含んでいた。

［出土遺物］壁に沿うように大型の土器破片を集中して検出した（第２分冊第60図１～３・５）。他にも覆土中～上部からは土器破片を多く出土したが、そのほとんどが無文の深鉢であった（同４・６）。この他、土器破片（第61図１～６）、スクレイパー類（同７～15）、両極石器（同17）、ＲＦ（同16・19～21）、磨・凹石類（同22）が出土した。

［時期］出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ36（第２分冊第２図）

［位置・検出状況］ＭＥ44グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、にぶい黄褐色土(１層)を中心とした黒褐色土のドーナツ状プランを検出した。確認面北側には、やや大型の礫が集中していた。

［概要］直径1.47ｍのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、底面および壁には地山礫が露出している。

［堆積土の特徴］覆土下部は炭化物を多量に含む黒褐色土であったが、覆土上部には地山にも似たにぶい黄褐色土(１層)が約10㎝の厚さ堆積していた。人為的な堆積と考えられる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第62図１～５)、ＲＦ(同６)、アスファルトが付着したフレイク(同７)、打製石斧(同８)、石皿(同９)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ37(第２分冊第２図、図版８)

［位置・検出状況］ＭＥ・ＭＦ44グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、周囲と土質が僅かに異なる灰黄褐色土のプランを確認した。

［概要］長径1.50ｍの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.44ｍである。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、壁面には地山礫が露出する。遺物はほとんど出土しなかった。

［堆積土の特徴］３層に分層した。灰黄褐色～黄褐色の粘質土層で、下層になるほどⅧ層由来の礫が多く含まれる。

［出土遺物］覆土中より土器破片(第２分冊第62図10・11)、石斧未成品(同12)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ38(第２分冊第２図)

［位置・検出状況］ＬＱ60グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、やや大型の土器破片を伴う小型の円形プランを確認した。

［概要］長径0.56ｍ、短径0.47ｍの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.16ｍと浅い。

［堆積土の特徴］灰色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第63図１～３)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ39(第２分冊第２図)

［位置・検出状況］ＬＱ60グリッドの地山(Ⅶ層)上面でやや炭化物を含んだ灰色土の円形プランを確認した。半截したところ、プラン東側に壁が検出されず、土層断面および平面プランを検討し、２基の土坑が重複したものと判断した。

［概要］ＳＫ217を切る。長径0.41ｍ、短径0.35ｍの不整楕円形で、確認面からの深さは0.12ｍと浅い。

［堆積土の特徴］灰色粘質土の単層である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第63図４)が出土した。

［時期］出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ43(第２分冊第２図、図版８)

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ43グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、にぶい黄褐色土(１層)の広がりを確認した。確認面でのプランはやや不明瞭であったため、サブトレンチを設定して下部の状況を確認したところ、黒褐色土(２層)と明瞭な底面および壁を検出したため、土坑であると認識した。

［概要］ＳＫ54に切られる。平面は直径1.72ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.34ｍを測る。底面は緩やかに湾曲し、凸レンズ状の断面形を呈する。

［堆積土の特徴］ほぼ水平に堆積するが、２層(黒褐色土)を地山由来の１層が覆っており、人為的な堆積と判断した。遺物は２層からの出土が目立つ。また、２層より動物遺存体を僅かに出土した(分析結果は第５章第７節参照)。

［出土遺物］壁際から石匙が２点(第２分冊第64図１・３)出土した。この他、土器破片(第63図５～13)、スクレイパー類(第64図２・４)、石錐(同５)、石核(同６)が出土した。

［時期］重複関係および出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ45(第２分冊第３図)

［位置・検出状況］ＬＱ60グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、褐灰色土の広がりを確認した。当初は楕円形のプランと思われたが、土層断面の観察により２基の遺構が重複しているものと判断した。

［概要］ＳＫ218を切る。直径0.69ｍの不整円形を呈し、確認面からの深さは0.20ｍを測る。

［堆積土の特徴］灰色粘質土の単層であった。微細な炭化物を微量含む。

［出土遺物］土器破片(第64図７～９)が出土した。７・８は同一個体の可能性がある。

［時期］出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ52(第２分冊第３図、図版９)

［位置・検出状況］ＭＤ43グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、礫が集中する暗灰黄色土の円形プランを確認した。

［概要］平面形は長径1.08ｍの円形を呈する。底面は緩やかに湾曲し、壁はやや急に立ち上がる。確認面からの深さは0.39ｍを測る。

［堆積土の特徴］覆土のほぼ中ほどに、炭化物の混入が少ないにぶい黄褐色土(２層)がほぼ水平に堆積する。これより下層(３層)には、わずかではあるが遺物を混入する。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第65図１～３)、磨・凹石類(同４)、石皿(同５)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ54(第２分冊第２図、図版８)

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ43グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、にぶい黄褐色土のプランを確認した。

［概要］ＳＫ43を切る。平面形は長径1.83ｍのやや歪な円形を呈する。確認面からの深さは0.89ｍを測る。地山砂礫層を掘りこんでおり、底面や壁には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］覆土上部(１～３層)はⅦ層に酷似した粘質土層である。４層は炭化物を多量に含んだにぶい黄褐色土が主体をなす。人為的な埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第65図６～13)、石錐(同14)、スクレイパー類(同15)、ＲＦ(同16・17)、磨・凹石類(同18)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ55(第２分冊第３図、図版９)

［位置・検出状況］ＬＱ・ＬＲ59グリッドのⅥ層上面で、Ⅴ層に似た粘質土の円形プランを確認した。このプラン内の粘質土層の落ち込む形状が非常に緩やかであったこと、基本土層のⅤ層と酷似していたことから、一時は自然地形と判断して調査を進めたが、下部に黒褐色の覆土が平面円形に

堆積していることを確認し土坑と判断した。なお、ＬＲラインより東側を2003(平成15)年度、西側を2004(平成16)年度に調査した。

［概要］Ⅵ層上面で確認したプランで長径2.13m、短径1.50mの不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で径0.86m程の円形を呈する。壁は急角度で立ち上がり、中位でやや角度を緩めて開口部へと大きく広がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。底面直上に堆積した３層は、植物質を多く含んだ黒色粘質土層でクルミを多く含んでいる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第66図１～６)、ＲＦ(同７)、スクレイパー類(同８)、磨・凹石類(同９)、石皿(同10)が出土した。石皿は３層上面より検出された。意図的に埋められたものと推察される。３層から出土したクルミは、完形品117点、縫合線から割れたもの241点がありこのうち12点には小動物の食痕が確認できたが、人為的な痕跡は確認できなかった。

［時期］クルミが出土したことから貯蔵穴の可能性が高い検出面および出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ56(第２分冊第３図)

［位置・検出状況］ＬＱ56グリッドの地山(Ⅶ層)上面でプランを確認した。

［概要］直径0.75mのほぼ円形を呈する。

［堆積土の特徴］褐灰色粘質土の単層であった。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第66図11～13)が出土した。

［時期］出土遺物から後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ61(第２分冊第３図、図版９)

［位置・検出状況］地山(Ⅶ層)上面で、ＭＥ44グリッド杭をほぼ中央としＭＤ・ＭＥ43、ＭＤ・ＭＥ44にまたがる円形プランを検出した。確認面ではプラン中央部に暗灰黄色土が円形に、その周囲を黄褐色土がドーナツ状に取り囲んでいた。

［概要］平面形は直径1.40mの円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。確認面からの深さは0.42mを測る。

［堆積土の特徴］７層に分層した。１～４層はプラン中央部にレンズ状に堆積し、５～７層は壁際に壁に沿うように堆積する。底面より厚さ15㎝ほど堆積した４層は黒褐色土である。１～３層は地山土に非常に似ている。人為的な埋め戻し土と考えられる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第66図14～16)が出土した。

［時期］土層の状況から土坑墓と判断した。構築時期は出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ65(第２分冊第３図、図版９)

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ44の地山(Ⅶ層)上面で、複数の遺構が重複したプランを確認した。サブトレンチを設定し土層の観察を行ったところ、３基の遺構が重複したものと確認された。このうち南端に位置し、もっとも新しい遺構をＳＫ65とした。

［概要］ＳＫ66を切る。平面形は長径0.78m、短径0.55mの不整円形を呈する。底面から壁にかけて緩やかに湾曲している。

［堆積土の特徴］２層に分層した。ともに地山に良く似た粘質土層である。２層は礫が多く混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第66図17・18）が出土した。遺物の混入は僅かである。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ66（第２分冊第３図、図版９）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ44の地山（Ⅶ層）上面で、複数の遺構が重複したプランを確認した。サブトレンチを設定し土層の観察を行ったところ、３基の遺構が重複したものと確認された。このうち、中央に位置する最も規模の大きなプランをＳＫ66とした。

［概要］ＳＫ65に切られ、ＳＫ67を切る。底面から壁にかけて緩やかに湾曲し、断面形は凸レンズ状を呈する。平面形は長径1.43m、短径1.07mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.18mと比較的浅い。重複するＳＫ65、ＳＫ67と底面の高さはほぼ同一である。

［堆積土の特徴］２層に分層した。ともに地山に良く似た粘質土層である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第66図19）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ67（第２分冊第３図、図版９）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ44の地山（Ⅶ層）上面で、複数の遺構が重複したプランを確認した。サブトレンチを設定し土層の観察を行ったところ、３基の遺構が重複したものと確認された。このうち、北側に位置し最も古いプランをＳＫ67とした。

［概要］ＳＫ66に切られる。残存部の長径は0.52mであり、円形もしくは楕円形のプランであったものと推察される。底面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山に似た粘質土層である。

［出土遺物］ごく僅か土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］遺構の重複関係から晩期初頭以前と推察される。

ＳＫ69（第２分冊第４図、図版９）

［位置・検出状況］ＭＣ45、ＭＤ44・45の３グリッドにまたがって位置する。ＭＤ45グリッド杭の北西、45ラインに設定した土層観察のトレンチで、地山の砂礫層が深く落ち込む箇所を確認した。周囲を掘り下げたところ、地山（Ⅶ層）上面で灰黄褐色粘土の円形プランが確認されたため、これをＳＫ69とした。

［概要］平面形は長径2.14mの円形を呈する。地山（Ⅶ層）上面で平面プランを検出したが、45ラインの土層断面により本来は遺物包含層（Ⅵ層）上部より構築されていることが確認された。地山粘土層（Ⅶ層）、および砂礫層（Ⅷ層）を深く掘り込んでおり、壁面には地山礫が露出する。底面はやや緩やかに湾曲し、壁は中段でやや屈曲して外反しながら直線的に立ち上がる。

［堆積土の特徴］遺構上部はⅤ層および地山（Ⅶ層）に良く似た粘質土層で覆われている。２層および３層は黒褐色土であり、遺物はこの２層から出土した。また、底面の中央付近に大型の礫を２点検出した。覆土中で他に目立った礫は検出されていないことや、その出土した位置などから、意図的に配置されたものと判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第66図20～22）が３層から出土した。また、第188図１の一部破片も出土している。円盤状石製品（第66図23）も出土した。

［時期］底面の礫の状況および土層の堆積状況から土坑墓と判断した。時期は遺構構築面および出

土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ70（第２分冊第４図、図版10）

［位置・検出状況］ＭＣ46グリッドで地山（Ⅶ層）上面で、オリーブ褐色土を中心に暗オリーブ褐色土がドーナツ状に取り囲むプランを確認した。これをＳＫ70とした。当初、隣接する遺構と考えていたＳＫ83は、精査中に本遺構と重複していることが明らかとなった。

［概要］ＳＫ83を切る。平面形は径1.09ｍのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、直径0.45ｍと狭く、壁は直線的に急角度で立ち上がる。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１層は地山に良く似た粘質土層であり、プラン中央に厚さ約20㎝堆積する。４層は遺物を多く混入した黒褐色土であり、南東壁際より流れ込むような堆積状況を示す。遺物の混入は覆土下位（３～４層）に比較的多く認められる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第67図１～７）、礫器（同８）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ71（第２分冊第４図、図版10）

［位置・検出状況］ＭＤ44グリッドの地山（Ⅶ層）上面で確認した遺構の精査を終了した後、ＳＲ57の東側に土器破片が数点埋まった状況を確認した。この遺物の状況を明らかにするため周辺の地山（Ⅶ層）を全体的に３㎝ほど掘り下げた地点で、灰黄褐色の楕円形プランを確認し、このプラン中に遺物が位置していることが分かった。

［概要］長径0.99ｍ、短径0.62ｍの楕円形を呈する。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１・２層は地山由来の粘質土層で、遺物はこの層から集中して出土した。３層は黒褐色土で、遺物はほとんど出土しなかった。

［出土遺物］１・２層の中央部より土器破片が重なり合うように出土した。そのほとんどが第２分冊第67図10の破片である。胴上部で緩やかに括れる深鉢で、括れより下部は本土坑内より、括れより上部の破片は周辺遺構（ＳＫ37・61）および周辺の遺物包含層より出土した。意図的に埋められたものと推察される。このほかにも土器破片（第67図９、第68図３）、石匙（第68図１）、ＲＦ（同２）が出土した。

［時期］遺物の出土状況から土坑墓と判断した。出土土器から晩期初頭と推察される。

ＳＫ73（第２分冊第４図、図版10）

［位置・検出状況］ＭＣ43・44グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、にぶい黄褐色土の円形プランを確認した。

［概要］長径1.20ｍ、短径0.92ｍのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しながら急に立ち上がる。地山の砂礫層を掘り込んでおり、壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］４層に分層した。底面直上層はやや黒みがかった土層であるが、１～３層は地山由来と思われる褐色土およびにぶい黄褐色土であり、分層はやや困難であった。

［出土遺物］南壁際より、底部を土坑中央に向けて斜倒立した状態の深鉢が出土した（第２分冊第68図４）。口縁を欠いており帰属時期の特定には至らないが、意図的に埋められたものと判断した。この他にも土器破片（第68図５～７）が出土した。

［時期］遺物の出土状況から土坑墓と判断した。時期は出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ77（第２分冊第４図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＣ46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］平面形は直径1.23ｍの円形であり、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいるため、壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］４層に分層した。２層は地山由来のにぶい黄褐色土である。２～４層までが人為的な埋め戻しと推察される。１層は遺構を埋め戻した後に、沈下して生じた窪みに遺物包含層（Ⅵ層）が堆積したものと判断できる。

［出土遺物］南西部の底面直上より、遺物がややまとまって出土した。主な出土遺物は、土器破片（第２分冊第68図８～12）、スクレイパー類（同13）、石棒（同14）である。石棒は遺構外から出土した破片と接合した（第１分冊第45図）。

［時期］堆積土の状況から土坑墓と判断した。時期は出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ79（第２分冊第５図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＣ45・46、ＭＤ45グリッドにまたがって、地山（Ⅶ層）上面で土器埋設遺構（ＳＲ86）およびこれに重複する２基の土坑プランを確認した。サブトレンチを設定し土層断面から新旧関係を確認した後、北側に位置する新しい方の土坑をＳＫ79とした。

［概要］平面形は長径1.07ｍ、短径1.04ｍの円形である。底面はやや湾曲し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は南東部が最も深く、北西側の壁はやや屈曲しながら大きく開く。

［堆積土の特徴］３層に分層した。重複するＳＫ80と異なり、覆土には遺物や礫の混入が少ない。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第68図15～17）が出土した。

［時期］出土遺物と重複関係から晩期前葉と推察される。

ＳＫ80（第２分冊第５図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＣ45・46、ＭＤ45グリッドにまたがって、地山（Ⅶ層）上面で土器埋設遺構（ＳＲ86）およびこれに重複する２基の土坑プランを確認した。サブトレンチを設定して土層断面より新旧関係を確認し、南側に位置する古い方の土坑をＳＫ80とした。

［概要］ＳＫ79に切られる。また、覆土上部にＳＲ86の土器破片が流れ込んだ状態で検出されており、ＳＲ86より古い、もしくはほぼ同時期の遺構と判断される。直径1.27ｍのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、壁は強い傾斜で直線的に立ち上がる。地山の砂礫層を深く掘り込んで構築されており、壁面には地山礫が露出している。

［堆積土の特徴］４層に分層した。覆土中位～下位（３・４層）に拳大の礫が多量に混入する。

［出土遺物］遺物は主に２～４層で出土した。２層中よりほぼ完形の小型の壺（第２分冊第69図１）が出土した。このほかに土器破片（第69図２～４）が出土した。

［時期］出土遺物より晩期中葉と推察される。

ＳＫ81（第２分冊第５図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＥ46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。この北側に位置するＳＫ97と重複している可能性を考慮し土層観察ベルトを設定したが、ＳＫ97とは重複していないことが明らかとなった。また、精査開始後に重複するＳＫＰ172を確認した。

［概要］ＳＫ97の南側に位置する。確認面の写真などをもとに検討し、ＳＫＰ172に切られていると

判断した。長径1.00m、短径0.79mのやや楕円形を呈する。確認面からの深さは0.36mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は黒褐色土で、土坑の埋没後に生じた窪みに遺物包含層（Ⅵ層）が堆積したものと推察される。２層は地山由来の暗灰黄色土である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第69図５）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ82（第２分冊第５図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＣ46・47グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、にぶい黄褐色土（１層）を中心に、それよりも色調の暗いにぶい黄褐色土がドーナツ状に囲む、直径２mほどの円形プランを確認した。

［概要］平面形は長径2.49m、短径2.03mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.65mを測り、地山の砂礫層（Ⅷ層）を深く掘り込んでいる。底面は平坦で、北東側の壁は直線的に急角度で立ち上がる。これに対し、南西側の壁は中ほどでやや外反し緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］十字にベルトを設定して観察し、10層に分層した。礫の混入度合いやわずかな色調の差で分層したが、いずれの土層も地山（Ⅶ・Ⅷ層）由来の埋め戻し土と判断した。遺物は土器破片を中心として全体に混入していたが、５層および10層から出土したものが多い。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第69図６～15）、打製石斧（同16）、礫器（同17）、砥石の可能性のある礫石器（同18）、石皿（19）が出土した。

［時期］土層の堆積状況から、土坑墓の可能性が高い。出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ83（第２分冊第４図）

［位置・検出状況］ＭＣ46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＳＫ70の北西に隣接する暗灰黄色土のプランを確認した。サブトレンチを入れて土層を観察したところ、ＳＫ70と重複する土坑であることを確認したため、これをＳＫ83とした。

［概要］ＳＫ70に切られる。長径0.85m、短径0.78mの円形を呈する。底面はごく狭く緩やかに湾曲して、壁は比較的緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.28mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山由来と思われ、炭化物粒などの混入が希薄である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第69図20～22）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ88（第２分冊第５図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＡ46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、地山土よりやや色調の暗い不整円形のプランを確認した。覆土、地山ともにグライ化しておりプランは不明瞭であったが、サブトレンチを設定して確認したところ、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達したところで深さ0.20mほど明瞭な掘り込みを確認できたため、土坑と判断しＳＫ88とした。

［概要］ＳＲ87と隣接する。新旧関係は土層からは判断できなかったが、ＳＲ87の埋設土器が完形で正立していたことから、ＳＫ88はＳＲ87より古い、あるいはＳＲ87と同時期の構築と考えられる。平面形は長径1.54m、短径1.45mの円形であり、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.85mを測る。

［堆積土の特徴］灰色土の単層であった。地山（Ⅶ層）由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］微細な土器破片を数点出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複するＳＲ87より晩期の土坑と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ91（第２分冊第５図）

［位置・検出状況］ＭＡ48グリッドで、Ｖ層を掘り下げ遺物包含層（Ⅵ層）上面に達した時点で、Ｖ層の褐色粘質土の不整円形プランを確認した。しかしプランが不明瞭であり、Ｖ層の堆積は非常に薄かったことから、この段階では自然地形と判断して調査を進めた。その後、地山（Ⅶ層）上面に達した段階で、同一地点に褐色土の不整円形プランが検出された。サブトレンチを入れて確認したところ、非常に浅いが周囲の状況と比較して不自然に窪んでいることから、人為的な掘り込みと判断し、これをＳＫ91とした。本来は遺物包含層（Ⅵ層）上面から構築された遺構と思われる。

［概要］長径1.19m、短径1.07mのほぼ円形である。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.16mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層には拳大の礫が多量に混入していた。

［出土遺物］２層を中心にいくつかの遺物が出土したが、時期の特定できるようなものは出土しなかった。覆土中よりＲＦ（第２分冊第69図23）が出土している。また、遺物包含層（Ⅵ層）中より本土坑に（平面的には）近接した位置から、ほぼ完形の注口土器（第２分冊第228図５）が出土している。本土坑がⅥ層上面より構築されたものとすると、本来は図示したものより平面規模が広かったと考えられるため、この注口土器が本土坑に伴った資料である可能性が高い。

［時期］構築面および前述した注口土器の時期から、晩期前葉の遺構である可能性が考えられる。

ＳＫ92（第２分冊第６図、図版12）

［位置・検出状況］ＭＡ48・49グリッドでⅥ層を掘り下げ中、Ｖ層がほぼ円形に集中する地点を確認した。この段階では人為的な掘り込みと判断できず、地山（Ⅶ層）上面まで周辺の土と同時に掘り下げたが、地山（Ⅶ層）上面においても褐色粘質土を中心に黒褐色土がドーナツ状に取り囲むプランが確認された。サブトレンチを入れたところ立ち上がりが確認できたため、人為的な掘り込みと判断した。本来は遺物包含層（Ⅵ層）中より構築された遺構であった可能性がある。

［概要］ＳＫ215を切る。長径1.45m、短径1.41mのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.31mを測る。

［堆積土の特徴］４層に分層した。２～３層には拳大の礫を多く混入していた。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第70図１）、土器片円盤（同２）、ＲＦ（同３）、磨製石斧（同４）、石皿（同６）、用途不明の石製品（同５）が出土した。

［時期］出土遺物や周辺包含層の遺物の時期から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ95（第２分冊第６図、図版12）

［位置・検出状況］ＭＡ45・46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、やや不明瞭な円形プランを確認した。サブトレンチを入れて確認したところ、地山の砂礫層に達した段階で深さ0.15mほどの明瞭な掘り込みを確認したため、人為的な掘り込みと判断した。

［概要］長径1.64m、短径1.28mのほぼ円形を呈する。底面より0.15mほど地山砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいるが、これより上部は覆土と壁（地山・Ⅶ層）が酷似しており、検出は困難であった。

［堆積土の特徴］灰色土の単層であった。地山（Ⅶ層）由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］僅かに微細な土器破片が出土したが、いずれも地文のみの胴部破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ97（第２分冊第６図、図版11）

［位置・検出状況］ＭＥ46・47グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、暗オリーブ褐色土の円形プランを確認した。南側にＳＫ81が隣接しており、重複していることも考えられたためにベルトを設定して精査したが、重複していなかった。

［概要］直径1.65ｍのほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は急角度で直線的に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層したが、２層と３層の境界は不明瞭であった。１層下部から２層上部にかけて拳～人頭大の礫を多量に混入する。いずれも地山（Ⅶ層）由来の埋め戻し土と思われる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第70図７～９）、ＲＦ（同10）、磨・凹石類（同11）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ98（第２分冊第６図、図版12）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、炭化物を多く含んだ褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫＰ142を切る。平面形は長径1.50ｍのほぼ円形を呈している。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。確認面からの深さは0.39ｍを測る。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１層は約５㎝角の地山土（Ⅶ層）のブロックを混入する。２～４層では炭化物粒の混入が顕著であった。４層は地山と酷似しており、底面の検出が困難であったが、土層観察ベルトに沿って設定したサブトレンチで底面を見極めた。底面のほぼ中央からは20㎝以下の大型の礫が集中して検出された。人為的に配されたものの可能性がある。

［出土遺物］南東側底面より、口縁を欠いた深鉢（第２分冊第71図２）が倒れて潰れた状態で出土した。本土坑に意図的に埋められたものと判断した。この他、土器破片（同１・３～６）、ＲＦ（同７）、石核（同８）が出土した。ＲＦは石鏃の未成品の可能性が考えられる。

［時期］遺物の出土状況から土坑墓と判断した。底面検出の個体土器は地文のみであったが、覆土中より出土したほかの遺物の時期から、晩期前葉の遺構と推察される。

ＳＫ140（第２分冊第６図）

［位置・検出状況］ＬＴ48グリッドの地山（Ⅶ層）をやや掘り下げて精査したところ、にぶい黄褐色土の楕円形プランを確認した。

［概要］長径0.76ｍ、短径0.49ｍの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であった。

［堆積土の特徴］炭化物を含んだにぶい黄褐色土の単層であった。

［出土遺物］覆土下位より土器破片（第２分冊第71図９～12）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ143（第２分冊第６図、図版12）

［位置・検出状況］ＭＤ47グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、暗オリーブ褐色土のプランを確認した。

［概要］長径1.30ｍ、短径1.00ｍのやや楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は一部外反しながら急に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘りこんでおり、壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］３層に分層した。２層の黒褐色土が主体をなす。１～２層には大型の礫および土

器破片などの遺物が混入する。遺物は特に２層からの出土が顕著であった。１層および３層は地山土(Ⅶ層)由来の可能性が高い。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第72図１～４)、礫器(同５)が出土した。

[時期] 出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ144(第２分冊第７図、図版12)

[位置・検出状況] ＭＤ46グリッドの地山(Ⅶ層)上面で暗オリーブ褐色土のプランを確認した。２基が重複している事が予測できたため、長軸方向に土層観察ベルトを設定して調査を開始した。このうち、東側に位置するプランをＳＫ144とした。

[概要] ＳＫ145に切られる。直径1.31ｍで、本来はほぼ円形を呈したものと推察される。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、壁面には地山礫が露出する。底面にはやや大型の礫が１点出土した。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。炭化物粒が多量に混入する１層が主体をなす。２層には小さな礫を多く含み、地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来と推察される。

[出土遺物] １層より土器破片(第２分冊第72図６・７)が出土した。

[時期] 出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ145(第２分冊第７図、図版12)

[位置・検出状況] ＭＤ46グリッドの地山(Ⅶ層)上面で暗オリーブ褐色土のプランを確認した。２基が重複している事が予測できたため、長軸方向に土層観察ベルトを設定して調査を開始した。このうち、西側に位置するプランをＳＫ145とした。

[概要] ＳＫ144を切る。また、ＳＫＰ192と重複するが、完掘後に土坑底面で確認したため、新旧関係は明らかではない。平面形は直径1.36ｍの円形で、底面は平坦である。壁は直線的に立ち上がるが、北側ではやや外反し緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.29ｍを測る。また、底面中央から６点の礫が集中して出土した。意図的に配されたものの可能性がある。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。１層には炭化物および小石を多量に、２層には大型の礫を多く含む。いずれも地山(Ⅶ層)由来の土層と推察される。

[出土遺物] 縄文土器の小破片が４点出土した。うち１点はその特徴から、晩期前葉の台付鉢と推察される。

[時期] 出土遺物および重複した遺構との関係から、晩期前葉以降と推察される。

ＳＫ146(第２分冊第７図、図版13)

[位置・検出状況] ＭＤ46・47グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、暗灰黄色土の円形プランを確認した。

[概要] 長径1.40ｍ、短径1.24ｍのほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。確認面からの深さは0.52ｍを測る。

[堆積土の特徴] ３層に分層した。１層には炭化物粒を多く含む。２～３層にかけては地山の礫層(Ⅷ層)由来の礫を混入する。いずれも、地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と判断した。

[出土遺物] １層および２層から土器破片が出土し、このうち２点(第２分冊第72図８・９)を掲載した。この他にＲＦ(同10)、磨・凹石類(同11)が出土した。第７図では土層断面部分に遺物が集中しているが、これは土層観察ベルトから出土した遺物のみ出土地点を図化したためである。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ153（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］48ラインに設定した土層観察ベルトに沿ったサブトレンチで、ＭＥ48グリッド杭の南東部、ＭＤ47グリッドで黒褐色土の落ち込みを確認した。周辺を平面的に精査したところ、黒褐色土の円形プランを確認したため、これを土坑と判断した。検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］直径0.83ｍの円形で、底面はほぼ平坦である。東側ではやや湾曲するが、他はほぼ垂直に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでおり、壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］４層に分層したが、３層と４層の境は不明瞭である。１層は黒褐色土で、炭化物粒の混入が顕著である。２～４層は地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］遺物は石匙１点（第２分冊第72図13）と、土器破片が僅かに出土したのみである。土器破片のうち、文様のある資料１点を掲載した（同12）。

［時期］出土遺物もごくわずかであるため、遺構の構築時期については判断できない。

ＳＫ155（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＥ46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、灰黄褐色土の円形プランを確認した。当初はＳＫ157と重複している可能性も考えられたため土層観察ベルトを設定したが、精査の結果、重複していないことが確認された。

［概要］直径1.13ｍの円形であり、底面は狭くやや湾曲し、そのまま壁へと立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。全体的に小石の混入が顕著である。地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］ＲＦ（第２分冊第72図14）が出土した。土器はほとんどが地文のみの破片資料であった。未掲載の資料に、Ⅵ群の壺の破片が１点含まれる。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ157（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ46グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、地山由来のオリーブ褐色土を中心に暗オリーブ褐色土がドーナツ状に囲む円形のプランを確認した。当初はこのオリーブ褐色土をＳＫ156としたが、調査の結果、ＳＫ157の覆土の一部であることが明らかとなった。

［概要］直径1.72ｍのほぼ円形を呈する。底面は狭くやや湾曲する。壁は北西側では直線的に急角度で立ち上がり、その他の箇所では湾曲しながら立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。２層は炭化物を多量に混入している。２層と３層の境はやや不明瞭であった。遺物は３・４層を中心に出土した。２～４層はⅦ層、５層はⅧ層由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第72図15～17）、スクレイパー類（同18）、石核（同19）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ160（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＥ47グリッドの地山（Ⅶ層）上面で精査をした段階ではプランを確認する事ができなかったが、Ⅶ層を少し掘り下げたところ地山の砂礫層（Ⅷ層）上面でオリーブ褐色～暗オリーブ褐色土のプランを確認した。２基が重複している事が予測されたため、サブトレンチを設定して

新旧関係を確認し、南西側に位置する新しい土坑をＳＫ160とした。

［概要］ＳＫ161を切る。平面形は直径1.52ｍの円形である。底面はごく狭く、緩やかに湾曲し、そのまま急角度で立ち上がる。確認面からの深さは0.46ｍを測る。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいるため壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］３層に分層した。底面中央には大型の礫が１点出土した。これは意図的に配されたものと判断した。遺物は２層からの出土が顕著であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第73図１～５）、ＲＦ（同６・７）、敲石（同８）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ161（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ47グリッドで念のために地山（Ⅶ層）を掘り下げたところ地山砂礫層（Ⅷ層）の上面でオリーブ褐色～暗オリーブ褐色土のプランを確認した。２基が重複している事が予測されたため、サブトレンチを設定して新旧を確認した。このうち、北東側に位置する古いほうの土坑をＳＫ161とした。

［概要］直径0.85ｍの円形を呈する。底面はやや湾曲し、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。礫の混入度合いと色調にわずかな差があるが、層の境は不明瞭である。遺物は１層からの出土が顕著であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第73図９～11）、磨・凹石類（同12）が出土した。

［時期］出土遺物からは晩期初頭の可能性があるが、出土遺物も少なく明確ではない。

ＳＫ163（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＤ45グリッドの地山（Ⅶ層）面で、黒褐色土と灰黄褐色土の重複する２基のプランを確認した。サブトレンチを入れて新旧を確認し、このうち南西側に位置する新しい土坑をＳＫ163とした。

［概要］ＳＫ164を切る。長径1.16ｍ、短径1.02ｍの円形プランである。底面はほぼ平坦で、壁は南東側は急角度で直線的に、北側はやや緩やかに立ち上がる。底面から大型の礫が１点出土した。人為的に配されたものと判断した。確認面からの深さは0.32ｍで、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層には小石の混入が目立つ。

［出土遺物］遺物は全て１層出土で、土器破片（第２分冊第73図13～17、第188図１の一部）、両極石器（第73図18）が出土した。

［時期］出土遺物から、後期末葉から晩期初頭と推察される。

ＳＫ164（第２分冊第７図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＤ45・46グリッドの地山（Ⅶ層）面で、黒褐色土と灰黄褐色土の重複する２基のプランを確認した、サブトレンチを入れて新旧を確認し、このうち北東側に位置する古い土坑をＳＫ164とした。

［概要］ＳＫ163に切られ、南西側の壁は失われているが、その形状はほぼ円形であったものと推察される。残存している部分での長径は1.08ｍである。ＳＫ163と底面の高さがほぼ同じで、確認面からの深さは0.30ｍを測る。底面は平坦で、壁は湾曲して緩やかに立ち上がる。なお、ＳＫ164を完掘後、底面でＳＫＰ193を確認した。新旧関係は不明である。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも炭化物の混入は少ない。２層には地山の砂礫層（Ⅷ層）由来と思われる礫が多く混入していた。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第73図19～21、第188図１の一部）が出土した。

［時期］出土遺物から、後期末葉から晩期初頭と推察される。

ＳＫ165（第２分冊第８図、図版13）

［位置・検出状況］ＭＤ45グリッドの地山（Ⅶ層）面で、黒褐色土のやや不明瞭なプランを確認した。サブトレンチを設定して確認したところ、地山の砂礫層（Ⅷ層）を深く掘り込んでいたために、明瞭な底面および壁が検出された。そこで、これを土坑と判断しＳＫ165とした。

［概要］平面形は長径1.70m、短径1.69mのほぼ円形を呈している。底面はやや湾曲し、壁も緩やかに立ち上がる。また、本遺構の底面で重複するＳＫＰ191を確認した。確認時にはすでにＳＫ165の覆土が失われていたため、詳細な土層観察ができなかったが、遺構確認面での写真を検討したところ、ＳＫＰ191の位置に土色の違う粘質土層がほぼ円形に存在した様子が確認できた。このことからも、ＳＫＰ191に切られていた可能性が高い。

［堆積土の特徴］４層に分けた。３層は砂質をおび、地山の砂礫層（Ⅷ層）由来と思われる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第73図22～24）が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ167（第２分冊第８図）

［位置・検出状況］ＭＣ・ＭＤ47グリッドでＭＤラインに設定した土層観察ベルト中に、Ⅳ層（粘質土層）が不自然に落ち込む箇所を確認した。下部に遺構が存在する可能性を考えて周囲を精査した結果、土坑の存在が明らかとなった。検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］長径1.80m、短径1.75mのほぼ円形を呈する。底面にはやや凹凸があり北側の壁は湾曲して立ち上がる。南側の壁は中段で屈曲し、緩やかに広がっている。

［堆積土の特徴］暗灰黄色土の単層であった。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでおり、底面および壁面には地山礫が露出している。覆土中位より炭化物が出土。厚さ５㎜程度で、南北に繊維方向が観察できる。板状木材のようだが保存状態も悪く、詳細は不明である。

［出土遺物］有孔石製品（第２分冊第73図25）、石棒破片（同26）、ＲＦ（同27）が出土した。僅かに土器破片も出土しており、晩期前葉～中葉と思われるものが含まれる。

［時期］出土遺物から晩期と推察されるが、詳細は不明である。

ＳＫ175（第２分冊第８図）

［位置・検出状況］ＭＢ47グリッドのグライ化した地山（Ⅶ層）面で、炭化物の混入がやや多く土の締りの弱い箇所を確認した。ピンポールで下部の様子を探ったところ、この付近で地山の礫層が深く落ち込んでいる事が判明したため、遺構があるものと認識した。

［概要］平面形は直径1.23mの円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しながら急激に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいるため、壁面には地山礫が一部露出している。底面中央に人頭大の礫３点がまとまって出土した。これは人為的に配されたものと判断した。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも灰色土で、２～３層には人頭大の礫を含んでいた。地山由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］底面中央部に人頭大の礫３点と、礫の下から小型の深鉢（第２分冊第74図１）が倒立した状態で出土した。意図的に埋められたものと判断した。この他、土器破片（同２）、打製石斧（同３）、石皿（同４）が出土した。

［時期］土層の状況や遺物の出土状況から、土坑墓と判断した。時期は底面出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ179（第２分冊第８図、図版14）

［位置・検出状況］ＭＦ41・42グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黄褐色土の円形プランを確認した。

［概要］長径1.49m、短径1.41mの不整円形を呈する。底面は狭く、やや凹凸がある。壁は垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは0.70mを測る。地山の砂礫層（Ⅷ層）を深く掘り込んでおり、底面および壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］５層に分層した。Ⅷ層由来と思われる礫や砂利の混入度合いに多少の差はあるが、いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第74図５～７）が出土した。５は壁面に貼り付いた状態で出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ180（第２分冊第８図、図版14）

［位置・検出状況］ＭＧ41・42グリッドに位置する。調査区西側の旧河川流路による撹乱層を除去したところ、断面で土坑のプランを確認した。検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］ＳＫＰ182を切る。西側半分を失っているが、底面は辛うじて全体が遺存しており、平面形は円形であったことが推察できる。底面は狭くほぼ平坦である。壁は北側では急に立ち上がり、南側ではやや緩やかに湾曲して立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいるため、壁面には地山礫が露出している。

［堆積土の特徴］５層に分層した。覆土下部ほどⅧ層由来の砂や礫を多く含む。いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第74図８・９）が出土した。遺物の出土はごく僅かであった。

［時期］出土遺物から晩期初頭以降と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ183（第２分冊第８図、図版14）

［位置・検出状況］ＭＢ50グリッド杭を中心に確認された風倒木痕（旧ＳＫ176）の範囲を確認するために地山（Ⅶ層）上面を精査したところ、ＭＡ49グリッドで暗褐色土の楕円形プランを確認した。当初、このプランの北側にも炭化物を包含する土層の広がりが確認できたため、複数の土坑が重複していることを予測したが、土層観察により、重複する遺構は存在しないことが分かった。

［概要］長径0.92m、短径0.70mのやや楕円形を呈する。底面および壁は緩やかに湾曲している。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層中央部から大きさ約15cmの礫が検出された。

［出土遺物］微細な土器破片が数点出土しており、Ⅵ群の鉢口縁部破片が１点含まれる。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ190（第２分冊第８図、図版14）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ46グリッドの地山（Ⅶ層）面で、やや色調の暗い不明瞭なプランを確認した。サブトレンチを設定して確認したところ、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達した時点で僅かに掘り

込みが確認できたため、これを土坑と判断した。

［概要］ＳＫＰ194と重複するが、調査当初には確認できず、ＳＫ190底面で確認した。そのため、新旧関係については不明である。

［堆積土の特徴］５層に分層した。覆土上部の１～３層と覆土下部の４・５層に大別される。１～３層は炭化物を微量に含む。主体となる４層は最も炭化物の混入が多い。５層は混入物の認められない粘性の強い土である。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第74図10)、磨・凹石類(同11)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ195(第２分冊第９図、図版14)

［位置・検出状況］ＭＧ41グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、礫が集中する地点を確認した。周辺を精査したところ、礫を取り囲むように円形のプランが確認されたため、これをＳＫ195とした。

［概要］平面形は直径0.85ｍの円形を呈する。底面および壁は緩やかに湾曲する。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、底面および壁には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれもⅧ層由来と思われる礫を多く混入する。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第74図12)、土器片円盤(同13)が出土した。

［時期］出土遺物から後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ196(第２分冊第９図、図版14)

［位置・検出状況］ＭＥ45グリッドの地山(Ⅶ層)面で、やや褐灰色の楕円形プランを確認した。

［概要］長径0.81ｍ、短径0.53ｍの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、僅かに壁が立ち上がる。確認面からの深さは0.14ｍである。

［堆積土の特徴］褐灰色土の単層であった。いずれも地山(Ⅶ層)由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

ＳＫ197(第２分冊第９図、図版14)

［位置・検出状況］ＭＥ45グリッドの地山(Ⅶ層)面で、褐灰色土の楕円形プランを確認した。サブトレンチを設定したところ、底面および壁の立ち上がりを確認したため、遺構と判断した。

［概要］ＳＫ198に切られる。平面形は長径1.18ｍ、短径0.81ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.26ｍを測る。地山の礫層(Ⅷ層)に達しており、底面および壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。

［出土遺物］出土土器は全て地文のみの破片であったため掲載していないが、薄手で細かな縄文が施文された資料が含まれる。

［時期］出土遺物から晩期と推察される。詳細な時期は不明である。

ＳＫ198(第２分冊第９図、図版14)

［位置・検出状況］ＭＥ45グリッドで現代の井戸跡に堆積した土を除去したところ、井戸跡の壁面にプランを確認した。地山(Ⅶ層)面で精査したところ、黒っぽい土のプランが確認された。土層観察ベルトを設定し、半截したところ、底面および壁の立ち上がりを検出した。

［概要］ＳＫ197を切る。遺構西側は現代の井戸跡に切られ、半分以上を失っている。残存部の長径

0.95mを測る。底面はほぼ平坦で、遺構の深さはＳＫ197とほぼ同じである。

［堆積土の特徴］灰黄褐色土の単層であった。地山由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期前葉以降に構築されたものと推察される。

ＳＫ199（第２分冊第９図、図版15）

［位置・検出状況］ＭＥ45・ＭＥ46グリッドに位置する。調査区西側の旧河川流路による撹乱層を除去し、遺物包含層および地山を露出させたところ、地山（Ⅶ～Ⅷ層）を掘り込んだ重複する２基の土坑断面を確認した。平面プランを把握すべく地山（Ⅶ層）面を精査したところ、撹乱による破壊を免れた半円状のプランが確認された。このうち北側に位置する土坑をＳＫ199とした。

［概要］ＳＫ214に切られる。残存部からは円形プランであったことが推察される。残存長は1.14mである。底面はやや湾曲し、壁は急激に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。４層の灰黄褐色土が主体をなす。地山（Ⅷ層）由来の砂利を多く含んでいる。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土した。Ⅴ群に属すると思われる無文の注口土器破片が含まれる。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ200（第２分冊第９図、図版15）

［位置・検出状況］ＭＥ45グリッドで地山（Ⅶ層）をやや掘り下げながら遺構確認作業を行ったところ、地山礫の少ない範囲を確認した。現代の井戸跡と重複しており、この井戸跡掘り形壁面で人為的な掘り込みである事が確認できた。平面的に観察したところ複数の遺構が重複していたため、土層観察ベルトを設定したところ、４基の土坑が重複した状況を確認した。このうち最も西側に位置する土坑をＳＫ200とした。

［概要］南西部を現代の井戸跡に、北東部をＳＫ213に切られる。残存部からほぼ円形を呈していたことが伺える。底面および壁は緩やかに湾曲する。確認面からの深さは0.33mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層は１層よりやや色調が暗く、僅かに小石を混入する。いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第74図14～16）が出土した。

［時期］出土遺物により、晩期前葉と推察される。

ＳＫ201（第２分冊第９図、図版15）

［位置・検出状況］ＭＥ45・46グリッドの地山（Ⅶ層）をやや掘り下げながら遺構確認作業を行ったところ、地山礫の混入の少ない部分を確認した。ＳＫ200から連なる４基の遺構群の１基である。

［概要］西側でＳＫ213を切り、北側でＳＫ205に切られる。平面形は直径1.09mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.22mを測る。

［堆積土の特徴］灰黄褐色粘質土の単層であった。地山（Ⅶ層）由来の埋め戻し土と思われる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第74図17・18）が出土した。

［時期］検出面や出土遺物から、晩期前葉である可能性が高い。

ＳＫ202（第２分冊第９図、図版15）

［位置・検出状況］ＭＣ45・46グリッドの地山（Ⅶ層）面で、暗オリーブ褐色土の楕円形プランを確

認した。

［概要］長径1.28m、短径0.90mの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.27mを測る。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、底面および壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層には小～拳大礫を多量に包含しており、地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土である。

［出土遺物］数点の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ205(第２分冊第９図、図版15)

［位置・検出状況］ＭＥ45・46グリッドの地山(Ⅶ層)をやや掘り下げながら遺構確認を行ったところ、にぶい黄橙色粘質土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ201を切る。平面形は直径1.22mの円形を呈する。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］３層に分層した。２・３層は礫あるいは砂を多く含んでおり、Ⅷ層に由来するものと判断した。これに対し１層は基本土層には確認できない。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］土層の堆積状況から土坑墓と判断した。出土遺物から時期は判断できなかったが、検出面から晩期前葉である可能性が高い。

ＳＫ206(第２分冊第９図)

［位置・検出状況］ＭＦ41グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、やや不明瞭な楕円形プランを確認した。

［概要］長径0.54m、短径0.44mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.12mを測る。

［堆積土の特徴］にぶい黄褐色粘質土の単層である。地山(Ⅶ層)由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］検出面から晩期である可能性が考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ208(第２分冊第９図、図版15)

［位置・検出状況］ＭＢ47グリッドでＳＲ30およびＳＲ84の精査を終了した後、地山(Ⅶ層)を約10㎝掘り下げたところ、炭化物を混入したにぶい黄橙色土の楕円形プランを検出した。

［概要］確認面では長径1.04m、短径0.86mの楕円形を呈する。平面位置ではＳＲ30・84と重複するが、土器埋設遺構の調査時には本土坑を認識できなかったため、新旧関係については不明である。埋設土器の依存状態を考慮すると、本土坑は本来遺物包含層(Ⅵ層)中より構築され、ＳＲ30に切られ、ＳＲ84を切っていた可能性が高い。

［堆積土の特徴］礫の混入度合いから２層に分層した。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と判断できる。

［出土遺物］数点の土器破片が出土した。微細な資料であり掲載していないが、Ⅵ～Ⅶ群に属すると思われる壺破片が１点含まれていた。

［時期］出土遺物から晩期前葉～中葉と推察される。

ＳＫ209(第２分冊第９図、図版15)

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ47グリッドに位置する。地山(Ⅶ層)上面で確認した遺構群の調査を終了した後、Ⅶ層を10㎝程度掘り下げたところ、周囲とやや色調の異なる地点を確認した。やや扁平な円形のプランにも見えたため、サブトレンチを設定したところ底面および壁の立ち上がりを検出したため、土坑と判断した。

［概要］長径1.44m、短径1.20mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.30mで、地山の砂礫層(Ⅷ層)まで達している。

［堆積土の特徴］２層中には拳大の礫が多量に混入する。人頭大の礫２点は底面に接地していた。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片が出土した。磨耗が著しく文様が判然としないために掲載していないが、Ⅵ群に属すると思われる深鉢の口縁部破片が出土している。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ213(第２分冊第９図、図版15)

［位置・検出状況］ＭＥ45・46グリッドで検出したＳＫ200とＳＫ201の重複関係を明らかにすべく土層断面を精査したところ、さらにもう１基の土坑の存在が確認された。これをＳＫ213とした。

［概要］ＳＫ201に切られ、ＳＫ200を切る。残存部での長径0.92mで、ほぼ円形を呈している。確認面(Ⅶ層上面)からの深さは0.30mを測る。

［堆積土の特徴］褐色粘質土の単層であった。炭化物を僅かに含む。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期前葉と推察される。

ＳＫ214(第２分冊第９図、図版15)

［位置・検出状況］ＭＥ45グリッドで調査区西側の旧河川流路による撹乱層を除去し、遺物包含層および地山を露出させたところ、この壁面に地山を掘り込んだ遺構のプランが確認された。

［概要］ＳＫ199を切る。残存部で長径0.76mを測る。確認面からの深さは0.42mである。

［堆積土の特徴］３層に分層した。下方になる従い、混入する砂や礫が多くなる。地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］僅かに土器破片を出土するが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から晩期初頭以降に構築されたものと推察できる。

ＳＫ215(第２分冊第６図)

［位置・検出状況］ＭＡ49グリッドに位置する。ＳＫ92の精査中に壁面で確認した。遺構の確認面はＳＫ92と同じく地山(Ⅶ層)上面である。

［概要］ＳＫ92に切られる。長径0.95m、短径0.59mの不整円形プランで、確認面からの深さは0.23mを測る。底面は緩やかに湾曲し、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層には小礫や砂利の混入が顕著で、２層には炭化物粒を僅かに含む。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の土層と推察される。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期前葉以前に構築されたものと推察できる。

ＳＫ217(第２分冊第２図)

［位置・検出状況］ＬＱ60グリッドに位置する。ＳＫ39の精査中に、当初確認したプランの外に遺構覆土を確認した。土層断面とあわせて観察した結果、重複するもう１基の土坑と判明し、これをＳＫ217とした。確認面は地山(Ⅶ層)面である。

［概要］ＳＫ39に切られる。残存部では長径1.08mのほぼ円形を呈する。底面から壁にかけて緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.22mである。

［堆積土の特徴］灰色粘質土の単層である。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、時期決定の出来る資料は無かった。

［時期］不明である。

ＳＫ218(第２分冊第３図)

［位置・検出状況］ＬＱ60グリッドに位置する。ＳＫ45の精査中に、当初確認したプランの外に遺構の覆土を確認した。断面とあわせて観察した結果、重複する別の土坑と判断しＳＫ218とした。

［概要］ＳＫ45に切られる。残存部で長径0.40mの不整円形を呈している。壁および底面は中央部に向かって傾斜している。

［堆積土の特徴］灰色粘質土の単層である。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土したが、時期を決定できる資料は無かった。

［時期］不明である。

ＳＫ221(第２分冊第30図、図版15)

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。試掘調査時の４号トレンチ内を精査中、トレンチ底面(Ⅷ層)および北側壁面で検出した。調査工程上の理由から、４号トレンチ内を先行して調査を実施した。その後、トレンチ北側で遺物包含層(Ⅵ層)上面で、平面プランが検出された。

［概要］ＳＫ726・729・734を切る。遺構構築面はⅥ層上面である。遺構南側は、トレンチによって削平されていたが、底面は辛うじて残存していた。残存部で長径1.40m、短径1.19mの不整円形を呈し、確認面からの深さは0.34mを測る。底面は緩やかに湾曲し、壁も比較的緩やかに立ち上がる。地山の砂～砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでいる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。２層のオリーブ褐色粘質土が主体をなす。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第75図１～３)、ＲＦ(同４)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ222ａ・222ｂ・222ｃ(第２分冊第11・30図、図版15・16)

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。４号トレンチ内を精査中、トレンチ底面(Ⅷ層)および北側壁面で検出した。調査工程上の理由からトレンチ内の精査を先行させたが、この段階では１基の土坑と認識したまま精査を終了した。その後、ＭＡ54グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で北側の平面プランを確認し、複数の土坑が重複しているものと認識した。そこで、４号トレンチ北壁に見えている土層断面も合わせて再検討し、炭化物の混入が顕著なプランをＳＫ222ａ、最も上部に構築されているプランをＳＫ222ｂ、覆土は砂を主体としＳＫ222ａを切るプランをＳＫ222ｃとした。

［概要］ＳＫ222ａ：ＳＫ222ｂ・222ｃ・738に切られる。地山の砂層(Ⅷ層)から構築されている。残存部で長径1.09m、短径0.97mのほぼ円形を呈する。深さは0.24mを測る。底面はほぼ平坦である。

覆土中より、繊維方向の観察できる炭化物、骨粉、被熱痕のある割れた礫が集中して出土した。

ＳＫ222ｂ：ＳＫ222ａ・222ｃ・665・735・736・737・738を切る。プラン南側は４号トレンチによって失われている。残存部で長径1.04m、短径0.88mで、やや南北方向に伸びた楕円形を呈する。深さは0.34mを測る。底面および壁面は緩やかに湾曲する。検出面はⅥ層上面である。

ＳＫ222ｃ：ＳＫ222ａ・665を切り、ＳＫ222ｂ・735・736に切られる。地山の砂層(Ⅷ層)より構築されており、長径0.85m、短径0.75mの不整円形を呈する。深さは0.24mを測る。

[出土遺物] ＳＫ222ａより土器破片(第２分冊第75図５～７)、ＲＦ(同８)を、ＳＫ222ｂより土器破片(同９～12)、ＳＫ222ｂあるいはＳＫ222ｃより土器破片(同12)が出土した。

[時期] 重複関係および出土遺物よりＳＫ222ａ・ｂは晩期前葉の、ＳＫ222ｃは晩期初頭の可能性がある。

ＳＫ223(第２分冊第11図、図版16)

[位置・検出状況] ＬＳ53グリッドに位置する。３・４号トレンチ間に設定した土層観察ベルトで断面を確認した。遺物包含層(Ⅵ層)上面で平面プランも確認されたため、これを土坑と判断した。確認面より拳大よりやや大きな礫が８点ほど検出された。意図的に配置されたものの可能性がある。

[概要] ＳＱ773、ＳＫＰ482と隣接する。南側はトレンチによって削平されている。長径0.87mのほぼ円形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは0.28mを測る。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。いずれも微量な炭化物粒を含んだ地山(Ⅶ層)由来の粘質土層である。１層下部、プラン中央に人頭大の礫が集中して検出された。意図的に配されたものと判断した。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第75図13・14)が出土した。

[時期] 出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ229(第２分冊第12図)

[位置・検出状況] ＭＡ53・54グリッドに位置する。４号トレンチ内を精査中、トレンチ底面(Ⅷ層)で複数の遺構が重複したプランを検出した。最も南に位置するプランをＳＫ229とした。

[概要] ＳＫ240の西に位置し、ＳＫＰ237に切られる。長径0.61m、短径0.52mのほぼ円形を呈する。上部を４号トレンチによって削平されているため、本来の遺構構築面や遺構の規模は不明である。残存部の深さは0.15mを測る。底面はほぼ平坦である。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。１層は粘土質で、２層はやや砂質である。

[出土遺物] ２層中より僅かに土器の小破片が出土したが、時期の特定にはいたらなかった。

[時期] 不明である。

ＳＫ230(第２分冊第13図)

[位置・検出状況] ＭＡ53・54グリッドに位置する。４号トレンチ内を精査中、トレンチ底面(Ⅷ層)で複数の遺構が重複したプランを検出した。

[概要] ＳＫ240の上部に構築されており、これを切る。また、ＳＫＰ238、ＳＫＰ253を切る。底面はほぼ平坦で、残存部では長径0.50m、短径0.42m、深さ0.07mを測る。

[堆積土の特徴] 褐色土の単層である。

[出土遺物] 微細な土器破片を数点出土したが、所属時期の分かる資料は無かった。

［時期］重複関係から、晩期初頭以降に構築された可能性がある。

ＳＫ232（第２分冊第12図）

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ53グリッドに位置する。４号トレンチ内を精査中、トレンチ底面（Ⅷ層）で、隅の丸い方形のプランを検出した。

［概要］長径1.53m、短径1.24mの方形プランを呈する。上部を４号トレンチによって失われており、本来の構築面や遺構の規模は不明である。残存部での深さは0.14mを測る。底面は平坦である。

［堆積土の特徴］黒色土の単層である。グライ化した粘質土で、地山（Ⅶ層）由来と思われる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第75図15～17）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ234（第２分冊第12図、図版16）

［位置・検出状況］ＬＲ59グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、灰色砂質土の円形プランを確認した。Ⅵ層上面で確認した最初のプランであった事もあり、人為的な遺構であるという確証を得るために土層観察用のサブトレンチを設定した。しかし、やや掘り下げたところで黒褐色土が現れ、これを遺物包含層（Ⅵ層）と誤認したため一時は自然の窪地と判断した。その後、地山（Ⅶ層）上面で同一地点に円形プランを検出した。再びサブトレンチを設定して確認したところ、明瞭に底面および壁を検出されたため、土坑と判断した。

［概要］本来の遺構構築面は遺物包含層（Ⅵ層）上面であったが、遺構と認識したのは地山（Ⅶ層）上面段階である。地山（Ⅶ層）上面で長径1.17m、短径1.12mのほぼ円形を呈する。深さは0.35mである。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は砂質、２層は粘土質で地山（Ⅶ層）由来の埋め戻し土と思われる。底面直上層からは人頭大の礫２点が検出された。意図的に配されたものと判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第75図18～22）、磨・凹石類（同23）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ235（第２分冊第12図）

［位置・検出状況］ＬＲ59グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、褐灰色土の円形プランを確認した。ＳＫ234と同様、人為的な遺構であるという確証を得るためにサブトレンチを設定したが、やや掘り下げたところで黒褐色土が現れ、これを遺物包含層（Ⅵ層）と誤認してしまったため自然の窪地と判断した。その後、地山（Ⅶ層）上面で同一地点に再び円形プランを確認したため、これをＳＫ235とした。平・断面図等の記録を作成したのはこの段階である。

［概要］ＳＫ236の北東に位置する。本来の遺構構築面は遺物包含層（Ⅵ層）上面であるが、遺構と認識したのは地山（Ⅶ層）上面段階である。地山（Ⅶ層）上面で、長径0.75m、短径0.58mの楕円形を呈する。深さは0.25mを測る。底面で小型のピットを確認したが、本土坑に付属するものか否か判断は出来なかった。

［堆積土の特徴］褐灰色土の単層である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］遺構の構築面から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ236（第２分冊第12図、図版16）

［位置・検出状況］ＬＳ58・59、ＬＲ59グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、灰色砂質土の円形プ

ランを確認した。調査期間との兼ね合いから、確認平面図を作成した後、土層観察ベルトを設定し、ベルトを残してプラン内外共に掘り下げ、地山(Ⅶ層)上面段階で再度平面プランを把握し、その後土坑の精査に入るという方法を採った。

［概要］長径1.51m、短径1.49mの円形を呈する。遺構構築面は遺物包含層(Ⅵ層)上面であり、深さは0.41mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや湾曲しながら緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。１層の灰色砂質土は基本土層のⅤb層に似ており、中央部にほぼ円形に厚さ18cmほど堆積している。２層以下は炭化物粒を多く含み、色調も暗い。また、底面直上層には地山(Ⅶ層)由来の粘質土ブロックが目立つ。これらは人為的な埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第76図１～３)、石匙(同４・５)、スクレイパー類(同６)、石核(同８)、礫器(同７)、磨・凹石類(同９)が出土した。遺物は２層以下からの出土が顕著であった。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ240(第２分冊第13図)

［位置・検出状況］ＭＡ53・54に位置する。４号トレンチ内を精査中、トレンチ底面(Ⅷ層)で複数の遺構が重複したプランを確認した。このうち、最も規模の大きなものをＳＫ240とした。

［概要］ＳＫ230・238・253に切られる。長径1.30m、短径1.18mの不整円形を呈する。深さは0.28mを測る。底面はほぼ平坦である。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１～２層には拳大以上の礫を多量に含んでいた。

［出土遺物］土器破片を数点出土したが、地文のみの深鉢破片であった。特に無文の深鉢が多い。他にスクレイパー類(第２分冊第76図10・11)が出土した。また、動物遺存体の微細な破片を検出した(第５章第７節参照)。

［時期］出土遺物から、後期末から晩期初頭の可能性がある。

ＳＫ242(第２分冊第12、図版16)

［位置・検出状況］ＭＣ47・48、ＭＤ47・48グリッドに位置する。48ラインに設定した土層観察ベルトおよび、これに沿ったサブトレンチの底面で確認された。そこで、土層観察ベルトより南側を先行して精査し、48ラインの基本土層と本土坑の断面図を併せて作成した。

［概要］ＳＫ252・682を切る。長径1.47m、短径1.36mでやや東西に長い円形を呈する。土層断面の観察によると遺構の構築面は遺物包含層(Ⅵb層)であり、ここからの深さは0.57mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上がる。底面ほぼ中央に人頭大の礫が配置されていた。

［堆積土の特徴］７層に分層した。２・４・７層には地山(Ⅷ層)由来の砂礫を多く含んでおり、人為的に埋め戻されたものと判断した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第77図１～４)、ＲＦ(同５)、石匙(同６)、石核(同７)、打製石斧(同８)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ252(第２分冊第12図、図版16)

［位置・検出状況］ＭＤ47・48グリッドに位置する。48ラインの土層断面でＳＫ242を確認し、精査を開始したところ、この西側に重複する土坑があることが判明し、これをＳＫ252とした。

［概要］ＳＫ242・243に切られる。残存部で長径1.07mである。掘り込みは地山の砂礫層(Ⅷ層)に

達しており、深さは0.36ｍを測る。底面はほぼ平坦で、北側の壁は非常に緩やかに立ち上がる。遺構構築面は遺物包含層（Ⅵ層）中である。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１層および３層には炭化物粒を多く含む。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第77図９・10）が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ262ａ（第２分冊第12図、図版17）

［位置・検出状況］ＭＡ50グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の不整円形プランを確認した。当初は単独の遺構と考えたが、後に重複する柱穴様ピットが存在する事が明らかとなった。

［概要］ＳＫＰ262ｂ・268を切る。長径0.74m、短径0.54mのほぼ円形を呈する。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。確認面からの深さは0.22mで、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層には炭化物のほか焼土粒も含まれる。

［出土遺物］１層下部から２層上部にかけて大きめの礫が集中していた。この礫に挟まるようにして、土器破片（第２分冊第77図11～13）が垂直方向に立った状態で並んで検出された。

［時期］不明である。

ＳＫ278（第２分冊第13図、図版16）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ48グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の明瞭な円形プランを確認した。

［概要］長径0.83m、短径0.74mの円形を呈する。確認面からの深さは0.44mであり、地山の砂礫層に達する。底面は平坦で、壁は垂直気味に直線的に立ち上がる。

［堆積土の特徴］底面から３層にかけて10～20㎝大の礫が集中している。１層に遺物を最も多く含み、４層、３層の順に続く。

［出土遺物］赤彩された浅鉢（第２分冊第77図14）がプランほぼ中央の１層下位より正位で出土した。意図的に埋められたものと推察される。この他、土器破片（同15～17、第78図１・２）、石錐（同３）、打製石斧（同５）、土製耳飾（同４）、石棒類（同６）が出土した。

［時期］礫や遺物の出土状況から、土坑墓と判断した。時期は、出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ279（第２分冊第13図、図版17）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ48・49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で黒褐色土の楕円形プランを確認した。

［概要］長径2.16m、短径1.94mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.66mを測る。底面は平坦で、西側に段を持つ。壁はやや外反しながら急に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を大きく掘り込んでいるため、底面および壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］10層に分層した。上位の１～５層と下位の６～10層に分けられるが、上位が粘質土なのに対し、下位は砂を多く含んだ土層で地山（Ⅷ層）由来と思われる。遺物は１層および４～６層からの出土が顕著であった。

［出土遺物］深鉢（第２分冊第78図８）が２層下部より土層に沿って斜めに流れ込んだ状態で出土している。一部欠損しているものの、１個体分がまとまって出土しており、意図的に埋められた遺物と推察される。この他にも土器破片（同７・９～14）、土製耳飾の破片（同15）、石匙（同16・17）、ス

クレイパー類(第79図１・２)、ＲＦ(同４～６)、石核(同３)、礫器(同７・11)、打製石斧(同８)、磨製石斧(同９・10)、その他の礫石器(第80図１)、石皿(同２)が出土した。

[時期] 出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ280(第２分冊第13図、図版17)

[位置・検出状況] ＭＥ48・49グリッドに位置する。調査区西側にある旧河川跡の状況を知るために、49ラインに沿ってサブトレンチを設定したところ、ＭＥ49グリッド杭付近で人頭大の礫を底面中央部に持つ円形の土坑が確認された。確認面は地山(Ⅶ層)上面である。

[概要] 西側を旧河川流路跡によって削平されている。残存部で長径0.93m、短径0.88mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.33mを測る。

[堆積土の特徴] ３層に分層した。１層は混入物の少ない黄褐色粘質土であり、遺構のほぼ全面を覆っている。２～３層は炭化物を含みやや黒っぽい。人為的な堆積と判断した。

[出土遺物] 遺物はほとんど出土しなかった。底面に拳大～人頭大の礫４点が集中していた。意図的に埋められたものと推察される。

[時期] 底面の礫の状況や土層の堆積状況から、土坑墓と判断した。時期は不明である。

ＳＫ281(第２分冊第13図)

[位置・検出状況] ＭＤ・ＭＥ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、地山(Ⅶ層)由来の粘質土の円形プランとそれを取り囲むような半月形の黒褐色土のプランを確認した。当初は、２基の土坑が重複するものと予測したが、精査の結果、単独の土坑であることが分かった。

[概要] 長径2.27m、短径1.60mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.63mを測る。底面は平坦で南側の壁はやや直線的に急角度で、北側の壁はやや湾曲しながら立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)まで掘り込みが達しており、底面および壁面には地山礫が露出していた。

[堆積土の特徴] ６層に分層した。炭化物粒や砂利の混入度合いに差があるものの、いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と推察される。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第80図３～８)、両極石器(同９)、打製石斧(同10)が出土した。

[時期] 出土遺物より晩期中葉と推察される。

ＳＫ289(第２分冊第14図)

[位置・検出状況] ＭＤ49グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、地山の現れない部分があることを確認した。この周辺の土層はグライ化が著しく、平面プランの検出が困難であった。そこで、複数のサブトレンチを設定し、土層断面および底面の検出状況から、複数の土坑の存在を確認した。この内、黒褐色土の比較的明瞭なプランをＳＫ289とした。

[概要] ＳＫ432に切られ、ＳＫ478・491を切る。長径1.20m、短径1.13mのほぼ円形のプランを呈している。確認面からの深さは0.54mを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、底面や壁には地山礫が露出する。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。いずれも炭化物やⅧ層由来の礫の混入が顕著である。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第80図11～13)が出土した。

[時期] 重複関係および出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ290(第２分冊第14図)

［位置・検出状況］ＭＤ48・49グリッド杭付近を精査中、地山(Ⅶ層)上面で重複する２基の土坑プランを確認した。このうち、新しい土坑をＳＫ290として精査を開始した。その後、当初確認した２基の北側にそれぞれ別の遺構が重複する事が判明したため、土層観察ベルトを追加して調査した。

［概要］ＳＫ322・478を切る。長径0.85m、短径0.72mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.75mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層には地山の砂礫層(Ⅷ層)由来の礫を多く含んでいる。人為的な埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第80図14～16)、スクレイパー類(同17)が出土した。

［時期］出土遺物から後期後葉の可能性がある。

ＳＫ291ａ・ｂ(第２分冊第14図)

［位置・検出状況］ＭＢ51グリッドの地山(Ⅶ層)面で、黒褐色土の不整円形プランを確認した。半截したところ、２基が重複している事が判明した。このうち、当初確認したプランをＳＫ291ａ、もう一方をＳＫ291ｂとした。しかし、ＳＫ291ｂの存在を認識した時点で、既にＳＫ291ａの覆土は掘り上がっていたため、その新旧関係については把握できなかった。

［概要］ＳＫ291ａは直径0.55mのほぼ円形で、確認面からの深さは最大で0.43mを測る。ＳＫ291ｂは確認時で長径0.40m、短径0.37mのやや楕円形を呈している。

［堆積土の特徴］いずれも黒褐色土の単層であった。砂利を多く含み、Ⅷ層由来と思われる。

［出土遺物］プラン内覆土より土器破片(第２分冊第81図１)、石匙(同２)、スクレイパー類(同３・４・６)、ＲＦ(同５)、打製石斧(同７)、敲石(同８)が出土した。

［時期］未掲載の土器破片に晩期の鉢底部が含まれるため晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ297(第２分冊第14図)

［位置・検出状況］ＭＢ51グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒色土の円形プランを確認した。周辺にはいくつかの土坑や柱穴のプランが確認されたが、精査を進めたところ、本土坑の南で確認されたＳＫ300が重複している事が明らかとなった。

［概要］ＳＫ300を切る。長径0.71m、短径0.61mのほぼ円形を呈している。確認面からの深さは0.12mと非常に浅い。底面はほぼ平坦である。

［堆積土の特徴］黒色土の単層である。地山(Ⅶ層)由来のグライ化粘質土ブロックが混入する。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期初頭以降に構築されたものと推察できる。

ＳＫ300(第２分冊第14図、図版18)

［位置・検出状況］ＭＢ51グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の周りに黒色土がドーナツ状に取り囲む円形プランを確認した。当初は２基の土坑が重複したもので、ＳＫ297とは隣接すると予測されたが、精査した結果ＳＫ297と重複する１基の土坑である事が分かった。

［概要］ＳＫ297に切られる。長径1.61m、短径1.26mのやや歪な円形を呈する。確認面からの深さは最大0.58mを測り、地山の砂礫層(Ⅷ層)に達している。底面はほぼ平坦で、北側に幅の狭い段を持つ。壁はやや内湾しながら垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれの土層にも地山(Ⅶ～Ⅷ層)のブロックを含んでおり、人為的な埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第81図９)、石錐(同10)、スクレイパー類(同11)、敲石(同12)、土製耳飾の破片(同13・14)、土偶(同15)が出土した。土偶は遺構外で出土した頭部～胴上半部の破片と接合した。

［時期］検出面や出土遺物から、後期末葉～晩期初頭と推察される。

ＳＫ322(第２分冊第14図、図版18)

［位置・検出状況］ＭＤ48グリッド杭付近の地山(Ⅶ層)上面で、重複する２基の土坑プランを確認した。このうち古いものをＳＫ322、新しいものをＳＫ290として精査を開始した。精査中に、それぞれ北側にも別の遺構が重複していることが分かった。

［概要］ＳＫ290に切られ、ＳＫ432を切る。長径1.32m、短径1.30mの円形を呈する。確認面からの深さは0.58mを測る。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。遺物の多くは下部の２層から出土している。底面ほぼ中央に人頭大の礫が複数出土した。これらは人為的に埋められた可能性がある。

［出土遺物］底面より出土した礫の上部にほぼ完形の注口土器が２点(第２分冊第82図１・２)が出土した。室内整理の結果、さらに１点の注口土器(同３)が復元された。これら３点の注口土器は意図的に埋められたものと判断した。他にも土器破片(同４～８)、土製耳飾の破片(同９)が出土した。７の内面にはアスファルト塊が付着しており、アスファルトの容器であったと思われる。

［時期］遺物の出土状況および土層の堆積状況から土坑墓と判断した。時期は、出土遺物から後期末葉～晩期初頭と推察される。

ＳＫ323(第２分冊第14図、図版18)

［位置・検出状況］ＭＣ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、やや大型の礫とこれを取り囲む黒褐色土の楕円形プランを確認した。

［概要］長径0.96m、短径0.60mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.61mを測る。確認面には大型の礫が４点並べられていた。人為的に配されたものと判断した。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層には炭化物粒の混入が顕著である。２～３層は砂を含み、地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］確認面より石斧未成品(第２分冊第82図15)、石皿(同16)が出土した。この他、土器破片(同10～13)、スクレイパー類(同14)が出土した。

［時期］出土遺物に１点、晩期前葉のもの(第82図13)が含まれているため、本土坑もこの時期に構築された可能性がある。

ＳＫ327(第２分冊第15図、図版18)

［位置・検出状況］ＭＢ47・48、ＭＣ47・48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、２基の土坑が重複するプランを確認した。48ラインベルトにかかるプランをＳＫ327、この北東に位置しこれに切られるプランをＳＫ330とした。両者の重複位置を通る断面および48ラインベルトを残して掘り下げ、先にベルトより北側を完掘し、土層断面の観察および記録を終了した後、全体の精査を実施した。

［概要］ＳＫ330を切る。長径1.96m、短径1.70mのほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は直線的

に急角度で立ち上がる。48ラインベルトの観察により、構築面はⅥb層であることが分かる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、底面や壁には地山礫が露出する。

[堆積土の特徴] ４層に分層した。１層は地山(Ⅶ層)由来の灰オリーブ色土で、プラン中央部にほぼ円形に確認される。主体を成すのは３層(黒褐色土)で炭化物や礫を多量に混入する。底面には人頭大の礫が置かれており、意図的に配されたものと推察できる。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第83図１～４)が出土した。

[時期] 出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ328(第２分冊第15図、図版18)

[位置・検出状況] ＭＢ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で検出したＳＲ248の精査中、ＳＲ248に切られる土坑の存在を土層断面で確認した。そこで再度プラン確認を実施したところ、黒褐色土の円形プランを検出した。

[概要] ＳＲ248に切られる。長径1.21m、短径1.05mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.53mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しながら急に立ち上がる。

[堆積土の特徴] ５層に分層した。５層は地山(Ⅷ層)由来の砂礫を多く混入している。４層は炭化物を多く含み、他の層に比べてややしまっている。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、底面および壁には地山礫が露出する。覆土下部４・５層から土器破片を中心とする数多くの遺物が出土した。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第83図５)、ＲＦ(同６)が出土した。

[時期] 出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ330(第２分冊第15図、図版18)

[位置・検出状況] ＭＢ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、２基の土坑が重複するプランを確認した。48ラインベルトにかかるプランをＳＫ327、この北東に位置し、重複するプランをＳＫ330とした。

[概要] ＳＫ327に切られ、プランの南西側半分を失っている。残存部での長径は1.01mを測る。確認面からの深さは0.40mで、底面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がる。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。１層は地山(Ⅶ層)由来と思われる灰黄褐色土で、炭化物などの混入も少ない。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第83図７・８)が僅かに出土した。

[時期] 重複関係から、晩期前葉以前に構築されたものと推察される。

ＳＫ332(第２分冊第15図、図版18)

[位置・検出状況] ＭＢ48グリッドに位置する。ＭＣラインの土層観察ベルトに沿ってサブトレンチを設定したところ、土坑らしき掘り込みがあることを確認した。地山(Ⅶ層)上面で平面プランの確認に努めたが、プランが不明瞭であったため、ＭＣラインベルトに直行するサブトレンチを設定したところ、一個体と思われる土器破片が底面に広がっている状況を確認した。２本のサブトレンチを基に平面プランも確認されたため、これを土坑と判断した。

[概要] 長径1.03m、短径0.98mの円形のプランを呈する。確認面からの深さは0.47mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

[堆積土の特徴] ３層に分層した。１層は地山(Ⅶ層)由来の灰黄褐色土であり、炭化物等の混入も

少ない。２層が主体で、炭化物、拳大の礫および土器破片などの遺物を多量に含む。

［出土遺物］底面には人頭大の礫が出土した。また、この上に倒れるようにほぼ完形の深鉢（第２分冊第83図９）が出土した。この他にも数点の土器破片が出土しており、後期末から晩期初頭に属すると思われる注口の破片が含まれている。

［時期］遺物の出土状況から土坑墓と判断した。時期は出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ336（第２分冊第15図、図版19）

［位置・検出状況］ＭＢ48・49グリッドに位置する。地山（Ⅶ層）上面を精査中、ＭＣラインの東側に遺構確認のためにサブトレンチを設定したところ、重複するいくつかのプランを確認した。このうち、ＭＣ49グリッド杭付近で検出し、ＳＫ337、ＳＫＰ335に切られるものをＳＫ336とした。

［概要］ＳＫ337、ＳＫＰ335に切られ、プラン西側を欠損している。残存部で長径0.79m、短径0.56mであり、ほぼ円形を呈したものと推察される。確認面からの深さは0.22mを測る。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土した。ほとんどが地文のみの小破片であるが、１点のみ晩期前葉に属すると思われる壺・注口類の破片が含まれる。

［時期］出土遺物および重複関係から晩期前葉と推察される。

ＳＫ337（第２分冊第15図、図版19）

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ48グリッドに位置する。地山（Ⅶ層）上面を精査中に、ＭＣラインの東側に遺構確認のためにサブトレンチを設定したところ、重複するいくつかのプランを確認した。このうち、ＭＣ49グリッド杭付近で検出したもののうち、中央部に位置する土坑をＳＫ337とした。

［概要］ＳＫＰ335に切られ、ＳＫ336・433を切る。また、北側にはＳＫ557が隣接する。ＳＫ337は長径1.21m、短径0.78mの楕円形を呈しており、確認面からの深さは0.47mを測る。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。炭化物、礫、土器破片などの遺物が多量に混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第83図10～13）、土偶の脚部（同14）、石匙（同15）、石錐（同16）が出土した。

［時期］出土遺物および重複関係から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ341（第２分冊第16図、図版19）

［位置・検出状況］ＬＲ・ＬＳ58グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、灰色粘質土の円形プランを確認した。土層観察ベルトを十字に設定し、確認平面図を作成した後に、ベルトのみを残してプラン内外の土層を一括して掘り下げ、地山（Ⅶ層）上面に達した時点で再度平面プランを確認した。その後、遺構の精査を開始した。

［概要］長径1.96m、短径1.69mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.56mで、Ⅶ層中に構築されている。底面は緩やかに湾曲し、壁はやや急激に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。主体となる３～４層は、炭化物や礫の混入度合いに差があるものの、質や土色はほとんど同じである。粘土質であり、地山（Ⅶ層）由来の埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］４層下部の底面近くから、小型の壺（第２分冊第84図１）と自然礫１点が並んで検出された。プランほぼ中央からの検出であり、意図的にこの位置に配されたものと判断した。また、同

じく４層下部より土偶２点(第85図１・２)が出土している。この他、土器破片(第84図２～５)、石錐(同７・８・13)、スクレイパー類(同９・11・14)、石匙(同10)、ＲＦ(同15～19)、土製耳飾の破片(第85図３)が出土した。

[時期] 遺物の出土状況および土層の状況から、土坑墓と判断した。出土遺物および遺構検出面より、晩期前葉と推察される。

ＳＫ347(第２分冊第16図、図版19)

[位置・検出状況] ＬＳ58グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、炭化物の集中する地点を確認した。遺構である可能性を考えたが、プランが不明瞭で把握出来なかった。そこで、地山(Ⅶ層)を５㎝程度掘り下げて再度プランを確認し、土坑と認定した。

[概要] ＳＫ348の東に隣接する。直径0.62ｍの円形を呈し、確認面からの深さは0.15ｍを測る。

[堆積土の特徴] 黒褐色粘質土の単層である。炭化物を非常に多く含んでいる。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第85図４～６)、敲石(同７)が出土した。

[時期] 出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ348(第２分冊第16図、図版19)

[位置・検出状況] ＬＳ58グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、ＳＫ347の西側にやや不明瞭ながらも炭化物を含んだオリーブ黒色粘質土の円形プランを確認した。しかし、プランがやや不明瞭であったため、地山(Ⅶ層)を５㎝程度掘り下げて再度プランを確認し、これをＳＫ348とした。

[概要] 長径0.56ｍ、短径0.48ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.22ｍを測る。底面は湾曲し、壁もやや緩やかに立ち上がる。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。いずれも炭化物を多く含んだ粘質土層で、地山(Ⅶ層)由来である。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第85図８)、ＲＦ(同９)が出土した。

[時期] 出土遺物より後期後葉と推察される。

ＳＫ349(第２分冊第16図、図版20)

[位置・検出状況] ＬＳ58グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、灰黄褐色土の円形プランを確認した。確認面の土層(１層)は地山(Ⅶ層)と酷似しており、プランの検出は困難であった。サブトレンチを設定し、断ち割ったところ炭化物を多く含んだ覆土が確認され、遺構であるとの確信を得た。

[概要] ＳＫ347・348の南に位置する。長径0.85ｍ、短径0.75ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.35ｍを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直気味に立ち上がる。底面は地山の砂層(Ⅷ層)まで達しており、底面および壁の立ち上がりは明確に把握できた。

[堆積土の特徴] ６層に分層した。炭化物などの混入物が目立つのは３層のみで、その他の土層は地山(Ⅶ層)由来の鈍い色調の粘質土である。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第85図10～15)、磨・凹石類(同16)が出土した。

[時期] 出土遺物から、後期後葉と推察される。

ＳＫ353(第２分冊第16図、図版20)

[位置・検出状況] ＭＣ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、２基の遺構が重複するプランを確認した。このうちの北側のプランをＳＫ353とした。

[概要] ＳＫ355を切る。長径0.74ｍ、短径0.69ｍでほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.33ｍ

を測る。底面は緩やかに湾曲しており、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は黒褐色土で、炭化物を微量に含む。２層は下位ほど湿り気を帯び灯油のような臭いがする。この臭いは数日間の精査期間中ずっと消えなかった。その原因をさぐるべく本土層を採取して分析にかけたが、原因を突き止めるには至らなかった

［出土遺物］２層より僅かに土器破片(第２分冊第85図17)が出土した。

［時期］不明である。

ＳＫ355(第２分冊第16図、図版20)

［位置・検出状況］ＭＣ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、２基の土坑が重複するプランを確認し、南側のプランをＳＫ355とした。精査の結果、他に２基の柱穴が重複していることが判明した。

［概要］ＳＫ353、ＳＫＰ316・318に切られる。長径0.74m、短径0.64mの円形を呈しており、確認面からの深さは0.28mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］暗灰黄色土の単層である。底面付近ではＳＫ353と同様灯油のような臭いがした。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ357(第２分冊第16図、図版20)

［位置・検出状況］ＬＲ59・60グリッドの地山(Ⅶ層)上面で確認した。北半部は調査区外へと延びている。

［概要］確認できた範囲で直径1.11mである。ほぼ円形を呈するものと推察される。底面は平坦であり、中央に径0.20mの小さなピットが掘り込まれている。壁は緩やかに立ち上がる。深さは確認面より0.35mを測る。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１・２層には多量の炭化物を含む。また、１層には小石を、２層には拳大以下の礫を多く含んでいる。どの層位からも細かな土器破片が多く出土した。

［出土遺物］底面より石皿片(第２分冊第86図５ｂ)が出土した。これと同一個体の破片(同５ａ)がＬＳ58グリッドⅥa層より出土している。この他、土器破片(第85図18～20)、土器片円盤(同21)、スクレイパー類(同22)、ＲＦ(同23、第86図１～３)、礫器(同４)が出土した。

［時期］出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ359(第２分冊第16図、図版20)

［位置・検出状況］ＬＲ59グリッドに位置する。試掘調査時の５号トレンチ西側に遺物包含層の厚さを確認するためサブトレンチを設定したところ、ほぼ完形の石皿(第２分冊第87図１)と大型の礫が並んだ状態で出土した。これらが遺構プラン内より出土しているものではないかと考え、トレンチの壁および地山(Ⅶ層)上面で確認したところ、５号トレンチの外側に半円状にプランが確認できた。トレンチ壁で確認した土層断面とも一致したため、これを土坑と認識した。

［概要］ＳＫ234の南東に位置する。プラン東側はトレンチで削平されており、残存部で長径1.02m、確認面からの深さは0.41mを測る。底面は湾曲し、壁も緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］４層に分層した。主体を成す２層は地山(Ⅶ層)由来のオリーブ褐色粘質土で、炭化物などの混入物が少ないため地山との判別が困難であった。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第86図６～８)、石匙(同９)、石皿(第87図１)、磨・凹石類(同２)、

石製品(同３)が出土した。

［時期］出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ362(第２分冊第16図、図版20)

［位置・検出状況］ＬＱ60グリッドに位置する。ＬＲラインの土層観察ベルトに沿ってサブトレンチを設定したところ、このトレンチ壁面で確認した。平面的にも地山(Ⅶ層)上面でプランが確認されたため、土坑と判断した。本来はＬＱ60グリッドにも本土坑が展開しているはずであるが、初年度の調査時には検出できなかった。

［概要］ＬＲラインより西側部分のみ確認できた。北側は調査区外へと延びている。検出した範囲では底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.20ｍを測る。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも炭化物を微量含んだ粘土層で、地山(Ⅶ層)由来である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第87図４)と土製玉類(同５)が出土した。遺物はごく僅かである。

［時期］出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ363(第２分冊第16図)

［位置・検出状況］ＬＲ60グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、調査区北端部で遺構外へ延びるプランを確認した。全体の形状は定かではないが、平面プランから類推される規模より、土坑として扱った。

［概要］確認した範囲では深さは0.16ｍである。壁面のみが検出されている。

［堆積土の特徴］オリーブ黒色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第87図６・７)が出土した。出土遺物はごく僅かである。

［時期］出土遺物より晩期初頭に構築された可能性がある。

ＳＫ367(第２分冊第17図)

［位置・検出状況］ＭＢ49グリッドに位置する。ＳＲ246ａの精査時、埋設土器の南西部を検出しようと少しずつ掘り下げたが検出されなかったために、サブトレンチを設定した。この断面により、重複する土坑の存在が明らかとなった。確認面は遺物包含層(Ⅵa層)上面である。

［概要］ＳＲ246ａ、ＳＫＰ246ｂを切る。長径0.58ｍ、短径0.42ｍの小形の楕円形プランで、確認面からの深さは0.20ｍを測る。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。炭化物を若干含んでおり、ＳＫＰ286ｂよりも硬くしまっている。

［出土遺物］数点の土器破片を検出したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から晩期初頭以降に構築されたものと推察される。

ＳＫ369(第２分冊第17図、図版20)

［位置・検出状況］ＭＣ50グリッドの地山(Ⅶ層)上面で黒褐色土の円形プランを明瞭に確認した。

［概要］長径0.73ｍ、短径0.57ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.53ｍを測る。底面は開口部に比して狭く、壁はやや湾曲しながらも急激に立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。グライ化した粘質土層で、地山(Ⅶ層)由来である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第87図８～12)、三脚様石器(同13)が出土した。

［時期］出土遺物から、後期後葉と推察される。

ＳＫ370(第２分冊第17図、図版21)

［位置・検出状況］ＭＣ・ＭＤ50グリッドに位置する。地山(Ⅶ層)上面を精査中、ＭＤラインの土層観察ベルトにかかる黒褐色土の半円形プランを確認した。ＭＤラインベルトの基本土層と土坑の断面図を兼ねることとし、まずベルトより東側を精査した。土層断面からも、地山(Ⅶ層)上面より構築された遺構であることが確認された。

［概要］長径1.20m、短径0.93mのやや南北方向に扁平な円形を呈している。確認面からの深さは0.37mを測る。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。底面は地山の砂層(Ⅷb層)に達する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層には拳大以上の礫が集中していた。砂質が強く、地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の土層と思われる。

［出土遺物］南側の壁近く、２層上位よりほぼ完形の注口土器(第２分冊第88図１)が出土した。意図的に埋められたものと推察される。この他、土器破片(同２～４、８)、スクレイパー類(同５)、ＲＦ(同６・７)が出土した。第88図８はＳＫ395から出土したものと接合した。

［時期］遺物の出土状況から、土坑墓と判断した。時期は出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ371(第２分冊第38図、図版21)

［位置・検出状況］ＭＣ50グリッドで遺物包含層(Ⅵ層)の精査中に大型の礫が集中する箇所を確認。礫を残したまま掘り下げたところ、地山(Ⅶ層)上面で明瞭に遺構プランを検出した。礫はいずれも側面を下に向け、垂直方向に立った状態であった。掘り形プランを確認できたのは地山(Ⅶ層)上面であったが、本来はⅥ層中から構築された遺構であった可能性もある。

［概要］ＳＫＰ373を切る。長径0.65m、短径0.52mの円形を呈し、確認面からの深さは0.19mを測る。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］黒色土の単層である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第88図９～10)、有孔石製品(同11)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ372(第２分冊第17図)

［位置・検出状況］ＭＣ50グリッドの地山(Ⅶ層)上面で黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫＰ379・380に切られる。長径0.64m、短径0.49mのやや東西に長い楕円形を呈する。確認面から0.50mで底面であるが、さらに径22㎝程度の小さなピット状の掘り込みが確認された。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。

［出土遺物］僅かに土器破片(第２分冊第88図12)が出土した。

［時期］不明である。

ＳＫ375(第２分冊第17図、図版21)

［位置・検出状況］ＭＣ50グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒色土の円形プランを確認した。確認面には数点の礫が検出されており、意図的に配されたものの可能性がある。

［概要］ＳＫＰ473を切る。長径0.75m、短径0.70mの円形を呈する。確認面から底面にかけて拳大以上の礫が多く検出された。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体をなす２層は灰黄褐色土で地山(Ⅷ層)由来の砂や礫を多く含んでおり、人為的な埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第88図13)とＲＦ(同14)、フレイク１点が出土している。また、確

認面より検出された礫のうち１点は、表裏の一部分に磨滅面があり、石皿(同15)とした。

［時期］出土遺物から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ377(第２分冊第17図、図版21)

［位置・検出状況］ＭＣ50グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。完掘時に西側底面で重複する柱穴様ピット状の掘り込みを検出したが、覆土が失われた後に検出されたため、ＳＫ377に付属するものか、重複する遺構か判断できなかった。

［概要］長径0.80m、短径0.75mのほぼ円形を呈している。底面より、ピット状の掘り込みが検出された。確認面からの深さは底面までで0.25m、ピット状の掘り込みまでは0.47mである。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層中央部には拳大より一回り大きい礫が集中して検出された。２層には、地山(Ⅷ層)由来の砂礫を多量に含んでいた。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第89図１)、ＲＦ(同２)、石棒の破片(同３)、磨・凹石類(同４)が出土した。３の石棒は１層下部より出土し、ＳＫ521の１層出土の小破片と接合した。４は底面より検出されたピット内より出土した。

［時期］出土遺物は後期後葉の土器であるが、１点のみで断定しがたい。

ＳＫ385(第２分冊第17図、図版21)

［位置・検出状況］ＭＣ51グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の楕円形プランを検出した。

［概要］長径0.59m、短径0.43mの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、南西側では20㎝ほどさらに深く掘りこまれている。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土である。

［出土遺物］数点の土器破片(第２分冊第89図５・６)およびフレイク１点が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ387ａ・387ｂ・387ｃ(第２分冊第17図、図版22)

［位置・検出状況］ＭＣ51グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の不整形プランを確認した。当初は単独の遺構と捉え、土層観察ベルトを１箇所に設定して掘り進めたが、精査した結果３基の遺構であることが判明した。そこで、それぞれにａ～ｃのアルファベットを付して遺構名とした。

［概要］ＳＫ387ａは最も規模が大きく、長径1.43m、短径1.11mの円形を呈する。確認面からの深さは0.37mを測る。ＳＫ387ｂはａの西側に位置し、長径1.02m、短径0.75mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.51mで３基のうちもっとも深い。ＳＫ387ｃは長径0.69m、短径0.59mの円形を呈し、確認面からの深さは0.41mである。

［堆積土の特徴］土層観察ベルトの設定位置が中央を外れており記録が不十分であるが、調査時の所見から、いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の黒褐色土であったと推察される。

［出土遺物］検出状況に記したような経緯から、出土遺物は全て「ＳＫ387」という注記のもとに取り上げられており、どの土坑に属するものかは判別できない。本土坑群より、土器破片(第２分冊第89図７～11)、土製耳飾破片(同12)、石棒の破片(同13)、スクレイパー類(同14)、両極石器(同15)、磨・凹石類(同16)、石皿(同17)が出土した。石皿はＳＫ387ｂの覆土上位でプランのほぼ中央部より出土した。

［時期］出土遺物から後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ391（第２分冊第18図、図版22）

［位置・検出状況］ＭＣ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ392の南側に位置する。長径1.82m、短径1.78mの円形を呈しており、確認面からの深さは0.63mを測る。底面は平坦で、壁は中位で屈曲しながら緩やかに立ち上がる。底面からは人頭大の礫が２点検出されており、人為的に配されたものと推察される。

［堆積土の特徴］４層に分層した。２層は南東側壁際にのみ分布する。３層は非常に粘性の高い暗灰黄色粘質土層である。４層は炭化物を非常に多く含んだ黒色土で、拳大の礫を多量に含んでいた。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第90図１～４）、打製石斧（同５）、ＲＦ（同６）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ395（第２分冊第18図、図版23）

［位置・検出状況］ＭＤ49・50グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、一部重複するいくつかのプランを確認した。このうちの１基で、ＳＫ397の西側の単独プランをＳＫ395とした。

［概要］長径0.72m、短径0.65mのほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１・２層ともに地山由来と思われる砂を多く混入している。確認面からの深さは0.27mを測る。

［出土遺物］１層下位より深鉢の大型破片（第２分冊第88図８）が出土した。これは、ＳＫ370出土の土器破片と接合した。この他、後期中葉から後葉に属すると思われる土器破片を数点出土している。また、石製品（第２分冊第90図７）も出土した。

［時期］出土遺物より後期後葉と推察される。

ＳＫ396（第２分冊第18図、図版23）

［位置・検出状況］ＭＣ・ＭＤ50グリッドの地山（Ⅶ層）上面でＳＫ397・428を精査中に、これらの北側に黄褐色粘質土の円形プランと、これと重複するいくつかのプランを確認した。このうち前者をＳＫ396とした。

［概要］ＳＫ641を切り、ＳＫＰ643に切られる。長径0.85m、短径0.69mのほぼ円形を呈する。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ層）由来の黄褐色粘質土の単層であった。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から、晩期初頭以降に構築された可能性がある。

ＳＫ397（第２分冊第18図、図版23）

［位置・検出状況］ＭＤ49・50グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＳＲ10の東側に重複するいくつかのプランを確認した。このうちの１基をＳＫ397とした。

［概要］ＳＫ428、ＳＫＰ420・764に切られる。ＳＫ428によって東側を大きく削平されている。残存部で長径1.49mであり、ほぼ円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは0.50mを測る。底面は平坦であり、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。４層は砂層で東西ベルトにのみ確認できた。主体となる３層は粘性の高い黒褐色土で、この上下には粒子の細かな砂を含んだ砂質土が堆積する。また、各層より土器破片を中心に遺物が出土した。３層からの出土が顕著であるが、いずれも小破片である。底面

のほぼ中央に大型の礫４点が出土した。これは意図的に埋められたものと判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第90図８・９）、スクレイパー類（同10）、敲石（同11）が出土した。

［時期］底面に配された礫の存在などから、土坑墓であった可能性が高い。各遺構の重複関係および出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ400（第２分冊第19図、図版23）

［位置・検出状況］ＭＣ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面を精査中に、ＳＫ391の北側で約20㎝大の柔らかな凝灰岩を中心に大型の礫が密集した地点を確認した。礫を取り込むように黒褐色土の円形プランが検出され、当初は配石遺構として捉えていたが、精査の結果、配石を伴う土坑として捉えた。

［概要］長径0.91m、短径0.86mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.53mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。確認面の柔らかな凝灰岩は直立していた。

［堆積土の特徴］３層に分層した。全体的に地山（Ⅷ層）由来と思われる砂を含んでいる。

［出土遺物］土器の小破片が数点出土した。いずれも地文のみであるが、胎土等から晩期の資料である可能性が高い。

［時期］出土遺物から晩期の所産である可能性が高いが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ425（第２分冊第19図、図版23）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の不整形プランを確認した。南北方向で遺構が重複している事が予測されたため土層観察ベルトを設定して精査を進めた。このうち南側に位置する土坑をＳＫ425とした。

［概要］ＳＫ426を切る。長径1.83m、短径1.58mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.50mを測る。底面はやや湾曲し、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。１・２層は粘土質であるが、南西部壁際に堆積する３～５層は砂質土、あるいは砂層である。この砂はきめが細かく、Ⅷ層のものとは異なる。主な覆土は２層であり、遺物の多くはここから出土している。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第91図１）、スクレイパー類（同２・３）が出土した。

［時期］出土遺物から後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ426（第２分冊第19図）

［位置・検出状況］ＭＤ49・50グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土不整形プランを確認した。ＳＫ425の北側に位置し、これに切られているものをＳＫ426とした。

［概要］ＳＫ425、ＳＫＰ427に切られる。これにより遺構の南半分は大きく削平されている。また、北側はＳＫＰ427に切られる。残存部での長径は1.08mで、確認面からの深さは0.44mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも砂層で、ＳＫ425の４層に似ている。

［出土遺物］遺物はほとんど出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期初頭以前に構築された可能性がある。

ＳＫ428（第２分冊第18図、図版23）

［位置・検出状況］ＭＣ49・50、ＭＤ49・50グリッドに位置する。地山（Ⅶ層）上面を精査中に、ＭＤ50グリッド杭の直下にＳＫ397を切る黒褐色土の円形プランを確認した。確認面では大型の礫

５～６点が見える程度であったが、５㎝ほど掘り下げたところプラン全面に直径10～20㎝ほどの礫が充填されている状況が確認できた。この土坑をＳＫ428とした。

［概要］ＳＫ397を切る。長径1.25m、短径1.24mの円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は直線的にやや急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］色調はいずれも同様で黒褐色であったが、礫の配置や炭化物等の混入量から３層に分層した。１層は10～30㎝の大型の礫が一面に検出された。２層は同様の大型礫をプラン中央部にのみ集中させていた。３層は１・２層よりも小さな、拳大ほどの礫が多く混入していた。人為的な堆積と考えられる。

［出土遺物］２層中位で礫に挟まるようにして小型壺（第２分冊第91図４）が出土した。意図的に埋められたものと判断した。この他、ＲＦ（同５・６）、石皿（同７）、土製耳飾破片（同８）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ429（第２分冊第19図、図版24）

［位置・検出状況］ＭＣ・ＭＤ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土のプランを確認した。２基が重複しており、このうち西側に位置する土坑をＳＫ429とした。

［概要］ＳＫＰ430を切る。長径1.02m、短径0.93mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.42mを測る。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体は２層で、地山（Ⅶ層）由来と思われるオリーブ褐色土のブロックをまばらに含んでいる。２層には大型の礫が比較的まとまって検出された。

［出土遺物］土器破片がいくつか出土したが、大半は地文のみの小破片であった。無文地に爪形の刺突列をもつ土器の小破片がある。

［時期］出土遺物から後期後葉の可能性が考えられる。

ＳＫ432（第２分冊第14図、図版18）

［位置・検出状況］ＭＤ48・49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、地山の現れない箇所を確認した。遺構の存在が予測されたが、この周辺の土層はグライ化が著しく平面プランの検出が困難であった。そこで複数のサブトレンチを設定し、土層断面や底面の検出状況から、本遺構を検出した。

［概要］ＳＫ322に切られ、ＳＫ289を切る。長径1.25m、短径1.07mのほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁はやや外反しながら急に立ち上がる。確認面からの深さは0.58mを測る。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１・２層は黒褐色土であり、炭化物の混入が目立つ。

［出土遺物］遺物の出土はごく少なく、重複するＳＫ322とは対照的である。２個体分の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。この他、石斧未成品（第２分冊第91図９）と打製石斧破片（同10）、磨・凹石類（同11）が出土した。

［時期］出土遺物から後期後葉の可能性が考えられる。

ＳＫ433（第２分冊第15図、図版19・24）

［位置・検出状況］ＭＢ48グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、遺構確認のためにサブトレンチを入れたところ、重複する複数の遺構を確認した。このうち最も南側に位置するプランをＳＫ433とした。

［概要］ＳＫ337、ＳＲ339に切られる。長径0.94m、短径0.83mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦だが狭く、壁は急に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り

込んでおり、底面および壁面には地山礫が露出している。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１・２層は砂質を帯びた黒褐色土である。３層はプラン北西部にのみ分布し、三角堆積の様相を呈する。遺物は１層からの出土が顕著である。

［出土遺物］土偶（第２分冊第91図12）、土器破片（第92図１～４）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ434（第２分冊第19図、図版24）

［位置・検出状況］ＭＣ51グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］長径1.54m、短径1.20mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.29mを測る。底面から壁にかけて緩やかに湾曲し、断面は凸レンズ状を呈する。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。底面のほぼ中央に人頭大の礫５点が集中して検出された。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第92図５・６）が僅かに出土した。

［時期］出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ435（第２分冊第19図、図版24）

［位置・検出状況］ＭＣ53グリッドに位置する。旧河川に向かって緩やかに傾斜する地区で、遺物包含層（Ⅵ層）上面で暗灰黄色砂質土の円形プランを確認した。確認プランの平面図を作成し地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げて、再度プランを確認した。その後、土坑内の精査を実施した。

［概要］長径1.13m、短径0.99mのやや東西方向に長い円形を呈する。底面および壁は緩やかに傾斜し、断面は凸レンズ状を呈する。確認面からの深さは0.18mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層はきめの細かな砂層、２層は地山の砂礫層（Ⅷ層）由来の粗い砂を含んだ黒褐色土層である。

［出土遺物］土器破片が僅かに出土したが、地文のみの胴部破片で所属時期は特定出来なかった。

［時期］検出面から、晩期前葉以降に構築された可能性がある。

ＳＫ436（第２分冊第19図、図版24）

［位置・検出状況］ＭＣ52・53グリッドに位置する。旧河川流路に向かって緩やかに傾斜する地区で、遺物包含層（Ⅵ層）上面で黒褐色砂質土の円形プランを確認した。確認プランの平面図を作成した後、プラン内外ともに地山砂礫層（Ⅷ層）上面まで掘り下げ、再度プランを確認した。その後、土坑内の精査を実施した。

［概要］長径0.45m、短径0.39mの円形を呈する。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。規模が小さいが、断面形状から積極的に柱穴と評価できず、土坑とした。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山（Ⅷ層）由来の砂を多く含んでいる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］検出面から、晩期前葉以降に構築された可能性がある。

ＳＫ437（第２分冊第19図、図版24）

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ53グリッドでＶb層を掘り下げ、遺物包含層（Ⅵ層）上面に達したところ、灰色砂質土の円形プランを確認した。確認プランの平面図を作成した後、地山砂礫層（Ⅷ層）上面まで掘り下げ、土坑の精査に入った。Ⅵ層上面には人頭大の礫が集中しており、本土坑との関連があるものと推察された。

［概要］ＳＫ466ａを切る。ＳＫＰ466ｂとの新旧関係は不明である。長径1.42m、短径1.09mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.35mを測る。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘りこんでおり、底面および壁面には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］断面図を作成する直前に、土層観察ベルトが崩れてしまったため記録は部分的である。土層は３層に分層した。

［出土遺物］土器破片が僅かに出土したが、いずれも地文のみの胴部破片であり、所属時期の明確な資料は無かった。

［時期］重複関係および遺構確認面より、晩期前葉以降に構築された可能性が高い。

ＳＫ438(第２分冊第20図、図版25)

［位置・検出状況］ＭＣ52・53グリッドに位置する。旧河川跡に向かって傾斜する地区で、遺物包含層(Ⅵ層)上面で黄灰色土の半円状でやや不明瞭なプランを確認した。確認平面図を作成した後、地山砂礫層(Ⅷ層)上面まで掘り下げ、再度遺構プランを確認した。本報告書に掲載した平面・断面図等の記録は、地山(Ⅶ層)上面段階で作成したものである。

［概要］ＳＫ471・617を切る。長径1.09m、短径1.00mのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、壁はやや直線的に急に立ち上がる。遺構構築面は遺物包含層(Ⅵ層)上面である。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層はＳＫ617にまたがって堆積しており、上部のＶb層が遺構埋没後に生じた窪みに自然堆積したものである。２層は混入物の少ない細かな粒子の砂層である。

［出土遺物］底面より拳大よりやや大きな自然礫が集中して検出された。人為的に配置されたものと推察される。また、僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係および遺構確認面から、晩期前葉以降に構築された可能性が高い。

ＳＫ445(第２分冊第20図)

［位置・検出状況］ＭＤ51グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)中に、黒色土の不明瞭なプランを確認した。土層観察ベルトを設定して半截したところ、２基が重複している様子が確認できた。このうち、新しいものをＳＫ445、古いものをＳＫ446とした。

［概要］ＳＫ446を切る。長径1.01m、短径0.60mの楕円形を呈する。底面は狭く、壁はやや内湾しながら急に立ち上がる。確認面からの深さは0.40mで、地山の砂礫層(Ⅷ層)に達している。

［堆積土の特徴］２層に分層した。

［出土遺物］１層より鉢(第２分冊第92図７)が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ446(第２分冊第20図)

［位置・検出状況］ＭＤ51グリッドに位置する。ＳＫ445を半截したところ、２基の重複であることが判明した。このうち切られている方をＳＫ446とした。また、土層断面の観察から本土坑の構築面は地山(Ⅶ層)上面であると判断された。

［概要］ＳＫ445に切られる。長径0.84m、短径0.59mのほぼ円形を呈する。底面は狭く平坦であり、壁はやや直線的に急角度で立ち上がる。確認面からの深さは0.43mで、地山の砂礫層(Ⅷ層)まで達している。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層の地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の暗灰黄色土が主体であり、埋め戻

し土と判断した。

［出土遺物］注口土器の破片（第２分冊第92図８）が出土している。この他、数点の土器破片が出土したが、所属時期の明確なものはなかった。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ447（第２分冊第20図、図版25）

［位置・検出状況］ＭＤ50グリッドで地山の砂層（Ⅷ層）まで掘り下げたところ、黒褐色土の円形プランを検出した。遺構底面より柱穴状の掘り込みが検出されたが、本土坑に付属するものか、重複する別の遺構か、判断はできなかった。ただし確認面では、重複する柱穴のプランは検出されなかったことから、これらは同一の遺構、あるいはＳＫ447より古い柱穴のいずれかと考えられる。今回は同一の遺構として報告した。

［概要］長径0.66m、短径0.60mの円形プランである。確認面からの深さは0.61mを測る。この底面よりさらに深さ0.61mの柱穴状の掘り込みがある。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。グライ化した粘質土層に砂利が混入しており、地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の土層と推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第92図９）、土製耳飾の破片（同10）が出土した。

［時期］出土遺物より晩期に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ448（第２分冊第20図、図版25）

［位置・検出状況］ＭＤ50・51グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）中で、黒色土のプランを確認した。このグリッドはⅥ層の堆積が薄かったため、プランを明確に検出しようと作業を進めるうちに地山（Ⅷ層）上面に達していた。そのため平・断面図などの記録は地山（Ⅶ層）上面段階のものであるが、調査時の所見からは周辺の遺物包含層（Ⅵ層）の堆積後に構築された遺構と判断できる。

［概要］ＳＫ450に切られ、ＳＫ449を切る。長径1.28m、短径1.22mの円形を呈しており、確認面からの深さは0.50mを測る。底面はやや湾曲し、壁も緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であり、地山粘質土のブロックを覆土中位に混入する。人為的な一括堆積と判断した。

［出土遺物］覆土中位、遺構のほぼ中央部より石棒の破片（第２分冊第92図17）が出土した。両端部を欠損した資料であったが、ＳＫ520の２層中より出土した石棒端部破片と接合した。この他、土器破片（同11～13）、スクレイパー類（同14・16）、石錐（同15）、ＲＦ（第93図１）、石核（同２）が出土した。

［時期］出土遺物および検出面から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ449（第２分冊第20図、図版25）

［位置・検出状況］ＭＤ50・51グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）を掘り進み、地山（Ⅷ層）上面に達した段階で、ＳＫ448と重複するやや粘土質な黒褐色土のプランを確認した。

［概要］ＳＫ448に切られる。長径1.35m、短径1.33mの円形であり、平面規模はＳＫ448よりやや大きい。深さは確認面から0.44mを測る。

［堆積土の特徴］黒色土の単層である。地山（Ⅷ層）由来の砂礫を含んでおり、人為的埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］出土遺物は全てＳＫ448と一括して取り上げており、本土坑に伴う遺物は不明である。

［時期］ＳＫ448との重複関係および遺物の時期から、晩期初頭～前葉と推察される。

ＳＫ450（第２分冊第20図、図版25）

［位置・検出状況］ＭＤ50グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げ中、黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ448を切る。長径0.68m、短径0.51mのほぼ円形を呈する。底面に段を有し、深さは、確認面から最大で0.44mを測る。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山（Ⅷ層）由来の砂礫を微量含んでいる。

［出土遺物］微細な土器破片（第２分冊第93図３）が僅かに出土した。

［時期］出土遺物は後期後葉に属するが、遺構の構築面や周辺遺構との重複関係から、晩期前葉以降に構築されたものと判断した。

ＳＫ458（第２分冊第20図、図版26）

［位置・検出状況］ＭＤ50グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）の掘り下げ中に確認された。当初、２基の土坑の重複したものと想定されたが、精査の結果、１基の土坑であることが判明した。

［概要］ＳＫＰ657を切る。長径1.87m、短径1.56mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.47mを測る。構築面は遺物包含層（Ⅵ層）中である。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体は暗灰黄色土層で、遺構の東側壁際にのみオリーブ褐色の砂層が堆積する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第92図４）が出土した。

［時期］出土遺物から後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ460（第２分冊第20図、図版26）

［位置・検出状況］ＭＤ50グリッドの地山（Ⅶ層）上面で確認した。当初、２基の重複したものと想定したが、調査の結果、１基の土坑であることが判明した。

［概要］ＳＲ287に切られる。底面はほぼ平坦で、南西側壁は緩やかに、北東側壁は垂直に近い角度で立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.42mを測る。

［堆積土の特徴］褐灰色土の単層である。地山（Ⅷ層）由来の砂礫を含む。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第93図５・６）、ＲＦ（同７）が出土した。出土遺物は少ない。

［時期］出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ465（第２分冊第21図、図版26）

［位置・検出状況］ＭＣ53グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下の地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、黒色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ438・471の北側に位置する。長径1.18m、短径1.17mの円形を呈する。確認面からの深さは0.37mを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層は炭化物を含んだ黒褐色土で、地山（Ⅷ層）由来の砂礫を含んでいる。２・３層は地山粘質土（Ⅶ層）のブロックを若干含んだ砂層である。いずれも埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第93図８・９）が出土した。

［時期］出土遺物から、後期後葉と推察される。

ＳＫ466ａ（第２分冊第19図、図版26）

［位置・検出状況］ＭＣ53グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下の地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ437の西側に、これに切られる黒色土のプランを確認した。

［概要］ＳＫ437に切られる。２基のＳＫＰ（466ｂ、654）と重複する。ＳＫＰ654は土層断面で確認できたため、ＳＫ466ａがこれを切っている事が明確に確認された。ＳＫＰ466ｂについては、ＳＫ466ａをほぼ底面まで掘り下げた段階で認識した。そのため、新旧関係について確証が無いが、確認面から覆土上部で検出された礫の図と重ねて見ると、礫の位置とＳＫＰ466ｂの平面位置がほぼ符合する。このことからＳＫ446ａを切ってＳＫＰ446ｂが構築されていた可能性が高い。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山（Ⅷ層）由来の砂礫を含み、埋め戻し土と判断できる。また、１層には微小骨片が含まれいてた。動物遺存体のうち形状が判別できる１点については種の同定を行った（第５章第７節参照）。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第93図10～12）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ467（第２分冊第21図、図版27）

［位置・検出状況］ＭＣ53グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下の地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、暗灰黄色土の円形プランを確認した。

［概要］長径0.97ｍ、短径0.92ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.21ｍを測る。底面はほぼ平坦である。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山（Ⅷ層）由来と思われる砂を主体とした土層で、暗褐色土のブロックを含む。このことから、人為的な埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］僅かに土器破片（第２分冊第93図13～15）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ468（第２分冊第21図、図版27）

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ53、ＭＢ・ＭＣ54グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下の地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、北側を試掘調査時の４号トレンチに切られる半円形の黒色土プランを確認した。４号トレンチ南壁で確認したところ、土坑底面は４号トレンチより深くまで掘り込まれている事が判明した。そこでトレンチ底面で平面的プランの確認に努めたが困難であったため、南北方向にサブトレンチを設定し、土層や底面の検出状況からプランを把握した。

［概要］長径1.52ｍ、短径1.34ｍのほぼ円形を呈する。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.47ｍを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第93図16～20）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ469（第２分冊第21図、図版27）

［位置・検出状況］ＭＢ53グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）の掘り下げ中に、地山砂礫層（Ⅷ層）上面でプランの一部を確認し、ＳＫ469とした。その後、ＭＢ53グリッド全体で遺物包含層（Ⅵ層）の掘り

下げが完了し、全面的に地山面となったところ、ＳＫ469の南西側に重複する土坑のプランが検出された。これをＳＫ578とした。

［概要］ＳＫ578に切られる。残存部で長径1.15m、短径0.81mの不整円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、壁は湾曲しながら垂直気味に立ち上がる。地山の砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.34mである。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層には地山(Ⅶ層)由来の粘質土をブロック状に含む。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土しており、その中には後期中葉に属すると思われるものが含まれていた。

［時期］出土遺物から後期中葉の可能性が考えられる。

ＳＫ471(第２分冊第20図、図版25)

［位置・検出状況］ＭＣ53グリッドで遺物包含層(Ⅵ層)直下の地山砂礫層(Ⅷ層)上面で、ＳＫ438に切られる黒褐色土のプランを検出した。

［概要］ＳＫ438に切られる。長径0.65m、短径0.44mの楕円形を呈する。確認面からの深さは最大で0.33mを測る。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山(Ⅷ層)由来の砂礫を混入する。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ474(第２分冊第21図)

［位置・検出状況］ＭＣ50グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の楕円形プランを検出した。

［概要］長径1.08m、短径0.60mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.28mである。底面は平坦である。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層は地山(Ⅷ層)由来の砂を主体としており、埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］１層下部で人頭大の礫が集中して検出された。人為的に配置された可能性がある。その他の遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

ＳＫ478(第２分冊第14図、図版27)

［位置・検出状況］ＭＤ48・49グリッドで地山(Ⅶ層)上面まで掘り下げたところ、地山が検出されない部分を確認したが、この周辺の土層はグライ化が著しく、平面プランの検出が困難であった。そこで複数のサブトレンチを設定し、土層断面および底面の検出状況から、複数の土坑の存在を確認した。この内、ＳＫ289とＳＫ290の間に確認された土坑をＳＫ478とした。

［概要］ＳＫ289・290に切られる。北側を削平されているため全体の形状は不明だが、残存部で長径0.59mである。確認面からの深さは0.27mで周囲の土坑群の中では比較的浅い。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。炭化物を多量に含んでいる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から後期後葉と推察される。

ＳＫ479(第２分冊第21図、図版27)

［位置・検出状況］ＬＲ57グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、灰色粘質土層のプランを確認した。おおよそ円形を呈するが、北側は輪郭がはっきりしなかった。そこで明確なラインを描く南側プランの平面図を作成してからⅥa層を掘り下げ、Ⅵb層上面で再度遺構プランを確認した。本土坑北側のⅥa層より人面装飾付土器（第194図２）が出土している。位置を検討したところ、Ⅵ層上面で確認した輪郭のはっきりしない灰色粘質土層中より出土しており、本土坑に伴う遺物であった可能性もある。位置関係については第21図に示した。

［概要］本来は遺物包含層（Ⅵa層）上面から構築された可能性があるが、全体のプランが明確に把握できたのはⅥb層に達してからである。この段階での規模は長径1.45m、短径1.29mのほぼ円形で、深さは0.35mを測る。掘り込みは地山の砂礫層（Ⅷ層）に達していない。底面は平坦で、壁はやや湾曲しながら急角度で立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体は１層で、地山（Ⅶ層）由来の灰色粘質土が主体をなす。いずれも炭化物の混入が多い。また、１層には土器破片を中心とした遺物の混入が目立つ。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第94図１～７）、土製耳飾の破片（同８・９）、石匙（同11）、ＲＦ（同10）、打製石斧（同13）、磨・凹石類（同12）、石棒の破片（同14）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ481（第２分冊第11図、図版27）

［位置・検出状況］ＬＳ53・54、ＬＴ53・54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、拳大～20㎝大の礫が集中する地点を確認した。これを取り囲む鈍い黄褐色土の楕円形プランが検出されたため、これを土坑と認識し、ＳＫ481とした。

［概要］ＳＱ773の西に位置する。長径0.84m、短径0.69mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.36mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は地山（Ⅶ層）由来の黄褐色粘質土層で、数点の礫を除いて混入物も認められない。人為的に埋め戻されたものと判断した。

［出土遺物］小形の深鉢（第２分冊第94図15）、土器破片（同16）、RF（同17）、スクレイパー類（同18）が出土した。

［時期］出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ488（第２分冊第14図）

［位置・検出状況］ＭＤ49グリッドで地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げたところ、地山土の検出されない部分を確認したが、この周辺の土層はグライ化が著しく、平面プランの検出が困難であった。そこで複数のサブトレンチを設定し、土層断面および底面の検出状況から遺構確認を行った。その結果、複数の土坑を確認した。このうちＳＫ491とＳＫＰ489の間に位置するものをＳＫ488とした。

［概要］ＳＫ491、ＳＫＰ489に切られる。残存部で長径0.77m、短径0.45mで確認面からの深さは0.22mを測る。底面は緩やかに湾曲している。壁も緩やかに立ち上がり、断面形は凸レンズ状を呈する。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。小さな礫を多量に含んでいる。

［出土遺物］数点の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ490（第２分冊第21図、図版17・28）

［位置・検出状況］ＭＤ48・49グリッドに位置する。ＭＥ49グリッド杭付近の地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土のプランを確認した。土層観察ベルトを設定し精査を開始後に、重複する柱穴（ＳＫＰ495）の存在が明らかとなった。

［概要］ＳＫＰ495の南に位置し、これに切られる。また北西にはＳＫ519ａが接するが、新旧関係については確認できなかった。長径1.46m、短径1.05mの楕円形を呈する。地山の砂礫層（Ⅷ層）確認面からの深さは0.48mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は炭化物の混入が顕著である。

［出土遺物］北側の底面より、大きさ25cmほどの礫が１点出土した。また、覆土から土器破片を出土しており、この中にはⅤ群深鉢の破片が含まれていた。

［時期］出土遺物より、晩期初頭と推察される。

ＳＫ491（第２分冊第14図）

［位置・検出状況］ＭＤ49グリッドで地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げたところ、地山が検出されない箇所を確認したが、この周辺の土層はグライ化が著しく、平面プランの検出が困難であった。そこで複数のサブトレンチを設定し、土層断面および底面の検出状況から遺構確認を行った。その結果複数の土坑を確認した。このうち、ＳＫ289の北側に位置するものをＳＫ491とした。

［概要］ＳＫ289に切られ、南半部を失っている。また、北側ではＳＫ488を切っている。残存部での長径は0.89mであり、本来は円形を呈していたものと思われる。地山の砂礫層を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.37mを測る。

［堆積土の特徴］オリーブ黒色土の単層である。炭化物を多量混入する。

［出土遺物］スクレイパー類（第２分冊第94図19）、ＲＦ（同20）が出土した。土器破片も出土したがほとんどが地文のみで、数点のみ後期後葉の特徴を有する資料が数点含まれる（未掲載）。

［時期］出土遺物から、後期後葉と推察される。

ＳＫ492（第２分冊第22図、図版28）

［位置・検出状況］ＬＳ57グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、灰色粘質土の明瞭な円形プランを確認した。この段階では重複する遺構の存在には気付かなかったが、ＳＫ492の完掘後、壁面に重複する遺構（ＳＫ520・549）の覆土が確認された。そこで、周辺を再度確認したところ、不明瞭ながらもＳＫ520の平面プランを確認することが出来た。ＳＫ594については、地山（Ⅶ層）上面で初めて平面プランが検出されたため、ＳＫ492との構築面（構築時期）の違いは明確である。

［概要］ＳＫ520・549を切る。長径1.29m、短径1.27mの円形を呈する。地山（Ⅶ層）を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.33mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。主体を成す１層（灰色粘質土）は全体的に炭化物を含んでいる。２層には地山（Ⅷ層）由来と思われる砂を多く含む。３層は壁に沿うように堆積した黒褐色土である。

［出土遺物］確認面より、人頭大の礫が１点検出された。人為的に配置されたものである可能性がある。覆土中からは土器破片（第２分冊第95図１・２）、ＲＦ（同３）、スクレイパー類（同４）、磨製石斧（同５）が出土した。

［時期］重複関係および出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ493（第２分冊第22図、図版28）

［位置・検出状況］ＬＳ57グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、ＳＫ492の南約１ｍの地点で灰色粘質土層の明瞭な円形プランを確認した。

［概要］長径1.44m、短径1.23mでほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.29mを測り、地山（Ⅶ層）中に構築されている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ層）由来の灰色粘質土の単層である。ＳＫ492の１層に似る。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第95図６・７）を僅かに出土した。

［時期］出土土器は後期中葉であるが、遺構の埋め戻し時に混入したものと捉えられる。検出面から推察すると晩期前葉以降に構築された可能性が高い。

ＳＫ494（第２分冊第22図、図版28）

［位置・検出状況］ＬＲ56グリッドに位置する。ＳＲ274の検出段階で、北側にこれと重複するプランが確認された。その新旧関係については、埋設土器の欠損状況からも明確であったが、土層断面の記録を作成すべく南北方向にベルトを設定し、ＳＲ274の調査状況にあわせて精査を進めた。

［概要］ＳＲ274を切る。長径0.86m、短径0.71mのほぼ円形を呈する。確認面は遺物包含層（Ⅵa層）で、深さは0.29mを測る。底面は僅かに地山（Ⅶ層）を掘り込み、壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも炭化物や遺物の混入が少ない。

［出土遺物］ＲＦ（第２分冊第95図８）が出土した。土器破片も少量出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］検出面および重複関係から、晩期前葉以降に構築されたものと推察される。

ＳＫ496（第２分冊第22図、図版28）

［位置・検出状況］ＬＳ56グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、褐灰色粘質土の明瞭な円形プランを確認した。また、ＳＫ496の完掘時に壁面で重複する土坑（ＳＫ592）を確認した。ＳＫ592の平面プランはⅦ層まで掘り下げた段階で確認されており、両者の構築面（構築時期）の違いは明確である。

［概要］ＳＫ592を切る。長径1.80m、短径1.63mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.52mを測る。地山（Ⅶ層）中に構築されており、底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層は壁際に約10㎝ほど堆積しており、主体は地山（Ⅶ層）由来の褐灰色粘質土の１層である。１層には炭化物などの混入物も僅かであったため、遺構の検出は困難であった。人為的に埋め戻されたものと判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第95図９～12）、土器片円盤（同13）、石核（同14・15）、ＲＦ（同16）、礫器（第96図１）が出土した。

［時期］遺構確認面および出土遺物から、晩期中葉と推察される。

ＳＫ497（第２分冊第22図、図版28）

［位置・検出状況］ＬＳ56グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、オリーブ褐色粘質土の円形プランを確認した。

［概要］長径0.79m、短径0.68mで小型の円形を呈する。確認面からの深さは0.29mを測り、底面は地山（Ⅶ層）に達する。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］オリーブ褐色土の単層である。

［出土遺物］ごく僅かに土器破片（第２分冊第96図３・４）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ500（第２分冊第22図、図版29）

［位置・検出状況］ＭＢ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、大型の礫６点を中央に配した黒褐色土の円形プランを確認した。この礫は、意図的に配した可能性がある。

［概要］長径1.13m、短径1.03mのほぼ円形を呈する。地山の砂礫層（Ⅷ層）まで掘り込んでおり、確認面からの深さは0.33mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層中に大型の礫および土器破片が多く含まれる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第96図５～９）、スクレイパー類（同10）、石鏃（同11）が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ508（第２分冊第23図、図版29）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ55グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、暗褐色土の不整円形プランを確認した。プランがやや不明瞭なまま土層観察ベルトを設定して精査を開始したが、壁を把握することができなかった。そこで土層観察ベルトのみ掘り残し、プラン内外共に地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げ、再度遺構確認を行った。その結果、ＳＫ508の西側に重複する別の土坑が存在する事が分かった。なお、本土坑の平・断面図等の記録は地山（Ⅶ層）上面段階で作成したものである。

［概要］ＳＫ646、ＳＫＦ700を切る。長径2.04m、短径1.90mのほぼ円形を呈している。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.50mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。覆土上部の１・２層は、地山（Ⅶ層）由来の粘質土層であり、混入物も少ない。４層は炭化物が主体である。３層は地山（Ⅶ層）由来の粘質土ブロックが多く混入する。以上の特徴から、人為的に埋め戻されたものと判断した。またプラン中央の底面付近で、大型の礫が集中して検出された。意図的に配されたものであろう。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第97図１～６）、土製耳飾の破片（同７）、石製品（同８）、スクレイパー類（同９）、ＲＦ（同10・11）、石核（同12）、磨・凹石類（同13）、敲石（同14）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ509（第２分冊第23図、図版29）

［位置・検出状況］ＬＳ55グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、やや黒褐色粘質土の円形プランを確認した。輪郭がやや不明瞭ではあったが、中央にトレンチを設定して精査を開始したが、壁を把握する事ができなかった。そこで土層観察ベルトのみを残して、プランの内外共に地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げ、再度遺構プランを確認した。この段階でもプラン南側の輪郭が不明瞭であったため、サブトレンチを設定したところ、南側に重複する別の遺構（ＳＫＦ702）が存在する事が判明した。この土層断面を基に、全体の形状を把握する事ができた。尚、重複する２基のＳＲについては、当初はＳＫ509に伴う遺物と認識したが、地山（Ⅶ層）上面で再度遺構確認を行った段階で、ＳＫ509と重複する土器埋設遺構であることが判明した。

［概要］ＳＲ581に切られ、ＳＫＦ702、ＳＲ765を切る。遺物包含層（Ⅵ層）上面より構築されており、長径1.48m、短径1.09mの楕円形を呈する。底面はやや湾曲し、壁は丸みをもって緩やかに立ち上がる。地山（Ⅶ層）中に構築されており、確認面からの深さは0.55mを測る。

［堆積土の特徴］５層に分層した。２層には炭化物を多く含む。５層のみやや砂質を帯びる。いずれも地山(Ⅶ層)と遺物包含層(Ⅵ層)を由来とした、人為的な埋め戻し土と推察される。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第98図１～７)、ＲＦ(同８・９)、礫器(同10・11)、磨製石斧(同12)、石皿(同13)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ512(第２分冊第24図)

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ52グリッドに位置する。遺物包含層(Ⅵ層)の掘り下げ中に、ＳＲ503の東側に礫が集中する地点を確認した。これを取り込む褐灰色土のやや歪な円形プランをⅥb層で明瞭に確認した。

［概要］ＳＲ503、ＳＫ553に切られ、ＳＫ573を切る。長径1.23m、短径0.89mの歪な円形を呈する。地山の砂礫層を掘り込んでいるが、確認面からの深さは0.16mと浅い。

［堆積土の特徴］褐灰色土の単層である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第99図１～５)、打製石斧の柄部破片(同６)が出土した。

［時期］出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ514(第２分冊第24図、図版29)

［位置・検出状況］ＬＲ56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、暗灰黄色粘質土の円形プランを確認した。しかし、一部プランが不明瞭であったことから土層観察ベルトを設定し、その箇所のみを残してⅥ層の掘り下げを進めた。地山(Ⅶ層)上面で再度プランを確認し、精査を開始した。

［概要］長径1.53m、短径1.50mの円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しながら急に立ち上がる。地山(Ⅶ層)中に構築されており、確認面からの深さは0.57mを測る。

［堆積土の特徴］４層に分層した。２～４層は北東上部から南西下部方向へと傾斜して堆積している。いずれの土層も地山(Ⅶ層)由来の埋め戻し土と推察される。プランのほぼ中央、３層中位からは人頭大の礫がまとまって出土した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第99図７～11)、土製耳飾の破片(同12)、石匙(同13)、ＲＦ(同14・15)、石錐(同16・17)、石核(同18)、篦状石器(同19)、石棒の破片(同20)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ515(第２分冊第30図)

［位置・検出状況］ＭＡ52・53、ＭＢ52・53に位置する。遺物包含層(Ⅵ層)上面で、ＭＢラインに設定した土層観察ベルトにかかる半月状のプランを確認した。ＭＢラインベルトで周辺の基本層位と遺構土層を併せて観察できるよう、ベルトより西側を先行して掘り下げた。その後、ベルトを除去したところ、東側に重複する遺構が存在することが判明した。

［概要］ＳＫ597・757を切り、ＳＫ703・706に切られる。残存部で長径1.24mの円形を呈する。確認面からの深さは0.26mを測る。底面は緩やかに湾曲し、壁も緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土しており、中には晩期に属すと思われる薄手のものが含まれる。

［時期］重複関係から、晩期初頭から前葉に構築されたものと思われる。

ＳＫ516(第２分冊第24図、図版29)

［位置・検出状況］ＭＢ52・53グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面において砂質土の円形プランを確認した。確認平面図を作成した後、Ⅵ層を掘り下げ、地山（Ⅶ層）上面で再びプランを確認した。

［概要］ＳＫ518の北側に位置し、ＳＫ721を切る。長径1.26m、短径1.11mの円形を呈する。確認面からの深さは0.59mを測る。底面はやや湾曲する。底面ほぼ中央に径10㎝程度のピットが存在する。壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］暗褐色土の単層であった。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］検出面および重複関係から、晩期前葉以降に構築された可能性が高い。

ＳＫ517（第２分冊第24図、図版29）

［位置・検出状況］ＭＢ53グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、黒褐色砂質土の集中する地点を確認したが、プランが不明瞭だったため先にⅥ層の掘り下げを進め、地山（Ⅶ層）上面で重複する遺構プランを確認した。褐灰色の円形プランに切られる黒褐色土のプランをＳＫ517とした。

［概要］ＳＫ577の南東に位置し、これに切られる。長径1.14m、短径1.12mの円形を呈する。地山（Ⅶ～Ⅷb層）を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.55mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや開きながら緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多く含んでいる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第99図21）、スクレイパー類（同22）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ518（第２分冊第24図、図版30）

［位置・検出状況］ＭＢ52グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面において砂質土の円形プランを確認した。確認平面図を作成した後、Ⅵ層の掘り下げを行い、地山（Ⅷ層）上面で再びプランを確認した。

［概要］ＳＫ721を切る。南側の壁上部を調査区中央の撹乱に切られる。残存部で長径1.40mで、ほぼ円形を呈していたものと推察される。地山（Ⅷ層）を掘り込んでおり、確認面からの深さは0.65mを測る。

［堆積土の特徴］暗褐色土の単層である。底面より人頭大の礫が１点出土した。意図的に埋められたものと推察される。

［出土遺物］僅かに土器破片（第２分冊第99図23・24）が出土した。

［時期］出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ519ａ（第２分冊第24図、図版17・30）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ49グリッドの地山（Ⅶ層）上面で黒褐色土の円形プランを検出した。また、精査中に底面で重複するピットを確認し、これをＳＫＰ519ｂとした。

［概要］ＳＫ420の北西に隣接して位置する。ＳＫＰ519ｂを切る。長径0.94m、短径0.65mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.24mを測る。底面はやや湾曲し、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。主体を成す１層は酸化して一部錆色に変色している。２層は東側底面に、３層は北側のＳＫＰ519ｂ上部にのみ堆積している。

［出土遺物］３層下部より磨・凹石類（第２分冊第99図25）が出土した。また、数点の土器破片を出土しており、中には後期後葉の特徴を有する資料が含まれる。

［時期］重複関係および出土遺物より、後期後葉と推察される。

ＳＫ520（第２分冊第22図、図版30）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ57グリッドに位置する。ＳＫ492の精査完了時に、壁面に重複する遺構の覆土を確認した。壁で確認した状況を目安に周囲の土層をやや掘り下げたところ、遺物包含層（Ⅵ層）中に、黄灰色土の円形プランを検出した。

［概要］ＳＫ521の東、ＳＫ492の南西部に位置し、ＳＫ492に切られる。長径1.17m、短径1.04mで確認面からの深さは0.55mで、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達する。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しつつ垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。１層は粒子の細かな砂を含んでおり、埋め戻し後に生じた窪みにⅤb層が自然堆積したものと判断できる。２層以下は地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の粘土層であり、特に３・４層には炭化物を多く含んでいる。

［出土遺物］２層中より２個体の深鉢（第２分冊第100図１・２）が倒れた状態で出土した。また、同じく２層下部より石棒の先端部破片（第92図17）が出土しており、意図的に埋められたものと判断した。なお、石棒はＳＫ448より出土した破片と接合した。底面中央部からは拳大より大きな礫が６点まとまって出土しており、意図的に配されたものである可能性がある。この他、土器破片（第100図３～８）、スクレイパー類（同９・10）、石鏃未成品の可能性のある小形のＲＦ（同11）、その他石製品（同12）、磨製石斧（同13）、敲石（同14）、磨・凹石類（同15）が出土した。12の石製品は、柔らかいシルト岩の表裏に直線的な文様が描かれている。

［時期］遺物の出土状況などから、土坑墓と判断した。出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ521（第２分冊第25図、図版30）

［位置・検出状況］ＬＴ57グリッドに位置する。ＳＫ520のプラン確認の際、その西隣に同様の規模の灰黄褐色土の円形プランを検出した。確認面は遺物包含層（Ⅵ層）中である。

［概要］長径0.88m、短径0.86mの円形を呈する。確認面からの深さは0.39mを測る。底面はほぼ平坦で壁はやや湾曲しながら、垂直気味に立ち上がる。確認面から１層中に大型の礫が集中していた。意図的に配置されたものと推察される。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも炭化物粒を微量混入し、砂質を帯びる。地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］遺物の検出は僅かで、隣接するＳＫ520と対照的である。土器破片（第２分冊第101図１・２）と、敲石（同３）が出土した。敲石は底面より出土した。

［時期］出土遺物からは詳細な時期は不明であるが、検出面からは晩期前葉以降の可能性がある。

ＳＫ522（第２分冊第25図、図版31）

［位置・検出状況］ＬＴ57グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で灰色粘質土の円形プランを確認したが、降雨などの影響もありプランが不鮮明となった。時間的制約もあり、まずⅥ層の掘り下げを先行し、地山（Ⅶ層）上面で再度プランを検出した。灰色粘質土を中心に、灰オリーブ土がドーナツ状に取り囲む円形プランであった。また確認面で、プランのほぼ中央に人頭大の礫が１点配置されていた。意図的に配されたものと推察される。平・断面図等の記録は全て、Ⅶ層段階で作成した。

［概要］ＳＫ636を切る。長径1.47m、短径1.34mのほぼ円形で、地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.52

ｍを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１～３層は地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来のグライ化した砂や粘質土の層で、４層のみが炭化物粒を多く含み、様相が異なる。

［出土遺物］地山(Ⅶ層)上面でプランを確認した際に、ＳＫ636との境界付近で潰れた深鉢(第２分冊第101図４)が出土した。この他、土器破片(同５～７)、ＲＦ(同８)、石核(同９)が出土している。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ523(第２分冊第26図、図版31)

［位置・検出状況］ＬＴ56・57グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で灰色土の円形プランを検出した。なお、完掘後に壁面で重複するＳＫ635の覆土を確認した。両者の構築時期の差は明確である。

［概要］ＳＫ635を切る。長径1.26m、短径1.17mのほぼ円形を呈している。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面中央部には拳大～人頭大の礫が集中していた。人為的に配されたものと推察される。

［堆積土の特徴］灰色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第101図10～13)、スクレイパー類(同14)、打製石斧の柄部破片(同15)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ524(第２分冊第26図、図版31)

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で暗灰黄色土の円形プランを検出した。

［概要］長径1.00m、短径0.96mの円形を呈する。掘り込みは地山の砂層(Ⅷb層)に達しており、確認面からの深さは0.29mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷb層)由来の砂質土で、埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第101図16～18)、ＲＦ(同19・20)が出土した。

［時期］検出面から、晩期前葉以降に構築された可能性がある。

ＳＫ525ａ(第２分冊第25図、図版31・32)

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で灰オリーブ土の円形プランを確認した。３基の遺構が北東から南西方向に向かって数珠つながりに重複しており、このうちもっとも北側に位置するものをＳＫ525として精査を開始した。重複するＳＫ526との新旧関係を把握するために十字に土層観察ベルトを設定して精査を進めたところＳＫ526との新旧関係は把握できたものの、ＳＫ525の壁を明確に把握出来なかった。土層断面の記録を作成した後にベルトを除去し、壁を観察したところ、ＳＫ526以外に地山(Ⅶ層)上面より構築されたいくつかの遺構が重複している事が判明した。そこで、遺構周辺の遺物包含層を掘り下げたところ、地山(Ⅶ層)上面で重複するいくつかの遺構プランを検出した。同一の土坑と判断して掘り進めてい部分が別のフラスコ土坑と判明したため、当初確認した土坑をＳＫ525ａ、後に確認したものをＳＫＦ525ｂとした。

［概要］ＳＫ545・644、ＳＫＦ525ｂを切る。長径1.88m、短径1.71mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.69mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は南側は比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１層は粒子の細かな砂を含んだ砂質土であり、遺構上部に堆積していたⅤb層に似る。２・３層はグライ化した粘質土層で、地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の埋め戻し土と推察される。これに対し４層は炭化物を非常に多く含んだ黒褐色土であった。また、底面からは拳大よりも大きな礫が複数出土した。意図的に配されたものの可能性がある。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第102図１～５、11)、土器片円盤(同６)、石匙(同７)、スクレイパー類(同８)、磨・凹石類(同９・10)が出土した。

［時期］土層の堆積状況や礫の検出状況から、土坑墓の可能性がある。出土遺物は後期後葉が上限であるが、検出面および重複関係から晩期前葉以降に構築された可能性がある。

ＳＫ526(第２分冊第25図、図版32)

［位置・検出状況］ＬＴ55・56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で灰色砂の円形プランを確認した。３基の遺構が北東から南西方向に向かって数珠つながりに重複しており、このうち中央に位置し確認面に人頭大の礫がまとまって出土したプランをＳＫ526とした。

［概要］ＳＫ527・ＳＫＦ525ｂを切り、ＳＫ525ａに切られる。長径1.71m、短径1.66mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは0.55mを測る。底面は平坦で、壁は湾曲しながらも垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。下部層ほど粒子の細かな砂の混入が増加する傾向だが、底面直上の５層は混入物の認められない粘質土層であり、地山(Ⅶ層)由来と思われる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第102図12～14)、打製石斧の柄部破片(同15)、線刻礫(同16)、磨・凹石類(第103図１～４)が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ527(第２分冊第25図)

［位置・検出状況］ＬＴ55グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、ＳＫ526の南西部に重複する褐色土の円形プランを確認した。確認プランのほぼ中央には礫が１点出土しており、意図的に配された可能性がある。確認プランの平面図を作成した後、土層観察ベルトを設定して精査を進めたが、南側の壁が明確には把握できなかった。そこで、ＳＫ527の南側についてはⅥ層を掘り下げ、地山(Ⅶ層)上面で再度プラン確認を行ったところ、地山面から構築された別の遺構(ＳＫ705)が重複している事が明らかとなった。

［概要］ＳＫ705を切り、ＳＫ526に切られる。直径0.95mのほぼ円形で、確認面であるⅥ層上面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］４層に分層した。３層は地山(Ⅶ層)粘質土のブロックであり、人為堆積と思われる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第103図５～７)、ＲＦ(同８・９)、打製石斧(同10)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ528(第２分冊第23図)

［位置・検出状況］ＬＴ55グリッドで遺物包含層(Ⅵ層)上面で、灰色砂の円形プランとこれに連なる暗灰黄褐色砂の円形プランを確認した。前者をＳＫ528、後者をＳＫ531とした。

［概要］ＳＫ531・646、ＳＫＦ700を切る。長径1.41m、短径1.40mの円形を呈する。確認面からの深さは0.50mを測る。底面は平坦で壁はやや緩やかに立ち上がる。底面にはやや大型の礫が出土し

た。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１～３層は粒子の細かな砂質土層で、２・３層には地山(Ⅶ層)由来の粘質土ブロックを含み、人為的に埋め戻された土層と判断した。また、４層のみが黒褐色土であり他の土層と明確に区別される。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第104図１～４)、打製石斧(同５)、敲石(同６)、有孔石製品(同７)が出土した。

［時期］出土遺物は後期後葉であるが、検出面および重複関係から晩期初頭以降と推察される。

ＳＫ529(第２分冊第26図、図版32)

［位置・検出状況］ＬＴ55グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で黄灰色土の楕円形プランを検出した。確認面には拳大以上の礫が集中していた。長径方向で半截して土層を記録した後に完掘したが、完掘後にその壁面で重複する別の遺構の存在(ＳＫ699)が明らかとなった。

［概要］ＳＫ699を切る。長径1.52m、短径1.08mの南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは0.54mを測る。底面はやや凹凸があり、壁の立ち上がりは北側では垂直気味、南側ではやや緩やかである。

［堆積土の特徴］グライ化した砂質土が主体である。拳大の礫をやや多く混入する。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第104図８～15)、土偶の脚部(同16)、石錐(同17)、打製石斧(同18)が出土した。

［時期］確認面および出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ530(第２分冊第26図、図版32)

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ55グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、灰色砂質土の円形プランが３基連なった状態を確認した。このうち、最も南側のものをＳＫ530とした。確認面のプランほぼ中央で人頭大の礫３点を検出した。人為的に配された可能性がある。

［概要］ＳＫ543を切る。長径2.00m、短径1.41mの不整円形を呈し、確認面からの深さは0.43mを測る。底面はほぼ平坦で壁は北側では緩やかに、南側は比較的急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］地山(Ⅶ層)由来のきめの細かい砂質土で、同時に確認したＳＫ543・544に似る。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第105図１～６)、打製石斧(同７)、磨・凹石類(同８)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ531(第２分冊第23図、図版32)

［位置・検出状況］ＬＴ55グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、灰色砂の広がりとこれに連なる暗灰黄褐色砂の広がりを確認した。前者をＳＫ528、後者をＳＫ531とした。

［概要］ＳＫ528に切られ、プラン南東側を失っている。残存部で長径1.26m、短径1.06mで確認面からの深さは0.42mを測る。底面はやや湾曲し、壁はやや湾曲しながらも垂直気味に立ち上がる。底面には拳大よりやや大きい礫がまとまって検出された。

［堆積土の特徴］５層に分層した。いずれの層も地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の砂や粘質土をブロック状に含んでいる。また、３～５層は黒褐色土である。人為堆積と判断できる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第105図９・10)、石核(同11)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から後期後葉の可能性が考えられる。

ＳＫ533（第２分冊第26図、図版32）

［位置・検出状況］ＬＴ56グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、砂質土の円形プランを確認した。

［概要］長径0.63m、短径0.57mの円形を呈する。確認面からの深さは0.23mである。平面位置はＳＫ709、ＳＫＰ740と重複するが、ＳＫ533の底面はこれらの遺構構築面（Ⅶ層）に達していない。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも炭化物を微量含んだ褐色の砂質土である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第105図12～14）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ536（第２分冊第26図、図版32）

［位置・検出状況］ＬＴ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、砂質土の円形プランを確認した。土層観察ベルトを残して精査したところ、当初確認したプランより一回り外側に壁を検出した。当初確認されたプランは、遺構の中央部にのみ堆積した土で、この外側にドーナツ状に黒色土のプランが存在する事が後で分かった。完掘時に、壁面で重複する遺構（ＳＫ658）の存在を確認した。

［概要］ＳＫ658を切る。長径1.80m、短径1.59mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.63mを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。底面は地山の砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［堆積土の特徴］７層に分層した。地山（Ⅶ層）に似た色調の１～３層と、遺物を多く含んだ黒～黒褐色土層（４～７層）に分けられる。特に５層は遺物の混入が目立つ。堆積状況は人為的と思われる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第105図15～19）、土製耳飾（同20）、スクレイパー類（第106図１・４）、ＲＦ（同２・３）が出土した。

［時期］出土遺物は後期後葉～晩期初頭だが、検出面および重複関係から晩期初頭の可能性がある。

ＳＫ537（第２分冊第26図、図版33）

［位置・検出状況］ＬＴ54・55の遺物包含層（Ⅵ層）上面で、グライ化した砂質土の不整円形プランを確認し、これをＳＫ537とした。完掘時に壁面で重複する遺構（ＳＫ658）の存在を確認した。なお、土層断面の写真撮影を行った直後にベルトの一部が崩落したため、記録が一部欠落している。

［概要］ＳＫ658を切る。長径2.09m、短径1.50mで、開口部は北東－南西方向に細長い楕円形プランを呈するが、底面は円形である。確認面からの深さは0.56mを測る。底面は緩やかに湾曲し、壁も比較的緩やかに立ち上がる。底面ほぼ中央より約20㎝程度の大型の礫が出土した。意図的に配されたものと判断した。

［堆積土の特徴］５層に分層した。２層の地山（Ⅶ層）由来の灰色粘質土が主体をなす。

［出土遺物］土坑の規模に比べて出土遺物は少ない。土器破片（第２分冊第106図６～８）、打製石斧（同９）、磨・凹石類（同10）が出土した。打製石斧は遺構外出土の刃部破片と接合した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期初頭～前葉と推察される。

ＳＫ539（第２分冊第27図、図版33）

［位置・検出状況］ＭＡ56グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、にぶい黄褐色砂質土の円形プランを確認した。確認面には拳大よりやや大きい礫が数点検出された。

［概要］ＳＫ634の南に位置し、ＳＫ623を切る。長径1.22m、短径0.96mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.38mを測り、掘り込みは地山の砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ層）由来のにぶい黄褐色砂質土の単層である。

［出土遺物］確認面より深鉢の底部２点(第２分冊第106図11ｂ・14)が出土した。その他、覆土中より土器破片(同11ａ・12・13)、石錐(同15)が出土した。

［時期］確認面および出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ540(第２分冊第27図)

［位置・検出状況］ＭＡ56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、約60㎝×35㎝の柔らかい凝灰岩を中心とした、灰色粘質土の円形プランを確認した。プランが不鮮明だったことと、調査期間の制約から、礫を遺したまま地山(Ⅶ層)上面まで掘り下げ、再度プラン確認を行った。確認面では重複する遺構に気付かなかったが、覆土中や完掘後の底面に重複する４基の柱穴様ピットを検出した。

［概要］ＳＫ524に切られる。ＳＫＰ759・760・761・762と重複する。覆土中でプランを検出したＳＫＰ759・762についてはＳＫ540を切ったものと判断したが、他の２基についてはＳＫ540との新旧関係は不明である。長径1.45m、短径1.15mの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。地山(Ⅶ層)上面からの深さは0.29mを測る。

［堆積土の特徴］地山(Ⅶ層)由来のにぶい黄褐色砂質土の単層である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

ＳＫ541(第２分冊第27図、図版33)

［位置・検出状況］調査区西側の河川跡に向かって地形が緩やかに傾斜するＭＡ55・56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、褐色土の円形プランを確認した。さらに、本土坑の壁面で重複する土坑を確認した。これら遺構のプランはⅥ層上面では確認されず、後に地山(Ⅶ層)上面で検出した。

［概要］ＳＫ626・693を切る。長径1.14m、短径1.00mの円形を呈する。確認面からの深さは0.45mを測る。底面は狭く、緩やかに湾曲する。壁は急に立ち上がる。南西壁際には人頭大の礫が２点出土した。意図的に埋められたものと推察される。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山(Ⅶ層)由来で、炭化物などの混入物は少ない。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第107図１～３)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ543(第２分冊第26図、図版32)

［位置・検出状況］ＭＡ55グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、灰色砂質土の円形プランが３基連なった状態で確認された。このうち、中央のものをＳＫ543とした。

［概要］ＳＫ530・544に切られ、北側と南側の壁を失っている。残存部で長径1.15m、短径1.08mであり、ほぼ円形を呈したものと判断できる。確認面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１層はＳＫ530の１層と同じ土層である。２・３層は地山(Ⅶ層)に色調の似た砂質土、４層は地山(Ⅶ層)由来の粘質土層である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第107図４～６)、有孔石製品(同７)が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ544(第２分冊第26図、図版32)

［位置・検出状況］ＭＡ55・56グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)上面で、灰色砂質土の円形プランが３

基連なった状態で確認された。このうち、最も北に位置するものをＳＫ544とした。

［概要］ＳＫ543を切る。長径1.20m、短径1.11mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.33mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１・２層は地山に似た色調の砂質土、３層は地山(Ⅶ層)由来の粘質土層である。

［出土遺物］土器破片が僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］検出面および重複関係などから、晩期中葉以降と推察される。

ＳＫ545(第２分冊第37図、図版47)

［位置・検出状況］ＬＴ56グリッドに位置する。ＳＫ525ａの完掘時に西側壁面に覆土を確認した。地山(Ⅶ層)上面で平面プランが検出されたため土坑と認識した。当初は１基の土坑と認識していたが、土層断面から複数の土坑である事が判明したため、それぞれＳＫ709・727・728とした。

［概要］ＳＫ525ａに東側を、ＳＫ727・728に西側を切られ、一部が残存しているに過ぎない。ＳＫ709とも僅かに重複している可能性があるが、新旧関係は確認できなかった。残存部での長径は1.00mで平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは0.43mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。底面ほぼ中央より自然礫が１点出土している。意図的に埋められたものと推察される。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山(Ⅶ層)由来の粘質土層で、１層は炭化物を多く含む。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第107図８～12)が出土した。

［時期］遺構の重複関係および出土遺物より、後期後葉と推察される。

ＳＫ547(第２分冊第27図、図版33)

［位置・検出状況］ＬＳ57グリッドの地山(Ⅶ層)上面で暗褐色土の円形プランを検出した。

［概要］長径1.30m、短径1.18mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.30mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体は２層で、地山(Ⅶ層)由来のにぶい黄褐色粘質土である。炭化物を微量に含む。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第107図14)、ＲＦ(同13)が出土した。

［時期］検出面から、後期後葉の可能性が考えられる。

ＳＫ549(第２分冊第27図、図版34)

［位置・検出状況］ＬＳ57グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、ＳＫ492の北東側に黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ492に切られる。長径0.99m、短径0.84mの円形を呈し、確認面からの深さは0.23mを測る。底面から壁まで緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層は黒褐色土で炭化物を多く含むが２・３層は地山(Ⅶ層)由来の粘質土層で、炭化物の混入もほとんどない。そのため壁の検出はやや困難であった。

［出土遺物］石匙を転用した石錐(第２分冊第107図15)が出土した。この他、土器破片を数点出土しており、後期中葉・後期後葉の特徴を有する資料が数点含まれる。

［時期］検出面および出土遺物より後期後葉である可能性が考えられる。

ＳＫ551（第２分冊第27図、図版34）

［位置・検出状況］ＬＴ51・52グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色～暗オリーブ色のやや歪な楕円形のプランを確認した。黒褐色土が円形プランを描いていたため、別の遺構である可能性を考えて土層断面などを観察し、この黒褐色土のプランをＳＫ551とした。

［概要］ＳＫ552を切る。直径0.54mの円形を呈する。確認面からの深さは0.21mと浅く、ＳＫ552の覆土内で収まっている。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。砂を微量に混入した粘質土層で、比較的しまって硬い。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第107図16～19）、ＲＦ（同20・21）、打製石斧の刃部破片（同22）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ552（第２分冊第27図、図版34）

［位置・検出状況］ＬＴ51・52グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、暗オリーブ色のやや歪な楕円形のプランを確認した。

［概要］ＳＫ551に切られる。長径1.26m、短径0.67mの楕円形で、確認面からの深さは0.33mを測る。底面は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］暗オリーブ色土の単層である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第107図23・24）が出土した。

［時期］出土遺物および重複関係から、後期末～晩期初頭の可能性がある。

ＳＫ553（第２分冊第27図、図版34）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ52グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、拳大程度の礫が集中する地点を確認した。礫の周囲には褐色土の広がりが確認できたため、掘り込みの有無を確認するため、長軸方向に半截した。土層断面の観察により、２基の遺構が重複したものと確認できた。このうち、新しい遺構をＳＫ553とした。

［概要］ＳＫ512・554を切る。直径0.35mの円形を呈する。確認面からの深さは0.17mを測る。底面はやや湾曲し、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］灰黄褐色粘質土の単層である。地山（Ⅷ層）由来の砂粒を多く混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第107図25・26）が出土した。ＳＫ554出土の土器片と接合した。

［時期］重複関係から、晩期初頭以降と推察されるが、詳細は不明である。

ＳＫ554（第２分冊第27図、図版34）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ52グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、拳大程度の礫が集中する地点を確認した。礫の周囲には褐色土の広がりが確認できたため、掘り込みの有無を確認するため、長軸方向に半截した。土層断面より２基の遺構が重複したものと確認し、古い遺構をＳＫ553とした。

［概要］ＳＫ553に切られる。長径0.97m、短径0.47mの楕円形を呈しており、確認面からの深さは0.52mを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は砂礫混土層で、２層は黒褐色粘質土層である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第108図１～４）、ＲＦ（同５）、打製石斧（同６）が出土した。いずれも２層から出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ556（第２分冊第28図、図版34）

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドで、ＳＲ453の周囲を地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げたところ、これと重複する円形プランが検出された。これをＳＫ556とした。土層断面で確認したところ、本土坑の構築面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］ＳＲ453に切られる。長径1.23m、短径1.13mの円形を呈する。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.33mを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいるため、壁面には地山礫が露出している。

［堆積土の特徴］炭化物を多く含む黒色土の単層である。覆土中央より人頭大の礫３点が出土した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第108図７～16）、磨製石斧の破片（同17）が出土した。

［時期］遺構の重複関係および出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ558（第２分冊第29図、図版34）

［位置・検出状況］ＬＴ52・53グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）中で、拳大よりやや大きな礫が集中している地点を確認した。人為的な掘り込みを伴うか平面的に観察したが確認できなかったため、そのまま地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げたが、この段階で黒褐色土の円形プランを検出した。先に上部で検出した礫群に関連する土坑と思われ、本土坑は本来Ⅵ層中より構築されていた可能性がある。

［概要］地山（Ⅶ層）上面で長径0.87m、短径0.86mのほぼ円形で、深さは0.42mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや外反しながら垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層の黒褐色粘質土が主体で、地山（Ⅷ層）由来の砂粒が混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第108図18～20）、スクレイパー類（同21）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ560（第２分冊第28図、図版35）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で２基の重複する大型の円形プランと１基の小形の円形プランを確認した。このうち東側に位置する大型プランをＳＫ560とした。

［概要］ＳＫ562を切る。長径1.84m、短径1.65mの円形を呈する。確認面からの深さは0.67mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しながらも急角度に立ち上がる。底面中央には大型の礫が数点置かれていた。意図的に埋められたものと推察できる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層の地山（Ⅶ層）由来の暗オリーブ色粘質土が主体である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第108図22～28）、石匙（第109図１）、石核（同２）、石斧未成品（同３）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ561（第２分冊第28図）

［位置・検出状況］ＬＴ53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で２基の重複する大型の円形プランと１基の小形の円形プランを確認した。小形のプランをＳＫ561とした。

［概要］ＳＫ562を切る。長径0.65m、短径0.49mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.12mと浅い。底面はほぼ平坦で壁も比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］暗オリーブ褐色土の単層である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期前葉と推察される。

ＳＫ562（第２分冊第28図、図版35）

［位置・検出状況］ＬＴ53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で２基の重複する大型の円形プランと１基の小形の円形プランを確認した。このうち西側に位置する大型プランをＳＫ562とした。

［概要］ＳＫ560・561に切られる。長径2.47m、短径1.97mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.65mでＳＫ560よりやや深い。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。底面より人頭大の礫を数点検出した。意図的に埋められたものと推察される。

［堆積土の特徴］３層に分層した。２層の黒褐色土が主体である。２～３層には地山（Ⅷ層）由来の砂粒を多く含んでいる。

［出土遺物］小形の鉢（第２分冊第109図４）、土器破片（同５～11）、スクレイパー類（同12）、磨・凹石類（同13）、敲石（同14）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ573（第２分冊第24図）

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドの地山（Ⅶ層）上面でＳＫ512の北西側に重複するプランを検出した。

［概要］ＳＫ512、ＳＲ503に切られる。長径1.34m、短径1.00mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.21mを測る。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ層）由来の灰黄褐色粘質土の単層である。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ574（第２分冊第29図、図版35）

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ552の北に位置する。長径0.51m、短径0.40mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.80mと浅い。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ577（第２分冊第24図、図版35）

［位置・検出状況］ＭＢ53グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で砂層が集中する地点を確認した。時間的制約があったため、先にⅥ層を掘り下げ、地山（Ⅶ層）上面で再度プラン確認を実施し重複する遺構プランを確認した。黒褐色土のプランを切る、褐灰色の円形プランをＳＫ577とした。平断面図などの記録は地山上面で作成したが、本来の遺構構築面はⅥ層上面である。

［概要］ＳＫ517を切る。長径1.16m、短径1.04mの円形を呈する。地山（Ⅶ層）上面からの深さは最大で0.29mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山（Ⅷ層）由来の砂粒を多く含んでいる。

［出土遺物］底面東側に人頭大の礫が３点集中して検出された。意図的に埋められたものと推察さ

れる。数点の土器破片が出土しており、うち１点は後期末から晩期初頭の特徴を有している。

［時期］検出面および重複関係から、晩期前葉～中葉と推察される。

ＳＫ578（第２分冊第21図、図版35）

［位置・検出状況］ＭＢ53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＳＫ469の南側に重複する灰色砂質土の円形プランを確認した。確認面ほぼ中央から人頭大の礫を数点検出した。

［概要］ＳＫ469を切る。長径1.42m、短径1.18mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.41mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや湾曲しながらも急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］灰色砂質土の単層である。

［出土遺物］土器底部破片（第２分冊第109図15）と、数点の土器破片が出土した。無文でやや丸みを帯びた注口土器の破片が含まれる。

［時期］出土遺物より、後期末から晩期初頭と推察される。

ＳＫ580（第２分冊第12図、図版35）

［位置・検出状況］ＭＣ47・48グリッドに位置する。48ラインに設定した土層観察ベルトを精査中、地山（Ⅶ層）上面でこのベルトにかかる黒褐色土のプランを確認した。そこで、基本土層と土坑の断面を併せて観察すべく48ラインベルトより南側の部分を先行して掘り下げた。その後、ベルトを除去したところ、重複する遺構（ＳＫ681・682）の存在が明らかとなった。

［概要］ＳＫ681・682に切られる。残存部分で長径1.67m、短径1.28mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.52mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は南側にやや緩やかに立ち上がる。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘りこんで構築されており、底面および壁には地山礫が露出する。

［堆積土の特徴］３層に分層した。南西部底面に堆積する３層は地山（Ⅶ層）由来の黄褐色粘質土層で、粘性が非常に高い。１～２層は炭化物を多く混入している。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第110図１～４）、スクレイパー類（同５）、打製石斧（同６）、磨・凹石類（同７）が出土した。

［時期］出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＫ583（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＴ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、ほぼ同規模の円形プランを３基検出した。このうち最も西側に位置するものをＳＫ583とした。完掘後に、その壁面で重複する遺構（ＳＫ658）を確認した。

［概要］ＳＫ658を切る。長径0.85m、短径0.83mの円形を呈する。確認面からの深さは0.27mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層のほぼ中央部から大きめの礫がまとまって検出された。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第110図８～10）、土器片円盤（同11）、ＲＦ（同12）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ584（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＴ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、ほぼ同規模の円形プランを３基検出した。このうち中央に位置するものをＳＫ584とした。

［概要］長径1.07m、短径1.00mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.60mを測る。底面はほ

ぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。２層下位および３層上位より10㎝程度の柔らかい凝灰岩が検出されている。

［堆積土の特徴］３層に分層した。２層には焼土ブロックが混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第110図13～16）、石錐（同17）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ585（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＴ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、ほぼ同規模の円形プランを３基検出した。このうち最も東に位置するものをＳＫ585とした。確認面で人頭大の礫を１点検出した。

［概要］長径0.75m、短径0.72mの円形を呈する。確認面からの深さは0.23mを測る。底面はやや湾曲し壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ層）由来の灰オリーブ土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第110図18～20）、スクレイパー類（同21）、剥離痕のある赤玉石（同22）が出土した。22はベンガラの原料としていた可能性がある。

［時期］検出面および出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ589（第２分冊第29・36図、図版36）

［位置・検出状況］ＭＡ53グリッドに位置する。４号トレンチ内を精査中に、トレンチ底面および壁面で土坑のプランを確認し、この部分についてＳＫ231として調査した。その後、ＭＡ53グリッドで地山（Ⅶ層）上面で、４号トレンチに切られる半円形のプランを確認した。この段階ではＳＫ231と同一である事に気付かず、あらたにＳＫ589という名称を与えて調査した。後に同一の遺構であった事が判明したため、統一してＳＫ589とした。

［概要］４号トレンチにより北側の壁面上部を失っている。残存値では長径1.33m、短径1.21mで楕円形を呈している。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.51mを測る。底面は緩やかに湾曲し、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１・２層は黒褐色粘質土層で炭化物を多量に混入する。３層は地山（Ⅶ層）由来の灰色粘質土層であり、炭化物などの混入は少ない。底面からは30㎝を超える大型の礫が出土した。人為的な出土状況と推察される。

［出土遺物］３層中より深鉢（第２分冊第111図９）の破片が土層に沿った状態で並んで出土した。この他にも比較的大型の土器破片（同１～８）、スクレイパー類（同10）が出土した。

［時期］遺物の出土状況などから土坑墓である可能性が高い。検出面および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ592（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＳ56グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒色土の円形プランを検出した。非常に明瞭なプランであった。この段階では、重複する遺構の存在は確認できなかったが、ＳＫ593の精査を進めたところ、重複関係が認められた。

［概要］ＳＫ593を切る。またＳＫ496の南西に位置しこれと近接するが、構築面も異なり直接の重複関係は無かった。平面形は直径0.83mの円形を呈している。確認面からの深さは0.26mを測る。底面はやや湾曲し壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第112図１・２）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から、後期後葉と推察される。

ＳＫ593（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＳ56グリッドの地山（Ⅶ層）上面でＳＫ592の南側にしみ状の黒色土プランが確認された。サブトレンチによって検出を試みたが、黒色土より下位に検出された覆土が地山に酷似しており、なかなか検出できなかった。そこで、地山（Ⅶ層）面をやや削ったところ、この南側に重複する円形土坑（ＳＫ704）のプランが検出された。このＳＫ704の調査を進めたところ、その壁面でＳＫ593の覆土と地山の違いを明確に把握することができた。

［概要］プラン確認状況など調査担当者の所見から、ＳＫ704に切られていたものと判断した。ＳＫ592にも切られる。平面形は長径1.33m、短径1.22mの円形を呈する。確認面からの深さは0.56mを測り、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達する。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層は黒色土であるが、２層以下は地山（Ⅶ層）由来のグライ化粘質土層である。炭化物等の混入物も認められない。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第112図３～５）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から後期中葉～後葉の可能性がある。

ＳＫ594（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ56、ＬＳ・ＬＴ57グリッドにまたがって位置する。ＬＴ57グリッド杭付近で、地山（Ⅶ層）上面でオリーブ黒色粘質土層が円形に広がるプランとこれに重複する同じくオリーブ黒色土の円形プランが確認された。杭の真下に存在するものをＳＫ594とした。

［概要］ＳＫ633を切る。長径1.14m、短径0.69mの楕円形を呈する。底面にはやや段が付く。確認面からの深さは0.49mであり、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。１層はプラン中央に円形に確認されており、地山由来と推察される暗灰黄色粘質土である。底面にはうっすらとオリーブ黒色粘質土が堆積している。植物質をやや含んでいた。土層の状況から人為的堆積と推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第112図６～８）、磨・凹石類（同９・10）が出土した。

［時期］土層の堆積状況から、土坑墓の可能性がある。時期は、検出面および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ597（第２分冊第30図、図版37）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ52グリッドに位置する。ＳＲ513の精査中にプランを確認した。ＳＲ513・688がより上位面から構築されていたので、ＳＲの調査を先行し、これが終了してからすこしずつ周囲を掘り下げたところ、地山（Ⅶ層）上面で大型の円形プランとこれに重複する複数の遺構プランを検出した。

［概要］ＳＲ513・688、ＳＫ515・706に切られる。ＳＫ605・757を切る。残存部で長径1.64m、短径1.60mの円形を呈する。確認面である地山（Ⅶ層）面からの深さは0.60mを測る。底面はほぼ平坦で壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山（Ⅷ層）由来の砂粒を多く含む。

［出土遺物］南側の底面付近より、底部を中央に向けて外側に倒れた状態の深鉢（第２分冊第112図11）が出土した。この他、比較的大型の土器破片（同12～14）、打製石斧（同15・16）が出土した。意図的に埋められたものと推察される。

［時期］遺物の出土状況などから、土坑墓と判断した。時期は出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ598（第２分冊第31図、図版37）

［位置・検出状況］ＭＡ52・53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、大型のプランを検出した。当初は複数の土坑が重複したものと考え、それぞれに名称をつけて調査を開始したが、調査の結果ＳＫ587・598・608は１基の土坑であったため、これをまとめてＳＫ598とした。

［概要］ＳＫ609に切られ、プラン北側を失っている。残存部で長径2.01m、短径1.42mであり、本来はほぼ円形を呈したものと思われる。確認面からの深さは0.63mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。底面直上の５層は特に炭化物を多く含む。また、全体的に地山の砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を混入する。

［出土遺物］１層中位から下位にかけて人頭大の礫と土器（第２分冊第113図１・２、第114図１）がまとまって出土した。意図的に埋められたものと判断した。この他にも土器破片（第113図３～６、第114図２～９）、石錐（同10・11）が出土した。

［時期］遺物の出土状況などから、土坑墓であると判断した。時期は重複関係や出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ600（第２分冊第31図、図版37）

［位置・検出状況］ＬＲ57グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、灰色粘質土の円形プランが確認された。時間的制約もあったため、確認プランの平面図を記録した後、プラン内外とも併せて掘り下げ、地山（Ⅶ層）上面で再びプランを検出し、遺構の精査を開始した。そのため、平面図はⅥ層段階の、断面図はⅦ層以下の部分を記録している。

［概要］平面プランは直径1.07mのほぼ円形である。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.31mであり、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達する。底面は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。１層は灰オリーブ色粘質土、２・３層はシルト～粘質土層であり、いずれも地山（Ⅶ層）由来である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第115図１・２）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から、晩期中葉と推察される。

ＳＫ605（第２分冊第30図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＡ52グリッドの地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＭＢラインに設定した土層観察ベルトにかかり半円形を呈しているプランを検出した。そこで、基本土層図と遺構の断面図を併せて作成するため、ベルト外に出ている部分の調査を先行して実施した。この断面の観察で別の遺構（ＳＫ706）に切られていることが判明した。その後、土層観察ベルトを除去して地山（Ⅶ層）上面でプランを確認したところ、ＳＫ597とも重複している事が判明した。

［概要］ＳＫ597・706に切られ、西側を失っている。残存部で長径0.81mを測り、底面や壁の形状などから本来はほぼ円形を呈したものと思われる。検出面である地山（Ⅶ層）面からの深さは0.24m

を測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。地山の砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を全体に含んでいる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第115図３）が出土した。

［時期］重複関係および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ606（第２分冊第31図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＡ52グリッドの地山砂礫層（Ⅷ層）上面で黒褐色土の円形プランを検出した。

［概要］直径1.03ｍの円形を呈する。確認面からの深さは0.27ｍと浅い。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。覆土中位に拳大以上の礫が充填されていた（東側半分のみ礫の実測図を作成したが、本来は全面に充填）。人為的な堆積と推察される。

［出土遺物］充填された礫の中に１点、石皿（第２分冊第115図７）が含まれていた。表裏面とも磨耗してやや平滑化している。また、裏面中央には敲打痕も認められた。この他に土器破片（同４～６）が出土している。

［時期］堆積土の状況から、土坑墓であった可能性もある。出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ609（第２分冊第31図、図版37）

［位置・検出状況］ＭＡ52・53グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）を若干残した段階で黒褐色土の円形プランが確認された。周囲に重複する遺構の存在が見て取れたため、これを把握すべく周囲をやや削って確認したところ重複する遺構のプランを検出した。そこで、新旧関係を把握すべく複数の土層観察ベルトやサブトレンチを設定して調査した。

［概要］ＳＫ598・610を切る。長径1.80ｍ、短径1.45ｍのほぼ円形を呈する。底面は径0.70ｍ程度の円形でほぼ平坦である。壁は比較的緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.45ｍを測り、掘り込みは地山砂礫層（Ⅷ層）に達する。

［堆積土の特徴］４層に分層した。いずれの土層も地山（Ⅷ層）由来の砂粒を含んでいる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第115図８～10）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ610（第２分冊第31図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＡ53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＳＫ609と重複する複数の遺構を検出した。サブトレンチを設定して詳細を確認し、ＳＫ609の北側で重複するプランをＳＫ610とした。

［概要］プランの南側はＳＫ609に切られているが、残存部での長径は1.53ｍで、底面および壁の様子から本来はほぼ円形を呈していたものと推察される。確認面からの深さは0.59ｍで地山砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層下位を中心に人頭大の礫が複数検出されている。

［出土遺物］内部に小形のフレイク・チップ26点（第２分冊第115図12～23、巻頭図版７）が入った、鉢（同11）が出土した。フレイク類はいずれも打点が確認でき、肉眼の観察では４個体程度の母岩から剥離されたものと思われる。この他、土器破片（第116図１～４）、石匙（同５）が出土した。４は深鉢の底部破片で、内面中央部に敲打痕が認められるほか、薄くアスファルトが付着している。

［時期］確認面および出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ613（第２分冊第32図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ47、ＭＥ48グリッドに位置する。48ラインベルト北壁および周辺グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＳＫ281の南西側にベルトにかかる黒褐色土のプランを確認した。ＭＢラインベルトで土層断面を確認したところ、人為的な掘り込みと判断されたため土坑とした。

［概要］長径1.43m、短径1.10mでやや楕円形を呈する。確認面からの深さは0.27mを測り、地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいる。底面は平坦で、壁はやや湾曲しながら緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多く含んでいる。

［出土遺物］ＲＦが１点（第２分冊第116図６）出土した。土器破片も出土しており、中には後期末葉から晩期初頭の特徴を有する資料が数点含まれる。

［時期］出土遺物から、後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ614（第２分冊第10・32図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）上面で、にぶい黄褐色土の円形プランが２つ重複して確認された。このうち南側をＳＫ614とし、北側をＳＫ615とした。土層観察ベルトを設定して調査を開始したが、当初確認されたプランの位置に壁が明瞭には確認されず、周辺に重複する遺構がさらに存在する事が予測されたため、地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げてから再度、遺構確認を実施した。

［概要］ＳＫ615に切られる。長径1.50m、短径1.33mの円形を呈する。確認面からの深さは0.65mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］５層に分層した。底面直上の５層は黒褐色土だが、１～４層はいずれも炭化物等の混入の少ない、砂質土層であり、地山（Ⅶ層）由来と推察される。１層はＳＫ615の１層と同じ土層である。埋没の時期が近接していた可能性が高い。なお、１～４層いずれも遺物を包含するが、特に２層に顕著であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第116図７～９）、スクレイパー類（同10）、磨製石斧の破片（同11）、敲石（同12）、磨・凹石類（同13）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ615（第２分冊第10・32図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＡ54・55グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、にぶい黄褐色土の円形プランが２つ重複して確認された。北側をＳＫ615、南側をＳＫ614とした。土層観察ベルトを設定して調査を始めたが、当初確認されたプランの位置に壁が確認されず、周辺に重複する遺構がさらに存在する事が予測されたため、周辺を地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げてから再度、遺構確認を実施した。

［概要］ＳＫ614、647を切る長径2.07m、短径1.90mの不整円形を呈する。底面はやや南側にゆるく窪んでおり、壁は湾曲しながら比較的緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.55mを測り、底面は地山砂礫層（Ⅷ層）に達する。遺構底面および壁面の形状、土層断面の状況から一度埋まった土坑を再度掘り返すような行為があったと推察される。

［堆積土の特徴］10層に分層した。全体的に地山（Ⅶ層）由来の粒子の細かな砂を含んでいる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第116図14・15）、土製耳飾の破片（同16）、石錐（同17）、ＲＦ（同18）、磨・凹石類（同19）が出土した。

［時期］確認面や重複する遺構の時期、出土遺物などから晩期前葉以降と推察される。

ＳＫ616（第２分冊第10図、図版38）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、ＳＫ221、ＳＫ222ｂ、ＳＫ614、ＳＫ630に囲まれる位置にオリーブ褐色土のプランを確認した。

［概要］ＳＫ614の東に位置する。ＳＫ729に切られ、ＳＫ711・734を切る。長径0.65m、短径0.50mの円形を呈する。確認面からの深さは0.15mと浅い。底面はほぼ平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は地山（Ⅶ層）由来の粘土質、２層は地山の粘質土ブロックを含んだ砂質土層である。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から、晩期初頭以降と推察される。

ＳＫ617（第２分冊第20図、図版26・38）

［位置・検出状況］ＭＣ52・53グリッドに位置する。調査区中央部を東西に横断する撹乱を除去したところ、壁面に遺構プランが確認された。地山（Ⅶ層）上面より構築された土坑と推察される。

［概要］遺構の南側を撹乱に、北側の一部をＳＫ438に切られる。残存部で長径1.04m、短径0.65mであり、底面の形状などから本来はほぼ円形のプランと判断できる。深さは最大で0.43mを測る。

［堆積土の特徴］３層に分層した。３層は炭化物を全体に多く含んだ黒色土である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第116図20～22）が出土した。出土遺物は少ない。

［時期］検出面および出土遺物から、晩期と推察されるが詳細な時期は不明である。

ＳＫ621（第２分冊第32図）

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に近い斜面地で地山（Ⅶ層）上面を精査中、粘性の強い粘質土の半円状プランを確認した。サブトレンチを設定したところ、西側を除いては壁の立ち上がりが明瞭に確認されたためこれを土坑と判断した。

［概要］西側を旧河川によって削平されている。残存部で長径1.04mであり、確認面からの深さは最大で0.16mである。地山の砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいる。

［堆積土の特徴］暗灰黄色土の単層であり、地山の砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を含む。

［出土遺物］僅かに土器破片（第２分冊第116図23・24）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ623（第２分冊第27図、図版38・39）

［位置・検出状況］ＭＡ56グリッドに位置する。ＳＫ539の完掘時、壁面に重複する遺構の覆土を確認した。周囲を地山（Ⅶ層）上面まで掘り下げたところＳＫ539に切られる円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ539に切られる。残存部で長径1.05m、短径1.02mであり、ほぼ円形を呈したものと分かる。確認面からの深さは0.49mを測り、地山砂礫層（Ⅷ層）に達する。底面はほぼ平坦で壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも炭化物を多く含む地山（Ⅶ層）由来の黄褐色土層である。

［出土遺物］確認面より浅鉢（第２分冊第117図１）が潰れた状態で検出された。この他、覆土中より土器破片（同２～４）、石匙（同７）、ＲＦ（同５・６・８）、石皿・砥石類（同９）が出土した。

［時期］遺物の出土状況などから土坑墓であった可能性がある。確認面や重複関係および出土遺物から、後期中葉と推察される。

ＳＫ624（第２分冊第33図、図版39）

［位置・検出状況］ＭＡ56グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に近い傾斜地で地山（Ⅶ層）上面を精査したところ、炭化物を多く含んだ暗灰黄色土が集中する地点を確認した。不明瞭ではあるがほぼ円形にまとまっていたため、サブトレンチを設定したところ、壁の立ち上がりが明瞭に確認されたためこれを土坑と判断した。

［概要］長径0.66m、短径0.55mのほぼ円形を呈する。底面は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは0.26mを測る。

［堆積土の特徴］炭化物や砂を多く含んだ地山（Ⅶ層）由来の暗灰黄色土の単層である。

［出土遺物］底面よりやや高い位置で大型の土器破片（第２分冊第117図12）が内面を上に向けて重ねられた状態で出土した。意図的に埋められたものと推察される。この他、土器破片（同10・11・13）、石核（同14）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物より後期中葉と推察される。

ＳＫ626（第２分冊第33図、図版39）

［位置・検出状況］ＭＡ56グリッドに位置する。ＳＫ541の調査を終了した後、周辺の包含層を除去したところ地山（Ⅶ層）上面でＳＫ541に重複する黒褐色土の円形プランを確認した。

［概要］ＳＫ541に切られる。長径0.92m、短径0.85mのほぼ円形を呈する。底面は緩やかに湾曲し、壁は急角度で立ち上がる。Ⅷ（砂）層を掘りこんでおり、確認面からの深さは0.35mである。

［堆積土の特徴］３層に分層した。覆土はいずれも地山（Ⅶ層）由来の粘土質である。底面付近より人頭大の礫が集中して検出された。

［出土遺物］２層上面より、２個体分の深鉢（第２分冊第118図１・５）の破片が出土した。意図的に埋められたものと推察される。この他、土器破片（同２～４）、ＲＦ（同６）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ630（第２分冊第34図）

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドに位置する。試掘時の４号トレンチ北壁を精査中に、やや土層が不自然に落ち込む部分を確認した。その後、ＭＢ54グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）上面を精査中に、黄褐色土の円形プランを検出した。

［概要］ＳＫ653・712・755を切る。長径1.21m、短径1.03mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.56mで、地山砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでいる。底面は平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は粘土質、２層はやや砂質を帯びる。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］確認面および重複関係から、晩期中葉の可能性が高い。

ＳＫ633（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ57グリッドに位置する。ＬＴ57グリッド杭付近で、地山（Ⅶ層）上面でオリーブ黒色粘質土層の円形プランとこれに重複する同じくオリーブ黒色土の円形プランが確認された。杭の真下に存在する方をＳＫ594とし、もう一方をＳＫ633とした。確認面では新旧関係が

不明瞭であったため、土層断面で判断すべく併せて半截した。

［概要］ＳＫ594に切られ南側を一部失っているが、底面および壁の形状から円形を呈していたものと推察される。残存部分で長径0.84m、短径0.57mである。確認面からの深さは0.43mを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の土層であり、特に１・２層には砂粒を多く含む。北側壁際の覆土中位(２層中)より人頭大の礫がまとまって出土した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第118図７)、ＲＦ(同９)、石棒の破片(同８)が出土した。

［時期］重複関係から晩期初頭以前に構築された可能性がある。

ＳＫ634(第２分冊第33図、図版39)

［位置・検出状況］ＬＴ57グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に近い傾斜地で地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の円形のプランを検出した。

［概要］長径1.95m、短径1.73mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.70mを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。底面はほぼ平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］10層に分層した。大きく見ると砂と粘質土が互層を成しており、少なくとも下部層は地山(Ⅶ層)由来の粘質土層である。中央部分に上位層が深く落ち込む状態であり、やや不自然である。底面西側より人頭大の礫２点が出土した。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第119図１～10)、石匙(同11)、石錐(同12)、スクレイパー類(同13・14・17)、ＲＦ(同15・16)、石核(同18)、礫器(第120図２)、磨・凹石類(同３～６)、岩偶(同１)が出土した。岩偶は右脚部のみを欠損しており、頭部後面に紐通し状の穿孔がある。

［時期］確認面および出土遺物より、後期後葉と推察される。

ＳＫ635(第２分冊第26図、図版39)

［位置・検出状況］ＬＴ56・57グリッドに位置する。ＳＫ523の完掘時にその壁面で本土坑の覆土を確認した。周囲の包含層を掘り下げてから地山(Ⅶ層)上面で精査したところ、ほぼ円形の平面プランが確認されたため、土坑と判断した。

［概要］ＳＫ523に切られ東側の壁を一部失っている。残存部で長径1.09m、短径1.00mであり、底面や壁の状況からほぼ円形を呈していたと分かる。確認面からの深さは0.53mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。主体となる２層はやや炭化物を含んだ灰色粘質土層である。１層には地山(Ⅷ層)由来の砂粒が混入する。１層中より小さな骨片が出土している(第５章第７節参照)。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第120図７～11)、ＲＦ(同12～14)、が出土した。

［時期］確認面および出土遺物より後期後葉と推察される。

ＳＫ636(第２分冊第25図、図版40)

［位置・検出状況］ＬＴ56・57、ＭＡ56・57グリッドに跨って位置する。地山(Ⅶ層)上面で、ＳＫ522の南側にこれと重複する黒色土のプランを検出した。確認面からは土器の底部破片と土製耳飾が並んで出土した。

［概要］北側でＳＫ522に切られる。残存部で長径2.31m、短径1.80mでやや南北に長い円形を呈する。

底面はやや湾曲し、壁は比較的緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは0.59ｍを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。底面に20～30㎝大の礫が７点並んでいた。人為的な出土状況と判断した。

[堆積土の特徴] 10層に分層した。地山(Ⅷ層)由来の砂利を多く含む層と炭化物を含んだ粘質土層が互層をなす。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第121図１～９)、スクレイパー類(同10～12)、打製石斧(同13・14)、磨・凹石類　(同15)、石棒類(同16)、土錘(同17)、土製耳飾(同18)が出土した。

[時期] 検出面および出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ638(第２分冊第33図)

[位置・検出状況] ＬＲ56グリッドの地山(Ⅶ層)上面で遺構の精査をほぼ終了した後、念のために地山(Ⅶ層)を削って再度遺構確認を行ったところ、灰色粘質土の円形プランを検出した。

[概要] ＳＫ514の西に位置する。長径0.98m、短径0.78mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.10ｍと浅く、底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

[堆積土の特徴] 地山(Ⅶ層)由来の灰色粘質土の単層である。

[出土遺物] 土器破片が僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

[時期] 詳細な時期は不明だが、検出面から晩期初頭以前に属する遺構と推察される。

ＳＫ639(第２分冊第35図、図版40)

[位置・検出状況] ＬＳ・ＬＴ55グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、暗褐色土の楕円形プランを検出した。確認面には人頭大の礫と深鉢の底部破片(第２分冊第122図３)が伏せて置かれており、人為的な出土状況と思われる。

[概要] ＳＫＦ700を切る。長径0.96m、短径0.71ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.26ｍを測る。底面から壁にかけては緩やかに湾曲する。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。いずれも地山(Ⅶ層)由来の粘質土層で１層には炭化物や礫を含む。

[出土遺物] 先に記した土器底部の他、土器破片(同１・２)、磨製石斧(同４)が出土している。磨製石斧は２層より出土しており、意図的に埋められたものと推察される。

[時期] 遺物の出土状況などから、土坑墓と判断した。確認面および出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ640(第２分冊第35図、図版40)

[位置・検出状況] ＬＳ・ＬＴ55グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、ＳＫ639の北側に黒褐色土の円形プランを検出した。

[概要] 長径0.76m、短径0.70ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.29ｍを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

[堆積土の特徴] 黒褐色土の単層であった。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第122図５・６)、ＲＦ(同７)が出土した。

[時期] 出土遺物から、晩期中葉と推察される。

ＳＫ641(第２分冊第18図、図版23)

[位置・検出状況] ＭＤ50グリッドに位置する。ＭＤ50グリッド杭付近で検出したＳＫ397・428を精査中、これらの北側に黄褐色土の円形プラン(ＳＫ396)と、これに重複するいくつかのプランを

確認した。このうちＳＫ396に切られるプランをＳＫ641とした。確認面は地山(Ⅶ層)上面である。

[概要] ＳＫ396およびＳＫＰ643・656に切られる。残存部で長径0.68m、短径0.47mで、底面および壁の検出状況から本来はほぼ円形を呈したものと推察できる。地山砂礫層(Ⅷ層)を掘り込んでおり確認面からの深さは0.19mを測る。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

[堆積土の特徴] 黒褐色土の単層であった。

[出土遺物] ＲＦが１点(第２分冊第122図８)出土した。他にも覆土中より僅かに土器破片が出土した。後期末葉と思われる口縁部破片が１点出土している(未掲載)。

[時期] 確認面や重複関係および出土遺物から、後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＫ644(第２分冊第25図、図版40)

[位置・検出状況] ＬＳ・ＬＴ56グリッドに位置する。ＳＫ525ａの完掘時に壁面で重複する別の遺構の覆土を確認した。周囲の遺物包含層(Ⅵ層)を掘り下げ、地山(Ⅶ層)上面で再度プラン確認を行ったところ、ＳＫ525ａの北東側に平面プランが確認できたためこれを土坑と認定した。

[概要] ＳＫ525ａに切られる。残存部で長径1.19m、短径0.60mであり、底面および壁の検出状況から本来はほぼ円形のプランであったと推察される。確認面からの深さは0.53mを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。底面は平坦で壁はやや垂直気味に立ち上がる。

[堆積土の特徴] ４層に分層した。４層はⅦ層に似た粘質土層であったため、覆土と壁の区別が付きにくかった。

[出土遺物] １～２層と３層の境界に、表面に細い傷のような痕跡のある板状の石皿(第２分冊第122図14)が出土した。この他、土器破片(同９～12)、石匙(同13)が出土している。

[時期] 確認面および出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ646(第２分冊第23図、図版41)

[位置・検出状況] ＬＴ55グリッドに位置する。ＳＫ508のプランを再確認すべく地山(Ⅶ層)上面を精査したところ、ＳＫ508と重複するプランが検出された。確認面では新旧関係やプランがやや不明瞭であったため、両者を横断するサブトレンチを設定して確認した。

[概要] ＳＫ508、ＳＫ528に切られ、ＳＫＦ700を切る。長径1.25m、短径1.18mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.61mを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。底面は緩やかに湾曲し、壁は急に立ち上がる。

[堆積土の特徴] ４層に分層した。主体は４層の黒褐色土で、炭化物や砂粒を多く含む。２・３層には地山(Ⅶ層)由来の粘質土ブロックを含んでおり、人為的埋め戻し土と推察される。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第122図15～17)、スクレイパー類(同18)が出土した。

[時期] 出土遺物および重複関係から、晩期初頭に構築された可能性がある。

ＳＫ647(第２分冊第32図、図版41)

[位置・検出状況] ＭＡ55グリッドに位置する。ＳＫ615の精査中に、これに重複する土坑の存在を確認した。周辺の遺物包含層(Ⅵ層)を掘り下げ、地山(Ⅶ層)上面を精査したところ、平面プランが検出されたため、これをＳＫ647とした。

[概要] ＳＫ615の北西側に位置し、プラン東側をこれに切られて失っている。ＳＫ748・753を切る。残存部で長径1.98mである。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急に立ち上がる。確認面からの深さ

は0.45ｍを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。１層には地山(Ⅶ層)由来の粘質土ブロックを混入する。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第123図１～４)、礫器(同５)、石棒(同６)が出土した。石棒は実測図下部がプラン北側の覆土中より出土し、遺構外出土の石棒と接合した。扁平な素材の縁辺に細かな剥離痕が確認できるが、全体に磨かれて滑らかになっている。

[時期] 確認面および出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ648(第２分冊第32図、図版41)

[位置・検出状況] ＭＡ・ＭＢ55グリッドの地山(Ⅶ層)上面で、黒褐色土の不整形プランを検出した。これをＳＫ648とした。ＳＫ647の北西部に位置しており、近接していたために両者を通過するように土層観察ベルトを設定して調査を開始したところ、両者の間にさらにもう１基の遺構(ＳＫ748)が重複している事が判明した。

[概要] ＳＫ748を切る。平面形は径1.09ｍの円形プランから、北西方向が半月形に張り出した格好になっている。底面はほぼ平坦で、北西側の張り出し部は若干高い。確認面からの深さは最大0.33ｍで地山砂礫層(Ⅷ層)に達しており、壁は垂直気味に立ち上がる。

[堆積土の特徴] ３層に分層した。いずれも炭化物の少ない地山(Ⅶ～Ⅷ層)由来の土層である。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第123図７・８)、石皿(同９)が出土した。

[時期] 出土遺物より晩期初頭と推察される。

ＳＫ650(第２分冊第33図、図版41)

[位置・検出状況] ＭＡ55グリッドの地山(Ⅷ層)上面で、黒褐色土のプランを確認した。

[概要] ＳＫ673を切る。長径1.21ｍ、短径0.93ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.35ｍを測り、地山砂礫層(Ⅷ層)に達する。底面は緩やかに湾曲し、壁は急に立ち上がる。

[堆積土の特徴] ２層に分層した。１層は黒褐色土であり地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を含んでいる。２層は壁際に堆積したにぶい黄褐色粘質土層である。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第123図10～16)が出土した。

[時期] 確認面および出土遺物より、晩期前葉と推察される。

ＳＫ651ａ(第２分冊第35図、図版41)

[位置・検出状況] ＬＴ・ＭＡ53グリッドの遺物包含層(Ⅵ層)中で、15～20㎝大の礫が集中する地点を確認した。平面図などの記録を作成した後に包含層を掘り下げたところ、地山(Ⅶ層)上面でやや楕円形を呈するプランを確認した。Ⅵ層中で確認した礫の位置を符合するため、礫群もこの遺構に伴うものと考えた。当初は１基の土坑と考えたが、精査を進めたところ柱穴様ピット(ＳＫＰ651ｂ)と重複している事が判明した。

[概要] ＳＫＰ651ｂを切る。長径0.81ｍ、短径0.66ｍの楕円形を呈している。本来の遺構構築面と考えられるⅥ層上面からの深さは0.15ｍを測る。底面はやや湾曲し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土の特徴] 黒褐色土の単層である。Ⅵ層から遺構プランを確認した地山(Ⅶ層)上面レベルまで、北側から南へと深くなるように礫が入っていた。

[出土遺物] 土器破片(第２分冊第123図17～19)が出土した。

[時期] 出土遺物より後期後葉～晩期初頭と推察される。

ＳＫ653（第２分冊第34図、図版41）

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＳＫ630に重複するやや黒っぽい砂質土の円形プランを検出した。

［概要］ＳＫ630に切られる。長径1.54m、短径1.23m、確認面からの深さは0.43mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。確認面には人頭大より大きな柔らかい凝灰岩が１点検出された。

［堆積土の特徴］４層に分層した。１～２層は粘土質であり３～４層は砂質が強い。いずれも地山由来の埋め戻し土と推察される。覆土の遺物は少なく、１～２層にやや集中する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第123図20・21）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ655（第２分冊第35図、図版41）

［位置・検出状況］ＭＡ55グリッドに位置する。ＳＫ530の完掘時に、壁面で重複する遺構の覆土を確認した。周囲の遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げた後に再度確認したところ、ほぼ円形の平面プランを検出したため、土坑と認定した。確認面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］ＳＫ530によって北側の底面および壁の一部を失っている。残存部で長径0.76mであり、底面および壁の状況から本来はほぼ円形を呈したものと推察される。確認面からの深さは0.28mを測り、地山砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の砂粒や粘質土ブロックを混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第124図１）が出土した。

［時期］出土遺物から後期中葉と推察される。

ＳＫ658（第２分冊第35図、図版42）

［位置・検出状況］ＬＴ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で検出したＳＫ536・537を完掘したところ、この壁面で重複する遺構の覆土を確認した。そこで、遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げた後に、地山（Ⅶ層）上面でプランを確認したところ、ＳＫ536・537・583の間に、これらに切られた土坑のプランが明瞭に検出された。これをＳＫ658とした。

［概要］ＳＫ536・537、583に切られ、底面や壁の一部を失っているが、底面および壁の検出状況ならびに確認面でのプランから、本来はほぼ円形のプランであったものと推察される。残存部で長径1.55mを測る。確認面からの深さは0.55mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は北側では垂直気味に、南側では比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の埋め戻し土で、主体を成す１層は砂質土、３層は炭化物等が混入しない暗褐色粘質土層である。底面には人頭大の礫が１点置かれていた。人為的な出土状況と判断した。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第124図２～９）、土製耳飾（同10）、スクレイパー類（同11）が出土した。

［時期］礫の出土状況などから、土坑墓であった可能性が高い。確認面や重複関係および出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ660（第２分冊第34図、図版42）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に向かう傾斜地で、Ⅴb層の掘り下げ中に大型の礫が集中する地点を確認した。これをＳＱ770とした。この礫群を残したまま遺物包含層(Ⅵ層)を掘り下げ、地山砂礫層(Ⅷ層)上面でプランの確認を実施したところ、礫のほぼ真下に当たる位置に黄褐色砂質土の円形プランを確認した。これをＳＫ660とした。確認プランのほぼ中央に２点の礫が検出されていた。周辺のⅥ層の除去を実施した後に遺構の精査を開始した。上部で確認された礫群との関連性がはっきりしなかったため、礫群はＳＱ770として扱った。

［概要］ＳＫ741の北側にほぼ接するように位置する。ＳＫ752・753を切る。遺物包含層(Ⅵ層)直下の地山砂礫層(Ⅷ層)上面で直径1.37ｍの円形を呈する。深さは0.29ｍである。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体は１層であり、底面にうっすらと暗褐色砂質土が堆積する。いずれも砂質であるが、１層はⅤb層に似て粒子が細かく、２層には地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒が多く混入する。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第124図12・13)が僅かに出土した。

［時期］出土遺物からは後期後葉に構築されたものと判断できる。

ＳＫ663(第２分冊第35図、図版42)

［位置・検出状況］ＭＢ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に向かう傾斜地で、地山砂礫層(Ⅷ層)上面で、やや粘土質の土を覆土とする複数の円形プランが連なるようにして確認された。このうち、もっとも平面プランがはっきりとしていたプランをＳＫ663として精査を開始した。

［概要］ＳＫ676ｂ・678を切る。長径1.01ｍ、短径1.00ｍの円形を呈しており、確認面からの深さは最大0.30ｍを測る。Ⅴb層を掘り下げた後に礫の集中部を検出し(第35図参照)、平面図等の記録を作成した後に除去したが、図面整理段階でこの礫群の一部がＳＫ663のプラン内にほぼ収まる事が判明した。ＳＫ663に伴うものであった可能性が考えられる。その場合、本土坑は遺物包含層(Ⅵ層)上面より構築された可能性がある。また、遺構北側の壁付近には被熱した痕跡および焼土が検出されている。この場で熱を受けたものと判断した。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を混入する。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第124図14～16)、ＲＦ(同17)が出土した。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ665(第２分冊第10・11図、図版16・43)

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。ＳＫ222の周辺で地山(Ⅷ層)上面を精査したところ、複数の遺構が重複しているのを確認した。このうちＳＫ222ｂとＳＫ666の間に位置するものをＳＫ665とした。

［概要］ＳＫ222ｂ・ｃ・666に切られ、ＳＫ737・738を切る。残存部で長径1.31ｍ、短径0.86ｍの東西にやや長い楕円形を呈している。確認面からの深さは0.39ｍを測る。底面はやや湾曲し、壁はやや急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。ともに地山(Ⅷ層)由来の砂粒を含んでいる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第124図18・19)、磨・凹石類(同18)が出土した。また、覆土東側より動物の骨１点が出土した(第５章第７節)。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ666（第２分冊第10図、図版43）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で灰オリーブ色砂質土の円形プランを確認した。確認面には拳大よりやや大きな礫が３点置かれていた。調査期間の制約から、確認プランの平面図を作成した後に、Ⅵ層の掘り下げを行い、本土坑については地山（Ⅶ層）上面で再度プランを確認してから精査を開始した。

［概要］ＳＫ701に切られプラン北側を失っている。また、本土坑の南側に位置するＳＫ665を切る。残存部での長径1.26m、短径0.94mで、底面および壁の検出状況からほぼ円形のプランを呈していたものと推察される。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.53mを測る。

［堆積土の特徴］３層に分層した。３層は粘土質であり、地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒をブロック状に多く含んでいる。底面より大型の礫が多数検出された。人為的な出土状況と推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第124図21・22）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ667（第２分冊第36図、図版43）

［位置・検出状況］ＬＳ54グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒褐色土の円形プランを検出した。

［概要］長径0.76m、短径0.53mのほぼ円形を呈する。覆土上部から拳大よりやや大きな礫２点が検出された。確認面からの深さは0.17mと浅く、底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第124図25）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ669（第２分冊第36図）

［位置・検出状況］ＬＳ54グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、黒色土のほぼ円形のプランを確認した。

［概要］長径0.56m、短径0.46mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.15mである。底面にはやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒色土の単層であった。地山（Ⅶ層）由来の粘質土ブロックを混入する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第124図23・24）が出土した。

［時期］出土遺物から、後期後葉と推察される。

ＳＫ673（第２分冊第33図、図版43）

［位置・検出状況］ＭＡ55グリッドの地山（Ⅶ層）上面で人頭大の礫とそれよりやや小さな礫の集中する地点を確認した。精査したところ、この礫群を取り込む形でほぼ円形のプランおよび、これと重複する遺構のプランを確認した。礫のある土坑をＳＫ673、重複するもう１基の土坑をＳＫ650とした。ＳＫ693については、当初近接するが重複はしていないものと判断していたが、ＳＫ693の壁面を検出したところ、本土坑の壁と接する形となった。新旧関係については不明である。

［概要］ＳＫ650の北西側に位置し、これに切られる。残存部で長径0.93m、短径0.84mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は急に立ち上がる。底面のほぼ中央には拳大よりやや大きな礫が集中して置かれていた。人為的な出土状況と推察した。

［堆積土の特徴］５層に分層した。確認面の礫は１層上部に位置している。この１層部分について

は礫を設置するための掘り形プランの可能性もある。

［出土遺物］確認面の礫周辺より同一個体の土器破片（第２分冊第125図１）が比較的まとまって出土した。この他、土器破片（同２～６）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物より後期中葉の可能性が高い。

ＳＫ676ａ・ｂ（第２分冊第35図、図版42）

［位置・検出状況］ＭＢ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に向かった傾斜地の地山砂礫層（Ⅷ）層の上面で、やや粘土質の土を覆土とする複数の円形プランが連なるようにして確認された。このうちＳＫ663の北側の円形プランをＳＫ676として精査を開始した。精査を進めるうちに、ＳＫ663との間にもう１基の遺構が存在する事が明らかとなった。そこで、先に検出していた部分をＳＫ676ａ、新たに検出されたＳＫ663との間の遺構をＳＫ676ｂとして区別した。確認面ほぼ中央部には人頭大の礫と、これに並んで１個体の土器破片が出土した。

［概要］ＳＫ676ａ：ＳＫ677に切られ、ＳＫ676ｂを切る。長径1.05m、短径0.83mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.21mを測る。

ＳＫ676ｂ：ＳＫ663とＳＫ676ａの間に位置し、これに切られる。残存部での長径0.62mで確認面からの深さは0.25mである。

［堆積土の特徴］ともに単層である。ＳＫ676ａの底面には人頭大の礫が置かれていた。

［出土遺物］当初、１基の土坑と認識していたため出土遺物がどちらの土坑に伴うものかは不明である。土器破片（第２分冊第125図７～９）、敲石（同９）が出土した。

［時期］出土遺物から後期中葉～後葉と推察される。

ＳＫ677（第２分冊第35図、図版42）

［位置・検出状況］ＭＢ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に向かった傾斜地の地山砂礫層（Ⅷ層）の上面で、やや粘土質の土を覆土とする複数の円形プランが連なるようにして確認された。このうち、もっとも北側で検出されたものをＳＫ677とした。

［概要］ＳＫ676ａを切る。長径0.59m、短径0.36mの小さな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.18mで、底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層が砂質土、２層が粘質土でいずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来である。

［出土遺物］覆土中より土偶の肩部破片（第２分冊第126図１）を検出した。また、土器破片を数点出土したが、中に１点晩期初頭と思われる特徴を有する資料が含まれる。

［時期］重複関係および出土遺物から、晩期初頭と推察される。

ＳＫ678（第２分冊第35図、図版43）

［位置・検出状況］ＭＢ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に向かった傾斜地の地山砂礫層（Ⅷ層）の上面で、やや粘土質の土を覆土とする複数の円形プランが連なるようにして確認された。このうちＳＫ663の南側、斜面の下方に確認された円形プランをＳＫ678とした。

［概要］ＳＫ663に切られ、北側半分を失っている。残存部での長径1.14m、短径0.43mであり、底面および壁の検出状況からほぼ円形のプランだったと推察される。確認面からの深さは最大で0.33mである。底面はほぼ平坦で壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。主体は２層で、地山(Ⅶ層)由来のオリーブ褐色砂質土である。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第126図３・４)、土偶の頭部(同２)が出土した。

［時期］重複関係および出土遺物より後期後葉と推察される。

ＳＫ679(第２分冊第36図)

［位置・検出状況］ＭＢ55グリッドに位置する。調査区西側の旧河川跡に向かう傾斜地で、地山砂礫層(Ⅷ層)上面で円形プランを検出した。半截したところ、斜面上部で壁の立ち上がりを明確に検出し、これを土坑とした。

［概要］長径0.59m、短径0.57mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは最大で0.25mである。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を含む。

［出土遺物］小形の浅鉢(第２分冊第126図５)が出土した。

［時期］出土遺物より後期中葉と推察される。

ＳＫ681(第２分冊第12図、図版44)

［位置・検出状況］ＭＣ48グリッドに位置する。ＳＫ580の精査を開始したところ、この東側で別の土坑に切られている事が明らかとなった。これをＳＫ681とした。ＳＫ681は48ラインベルト中で確認され、これより北側では既にプランは失われていた。確認面は地山(Ⅶ層)上面である。

［概要］ＳＫ580を切る。長径1.02m、短径は推定値で0.74m程度である。確認面からの深さは0.85mを測る。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を含んでいる。

［出土遺物］土器破片(第２分冊第126図６)が僅かに出土した。

［時期］出土遺物は後期後葉の資料であるが、重複するＳＫ580が晩期初頭に属すると推察されるため、本土坑は晩期初頭以降と推察される。

ＳＫ682(第２分冊第12図、図版35)

［位置・検出状況］ＭＣ47・48、ＭＤ47・48グリッドに跨って位置する。48ラインに設定した土層観察ベルトを掘り下げて遺構の確認を行ったところ、先に確認していたＳＫ242とＳＫ580の間に重複する遺構が存在する事が分かった。これをＳＫ682とした。検出面は地山(Ⅶ層)上面である。

［概要］ＳＫ580を切っている。プラン西側はＳＫ242に切られており、残存部で長径0.98m、短径0.60mを測る。底面および壁面の状況から、ほぼ円形のプランを呈していたと推察される。地山(Ⅶ層)上面からの深さは0.35mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。２層は底面に薄く堆積した黄褐色粘質土層である。

［出土遺物］ＲＦ(第２分冊第126図７)が出土した。

［時期］重複関係から、晩期初頭～前葉と推察される。

ＳＫ683(第２分冊第36図、図版44)

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ50グリッドに位置する。50ラインベルトの北壁およびその周辺を精査中に、このベルトにかかる黒褐色土のプランを検出した。これをＳＫ683とした。50ラインベルトの土層断面により、本土坑の構築面が地山(Ⅶ層)上面であることを確認した。

［概要］長径1.22m、短径1.00mのやや東西方向に長い円形を呈する。確認面からの深さは0.22mで、地山砂礫層(Ⅷ層)を掘りこんでいる。底面はほぼ平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を多く混入する。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも無文の深鉢胴部破片であった。

［時期］検出面および出土遺物より、後期後葉から晩期初頭の可能性が高い。

ＳＫ686(第２分冊第36図、図版44)

［位置・検出状況］ＭＣ49・50グリッドに位置する。50ラインベルトの北壁を精査中に重複する２基の遺構プランを確認した。２基のうち古いものをＳＫ686、新しいものをＳＫＰ685とした。

［概要］ＳＫＰ685に切られる。また、50ラインベルトに沿って設定したサブトレンチにより、プラン北側を失っている。残存部で長径0.98m、短径0.72mある。断面によると構築面はⅥ～Ⅶ層の漸移層であり、深さは0.44mを測る。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を僅かに含む。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複する遺構にも時期の明確なものが存在せず、本土坑についても所属時期は不明である。

ＳＫ693(第２分冊第33図、図版44)

［位置・検出状況］ＭＡ55・56グリッドに位置する。ＳＫ541の完掘時に壁面で重複する遺構の覆土を確認した。周辺の遺物包含層(Ⅵ層)を掘り下げた後、地山(Ⅶ層)上面で精査したが、プランが明瞭には確認できなかったため、サブトレンチを設定してこの観察から底面および壁面を検出した。ＳＫ673との重複関係については、この段階で初めて確認できたために重複箇所の覆土が既に失われており、新旧関係を把握することは出来なかった。

［概要］プラン北側でＳＫ541に切られる。ＳＫ673と接するが、新旧関係は不明である。残存部で長径0.96m、短径0.95mを測り、底面および壁面の状況からほぼ円形を呈したものと推察される。底面はほぼ平坦で壁はやや急に立ち上がる。プランほぼ中央に大型の礫が検出されている。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれの層にも地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒がブロック状に含まれる。主体は３層で、炭化物などが少ない地山(Ⅶ層)由来の黄灰色粘質土層である。

［出土遺物］底面に拳大よりやや大きな礫と小さな壺形土器(第２分冊第126図８)が正位で置かれていた。人為的な出土状況を示していると思われる。他にも土器破片(同９・10)が出土した。

［時期］遺物等の出土状況から、土坑墓と判断した。検出面や重複関係および出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ695(第２分冊第36図、図版44)

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ53グリッドに位置する。試掘調査時の４号トレンチ内で確認された遺構の展開を探ろうと地山(Ⅶ層)上面を精査したところ、４号トレンチの壁面に土坑の断面を確認した。これをＳＫ695とした。４号トレンチよりも土坑の掘り込みが浅くトレンチ内のプランは失われていた。

［概要］ＳＫ710を切る。残存部で長径1.34m、短径0.90mである。底面および壁面の状況から、ほぼ円形のプランを呈したものと判断できる。確認面からの深さは0.45mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は西側では垂直気味に、東側ではやや緩やかに立ち上がっている。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれの土層にも地山(Ⅷ層)由来と思われる砂粒が混入している。底面からは20㎝大の礫が集中して検出された。意図的に埋められたものと推察される。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］礫の出土状況や土層の状況から、土坑墓の可能性が考えられる。重複するＳＫ710が晩期初頭に属すると思われるため、本土坑は晩期初頭以降の所産と判断できる。

ＳＫ697（第２分冊第30図、図版45）

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ54グリッドに位置する。ＳＫ222の周辺部で地山（Ⅶ層）上面を精査したところ、重複する複数の遺構が確認された。このうちＳＫ222ｂの東側で、暗褐色土を中心に黄褐色砂質土がドーナツ状に取り囲むようなプランを確認した。４号トレンチ北壁で土層断面も確認され、人為的な掘り込みである事が明白であったため、これをＳＫ697とした。４号トレンチに切られて南側の壁が一部失われていたが、トレンチ底面より深い土坑であったため、底面は残っていた。

［概要］ＳＫ735・736・737を切る。残存部で長径1.21m、短径1.07mであり、底面の状況から本来はほぼ正円形のプランを呈したものと推察される。

［堆積土の特徴］４層に分層した。主体を成すのは４層であり地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来と判断できる。１～３層は遺構上面が若干落ち込んでいた時期に自然に堆積した土層と思われる。

［出土遺物］２層を除いた各層から僅かに土器破片（第２分冊第126図11・12）が出土した。

［時期］ＳＫ737が後期後葉に属すると思われるため、これを切っている本土坑は晩期初頭以降と推察される。

ＳＫ698（第２分冊第30図、図版45）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ53グリッドの地山（Ⅶ層）上面で、ＭＢラインに設定した土層観察ベルトにかかる遺構のプランを確認した。これをＳＫ698とした。ＭＢラインの土層断面によると、本来の構築面は遺物包含層（Ⅵ層）上面であったと判断できる。

［概要］ＳＫ703・710を切る。長径1.26m、短径1.00mの円形を呈する。プラン北側の底面にはピット状の落ち込みが存在する。地山（Ⅶ層）上面からの深さはこのピット部分で0.76mを測る。この部分を除けば底面はほぼ平坦であり、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ層）由来の灰黄褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第126図14）、石棒（同13）が出土した。石棒はＭＤ43グリッドより出土した破片と接合した。

［時期］重複関係および出土遺物より、晩期前葉と推察される。

ＳＫ701（第２分冊第10図、図版45）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、オリーブ褐色砂の円形プランを確認した。しかし、この地区では重複する複数の遺構が存在することが予測されたため、確認プランの平面図を記録した後、Ⅵ層の掘り下げを先行して実施し、その後地山（Ⅶ層）上面で再度プランを確認した。この円形プランをＳＫ701とした。

［概要］ＳＫ666・708を切る。直径1.13mの円形を呈する。地山（Ⅶ層）上面から底面までの深さは0.33mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

［堆積土の特徴］３層に分層した。主体は１層であり、オリーブ黒粘質土層の薄い間層を挟んで底面には地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多量に含んだ灰色砂質土が厚さ10㎝程度堆積する。土層の状

況から人為的堆積と思われる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第126図16・17）、磨・凹石類（同15）が出土した。

［時期］出土遺物や重複関係などから、晩期前葉以降と推察される。

ＳＫ703（第２分冊第30図、図版45）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ53グリッドに位置する。ＭＢラインの土層観察ベルトを除去し、地山（Ⅶ層）上面で精査したところ、ＳＫ698とＳＫ597の間に複数の重複する遺構を確認した。このうち、ＳＫ698の南隣に位置するプランをＳＫ703とした。

［概要］ＳＫ698・724・706に切られる。ＳＫ515との新旧関係については不明である。残存部で長径1.17m、短径1.05mで、底面および壁の検出状況から円形プランを呈したものと推察される。検出面である地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.19mであるが、ＭＢラインの土層断面によると、本来はⅥ層中からの構築であった可能性も考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。

［堆積土の特徴］ＭＢラインの土層断面でＳＫ703に該当する箇所を見ると、基本層序には含まれない３層の堆積が確認されている。これらが本土坑の覆土であったものと判断した。底面からは約20cm大の礫がびっしりと検出された（半截時に図化しなかったため、平面図では西側半分のみ）。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係などから晩期前葉以前と推察される。

ＳＫ704（第２分冊第29図、図版36）

［位置・検出状況］ＬＳ55・56グリッドの地山（Ⅶ層）上面でＳＫ592の南側にＳＫ593を確認した。プランがやや不明瞭だったため、サブトレンチを入れて壁の位置を確かめようとしたが、土坑の覆土が地山のグライ化粘質土（Ⅶ層）に酷似しており、困難であった。そこで地山（Ⅶ層）をやや削ったところ、ＳＫ593の南側に重複する別の円形プランを検出した。これをＳＫ704とした。

［概要］ＳＫ593を切る。長径1.13m、短径1.00mの円形プランを呈している。底面はⅧ層（砂礫層）に達しており、検出面からの深さは0.47mを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

［堆積土の特徴］地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来のにぶい黄褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第126図18～20）、土製耳飾（同22）、線刻礫（同23）、磨・凹石類（同24）が出土した。

［時期］確認面および出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ705（第２分冊第25図、図版45）

［位置・検出状況］ＬＴ55グリッドに位置する。ＳＫ527の精査中、南側の壁面がなかなか検出できなかったために周辺の土層を掘り下げて地山（Ⅶ層）上面で精査を行ったところ、ＳＫ527の南側にこれと重複する黒色土の円形プランを確認した。これをＳＫ705とした。

［概要］ＳＫ527に切られ、北側の壁を失っている。残存部で長径1.37m、短径0.70mでほぼ円形を呈していたものと推察される。確認面からの深さは0.43mを測る。底面はほぼ平坦で壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも地山（Ⅶ層）由来の粘質土ブロックを含む砂質土層である。

［出土遺物］南東部底面より２個体の深鉢（第２分冊第127図１・２）が潰れた状態で出土した。意図的に埋められたものと推察される。この他、土器破片（同３～６）、打製石斧（同８）が出土した。

［時期］遺物の出土状況などから土坑墓と判断した。時期は検出面や重複関係、出土遺物などから晩期初頭と推察される。

ＳＫ706（第２分冊第30図、図版15・37・45）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ52グリッドに位置する。ＭＢラインの土層観察ベルトを除去し、地山（Ⅶ層）上面で精査したところ、ＳＫ698とＳＫ597の間に複数の重複する遺構を確認した。このうち、ＳＫ597の北隣に位置するプランをＳＫ706とした。

［概要］ＳＫ597・605・703・724を切る。ＳＫ515との新旧関係は不明である。地山（Ⅶ層）上面での規模は、長径1.50m、短径1.20mのやや東西に長い円形プランを呈する。検出面である地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.57mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は外反しながらも急に立ち上がる。ＭＢラインの土層断面から、本来は遺物包含層（Ⅵ層）上面から構築された土坑であった可能性が高い。

［堆積土の特徴］３層に分層した。主体を成すのは２層の黒褐色土で、地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を全体に含む。また覆土中位には大型の礫が集中しており、人為的な出土状況と推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第127図９～12）、ＲＦ（同13・14）、打製石斧（第128図１）、磨・凹石類（同２）、石棒（同３）が出土した。

［時期］検出面、重複関係および出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ708（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ54・55グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）直下の地山砂層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ701の北側にオリーブ黒色土の円形プランを確認し、これをＳＫ708とした。

［概要］ＳＫ701に南壁を若干切られている。長径0.96m、短径0.78mのやや東西方向に長い円形を呈している。確認面からの深さは0.24mを測る。

［堆積土の特徴］底面東側に20㎝大の柔らかい凝灰岩が検出された。意図的に埋められたものと推察される。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第128図４）、土製耳飾（同５）が出土した。

［時期］ＳＫ701との重複関係より晩期中葉以前に構築されたものと考えられる。出土遺物から後期中葉の可能性もある。

ＳＫ709（第２分冊第37図、図版46）

［位置・検出状況］ＬＴ56グリッドに位置する。ＳＫ545の精査中に、土層断面などからＳＫ545としていたものが複数の土坑が重複したものである事が分かった。重複する一群のうち、もっとも南側に位置するプランをＳＫ709とした。検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］ＳＫ727に切られる。ＳＫ545との新旧関係は不明である。残存部で長径1.11m、短径1.04mのやや楕円形を呈する。検出面からの深さは0.81mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。また、底面と壁面には小さな段を持っており、最も深い底面は円形プランを呈する。

［堆積土の特徴］５層に分層した。いずれの層にも地山（Ⅷ層）由来の砂粒が混入しているが、底面に近くなるにつれその傾向が強くなる。

［出土遺物］２層下部および４層よりほぼ完形の深鉢（第２分冊第128図７・８）が出土した。意図的に埋められたものと判断した。この他に土器破片（同９～11）、石錐（同６）、石製品（同12）が出土した。また、覆土中より動物遺存体２点が検出された（第５章第７節参照）。

［時期］検出面、重複関係および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ710（第２分冊第36図、図版46）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ53グリッドに位置する。試掘調査時の４号トレンチ底面で、トレンチ南壁にかかる遺構のプランを検出した。これをＳＫ228とし、トレンチ内部のみ先行して精査を終了させた。その後ＭＡ・ＭＢ53グリッドで地山（Ⅶ層）上面を精査中に、４号トレンチに北側を削平された土坑のプランを確認した。これをＳＫ710として精査した。整理作業段階に、両者が同一の遺構と判断されたため、まとめてＳＫ710と呼称する事とした。

［概要］ＳＫ598・695に切られる。長径は最大で0.80ｍを測る。地山（Ⅶ層）上面からの深さは0.54ｍと深く、底面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多く混入している。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第129図１～７）、石匙（同８・９）、石核（同10）が出土した。特に石匙はプラン北側の底面付近から出土しているが、意図的に埋納されたものと思われる。

［時期］遺物の出土状況などから土坑墓であったと判断した。時期は、重複関係や出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ711（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）上面で確認したＳＫ614・630・221に囲まれた部分で、Ⅷ（砂）層上面でオリーブ黒色土のプランを検出した。これをＳＫ711とした。

［概要］ＳＫ221・614・616・726・730・734に切られる。壁はほとんど失われており、平面規模は不明である。底面は直径0.56ｍ程度の円形である。確認面からの深さは0.32ｍを測る。

［堆積土の特徴］オリーブ黒色土の単層である。地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多く含んでいる。底面より20㎝大の礫が２点検出された。人為的に配置された可能性がある。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から、晩期初頭より以前に構築された可能性が高い。

ＳＫ712（第２分冊第10・34図、図版46）

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドに位置する。地山砂礫層（Ⅷ層）上面を精査中に、ＳＫ660・630付近で重複する複数の遺構を確認した。このうちＳＫ630に切られＳＫ732を切るプランをＳＫ712とした。

［概要］プラン西側をＳＫ630に切られる。ＳＫ732を切る。残存部分で長径0.70ｍ、短径0.40ｍで、底面や壁の状況から本来はほぼ円形のプランを呈したものと推察される。底面には30㎝大の礫が置かれていた。人為的な出土状況と思われる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の砂質土層で、炭化物を多量に含んでいる。

［出土遺物］１層より僅かに土器破片（第２分冊第129図11）が出土した。

［時期］時期は不明である。

ＳＫ719（第２分冊第37図、図版35・46）

［位置・検出状況］ＭＢ52・53グリッドの地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ578の南側に灰黄褐色土のプランを検出した。これをＳＫ719とした。

［概要］ＳＫ578と隣接するが、重複関係は不明瞭である。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来と思われる砂質土層である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＫ720（第２分冊第37図）

［位置・検出状況］ＭＢ52・53、ＭＣ52・53グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げた段階で、ＭＣ53グリッド杭の真下に円形プランを確認した。確認面のほぼ中央部には大型の礫が３点並んで検出された。人為的に配された可能性がある。

［概要］長径1.34m、短径1.26mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.32mを測る。底面はほぼ平坦で壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。いずれも地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の鈍い黄褐色土である。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第129図12・13）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期中葉と推察される。

ＳＫ721（第２分冊第24図、図版46）

［位置・検出状況］ＭＢ52・53グリッドに位置する。ＳＫ518の精査時に、壁面で重複する遺構の覆土が確認された。そこで土層観察ベルトを設定してサブトレンチを掘ったところ、ＳＫ518に切られている別の土坑であることが判明し、これをＳＫ721とした。地山（Ⅶ層）上面で平面プランを確認した後に精査を行った。

［概要］ＳＫ516・518に切られる。残存部で長径1.46m、短径1.29mでほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.55mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第129図14・15）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ724（第２分冊第30図、図版46）

［位置・検出状況］ＭＡ52・53グリッドに位置する。ＭＢラインの土層観察ベルトを除去し、地山（Ⅶ層）上面で精査したところ、ＳＫ698とＳＫ597の間に複数の重複する遺構を確認した。このうち、ＳＫ703と706の間に確認された土坑をＳＫ724とした。

［概要］ＳＫ706にプラン南側を切られる。北側ではＳＫ703を切る。残存部で長径1.01m、短径0.84mであり、底面や壁の状況から本来はほぼ円形のプランを呈したものと推察される。確認面からの深さは0.35mを測る。確認面より人頭大の礫が１点検出された。意図的に配置されたものと思われる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第130図１～５）が出土した。

［時期］重複関係および出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ725（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ54グリッドに位置する。ＳＫ614・630の周辺で地山（Ⅶ層）上面を精査中にＳＫ732に重複する黒褐色土プランを検出した。土層断面で観察したところ立ち上がりが確認でき、底面および壁が検出された事から、これを土坑と判断しＳＫ725とした。

［概要］ＳＫ732に切られ、プランの大半部分を失っている。ＳＫ711・730を切る。残存部で長径0.69ｍである。確認面からの深さは0.19ｍを測る。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から、晩期初頭以前に構築された可能性が高い。

ＳＫ726（第２分冊第10図、図版15）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ54グリッドでⅥ層直下、Ⅷ（砂）層上面を精査中、ＳＫ221の西側にこれと重複する黒褐色土の円形プランを確認した。これをＳＫ726とした。

［概要］ＳＫ221・734に切られ、ＳＫ711を切る。残存部で長径0.76ｍ、短径0.41ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.25ｍを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から、晩期初頭以前に構築された可能性が高い。

ＳＫ727（第２分冊第37図、図版46）

［位置・検出状況］ＬＴ56グリッドに位置する。ＳＫ545の精査中に、土層断面などから複数の土坑が重複したものである事が分かった。重複する一群のうち、もっとも新しいプランをＳＫ727とした。確認面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］ＳＫ545・709・728を切る。ＳＫ636の東に位置する。長径1.13ｍ、短径1.08ｍの円形プランを呈する。底面はほぼ平坦で壁はやや垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は暗灰黄色粘質土層で、２層はこれに砂が混入した状況の土層である。いずれも炭化物等の混入物は少ない。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第130図６～８）が出土した。６は１層下部より出土している。

［時期］重複関係と出土遺物より晩期前葉と推察される。

ＳＫ728（第２分冊第37図、図版47）

［位置・検出状況］ＬＴ56グリッドに位置する。ＳＫ545の精査中に、土層断面などから複数の土坑が重複したものであることが分かった。重複する一群のうち、もっとも北側に位置するプランをＳＫ728とした。検出面は地山（Ⅶ層）上面である

［概要］ＳＫ727に切られ、ＳＫ545を切る。ＳＫ523の南に位置する。残存部で長径1.42ｍ、短径0.74ｍのほぼ円形を呈する。底面はやや湾曲し、壁は垂直気味に立ち上がる。

［堆積土の特徴］６層に分層した。全体的に地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を混入し、砂質を帯びている。２層のみが炭化物を多量に含んでおり、黒褐色を呈する。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第130図11～13）、スクレイパー類（同９）、打製石斧（同10）が出土した。

［時期］検出面、重複関係および出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＫ729（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）直下、地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ221の東側にこれと重複する黒褐色土のプランを確認した。

［概要］ＳＫ616・734・738を切り、ＳＫ221に切られる。

［堆積土の特徴］２層に分層した。残存部で長径0.84m、短径0.65mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.37mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は外反しながら急角度で立ち上がる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第130図14）が出土した。

［時期］重複関係および出土遺物から晩期初頭以降と推察される。

ＳＫ730（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ54グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）直下、Ⅷ（砂）層上面で精査中、ＳＫ614の南に重複する複数の遺構を確認した。平面プランおよび土層断面の観察により、ＳＫ614とＳＫ725の間にも遺構プランが存在することが判明したため、これをＳＫ730とした。

［概要］ＳＫ614・725に切られ、残存部で長径0.67mを測る。確認面からの深さは0.16mである。

［堆積土の特徴］暗褐色土の単層であった。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複するＳＫ614が晩期前葉に属すると思われるため、これに切られる本土坑は晩期前葉以前に構築されたものと推察される。

ＳＫ732（第２分冊第10図、図版46）

［位置・検出状況］ＭＡ・ＭＢ54グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下、地山（Ⅷ層）上面で精査中、ＳＫ712の北東側に黒褐色土のプランを確認した。

［概要］ＳＫ712に切られ、ＳＫ725を切る。残存部で長径0.70m、短径0.30mであり確認面からの深さは0.26mを測る。掘り込みは地山砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を含んでいる。

［出土遺物］僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片である。

［時期］時期は不明である。

ＳＫ734（第２分冊第10図、図版46）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下、地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ616・729に重複するオリーブ黒色土の円形プランを確認した。これをＳＫ734とした。

［概要］ＳＫ221・614・616・729に切られ、ＳＫ711を切る。残存部で長径0.90mである。底面は径0.54m程度の円形であり、本来は本土坑の平面プランもほぼ円形を呈したものと推察される。確認面からの深さは0.43mを測る。

［堆積土の特徴］オリーブ黒色土の単層である。地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来で炭化物を多量に含んでいる。

［出土遺物］土器破片が僅かに出土しており、中には晩期初頭の特徴を有する資料が含まれる。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＫ735（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。試掘調査時の４号トレンチ北壁で検出したＳＫ222に切られるプランを、ＳＫ233として精査した。その後、トレンチ以外での調査が進みＳＫ222は３基の、ＳＫ223は２基の重複した遺構であることが判明した。そのためＳＫ223を欠番とし、新しいものをＳＫ735、古いものをＳＫ736と名称を変更した。確認面は地山砂礫層（Ⅷ層）である。

［概要］ＳＫ222ｂ・697に切られ、ＳＫ736を切る。底面と壁の一部が残存するのみで、全体の規

模は不明である。確認面からの深さは0.26ｍである。

［堆積土の特徴］３層に分層した。いずれも黒褐色土で炭化物の混入が目立つが、特に３層は炭化物が主体の層である。

［出土遺物］１・３層より僅かに土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から後期後葉～晩期初頭と推察される。

ＳＫ736（第２分冊第10・11図）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。試掘調査時の４号トレンチ北壁で検出したＳＫ222に切られるプランをＳＫ233として精査した。その後、トレンチ外での調査が進みＳＫ222は３基の、ＳＫ223は２基の重複した遺構であることが判明した。そのためＳＫ223を欠番とし、新しいものをＳＫ735、古いものをＳＫ736とした。確認面は地山砂礫層（Ⅷ層）である。

［概要］ＳＫ222ｂ・697・735に切られ、ＳＫ222ｃ・737を切る。底面と壁の一部が残存するのみで、全体の規模は不明である。

［堆積土の特徴］２層に分層した。１層は地山（Ⅷ層）由来の砂粒を多く混入している。

［出土遺物］１層より土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から後期後葉～晩期初頭と推察される。

ＳＫ737（第２分冊第10図、図版43・47）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下、地山砂礫層（Ⅷ層）上面でＳＫ222ｂ・ｃなどに切られる黒褐色土のプランを検出し、これをＳＫ737とした。

［概要］ＳＫ222ｂ・ｃ・665・697・735・736に切られる。残存部で長径0.99ｍである。底面は平坦で、確認面からの深さは0.36ｍを測る。掘り込みは地山砂礫層（Ⅷ層）に達する。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層であった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第130図15）が出土した。ＳＫ735－３層との接合資料である。

［時期］出土遺物から後期後葉と推察される。

ＳＫ738（第２分冊第10図）

［位置・検出状況］ＭＡ54グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）直下、地山砂礫層（Ⅷ層）上面で精査したところ、ＳＫ222ｂとＳＫ729の間に黒褐色土のプランを確認した。土層断面により立ち上がりが確認されたため土坑と判断し、これをＳＫ738とした。

［概要］ＳＫ222ｂ・729・665に切られ、ＳＫ222ａを切る。プラン南側は４号トレンチにより削平されている。

［堆積土の特徴］３層に分層した。地山（Ⅶ～Ⅷ層）由来の砂粒や粘土ブロックを含む。また１・２層には炭化物を非常に多く混入する。

［出土遺物］１層よび土器破片を僅かに出土した。ほとんどが地文のみの小破片であるが、中に１点、後期後葉から晩期初頭の特徴を有する資料が含まれる。

［時期］出土遺物から後期後葉から晩期初頭と推察される。

ＳＫ741（第２分冊第34図）

［位置・検出状況］ＭＢ54・55グリッドの地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数のプランを確認した。このうちＳＫ660の南に隣接するプランをＳＫ741とした。

［概要］ＳＫ742、ＳＫＰ661に切られ、ＳＫ745・752を切る。長径0.84m、短径0.63mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは0.26mを測る。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。プラン中央には人頭大の礫が検出された。意図的に配されたものと推察される。

［堆積土の特徴］暗褐色土の単層である。地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒を多く混入していた。

［出土遺物］覆土より土器破片を１点出土したが、無文の小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ742(第２分冊第34図)

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドの地山砂礫層(Ⅷ層)上面を精査中、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数のプランを確認した。このうちＳＫ741の南に重複するプランをＳＫ742とした。

［概要］ＳＫ743に切られ、ＳＫ741を切る。残存部で長径0.58mであり、底面および壁の状況から本来は円形プランを呈したものと思われる。確認面からの深さは0.18mである。

［堆積土の特徴］灰黄褐色土の単層であった。

［出土遺物］覆土中より２点の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

ＳＫ743(第２分冊第34図)

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドの地山砂礫層(Ⅷ層)上面を精査中、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数の遺構のプランを確認した。このうちＳＫ742の南に重複する土坑をＳＫ743とした。

［概要］ＳＫ755、ＳＫＰ744に切られ、ＳＫ742を切る。長径0.75mの円形を呈し、確認面からの深さは0.33mを測る。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］暗褐色土の単層であった。地山砂礫層(Ⅷ層)由来の砂粒や大型礫を混入している。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］不明である。

ＳＫ745(第２分冊第34図)

［位置・検出状況］ＭＢ54・55グリッドの地山砂礫層(Ⅷ層)上面で、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数の遺構のプランを確認した。このうちＳＫ660の南西に確認された暗オリーブ褐色土のプランをＳＫ745とした。

［概要］ＳＫ741・746・752に切られており、底面および壁の一部が残存するのみである。残存部の長径は0.50mであり、確認面からの深さは0.15mを測る。

［堆積土の特徴］暗オリーブ褐色土の単層である。炭化物粒を多く含む。

［出土遺物］１層より土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係より晩期初頭以前に構築されたものと推察される。

ＳＫ746(第２分冊第34図)

［位置・検出状況］ＭＢ54・55グリッドの地山砂礫層(Ⅷ層)上面で、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数の遺構のプランを確認した。このうちＳＫ660の南西側に位置する黒褐色土の円形プランをＳＫ746とした。

［概要］ＳＫ745を切る。長径0.74m、短径0.53mの不整円形を呈している。確認面からの深さは0.12mを測る。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土の特徴］黒褐色土の単層である。地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を含んでいる。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第131図１～３）、スクレイパー類（４）、ＲＦ（５）、石斧未成品が出土した。

［時期］出土遺物より、晩期初頭と推察される。

ＳＫ748（第２分冊第32図、図版47）

［位置・検出状況］ＭＡ55グリッドに位置する。ＳＫ647およびＳＫ648を精査中、ＳＫ647の北西側とＳＫ648の南東壁に地山が検出されない事に気付いた。両者に挟まれた位置を平面的に精査したのち、東西方向にサブトレンチを設定したところ、底面および壁の立ち上がりが検出されたためこれを土坑と認定し、ＳＫ748とした。確認面は地山砂礫層（Ⅷ層）上面である。

［概要］ＳＫ647・648に切られ、ＳＫ753を切る。残存部での長径0.92ｍで、底面および壁の状況から本来は円形プランであったものと推察される。

［堆積土の特徴］地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多量に含む灰黄褐色土の単層であった。

［出土遺物］数点の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から晩期初頭以前に構築されたものと推察される。

ＳＫ752（第２分冊第34図）

［位置・検出状況］ＭＢ55グリッドで地山砂礫層（Ⅷ層）上面を精査中、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数の遺構のプランを確認した。このうちＳＫ660とＳＫ745の間に確認されたにぶい黄褐色土のプランをＳＫ752とした。

［概要］ＳＫ660・741に切られ、ＳＫ745を切る。底面および壁の一部のみが残存するが、全体の形状および規模は不明である。

［堆積土の特徴］にぶい黄褐色土の単層である。地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を多く混入する。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［時期］重複関係から晩期初頭以前の可能性があるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ753（第２分冊第32・34図、図版47）

［位置・検出状況］ＭＡ55グリッドに位置する。ＳＫ647・660の壁面で重複する遺構の覆土を確認した。地山砂礫層（Ⅷ層）上面で平面プランが確認されたためこれをＳＫ753とした。

［概要］ＳＫ647・660・758に切られる。残存部で長径1.36ｍ、確認面からの深さは0.25ｍである。底面から壁にかけては緩やかに湾曲する。

［堆積土の特徴］単層であった。地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂粒を主体とする。

［出土遺物］数点の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］重複関係から晩期初頭以前の所産と推察される。

ＳＫ755（第２分冊第34図）

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドの地山砂礫層（Ⅷ層）上面で、ＳＫ660とＳＫ630の間に重複する複数の遺構のプランを確認した。このうちＳＫ630の北に隣接するプランをＳＫ755とした。

［概要］ＳＫ630・653に切られ、ＳＫ743、ＳＫＰ744を切る。残存部で長径0.64ｍ、短径0.43ｍの楕円形を呈する。底面から壁にかけて緩やかに湾曲する。確認面からの深さは0.11ｍを測る。

［堆積土の特徴］単層である。

［出土遺物］１点の土器破片が出土した。細かな羽状縄文が施文された鉢破片であり、晩期に帰属するものと思われる。

［時期］出土遺物および重複関係から晩期初頭から中葉に構築されたものと推察される。

ＳＫ757（第２分冊第30図）

［位置・検出状況］ＭＢ52グリッドに位置する。ＳＫ515・597の精査時にこれらの西側に重複する別の遺構が確認された。地山（Ⅶ層）上面で精査したところ平面プランが確認されたためこれを土坑と判断し、ＳＫ757とした。

［概要］ＳＫ515・597に切られ、プランの東側は失われている。残存部で長径0.71m、短径0.50mで確認面からの深さは0.17mである。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

［堆積土の特徴］単層である。

［出土遺物］数点の土器破片が出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］不明である。

（２）フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は４基検出された。ＳＫＦ548は重複する遺構も無く、良好に保存されていたが、他の３基は複数の土坑に切られ全体の一部が残存しているに過ぎなかった。いずれも55ライン以北に構築されており、底面は地山砂礫層（Ⅷ層）に達していた。調査時にはいずれも底面付近より湧水が確認されたが、構築された当時の環境については定かではない。

以下、それぞれの遺構について詳細を記述する。

ＳＫＦ525ｂ

［位置・検出状況］ＬＳ・ＬＴ56グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）上面で検出したＳＫ525の精査中、このプラン南東側の壁が明確に検出されなかったため、周囲をやや掘り下げて確認したところ、地山（Ⅶ層）上面で重複する別の土坑のプランが検出された。当初確認した方をＳＫ525ａ、Ⅶ層で確認されたフラスコ状土坑をＳＫＦ525ｂとした。

［概要］ＳＫ525ａ・526に切られ、大半の部分を失っている。壁の形状などから本来はほぼ円形のプランを呈したものと推察される。底面は平坦で、確認面からの深さは0.52mを測る。掘り込みは地山の砂礫層（Ⅷ層）に達している。

［出土遺物］当初はＳＫ525ａとの区別が出来ておらず、ほとんどの遺物を一括して扱った。ＳＫＦ525ｂとして取り上げられた遺物はほとんどが地文のみの小破片であった。

［時期］検出面や重複関係、出土遺物から、後期後葉に構築された可能性が高い。

ＳＫＦ548

［位置・検出状況］ＬＳ57グリッドに位置する。ＳＲ475の精査中、断面で隣接する深い掘り込みの存在を確認した。周囲を掘り下げたところ、地山（Ⅶ層）上面で円形の明瞭なプランを検出した。

［概要］ＳＲ475の東に位置するが、直接の重複関係は不明である。開口部は径1.00mで、中段では径1.04m、底面は径0.74mの円形である。確認面からの深さは0.65mで、地山の砂礫層（Ⅷ層）に達する。底面は平坦である。

［堆積土の特徴］上部には遺物包含層（Ⅵ層）が堆積しており、これは本土坑の埋没後に生じた落ち込みに堆積したものと判断した。覆土は３層に分層した。３層には地山砂礫層（Ⅷ層）由来の砂利を、２層には同じ砂利と地山（Ⅶ層）由来の粘土ブロックを混入する。人為的な埋め戻し土と判断した。

［出土遺物］土器類（第２分冊第131図６～13、第132図１～３）、土偶（第132図４）スクレイパー類（５・７）、ＲＦ（６・８・９）が出土した。掲載した資料の他、スクレイパー類３点、ＲＦ４点、剥片19点が出土している。遺物は２層からの出土が多い。

［時期］確認面および出土遺物より後期後葉の可能性が高い。

ＳＫＦ700

［位置・検出状況］ＬＴ55グリッドに位置する。ＳＫ508とＳＫ528の間に検出されたＳＫ646の調査中で壁の検出を実施していたところ、プラン北側は地山が検出されず南側とは様相が異なっていた。そこで、南北方向にサブトレンチを設定し、この断面で確認したところＳＫ646に重複するフラスコ状土坑が存在する事が判明した。遺構検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］ＳＫ508・528・646に切られており、プラン南側では底面のみが残存する状況であった。残存部分で長径1.62m、短径1.06mであり、本来は円形のプランを呈したことが推察される。

［堆積土の特徴］ＳＫ646とＳＫＦ700を横断する方向で土層断面の観察を行ったが、記録作成前にベルトが崩落してしまい、一部の記録できなかった。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第132図10～12）、土器片円盤（同13・14）、スクレイパー類（同15・16）、フレイク８点などが出土した。

［時期］検出面および出土遺物より、晩期初頭と推察される。

ＳＫＦ702

［位置・検出状況］ＬＳ55グリッドに位置する。ＳＫ509の精査中、そのプランが不明瞭であったために周辺の遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げ、地山（Ⅶ層）上面で再度遺構プランを確認した。ＳＫ509の南側では依然としてプランが不明瞭であったため、サブトレンチを設定したところ別のフラスコ状土坑と重複している事が分かった。地山（Ⅶ層）上面で再度確認したところ、平面プランも把握出来たため、これをＳＫＦ702とした。

［概要］ＳＫ509の南西側に位置し、これに切られる。残存部で底面の長径は1.09mで、平面形はほぼ円形を呈したものと推察される。底面はほぼ平坦である。地山砂礫層（Ⅷ層）に達しており、確認面からの深さは0.73mを測る。

［堆積土の特徴］４層に分層した。褐色土と黒色土が互層を成している。

［出土遺物］土器破片（第２分冊第133図１～５）が出土した。

［時期］第133図２のみが晩期前葉の資料であるが、これはＳＫ509の遺物が混入した可能性がある。重複関係などから晩期初頭と推察される。

（３）柱穴様ピット

径0.7m以下の小型の遺構で、壁が垂直に立ち上がるもの、あるいは土層断面に柱痕跡が確認できるものについて柱穴様ピットとした。本来は複数の柱穴様ピットが組み合わせられて掘立柱建物跡などを形成したものと推察されるが、今回は掘立柱建物跡などは確認できなかった。今回の調査で

は156基が柱穴様ピットと判断した。その幾つかについては平・断面図を第２分冊第38図に掲載した。ＳＫＰ340、371、444などは覆土上部に拳大～30㎝程度の礫が配置されたものであり、極めて特徴的な検出状況を示していた。その他の柱穴様ピットについては、平面位置は付図を、出土遺物や平面規模などの情報については第１分冊第35表に掲載した。

柱穴様ピット内から出土した遺物の一部を第２分冊第133図６～第135図21に掲載した。第134図28はＳＫＰ444より出土した土偶である。頭部から胴部にかけてが柱穴内から出土しており、遺構外から出土した腕部と接合した。左胸、右腕、顔面や後頭部などは剥落している。正面の、丁度顔の付近には、破損後に付いたと思われる敲打痕が観察できる。

（４）土器埋設遺構

合計75基の土器埋設遺構を検出した。Ｖa層から地山（Ⅶ層）上面にかけて構築されており、土坑群の集中する位置よりやや東側に帯状に分布する傾向が認められる。埋設土器は文様帯を持たない地文のみの深鉢が多くその構築時期が明確なものは少ない。埋設土器は正立で埋められたものが最も多い。埋設方法の詳細については第６章で述べる。

調査方法：土器埋設遺構は、確認面で土器埋設時の掘り形プランの検出に努め、プランおよび埋設土器の確認状況を平面図化したのち断ち割り調査を行った。出土遺物については、基本的には１点ずつ番号を付し、平面位置と高さを記録した。約２㎝以下の小破片については、おおよその出土位置を［覆土上位・覆土下位］などと記録して取り上げた。

以下、各遺構についての詳細を遺構番号順に記述する。

ＳＲ06（第２分冊第39図・図版48）

［位置・検出状況］ＭＦ42グリッドに位置する。調査区西側に確認された河川跡の堆積土を除去し、縄文時代の遺物包含層と地山（Ⅶ・Ⅷ層）を露出させたところ、口縁部を一部失った状態で埋設された深鉢を検出した。検出面はＶ'b層である。

［概要］現存で長径0.42m、短径0.35m、深さ0.26mの掘り形に、深鉢（第２分冊第136図１）が正立した状態で埋設されていた。土器内３層、掘り形内が単層の４層に分層した。３層は炭化物を多量に含み、埋設土器内部に貼りつく様に分布している。これは、埋設された土器を用いて煮沸した際などに付着した炭化物に由来するものと推察される。

［出土遺物］検出面および１層より数点の土器片を検出した（第136図２・３）。

［時期］埋設土器および出土遺物により、晩期前葉と推察される。

ＳＲ07（第２分冊第39図・図版48）

［位置・検出状況］ＭＦ44グリッドに位置する。調査区西側に確認された河川跡の堆積土を除去し、縄文時代の包含層および地山を露出させたところ、埋設された深鉢を確認した。検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］現存で長径0.42m、短径0.35m、深さ0.40mの掘り形に深鉢（第２分冊第135図４）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内５層、掘り形内単層の６層に分層した。５層は埋設土器内部に沿うように分布している。土器内部に付着していた煤状炭化物に由来するものと推察される。

［出土遺物］検出面では埋設土器内に小石を多く検出したが、河川による撹乱を受けた際に堆積したものと思われる。この他、目立った遺物は検出されなかった。

［時期］遺構の検出位置や検出面から、晩期の可能性が高いが詳細な時期は不明である。

ＳＲ08（第２分冊第39図、図版48）

［位置・検出状況］ＭＦ44グリッドに位置する。ＳＲ06・07と同様、河川跡への堆積土を除去し、縄文時代の包含層および地山を露出させたところ、口縁部を欠いた深鉢が埋設されているのが確認できた。検出面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］現存で長径0.32m、短径0.30m、深さ0.27mの掘り形に深鉢（第２分冊第136図５）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内部より深鉢（同６）が出土した。底部破片は埋設内下位から正立した状態で、胴上部破片は１層上に内面を下にした状態で置かれていた。意図的に配置されたものと判断した。

［時期］出土遺物がいずれも地文のみの深鉢であるため詳細な時期は不明だが、遺構の構築位置や検出面などから、晩期の可能性が高い。

ＳＲ10（第２分冊第39図、図版48）

［位置・検出状況］ＭＤ49グリッドに位置する。重機を用いて表土除去を行った際、Ⅴ'a層で検出された。埋設土器の上部は後世の撹乱により失われていた。

［概要］ＳＫ397の西へ約20㎝に位置する。ＳＫＰ764を切る。現存で長径0.33m、短径0.28m、深さ0.21mの掘り形に、深鉢（第２分冊第137図１）が正立した状態で埋設されていた。土器内を４層、掘り形は単層の合計５層に分層した。４層は暗赤褐色の砂層で、分析の結果ベンガラが含まれる事が判明した（第５章第３節参照）。

［出土遺物］土器破片を僅かに出土したが、いずれも地文のみの小破片であった。

［時期］検出面から晩期の可能性が高い。

ＳＲ11（第２分冊第39図、図版48）

［位置・検出状況］ＬＴ49グリッドのⅤ'a層上面で、深鉢が埋設されている状況を確認した。

［概要］現存で長径0.62m、短径0.49m、深さ0.19mの不整円形の掘り込みに底部を欠いた深鉢（第２分冊第137図２）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内より微細な骨片が出土した。（第５章第７節参照）。

［出土遺物］埋設土器の内部より、打製石斧１点（第137図３）と土器破片（同５）が出土した。また、掘り形内より小型の壺（同４）１点、土器破片（同６・７）などが数点出土した。

［時期］埋設土器および出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＲ12（第２分冊第40図、図版48）

［位置・検出状況］ＭＢ46グリッドに位置する。調査区南部の撹乱壁面を、土層観察のため垂直に削ったところ、垂直方向に立った深鉢の口縁部が露出したため、土器埋設遺構の存在が明らかとなった。遺構構築面はⅥb層である。

［概要］現存で長径0.39m、深さ0.42mの掘り形にほぼ完形の深鉢（第２分冊第138図１）が正立した状態で埋設されていた。確認面では約20㎝大の礫を２点検出した。埋設土器の内部からはほぼ完形の小型の深鉢（同２）および大型の土器破片（同５）が出土した。２の小型深鉢は底部を上に、口縁を

下に倒立した状態で埋設土器内に入れられており、やや斜めに傾いて潰れた状態で出土した。５はこの土器の胴部破片に挟まるようにして出土した。

［出土遺物］埋設土器の内部より土器破片（同３・４）、敲石（同６）が出土した。

［時期］埋設土器および出土遺物から晩期と推察される。

ＳＲ13（第２分冊第40図、図版49）

［位置・検出状況］ＭＡ53グリッドに位置する。試掘調査時の４号トレンチ底面で検出した。トレンチにより上半部は欠損している。検出面は地山砂礫層（Ⅷ層）である。

［概要］現存で長径0.35m、深さ0.22mの掘り形に深鉢（第２分冊第137図８）が正立した状態で埋設されていた。土器内部を４層、掘り形が単層の合計５層に分層した。基本的に砂が主体の土層であるが、４層のみ特にしまりが弱く他の土層とは様相が異なっていた。４層については自然科学分析を実施している（第５章第３節参照）。

［出土遺物］埋設土器の内部から遺物は出土しなかった。

［時期］詳細な時期は不明であるが、埋設土器の形状などから晩期の可能性がある。

ＳＲ14（第２分冊第40図、図版49）

［位置・検出状況］ＬＰ59グリッドに位置する。Ⅴc層で埋設土器を確認した。土圧により口縁部は潰れ、破片が周囲に散乱していた。遺構構築面はⅥa層上面である。

［概要］長径0.57m、深さ0.34mの不整円形の掘り形に、深鉢（第２分冊第138図７）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器の内外に１層（Ⅴc層）が堆積しており、遺構はこの下部より構築されたことが分かる。

［出土遺物］埋設土器の内部より土器破片（同８～11）、石核（第139図１）、石鏃（同２）が出土した。

［時期］埋設土器から晩期前葉と推察される。

ＳＲ15（第２分冊第40図、図版49）

［位置・検出状況］ＬＴ49グリッドで、Ⅴ'a層の掘り下げ中に土器破片が集中する地点を確認した。土器埋設遺構である可能性を考え、出土遺物を残しながら周辺を精査したところ、遺物包含層（Ⅵa層）上面で掘り形プランを確認した。

［概要］長径0.47m、深さ0.26mの円形の掘り形に、深鉢（第２分冊第139図４）が正立した状態で埋設されていた。底部より約30㎝が残存し、これより上部は破片となって周囲に散乱していた。

［出土遺物］埋設土器内部の２層より土製耳飾（同３）が出土した。径13.3㎜と小型で全面赤彩されていた。副葬品と思われる。また、遺構確認面で埋設土器の破片と入り乱れて土器破片（同５～７）、磨・凹石類（同８）が出土した。

［時期］遺構の検出面および確認面の出土遺物から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ16（第２分冊第40図、図版49）

［位置・検出状況］ＭＡ50グリッドで、遺物包含層（Ⅵa層）上面を精査中に確認した。

［概要］長径0.36m、深さ0.14mの掘り形に口縁部および底部を欠いた深鉢（第２分冊第139図13）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内部からは大型の土器破片が出土しているが、このうち北西側に集中する９点が同一個体であった。その一部破片（第139図９）を掲載した。この他、埋設土器内より土器破片

(同10・11)が、掘り形底面より石皿片(同12)が出土した。埋設土器はこの上に置かれており、これらの遺物は埋設時に土器の高さを調整するために利用されたものと推察できる。

［時期］遺構の検出面および出土遺物から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ17(第２分冊第40図、図版49)

［位置・検出状況］ＭＦ43グリッドのⅤ'b層上面で確認した。土圧により口縁部が破損しており、破片は周囲に散乱していた。

［概要］長径0.38m、深さ0.16mの掘り形に深鉢(第２分冊第140図１)が、北側にやや傾いて正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器の内部からは遺物は出土しなかった。第140図２・３は、確認面で埋設土器に近接して出土した資料である。

［時期］遺構構築面および出土遺物より晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ19(第２分冊第41図、図版49)

［位置・検出状況］ＭＥ42グリッドで地山(Ⅶ層)上面を精査中に検出した。確認面には大型の礫が存在し、これにより口縁部が潰された状況が確認できた。口縁部を地面より１㎝程度露出させた段階で掘り形プランを確認した。

［概要］長径0.36m、深さ0.39mの円形の掘り形に、完形の深鉢(第２分冊第140図４)が正立した状態で埋設されていた。埋設土器は口縁部まで埋まっており、遺存状態は良好であった。

［出土遺物］１層中より数点の自然礫を検出した他、遺物は出土しなかった。

［時期］遺構構築面および埋設土器の形状から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ22(第２分冊第41図、図版50)

［位置・検出状況］ＬＴ51グリッドで、遺物包含層(Ⅵa層)を掘り下げ中に検出した。

［概要］長径0.39m、深さ0.40mのほぼ円形のプランに、ほぼ完形の深鉢(第２分冊第140図５)が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内３層、掘り形内単層の４層に分層した。３層および４層には自然礫が多く含まれていた。

［出土遺物］埋設土器内から遺物は出土しなかった。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＲ24(第２分冊第41図、図版50)

［位置・検出状況］ＬＰ60グリッドで遺物包含層(Ⅵa層)を精査中に確認した。土器は細かく割れており、確認時の平面プランでは埋設土器は大きく歪んでいた。

［概要］長径0.42m、深さ0.25mの掘り形内に深鉢(第２分冊第141図１)が正立した状態で埋設されていた。特にプラン北側では土器が細かく割れ、出土位置も不整合となっていた。砂礫を含まぬ粘質土層(Ⅶ層)に構築されていたため、周囲からの土圧で歪んだものと思われる。

［出土遺物］埋設土器内部から、数点の土器破片(同２・３)が出土した。この他に遺物は出土しなかった。いずれも埋設時に混入した遺物と推察される。

［時期］埋設土器内の出土遺物より、後期後葉の遺物包含層を掘って構築された遺構であると推察されるが、埋設土器自体は地文のみの粗製深鉢であり、遺構の構築時期は判断できなかった。

ＳＲ30(第２分冊第41図、図版50)

［位置・検出状況］ＭＢ47グリッドでⅤ'a層を精査中に確認した。確認面北側に大型の礫があり、これによって口縁部が圧迫され、割れていた。

［概要］長径0.30m、深さ0.25mの円形の掘り形に、口縁部を欠損した深鉢（第２分冊第141図４）がやや南西に傾いて正立した状態で埋設されていた。土器内の底部付近からは自然礫が１点出土した。意図的に埋められたものと判断した。埋設土器内の土層は４層に分層した。２層の灰黄褐色土が主体であり、人為的な埋め戻し土と判断される。なお、本遺構はＳＫ208の上部に構築されており、これより新しい。

［出土遺物］埋設土器内部の確認面から１層上部にかけて土器破片（同５）が出土した。このうち９点は埋設土器の破片であった。

［時期］出土遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＲ32（第２分冊第41図、図版50）

［位置・検出状況］ＭＡ48グリッドで地山（Ⅶ層）を若干掘り下げながら精査したところ、ほぼ円形に並んだ土器破片と掘り形プランが確認された。

［概要］確認面では長径0.37mでほぼ円形の掘り形プランを検出した。精査を進めると、埋設土器（第２分冊第141図６）の口縁部付近はほぼ円形に並んで出土したが、胴部は細かな破片となって「く」の字に折れ曲がり、プラン外側へと大きく膨らんで出土した。上部からの土圧により垂直方向に潰れて、胴部は外へ向けて大きく押し出されたものと判断した。本来は底部を欠いた深鉢を正立した状態で埋設したものであったと推察される。

［出土遺物］埋設土器内部２層より土器破片（同７）が出土した。

［時期］埋設土器内の出土遺物から、晩期中葉と推察される。

ＳＲ40（第２分冊第41図、図版50）

［位置・検出状況］ＭＣ47グリッドでⅤ'a層の掘り下げ中に検出した。埋設された土器の上部（口縁より約10㎝）は破片となって周辺に散乱していた。調査時には埋設土器の一部とは認識できず、包含層一括資料として取り上げたが、整理作業時に接合関係が確認され、埋設土器は口縁部まで復元された。

［概要］長径0.43m、深さ0.39mの円形の掘り形に口縁部を欠いた深鉢（第２分冊第141図８）が埋設されていた。掘り形底面に埋設土器の底部がほぼ接地していた。口縁部破片の出土状況など、遺構構築当初より埋設土器の口縁部が10㎝ほど地面から突出していた可能性がある。

［出土遺物］埋設土器内３層中より自然礫が１点出土した。意図的に埋められたものと推察される。１層上部からは数点の土器片（同９・10）や礫が出土した。

［時期］埋設土器は地文のみの深鉢であり帰属時期がはっきりしないが、１層より出土した遺物から晩期前葉と推察される。

ＳＲ44（第２分冊第41図、図版51）

［位置・検出状況］ＬＴ50グリッドで遺物包含層（Ⅵa層）中の遺物を残しながら掘り下げていたところ、それまで土器の底部破片と認識していたものが倒立した壺形土器（第２分冊第142図１）であることが分かった。掘り形プランも確認できたため、土器埋設遺構と認定した。

［概要］掘り形はⅥb層で確認したが、本来の構築面はⅥa層中であったものと推察される。長径

0.23mの円形プランで、検出面からの深さは0.80mを測る。埋設土器内および掘り形の埋土を３層に分層した。特に３層は焼土および炭化物の混入が顕著であった。

［出土遺物］掘り形の床面より、深鉢の底部破片（同２）が出土した。倒立した埋設土器の口縁部はこの上に置かれており、蓋として利用されたものと推察される。

［時期］埋設土器や出土遺物、検出面などから晩期前葉以降と推察される。

ＳＲ57（第２分冊第42図、図版51）

［位置・検出状況］ＭＤ・ＭＥ44グリッドで地山（Ⅶ層）上面を精査中に検出した。

［概要］長径0.50m、短径0.36m、深さ0.35mの楕円形の掘り形に深鉢（第２分冊第141図４）が正立した状態で埋設されていた。１層下部および掘り形の覆土中より、大型の土器破片が集中して出土した。埋設土器内部のものは蓋の役割を、掘り形内のものは埋め戻す際に土器を安定させるために利用されたものと推察できる。

［出土遺物］埋設土器内部の破片および掘り形内部の破片を接合したところ、２個体の深鉢（同５・６）が復元された。遺構構築時に破片の状態で、埋設土器に伴って埋められたものである。また、いずれの土器にも補修孔が認められる。

［時期］出土遺物および埋設土器はいずれも地文のみの深鉢であり、遺構構築時期は判断できない。

ＳＲ58（第２分冊第42図、図版51）

［位置・検出状況］ＭＢ44グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵ層）の堆積が希薄な地区の、旧表土（Ⅵ'層）で検出した。埋設土器の上部破片は１層上面および周辺に散乱していた。

［概要］掘り形は長径0.33mのほぼ円形で、確認面からの深さは0.21mを測る。深鉢の胴下半部（第２分冊第142図７）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内より遺物は出土しなかった。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＲ59（第２分冊第42図、図版51）

［位置・検出状況］ＭＤ45グリッドでⅤ'a層の掘り下げ中に、ほぼ直立した状態の土器破片を確認した。周囲をやや掘り下げたところ、土器破片が全周し一個体の土器であることが判明した。掘り形プランも確認されたことから、土器埋設遺構と認識した。

［概要］長径0.36m、短径0.31m、深さ0.25mのほぼ円形の掘り形に、口縁部を欠いた深鉢（第２分冊第143図１）が正立した状態で埋設されていた。胴上半部を不均一に欠損しており、また底部破片は段違いに検出された。以上の点から当遺構は既に割れていた深鉢を埋設したものと推察される。

［出土遺物］自然礫２点が覆土上部より出土したが、遺物は出土しなかった。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＲ60（第２分冊第42図、図版51）

［位置・検出状況］ＭＥ45グリッドで、遺物包含層（Ⅵ層）の掘り下げ中に垂直方向に立った土器破片が集中する箇所を確認した。この土器破片の配置や広がりを確認したところ、ほぼ円形に配置しており、掘り形プランも確認できたため土器埋設遺構と認識した。構築面は地山（Ⅶ層）上面である。

［概要］長径0.43m、短径0.35m、深さ0.15mの掘り形に口縁部を欠いた深鉢（第２分冊第143図２）が正位で埋設されていた。埋設土器の器形に比し、掘り形は浅く壁も緩やかに広がっており、埋設土

器はこの掘り形に沿って壁に貼りついた状態で出土した。埋設後に、土圧等で割れて検出時の状態になったと推察される。なお、埋設土器の内外面には煤の付着は認められず、煮沸等に使用されたものとは考えにくい。

［出土遺物］確認面では埋設土器内に数点の自然礫を検出した。また、埋設土器内部より土器破片（同３）が出土した。

［時期］検出位置や検出面から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ62（第２分冊第42図、図版51）

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ51で遺物包含層（Ⅵ層）の掘り下げ中に、垂直方向に直立した土器破片と石皿を確認した。遺構プランの確認を試みたが、土壌が鉄分を帯びて酸化しておりプランが確認できなかった。そこで、土層観察用のベルトを残して土器破片の周囲を掘り下げたところ、口縁を下に向けた倒立状態の無文の深鉢（第２分冊第143図４の胴上半部）であることが判明した。土層断面で掘り形プランが確認できたため、土器埋設遺構と判断した。検出面は遺物包含層（Ⅵa層）中である。

［概要］無文の深鉢（第２分冊第143図４）の口縁から胴上半部が、倒立した状態で埋設されていた。埋設土器の規模から推定して、長径0.42m程度の円形の掘り形と推察される。掘り形の底面はほぼ平坦で、土器片８点が並んで出土した。整理作業時にこれら土器破片が埋設土器の胴下半部であることが判明した。こうした状況から本遺構の構築方法は、埋設土器の胴下半部を掘り形底面に敷いた後、胴上半部を逆さまにしてかぶせたものと判断できる。

［出土遺物］遺構の確認面より石皿（同５）が出土した。また、スクレイパー類（同６・７）を遺構周辺部より出土した。

［時期］検出面から、晩期初頭～前葉に構築された可能性が考えられる。

ＳＲ76（第２分冊第42図、図版51）

［位置・検出状況］ＭＤ45グリッドで遺物包含層（Ⅵa層）掘り下げ中に、礫の集中する箇所を確認した。礫のみを残して周囲を掘り下げたところ、垂直に立っている土器破片を検出した。土器破片の周囲を掘り下げたところ、底部を有する一個体の土器であることが分かった。この土器の北側では掘り形プランが確認できたため、土器埋設遺構と認定した。

［概要］掘り形は南側半分を失っているが、残存部から類推して楕円形を呈していたものと推察される。残存部で長径0.45m、深さは0.25mを測る。深鉢（第２分冊第144図１）が正立した状態で埋設されているが、南側は大きく欠損している。確認面ではやや大きめの自然礫が出土しており、土器を埋設した後、意図的に配されたものの可能性がある。

［出土遺物］数点の土器破片が出土した。そのうち１点（同２）を掲載した。

［時期］埋設土器が地文のみの粗製土器であり時期決定の要素に欠けるが、底部形状が特徴的であり、後期末葉の可能性がある。

ＳＲ84（第２分冊第43図、図版51）

［位置・検出状況］ＭＢ47グリッドで遺物包含層（Ⅵa層）を掘り下げ中に、やや大型の土器破片が集中する地点を確認した。周囲を掘り下げて観察したところ、土器の底部が現れ、一個体の深鉢が埋設されていることが判明した。土層断面および平面で掘り形プランが確認できたため、これを土器

埋設遺構と判断した。埋設土器内の確認面には大型の柔らかい凝灰岩が東側の口縁部に寄りかかるようにして検出された。意図的に配されたものと判断した。

［概要］現存で長径0.35m、深さ0.21mの掘り形に深鉢（第２分冊第144図６）が正立した状態で埋設されていた。掘り形北半分では埋設土器の口縁から胴下半部にいたるまでを欠損しており、南側でも口縁部が破片となって散乱していた。当遺構の調査終了後、この北側にＳＫ208が検出されたが、両遺構の平面配置や検出状況を検討した結果、ＳＫ208は本来遺物包含層（Ⅵ層）以上からＳＲ84を切って構築されていた可能性が高い。

［出土遺物］埋設土器内部および掘り形内から土器破片（同３～５）が出土した。また、１層下位からは拳大の円礫が検出された。意図的に埋められたものと推察される。

［時期］出土遺物および遺構検出面から晩期前葉と推察される。

ＳＲ85（第２分冊第43図、図版52）

［位置・検出状況］ＭＢ47グリッドに位置する。本グリッドでの遺構精査を一度終えた後、地山（Ⅶ層）を掘り下げて遺構の有無を確認していたところ、本遺構を検出した。

［概要］長径0.32m、短径0.31mで深さ0.16mの不整円形の掘り形に、深鉢の胴下半部（第２分冊第144図７）が正立した状態で埋設されていた。覆土は４層に分層したが、１層は遺物の混入も多くその土色や特徴などからも遺物包含層（Ⅵ層）の流れ込みと思われる。

［出土遺物］１層中より数点の土器破片（同８・９）が出土した。

［時期］出土遺物から晩期前葉以前に構築されたものと推察される。

ＳＲ86（第２分冊第43図、図版52）

［位置・検出状況］ＭＣ・ＭＤ45、ＭＣ・ＭＤ46グリッドにまたがって位置する。地山（Ⅶ層）上面で土坑（ＳＫ80）と重複する土器埋設遺構を確認した。確認面からも埋設土器内への大型礫の混入が確認できた。また、土坑と接する付近では埋設土器の破損が著しかった。

［概要］ＳＫ80と接する付近はプランがやや不明瞭であったが、およそ長径0.48m、深さ0.23mで円形の掘り形に、口縁部を欠損した深鉢（第２分冊第145図１）が正立した状態で埋設されていた。ＳＫ80との新旧関係について土層の観察や埋設土器の出土状況を慎重に精査したところ、埋設土器の一部が、ＳＫ80の覆土上部に順序を保ったまま、流れ込んだ状態で検出された。これにより、ＳＲ86構築時にはＳＫ80が既に存在し、埋まり切らない状態であったと考えられる。以上の事から、ＳＲ86がＳＫ80より新しい、あるいはほぼ同時期の構築と推察できる。

［出土遺物］確認面に集中していた礫の中に、石皿片（同３）と磨・凹石類（同４）が確認された。埋設土器内からは土器破片（同２）が出土したが、これと同一個体の破片が本遺構周辺から出土しており、埋設時に混入したものと判断できる。他に１層中位より骨片が出土している（第５章第７節参照）。

［時期］出土遺物や重複関係などから晩期前葉と推察される。

ＳＲ87（第２分冊第43図、図版52）

［位置・検出状況］ＭＡ46グリッドに位置する。グライ化した地山（Ⅶ層）上面で、ＳＫ88の西側に検出した。掘り形はやや不明瞭ながらも確認できた。ＳＫ88の平面プランが不明瞭で本遺構との重複関係が判断できなかったため、土層断面で確認した。

［概要］ＳＫ88を切る。長径0.29m、深さ0.34mの円形の掘り形に完形の深鉢（第２分冊第144図10）が埋設されていた。掘り形の規模が埋設土器とほぼ一致しており、口縁部まで埋まっていた。埋設土器は底部付近が一部欠損しており、意図的とも思われる。土器の周囲には大型の自然礫が３点検出されたが、意図的なものか否かは不明である。

［出土遺物］埋設土器内から遺物は出土しなかった。

［時期］詳細な時期は不明だが、埋設土器の器形から晩期の可能性が高い。

ＳＲ94（第２分冊第43図、図版52）

［位置・検出状況］ＬＳ51グリッドに位置する。平成15年度の調査で、遺物包含層（Ⅵ層）上面で確認し、翌平成16年度に調査を実施した。30㎝大の礫が南側の口縁に乗っており、口縁部が潰れていた。

［概要］開口部が長径0.58m、短径0.50mのほぼ円形で深さ0.35mの掘り形に、口縁部を欠いた深鉢（第２分冊第145図５）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器は内外面とも煤などの付着は認められず、煮沸等に使用されたものとは考えられない。

［出土遺物］埋設土器内には小さな土器破片（同６）が混入するのみであった。

［時期］埋設土器の器形および遺構検出面から、晩期前葉から中葉と推察される。

ＳＲ245（第２分冊第43図、図版52）

［位置・検出状況］ＬＳ58グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げ中に検出した。土圧により割れた口縁部破片が外にずれ込み、３重に重なっていた。

［概要］長径0.38m、深さ0.31mのほぼ円形の掘り形に、口縁部を欠いた深鉢（第２分冊第146図１）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内、底部付近（３層下部）よりＲＦ（第146図５）が出土した。意図的に埋められたものと判断した。この他、土器破片（同２～４）が出土したが、これらは埋設時に混入したものと推察される。

［時期］出土遺物から晩期初頭と推察される。

ＳＲ246ａ（第２分冊第44図、図版53）

［位置・検出状況］ＭＢ49グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げ中、垂直方向に立った土器破片を確認した。掘り下げながら確認したところ、土器破片は半円状に連続していたが、南西側では検出されなかった。土器埋設遺構が別の遺構に切られている状況と考え、土器埋設遺構をＳＲ246とした。確認面で重複する遺構プランの検出につとめたが、明確には確認できなかった。そこで、埋設土器のほぼ中央を通る位置で土層断面を観察し、ＳＫ367、ＳＫＰ246ｂが重複していることを確認した。

［概要］ＳＫ367およびＳＫＰ246ｂに切られる。埋設土器の破片はＳＫＰ246ｂの覆土中に散乱していた。残存部で長径0.42m、深さ0.38mの掘り形に、深鉢（第２分冊第146図６）が正立した状態で埋設されていた。土器は底部が欠損しているがＳＫＰ246ｂの構築時に失われたものと推察される。

［出土遺物］覆土上部より土器破片（同７・８）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ247（第２分冊第44図、図版53）

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ49グリッドでＭＣラインの土層観察ベルトの東側に、深鉢の口縁部が半月状に突出しているのを確認した。ベルトを遺物包含層(Ⅵ層)上面まで掘り下げたところ、全周する土器の口縁部および掘り形プランが検出されたため、土器埋設遺構と認識した。

［概要］長径0.44m、短径0.42m、深さ0.25mのほぼ円形の掘り形に、深鉢(第２分冊第147図１)がやや南東方向に口縁を傾けた状態で埋設されていた。

［出土遺物］１・２層から土器片(同２～４)、ＲＦ(同７)を検出した。掘り形内の確認面付近よりＲＦ(同５)、スクレイパー類(同６)が出土した。いずれも意図的に埋められたものと判断できなかった。

［時期］出土遺物、埋設土器とも晩期初頭の特徴を示しており、この時期に構築されたものと推察される。

ＳＲ248(第２分冊第44図、図版53)

［位置・検出状況］ＭＢ48グリッドの地山(Ⅶ層)上面、ＳＫ332の南側で検出した。当初、重複する遺構の存在を見極められなかったが、土器埋設遺構の土層断面を確認したところＳＫ328を切って構築されていることが判明した。

［概要］ＳＫ328を切る。長径0.44m、深さ0.45mの掘り形に完形の深鉢(第２分冊第147図８)が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内の底部には一部を欠損した小型の鉢(同12)が正立した状態で検出された。意図的に埋められたものと判断した。

［出土遺物］埋設土器内より土器破片(同９～11)が、掘り形より磨製石斧の刃部破片(同13)が出土した。

［時期］出土遺物より晩期前葉～中葉と推察される。

ＳＲ249(第２分冊第44図、図版53)

［位置・検出状況］ＬＲ59グリッドでⅤ'a層を掘り下げたところ、１辺約30㎝の板状の石皿(第２分冊第148図１)が出土した。周囲を掘り下げて確認したところ、石皿の下に埋設土器を確認した。

［概要］遺物包含層(Ⅵ層)上面より、深さ0.30mほど掘り込んで構築されている。平面プランは径0.90mのほぼ円形を呈し、無文の深鉢(同３)が正位で埋設されていた。石皿は埋設土器の内部より、西側が深く沈みこんだ状態で検出された。蓋として利用されたものと判断した。

［出土遺物］掘り形内部より土器破片(同２)が出土した。

［時期］検出面および埋設土器から後期末から晩期初頭の可能性が考えられる。

ＳＲ250(第２分冊第44図、図版53)

［位置・検出状況］ＭＢ49グリッドの遺物包含層(Ⅵa層)上面で、礫と土器破片が集中する地点を確認した。掘り下げながら観察したところ、埋設土器の存在が明らかとなった。

［概要］長径0.58m、短径0.46m、深さ0.30mの不整円形の掘り形に、深鉢(第２分冊第148図６)が正立した状態で埋設されていた。土圧により垂直方向に潰れており、胴部破片は外側へ歪に広がっていた。埋設土器内は５層に分層した。下位の３～５層はやや砂質であった。

［出土遺物］確認面から覆土上部より土器破片(同４・５)を、確認面から磨・凹石類(同７)が出土した。また、埋設土器底部付近から自然礫が１点出土した。他の遺構の例からも、意図的に入れられたものである可能性が高い。

［時期］検出面、埋設土器や確認面の出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＲ251（第２分冊第44図、図版54）

［位置・検出状況］ＭＢ49グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）を精査中に確認した。掘り形プランが不明瞭であったため、土器の検出状況を図化したのち、土層断面位置から半分側のみを徐々に掘り下げ、プランの検出に努めた。最終的には土層断面の観察を基に、掘り形プランを検出した。

［概要］長径0.50m、短径0.40mの楕円形で、確認面からの深さが0.29mの掘り形に深鉢（第２分冊第149図１）がやや南西方向に口縁を傾けて埋設されていた。土圧による影響か、北側では埋設土器が割れて大きく乱れていた。

［出土遺物］１層上位から土器破片（同２～５）を、掘り形内よりスクレイパー類（同６）を検出した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期初頭～前葉の構築である可能性が高い。

ＳＲ270（第２分冊第45図、図版54）

［位置・検出状況］ＭＣ48グリッドで地山（Ⅶ層）上面を精査中に、口縁部と思われる土器破片が歪な半円を描き、その内側に拳大の礫の集中している状況を確認した。土器埋設遺構と判断し、掘り形プランの把握に努めたが、明確にできなかったため、土層観察の位置を設定して断ち割り、土層断面の観察を基に平面プランを確認した。

［概要］掘り形プランおよび埋設土器は横からの土圧によって歪に変形していた。掘り形プランは残存部で長径0.40mを測る。また、確認面からの深さは0.39mである。掘り形内には深鉢（第２分冊第149図７）が正立した状態で埋設されていたようだが、検出時には胴上半部と底部付近は南北方向にずれて検出された。埋設土器内の南側、２層から３層上位にかけて拳大の礫が集中している。土器の検出状況と何らかの因果関係が考えられる。

［出土遺物］１層上位から３層中位にかけて小型の深鉢（同８）が出土した。この他、土器破片（同９・10）およびＲＦ（同11）が出土した。

［時期］出土遺物および埋設土器の形態、検出面から晩期初頭から前葉に構築されたものと推察される。

ＳＲ271（第２分冊第45図、図版54）

［位置・検出状況］ＬＳ55グリッドでⅤ'a層を掘り下げ中に、２基の土器埋設遺構が並んでいるのを確認した。このうち北西側のものをＳＲ271とした。掘り形プランは不明瞭であったため、断ち割って土層断面の観察をもとに検出した。約0.2ｍの間隔で隣接するＳＲ272と重複している可能性も考慮し、この２基を横断する位置で土層断面を観察したが、重複関係は認められなかった。

［概要］ほぼ完形の深鉢（第２分冊第149図12）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器の出土位置から、掘り形は長径0.39m、深さ0.40mのほぼ円形を呈していたものと推察できる。

［出土遺物］ＳＲ272と同時進行で調査したため、遺物取り上げ時に一部の遺物が混ざってしまった。これらはＳＲ271・272出土として提示した（第150図６～８）。

［時期］詳細な時期は不明だが、検出面から晩期と推察される。

ＳＲ272（第２分冊第45図、図版54）

［位置・検出状況］ＬＲ55グリッドでⅤ'a層を精査中、２基の土器埋設遺構が並んでいるのを確認した。このうち南東側のものをＳＲ272とした。ＳＲ271と同様、掘り形のプランが不明瞭であった

ため、土層断面の観察を基に検出した。

［概要］長径0.44m、深さ0.35mの円形の掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第150図１）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内の底部付近には小型の深鉢（同２）が正立して出土した。意図的に埋められたものと判断した。

［出土遺物］ＳＲ272と同時進行で調査したため、遺物取り上げ時に一部の遺物が混ざってしまった。これらはＳＲ271・272出土として提示した（第150図６～８）。埋設土器上部から大型の石皿片（同５）が出土しており、意図的に配されたものと判断した。この他、数点の土器破片（同３・４）が出土した。

［時期］検出面から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ273（第２分冊第45図、図版54・55）

［位置・検出状況］ＬＲ56グリッドでⅤ'a層を掘り下げ中に、２基の土器埋設遺構が並んでいるのを確認した。このうち西側のものをＳＲ273とした。掘り形プランは明瞭であった。隣接するＳＲ274の掘り形を切っているように見えたため、両者を貫く土層観察ベルトを設定したが、新旧関係は土層断面に現れなかった。確認面での平面観察からＳＲ273がＳＲ274より新しいと思われる。

［概要］長径0.52m、短径0.49m、深さ0.15mのほぼ円形の掘り形に、やや小型の深鉢（第２分冊第150図９）が西側に傾いて埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器の内部から遺物は出土しなかった。

［時期］埋設土器より晩期前葉と推察される。

ＳＲ274（第２分冊第45図、図版55）

［位置・検出状況］ＬＲ56グリッドでⅤ'a層を精査中に、２基の土器埋設遺構が並んでいるのを確認した。東側のものをＳＲ274とした。確認面での掘り形プランは比較的明瞭であり、北側はＳＫ494に切られている状況が確認された。

［概要］長径0.53mの不整円形の掘り形で、深さは0.37mを測る。胴上半部を欠損した深鉢（第２分冊第151図１）が、掘り形の中央に正立した状態で埋設されていた。ＳＫ494に切られており、埋設土器北側の破片は失われていた。

［出土遺物］埋設土器底部に深鉢の大型破片（第151図３：複数に割れていたが全て同一個体）が、内面を上に向けて重ねられた状態で出土した。意図的に埋められたものと判断した。この他、数点の土器破片（同２）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ275（第２分冊第45図、図版55）

［位置・検出状況］ＬＲ57グリッドでⅤ'a層を掘り下げ中に確認した。

［概要］長径0.42m、深さ0.39mの掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第151図４）が正立した状態で埋設されていた。上部からの土圧により、埋設土器の口縁部が割れ、外側にやや開いた状態で検出された。なお、本遺構の精査終了後に北東側にＳＫ600が確認されている。

［出土遺物］埋設土器内３層中で、大型の土器破片（同５）が内面を下に向けて出土した。蓋の役割を果たしたものと推察される。また４層中、埋設土器のほぼ中央で自然礫が１点出土している。これも意図的に埋められたものであろう。また、１層下位より石匙の破片（同６）が出土している。

［時期］埋設土器が地文のみの粗製土器であるため、その帰属時期が明確ではない。検出面を考慮すれば、晩期の可能性が高い。

ＳＲ276（第２分冊第46図、図版55）

［位置・検出状況］ＭＢ49グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）を掘り下げ中に検出した。当初、土器破片の集中と認識したが、掘り下げながら観察したところ、一個体の土器であることが判明した。掘り形プランも確認されたため土器埋設遺構と認識した。

［概要］掘り形は長径0.54m、短径0.42mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約0.15mで、底面から壁まで緩やかに湾曲する。深鉢（第２分冊第152図２）の破片が掘り形壁面に沿って出土し、この内部には別の深鉢（同１）の破片が積み重ねられていた。この積み重ねられた土器破片は底部付近→口縁部破片→胴部破片の順に下から重なっており、口縁部までは内面を上に向けて、胴部破片は内面を下に向けて重ねられていた。他の土器埋設遺構と比較しても特異な出土状況である。

［出土遺物］２個体の深鉢の他に遺物は出土しなかった。

［時期］埋設土器と出土遺物から、後期末～晩期初頭と推察される。

ＳＲ286（第２分冊第45図）

［位置・検出状況］ＭＤ50グリッドで地山（Ⅶ層）上面で検出した。この地区では遺物包含層（Ⅵ層）の堆積が希薄であった。

［概要］長径0.42m、短径0.34mのほぼ円形の掘り形に、深鉢の胴下半部（第２分冊第152図３）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内より、土器破片（同４・５）が出土した。

［時期］時期決定の資料に乏しいが、埋設土器の底部がやや上げ底で、網代痕を持つなどやや古手の土器の特徴を持っているように思える。出土遺物からも後期後葉の可能性が考えられる。

ＳＲ287（第２分冊第45図）

［位置・検出状況］ＭＤ50グリッドで地山（Ⅶ層）上面で検出した。

［概要］ＳＫ460を切る。長径0.45m、短径0.44m、深さ0.41mの掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第152図４）が正立した状態で埋設されていた。確認面から１層中位にかけて、拳大の礫を比較的多く出土した。

［出土遺物］埋設土器内の１層より、磨・凹石類（同７）が出土した。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＲ305（第２分冊第46図、図版55）

［位置・検出状況］ＭＢ51グリッドに位置する。調査区中央部に東西方向に溝状に横断する撹乱の土を除去したところ、壁面に深鉢の一部が露出した。この調査区が地山（Ⅶ層）まで掘り下げられた段階でその全体が平面的に検出されたため、土器埋設遺構と認定した。

［概要］長径0.37mのほぼ円形の掘り形で、深さは0.27mを測る。深鉢の胴下半部（第２分冊第153図１）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内の底部より磨・凹石類（同２）が１点出土した。意図的に埋められたものである可能性が高い。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＲ339（第２分冊第15図、図版55）

［位置・検出状況］ＭＢ・ＭＣ48グリッドに位置する。ＭＣラインに設定した土層観察ベルトの西側に、深鉢の一部が露出していた。土層観察ベルトを掘り下げたところ地山（Ⅶ層）上面で掘り形プランを確認したため、土器埋設遺構と認定した。

［概要］ＳＫ433を切る。長径0.54m、短径0.41mのやや東西に長い円形で、深さは0.29mの掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第153図３）が正立した状態で埋設されていた。確認面から埋設土器底部にかけて、礫が多量に検出された。埋設土器底部には人頭大の礫が埋められ、覆土はほとんどない。覆土上位の礫の重量によって埋設土器の上部は破片となり原位置よりずれていた。また、掘り形底面からも礫が数点検出された。埋設土器を安定させるために入れられたものと推察される。

［出土遺物］埋設土器内からは遺物は出土しなかった。

［時期］重複する土坑の時期から判断して、晩期前葉以降に構築されたものと推察される。

ＳＲ343（第２分冊第46図、図版56）

［位置・検出状況］ＬＲ58グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で検出した。

［概要］長径0.38m、深さ0.31mのほぼ円形の掘り形に、完形の深鉢（第２分冊第153図４）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内は３層に分層した。２～３層には地山（Ⅶ層）粘土のブロックを多く含んでおり、埋め戻しの人為堆積と認識した。１層は遺物の混入具合や、掘り形内にも同一の土層が確認できることから、土器を埋設した後に堆積したものと判断した。

［出土遺物］確認面より土器破片（同６）、ＲＦ（同11）、有孔石成品（同10）を、１層中より小型の土器（同５）、ＲＦ（同12）を、２層中より土器破片（同７・８）が出土した。３層上面からは磨製石斧（同９）が出土しており、これは意図的に埋められた副葬品と推察される。

［時期］２層中より出土した土器破片から、後期後葉の可能性がある。

ＳＲ368（第２分冊第47図、図版56）

［位置・検出状況］ＬＲ55グリッドの地山（Ⅶ層）上面で検出した。グライ化した粘質土層であったが、掘り形プランは比較的明瞭に確認できた。確認面にはやや大型の礫２点がのっていた。

［概要］長径0.29m、深さ0.36mの掘り形に、完形の深鉢（第２分冊第154図１）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］１層中より僅かに土器破片（同２・３）が出土した。

［時期］検出面および埋設土器の形態、出土遺物などから後期後葉の可能性がある。

ＳＲ390（第２分冊第47図、図版56）

［位置・検出状況］ＬＳ54グリッドでⅤ'a層の掘り下げ中に、垂直に直立する土器破片が半円状に並んでいるのを確認した。掘り下げたところ１個体の土器であることが判明した。掘り形プランも確認できたため、土器埋設遺構と判断した。遺構検出面は遺物包含層（Ⅵ層）上面である。

［概要］長径0.32m、短径0.29mのほぼ円形の掘り形に、胴部が丸く膨らむ深鉢の胴下半部（第２分冊第154図４）が正立した状態で埋設されていた。確認面からの深さは0.10mを測る。土器の上部は南側からの圧力でずれていた。原位置を保っていたのは底部付近のみである。

［出土遺物］確認面より土器破片（同５）が出土した。その他、埋設土器内から遺物は出土しなかった。

［時期］検出面より晩期初頭から前葉の可能性がある。

ＳＲ403（第２分冊第47図、図版56）

［位置・検出状況］ＭＢ50グリッドの地山（Ⅶ層）上面で検出した。掘り形プランも比較的明瞭に確認された。

［概要］長径0.50m、短径0.47m、深さ0.25mの不整円形の掘り形に、深鉢（第２分冊第154図６）が南にやや口縁を向けた正立した状態で埋設されていた。本来は完形の深鉢であったのだろうが破損が著しく、口縁から胴下半部までが大きく欠損していた。

［出土遺物］掘り形内より石核（同７）が１点出土した。

［時期］検出面や埋設土器の特徴から後期後葉から晩期初頭の可能性がある。

ＳＲ417（第２分冊第47図）

［位置・検出状況］ＬＲ57グリッドでⅤ'a層の掘り下げ後、遺物包含層（Ⅵa層）上面で、３基の土器埋設遺構が隣り合った状態で検出された。このうち最も北側に位置するものをＳＲ417とした。

［概要］長径0.46m、短径0.40m、深さ0.37mのほぼ円形の掘り形に、口縁部を欠いた深鉢（第２分冊第155図１）が正立した状態で埋設されていた。埋設土器内の覆土は４層に分層した。２層と３層は境が不明瞭である。４層は赤味を帯びており、分析の結果、ベンガラを含んでいることが明らかになった（第５章第３節参照）。遺物は１層を中心に出土したが、総じて出土遺物は少なかった。

［出土遺物］１層および３層より土器破片（同２・３）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から晩期初頭の可能性がある。

ＳＲ418（第２分冊第47図、図版56・57）

［位置・検出状況］ＬＲ57グリッドでⅤ'a層の掘り下げ後、遺物包含層（Ⅵa層）上面で、３基の土器埋設遺構が隣り合った状態で検出された。このうち最も南側に位置するものをＳＲ418とした。

［概要］長径0.44m、短径0.38m、深さ0.38mの掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第155図４）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］埋設土器内３層上面に一個体の深鉢の破片（同５）が内面を下にして敷き詰められていた。また、確認面には板状の礫がのっていた。この他、確認面と２層から土器破片（同６・７）が出土した。

［時期］検出面および出土遺物から、晩期初頭の可能性がある。

ＳＲ419（第２分冊第47図、図版57）

［位置・検出状況］ＬＲ・ＬＳ57グリッドでⅤ'a層の掘り下げ後、遺物包含層（Ⅵa層）上面で、３基の土器埋設遺構が隣り合った状態で検出された。このうち最も西側に位置するものをＳＲ419とした。

［概要］長径0.50m、短径0.42m、深さ0.17mの楕円形の掘り形に、深鉢（第２分冊第156図１）が正立した状態で埋設されていた。上部からの土圧により、口縁部が割れて外側に広がっていた。プラン西側には暗灰黄色粘質土（１層）が分布し、断面にも示したようにこの位置の土器が欠損している。重複する遺構である可能性も考えたが、壁の形状や底面が一定せず、人為的なものと考えにくかったので、遺構とはしなかった。

［出土遺物］埋設土器は、表面全体に粘土紐の痕跡を残す。基本的には無文であるが、実測図および拓本に示したように一部分のみ縄文を転がしている。この他、２層より土器破片（同２）を、確認

面より磨・凹石類(同３)を検出した。

［時期］検出面からから晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ452(第２分冊第47図、図版58)

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドに位置する。遺物包含層(Ⅵa層)上面で確認した。

［概要］長径0.31m、深さ0.32mの円形の掘り形に、深鉢の胴下半部(第２分冊第156図４)が正立した状態で埋設されていた。土層は埋設土器内で３層、掘り形内で２層の合計５層に分層した。

［出土遺物］埋設土器内から遺物は出土しなかった。

［時期］検出面から、晩期初頭～前葉の可能性がある。

ＳＲ453(第２分冊第47図、図版58)

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドの遺物包含層(Ⅵa層)上面で確認した。

［概要］長径0.35m、深さ0.43mの円形の掘り形に、完形の深鉢(第２分冊第156図５)が正立した状態で埋設されていた。ＳＫ556の上部に堆積した遺物包含層(Ⅵ層)の上面より構築されており、掘り形が一部ＳＫ556の堆積土を切っている。

［出土遺物］確認面より自然礫が６点ほど集中して検出されている。また、２層上部からは拳大の柔らかい凝灰岩が１点出土している。意図的に埋められた可能性がある。

［時期］検出面と埋設土器から、晩期前葉と推察される。

ＳＲ454(第２分冊第48図、図版57)

［位置・検出状況］ＬＳ51グリッドの遺物包含層(Ⅵa層)上面で確認した。周囲をやや掘り下げたところ、２基の土器埋設遺構が重複している事が分かった。先に確認されたものをＳＲ454とした。

［概要］ＳＲ550の西側位置し、これを切る。長径0.43m、短径0.37m、深さ0.35mの掘り形に完形の深鉢(第２分冊第157図１)が正立した状態で埋設されていた。３層は埋設土器底部に沿うようにして検出された暗赤褐色土で、分析の結果ベンガラを含むことが判明した(第５章第３節参照)。

［出土遺物］１層より小型の自然礫と土器片(同２)が少量出土した。

［時期］検出面と出土遺物から晩期の可能性が高い。

ＳＲ455(第２分冊第48図、図版58)

［位置・検出状況］ＬＲ・ＬＳ52グリッドのＳＱ20より北西約２mの位置で、遺物包含層(Ⅵa層)を掘り下げ中に確認した。ほとんど欠損しない口縁部が全周しており、遺存状態は良好であった。

［概要］長径0.41m、深さ0.37mで円形の掘り形に、完形の深鉢(第２分冊第157図５)が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］１層中より、拳大の自然礫を２点検出した。この他、土器破片(同３・４)が出土した。

［時期］埋設土器および出土遺物から、晩期前葉と推察される。

ＳＲ475(第２分冊第48図、図版58)

［位置・検出状況］ＬＳ57グリッドの遺物包含層(Ⅵa層)上面で、歪に変形しつつも全周する土器破片を確認した。掘り形の検出に努めたが確認できず、裁ち割り調査の結果、Ⅵb層上面で掘り形を確認することができた。

［概要］ＳＫＦ584の西側に隣接している。直接重複はしていないが、ＳＫＦ584上部に堆積する土層によって東側から押しつぶされたようになって埋設土器が出土した。掘り形は確認面で長径

0.31m、短径0.27m、深さ0.24mであり、深鉢の胴下半部（第２分冊第157図６）が正立した状態で埋設されていた。構築面はⅥb層と思われ、土器は地面から約10㎝突出した状態だったと思われる。

［出土遺物］埋設土器内より若干の土器破片や礫を出土している。このほか、確認面から土器破片（同７）が出土した。

［時期］検出面から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ483（第２分冊第48図、図版58・61）

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドでＳＱＮ484を確認した後、この部分を残しつつ周辺を掘り下げたところ、ＳＱＮ484の下部に土器埋設遺構が確認できた。確認面は遺物包含層（Ⅵa層）中である。

［概要］ＳＱＮ484と平面位置は重複するが、上部に重なっているのみでほとんど破壊は受けていない。長径0.51m、短径0.44mの不整円形の掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第158図１）が正立した状態で埋設されていた。掘り形は、底面から中段までは垂直に近く、中段より確認面までは湾曲しながらも開く形である。

［出土遺物］１層中から拳大よりやや大きな自然礫が３点出土している。また、土器片も比較的多く含まれており、うち数点を掲載した（同２～５）。この他、ＲＦ（同６）が出土している。

［時期］埋設土器から晩期前葉と推察されるが、時期決定の材料に乏しく断定できない。

ＳＲ485（第２分冊第48図、図版59・61）

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ52グリッドでⅤ'a層を掘り下げ、遺物包含層（Ⅵa層）上面に達したところで確認された。掘り形プランは不明瞭で、埋設土器外を掘り下げた後に断面より検出した。

［概要］確認できた範囲で、長径0.35m、深さ0.37mの掘り形である。平面形は円形を呈していたものと推察される。ほぼ完形の深鉢（第２分冊第158図７）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］２層より大型の礫が出土した。人為的に埋められたものと推察した。また、僅かに土器片が出土したが、時期の特定できる資料は無かった。

［時期］詳細な時期は不明である。

ＳＲ486（第２分冊第48図、図版59）

［位置・検出状況］ＭＡ52グリッドで遺物包含層（Ⅵa層）を精査中に、ＳＲ485より西へ約1.5mの地点で確認した。

［概要］長径0.40m、短径0.38m、深さ0.35mのほぼ円形の掘り形に、完形の深鉢（第２分冊第158図８）が正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］２・３層より土器破片（同９・10）などを比較的多く検出した。埋設土器底部付近より、拳大の柔らかい凝灰岩が検出された。意図的に埋められたものと判断した。

［時期］埋設土器の特色から晩期と推察されるが、詳細な時期については不明である。

ＳＲ487（第２分冊第48図、図版59）

［位置・検出状況］ＳＲ273より西へ１m、ＬＳ56グリッドの遺物包含層（Ⅵa層）上面で検出した。

［概要］長径0.36m、深さ0.37mの掘り形に口縁部を一部欠いた深鉢（第２分冊第158図11）が、口縁をやや西側に傾けて正立した状態で埋設されていた。

［出土遺物］２層から土器破片が比較的まとまって出土したが、いずれも地文のみの胴部破片であった。２層中北側より、拳大よりやや大きな礫２点が並んで出土した。土器を埋設した後、上部に

配置した礫と推察される。

［時期］検出面から晩期前葉から中葉と推察される。

ＳＲ503（第２分冊第49図、図版59）

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドに位置する。遺物包含層（Ⅵa層）中で土器埋設遺構群を検出した後、その部分を残して周辺を掘り下げ、地山（Ⅶ層）上面の検出を試みたが、この作業の途中、遺物包含層（Ⅵb層）中で確認した。当初、遺構の重複には気づかなかったが、この土器埋設遺構の精査を進めたところ、土層断面より重複する２基の土坑を確認した。

［概要］長径0.37m、深さ0.23mの掘り形に深鉢の胴下半部（第２分冊第159図１）が正立した状態で埋設されていた。ＳＫ512およびＳＫ573を切る。上部からの土圧により埋設土器は破片となって、内側にややずれ込んでいた。

［出土遺物］土器片（同２・３）を中心として数点の遺物を検出したが、その多くが１層からの出土であった。ＲＦ（同４）も出土した。また、確認面の埋設土器内南側には拳大の自然礫が１点出土している。意図的なものかどうかは判断できなかった。

［時期］遺構の重複関係から、晩期前葉以降と推察される。

ＳＲ513（第２分冊第49図、図版59）

［位置・検出状況］ＭＢ52グリッドの遺物包含層（Ⅵa層）上面、ＭＢラインベルトの西側で確認した。ＭＢラインベルトを掘り下げたところ、これと0.5mほどの間隔を持った東側に土器埋設遺構がもう１基存在することが明らかとなった。これをＳＲ688とした。時間的制約もあり、半截等はこの２基を横断する位置で行った。ＳＫ597との重複関係については、裁ち割り調査で把握した。

［概要］ＳＫ597の上部に堆積した遺物包含層（Ⅵa層）を掘り込んで構築している。ＳＲ688とは重複していなかった。長径0.39m、短径0.34m、深さ0.40mの掘り形にほぼ完形の深鉢（第２分冊第159図５）が正立した状態で埋設されていた。１層下部から２層上部にかけて、拳大の礫が３点出土した。ほぼ中央より出土しており、人為的に埋められたものである可能性がある。

［出土遺物］埋設土器内より、数点の土器片（同６・７）が出土した。

［時期］ＳＫ597よりも新しいこと、出土遺物などから晩期前葉～中葉と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＲ546（第２分冊第49図、図版60）

［位置・検出状況］ＭＢ51グリッドの地山（Ⅶ層）上面で確認した。当初は遺構外の一括土器と思われたが、精査したところ周囲に掘り形プランが確認されたため、土器埋設遺構と判断した。

［概要］長径0.45m、短径0.41mのほぼ円形の掘り形である。深さは最大で0.11mで床面は南に傾斜している。埋設土器（第２分冊第159図８）は口縁部を下にした状態で出土した。上部からの土圧により埋設土器胴下半部は潰れ、周囲に広がっていた。底部破片が欠損しているが、埋設当初から故意に破損されたものか否かは不明である。

［出土遺物］埋設土器のほかに、本遺構に伴う遺物は確認できなかった。

［時期］埋設土器より後期後葉と推察される。

ＳＲ550（第２分冊第48図、図版57）

［位置・検出状況］ＬＳ51グリッドで遺物包含層（Ⅵ層）を精査中、ＳＲ454を確認した。この掘り形

プランの確認のため周囲を掘り下げたところ、ＳＲ550がＳＲ454に切られた状態で確認された。

［概要］長径0.37m、深さ0.30mの掘り形に、深鉢（第２分冊160図１）が正立した状態で埋設されていた。西側をＳＲ454に切られており、埋設土器の破片が失われている。

［出土遺物］２層下部より、埋設土器とは別の個体の深鉢底部（同２）が出土した。埋設土器の中央に正立した状態で検出されており、意図的に埋められたものと判断した。

［時期］埋設土器の形態から後期末葉から晩期初頭の可能性が考えられるが、出土資料がいずれも地文のみであり、時期判断の要素に乏しいため断定できない。

ＳＲ581（第２分冊第49図、図版60）

［位置・検出状況］ＬＳ55グリッドに位置する。ＳＫ509のプランを検出したため、土層断面ベルトを設定し、これを残しながら掘り進めたところ、北西側で土器の集中が確認された。当初はＳＫ509の中に構築されたものかと思ったが、より詳細に確認したところ、ＳＫ509のプランを切ってＳＲ581が存在していることが明らかとなった。埋設土器の遺存状態などから、おそらく遺物包含層（Ⅵ層）上面が構築面であったものと推定される。精査中、天候の悪化などにより土層が軟弱となり、記録前に一部が崩落してしまったため、記録が欠落した部分がある。

［概要］ＳＫ509を切る。掘り形は確認段階で長径0.41m、深さ0.11mである。この底部に大型の土器片（第２分冊第160図４）が内面を上に向けた状態で重ねられており、この上に深鉢（同３）が口縁を下に向けて倒立した状態で埋設されていた。原位置で確認されたのは口縁部破片のみであり、胴部破片はつぶれた状態で検出されている。垂直方向に立っていた口縁部破片は、上からの土圧で一部地山にめり込んでいた。

［出土遺物］数点の土器破片（同５・６）が出土した。６は緩やかなカーブを描いた帯状の破片で土製品の可能性がある。

［時期］重複するＳＫ509が晩期前葉と推察されることから、本遺構の構築時期は晩期前葉以降と推察される。

ＳＲ628（第２分冊第49図、図版60）

［位置・検出状況］ＬＳ54・55グリッドの地山（Ⅶ層）上面で検出した。

［概要］ＳＫＰ670の北側に位置する。長径0.38m、短径0.36m、深さ0.24mの掘り形に、深鉢の胴下半部（第２分冊第160図７）が正立した状態で埋設されていた。１層上部より小型の自然礫が２点検出されたが、意図的なものかは判断がつかなかった。

［出土遺物］確認面から数点の土器破片（同８・９）が出土した。

［時期］出土遺物から後期後葉以降に構築された可能性がある。

ＳＲ629（第２分冊第49図、図版60）

［位置・検出状況］ＬＳ55グリッドに位置する。ＳＲ628よりへ約1.4mの地点で、地山（Ⅶ層）上面で確認した。

［概要］長径0.42m、短径0.39m、深さ0.27mの掘り形に、ほぼ完形の深鉢（第２分冊第161図１）が正立した状態で埋設されていた。確認面には大型の礫が２点並んでいた。

［出土遺物］埋設土器内底部より、人頭大の自然礫が検出された。確認面の礫と、底部の礫の間には厚さ10㎝ほど土層が堆積している。この他、土器破片（同２）が出土した。

［時期］埋設土器が地文のみであり、時期判断の要素に欠けているため、詳細な時期は不明である。

ＳＲ632（第２分冊第49図、図版61）

［位置・検出状況］ＭＢ54グリッドに位置する。旧河川跡に向かって地山の傾斜が認められる地区で、遺物包含層（Ⅵ層）上面で検出した。

［概要］長径0.36m、深さ0.18mの掘り形に、深鉢の胴下半部（第２分冊第161図５）が正立した状態で埋設されていた。検出地点が旧河川流路に近い傾斜地であることから、上部はこれによって削平されている可能性がある。

［出土遺物］１層上位から数点の土器片（同３・４）が出土した他には遺物は出土しなかった。

［時期］出土遺物により、晩期初頭の可能性がある。

ＳＲ645（第２分冊第50図、図版61）

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドで地山（Ⅶ層）を精査中に確認した。当初、遺構外の土器破片と認識したが、全体の様相を把握するため掘り下げたところ、一部に不明瞭ながらも掘り形プランが確認できたため、土器埋設遺構と判断した。

［概要］長径0.37m、短径0.33m、深さ0.18mの掘り形に、深鉢（第２分冊第161図６）が正立した状態で埋設されていた。また横方向からの土圧により、埋設土器は歪に潰れていた。埋設土器の遺存状態から、本来はもっと上部から掘り込まれて構築されていた可能性が高い。埋設土器内は３層に分層した。２層には地山粘質土の混入が著しい。

［出土遺物］埋設土器内より数点の土器破片を検出したが、その多くが埋設土器の胴部破片であった。その他、遺物はほとんど出土しなかった。

［時期］埋設土器が地文のみで時期判断の要素に欠けるが、検出面から晩期前葉の可能性がある。

ＳＲ688（第２分冊第50図、図版59）

［位置・検出状況］ＭＡ52グリッドでＭＢラインベルトを掘り下げたところ、ＳＲ513の0.5mほど東側に土器埋設遺構を検出した。時間的制約もあり、半截等はこの２基を横断する位置で行った。ＳＫ597と重複していることは、本遺構の裁ち割り段階で認識した。構築面は遺物包含層（Ⅵa層）中である。

［概要］長径0.36m、深さ0.36mの掘り形に、深鉢の胴下半部（第２分冊第162図１）が正立した状態で埋設されていた。土圧による破損が著しく、底部と胴部破片の位置がずれていた。

［出土遺物］１層から２層上部にかけて土器破片（同２～４）が出土した。

［時期］埋設土器が地文のみであり時期判断の要素に欠けるが、検出面からは晩期の可能性がある。

ＳＲ691（第２分冊第50図、図版61）

［位置・検出状況］ＭＣ47・48グリッドに位置する。48ラインに設定した土層観察ベルトを掘り下げたところ、ＳＫ327の西側に土器埋設遺構を確認した。遺物包含層（Ⅵa層）上面で検出された。

［概要］長径0.29m、短径0.28m、深さ0.16mの掘り形に、深鉢（第２分冊第161図５）が正立した状態で埋設されていた。上部からの土圧による破損が著しく、胴部と底部の検出位置がずれていた。

［出土遺物］土器破片（同６・７）が出土した。

［時期］埋設土器から、晩期前葉と推察される。

ＳＲ765（第２分冊第50図、図版61）

［位置・検出状況］ＬＳ55グリッド、ＳＫ509の調査時に確認した。本来はＳＫ509の壁面に検出されるべきものを、ＳＫ内の遺物と思って土器内をほぼ掘り上げた段階で検出した。深鉢（第２分冊第162図８）が正立した状態で埋まっている状態と分かってから、土器埋設遺構であったと認識した。よって土層は掘り形内しか確認できなかった。構築面は遺物包含層（Ⅵa層）中であろう。

［概要］ＳＫ509に切られており、埋設土器の半分は失われている。

［出土遺物］上記のような確認状況であったため、埋設内から出土した遺物は不明である。

［時期］埋設土器も粗製の深鉢であり判断材料に乏しいが、埋設土器の形態や周辺遺構との新旧関係などから、後期後葉～末葉と推察される。

（５）石囲土器埋設炉

ＳＱＮ74

［位置・検出状況］ＭＤ45グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）を精査中、拳大よりやや大きい自然礫が円形に配置しているのを確認した。

［概要］0.62×0.59mの掘り形に自然礫が並べられ、中央には深鉢の底部（第２分冊第165図３）が埋設されていた。掘り形の深さは0.13ｍを測る。埋設土器の外側より灰や焼土が検出されていることから、炉跡と判断した。また、埋設土器内部からも焼土ブロックが検出されている。

［出土遺物］配石の一部に敲石（同４）が使用されていた。三角柱状自然礫の長軸縁辺に敲打痕が認められる。

［時期］検出面より晩期の可能性が高いが、詳細な時期は不明である。

ＳＱＮ484

［位置・検出状況］ＬＴ52グリッドの遺物包含層（Ⅵ層）上面で、25㎝大の柔らかい凝灰岩を中心に、拳大よりやや大きな自然礫が円形に配置されている状況を確認した。当初は配石遺構と捉えたが、調査を開始したところ中央の凝灰岩の下部に土器が埋設されていることが判明した。またこの上部から周辺にかけて灰や焼土が確認されたことから、炉跡と判断した。

［概要］ＳＲ483の上部に構築されており平面位置は重なるが、掘り形が浅いために直接の切りあい関係は認められない。0.76×0.68ｍの掘り形に、自然礫が配置されていた。中央部には鉢形土器（第２分冊第165図５）が埋設されており、その上部に凝灰岩が配されていた。

［出土遺物］埋設土器のほかに、遺物は出土しなかった。

［時期］下部のＳＲ483が晩期前葉に属すると思われるため、本遺構は晩期前葉以降に構築されたものと判断できる。

（６）配石遺構

包含層や遺構検出面からは比較的多くの自然礫が出土したが、このうち人為的な状況を示していると判断できるものを配石遺構とした。人為的な状況とは、１）軸を揃えて列状に配置されている、２）配置された平面形が整っている、３）石の重心に逆らった不自然な姿勢（立つなど）、４）礫が一定の方向に折り重なっている、などで判断した。また、土坑などの遺構確認プラン上に確認された配石は、それぞれの土坑に付属するものとし、配石遺構には分類しなかった。

規模の大小は様々であるが、合計28基を配石遺構と認定した。大まかには次のようなタイプに分けられる。Ａ：比較的規模の大きなもので、人頭大程度の礫を配置したもの（ＳＱ20、41、42）。Ｂ：拳大～人頭大の礫を使用したもので、配置したというよりも「集めて置いた」状況に近いもの。Ｃ：拳大以下の細かな礫を平坦な面にびっしりと敷き詰めたもの（ＳＱ504、611）。Ｄ：その他、不自然な状況を呈するもの（ＳＱ778）の４タイプである。

以下、Ａ・Ｄについては個々の状況を詳述する。Ｂ・Ｃについては、その概観を記す。

Ａ：大型の配石について

ＳＱ20（第２分冊第52図、巻頭図版５）

［位置・検出状況］ＬＱ・ＬＲ52グリッドでⅤ層を掘り下げていたところ、人頭大以上の自然礫が並んでいるのを確認した。60㎝大の柔らかい凝灰岩を中心として、上面を水平に揃えるように礫が配置されていた。東側は調査区外へと展開する。平面規模は3.9m×1.5mで、配置は整っているが全体として何を形作っているものかは不明である。断ち割り調査を行ったが下部に掘り込み等は確認されず、配石の10㎝ほど下に旧表土と考えられる黒色土層が確認された。

［時期］配石下部の旧表土面からは後期後葉の遺物が出土している。この面から、配石の検出面まで約10㎝の堆積が認められているため、ある程度の時期差が考えられる。周辺の包含層からは晩期前葉の遺物がまとまって出土しており、当遺構も晩期前葉の可能性が考えられる。

ＳＱ41・42（第２分冊第51図、巻頭図版５・図版62）

［位置・検出状況］ＬＴ・ＭＡ42グリッド付近でⅤ層を掘り下げていたところ、人頭大の礫が集中して検出された。礫を残して全体を掘り下げてみたところ、大きく２本の弧を描くような配置である事が分かった。そこで、北側の弧をＳＱ41、南側をＳＱ42とした。

大きく見ると弧を描くが部分ごとに観察すると、礫が列状に並んでいる分部や円を描いている部分など幾つかのまとまりが確認できる。断ち割り調査を実施したが、下部には基本土層が水平に堆積している状況で、土坑などの人為的な掘り込みは検出されなかった。

［時期］配石の礫の下より数点の土器片が出土している（第２分冊第164図１～４）。口縁部に平行沈線を持ち、胴部には地文縄文を施文した深鉢で、晩期前葉に属するものと推察される。従って、本配石遺構もこの時期に構築されたものと判断できる。

Ｂ：中～小型の配石について（第２分冊第54～56、図版62～64）

堀ノ内遺跡の遺物包含層はある程度自然礫を含んでおり、それらが人為的に配置されたものか否かの判断は困難を極めた。調査では拳大より大きな礫はその場に残して掘り下げ、不自然に礫が集中する箇所については、これに関連した土坑状の施設がないかを確認した。土坑が確認された場合は「土坑」に分類し、下部構造が認められなかったものについては配石遺構とした。Ⅵ層上面～中位で検出されたものが最も多く８基（ＳＱ33・510・596・774～776・780・781）確認された。この他、Ⅵb層で２基（ＳＱ511・779）、Ⅴ'b層中で３基（ＳＱ23・782・783）、Ⅴb層中で２基（ＳＱ770・777）が検出されている。地山面に構築されたものが存在せず、いずれも晩期に構築された可能性がある。

Ｃ：拳大の礫を敷き詰めた配石について（第２分冊第57図、図版64）

５基（ＳＱ504・611・771・772・773）が確認された。ＳＱ773はⅥa層上面に、ＳＱ771・772はⅥa層中に、ＳＱ504・611はⅥb層から地山（Ⅶ層）上面に構築されていた。平面形については、ＳＱ611は径1.2mの円を描いているが、その他４基については、平面形はやや不明瞭である。いずれも上面がほぼ平坦になっており、敷石状の様相を呈する。断ち割り調査を実施したが、下部に土坑状の掘り込みは確認されなかった。ＳＱ771・772はＳＫ508・528間の隙間に位置しており、隣接する遺構に付属する施設の可能性も考えられる。

Ｄ：その他

ＳＱ778（第２分冊第55図、図版64）

［位置・検出状況］人頭大の礫が直立し、その周囲（直径約１mの範囲）に焼土ブロックが散布されていた。礫を立てるための掘り込み等は確認できなかった。焼土ブロックは硬化して硬く、拳大程度の大きさである。その場で被熱したものではなく、明らかに別地点から動かされたものである。

［時期］周辺から出土した遺物から、後期後葉あるいは晩期前葉の可能性がある。

（７）焼土遺構

焼土遺構は３基検出された。いずれも被熱痕跡が弱く使用頻度は低かったと判断できる。

ＳＮ75（第２分冊第57図）

［概要］ＭＣ46グリッドでⅥa層を精査中に確認した。Ⅵa層が被熱してやや赤くなっていたが、規模は平面で長径0.65m、厚さは５㎝程度と微弱で、掘り込み等も確認できなかった。

［時期］Ⅵa層中からは主に晩期前葉の資料を出土しており、当遺構もこれとほぼ同時期に構築されたものと判断できる。

ＳＮ96（第２分冊第53図、巻頭図版５）

［概要］ＳＱ20の精査中、ＬＲ51・52グリッドのⅤ層直下に検出した。ＳＱ20から南西に１mの地点で、長径0.8m、短径0.5mの規模である。明瞭な掘り込み等は確認されなかった。ＳＱ20とほぼ同一の面で検出されており位置も非常に近い事から、両者には何らかの関連があったものと推察される。

［時期］検出面から晩期と推察されるが、詳細な時期は不明である。

ＳＮ219（第２分冊第57図）

［概要］試掘調査の４号トレンチ北壁で確認した。その後、ＭＢ54グリッドでＶｂ層を掘り下げたところ、平面的に灰層と被熱痕跡の広がりを確認したため、これを焼土遺構とした。ＳＫＰ220の上部に位置する。灰層の広がりは残存部で長径1.0mで、この下部に被熱痕跡を検出した。被熱面は中央部に向かって非常に緩やかに窪んでいた。

［時期］判断材料に乏しく、構築時期は不明である。